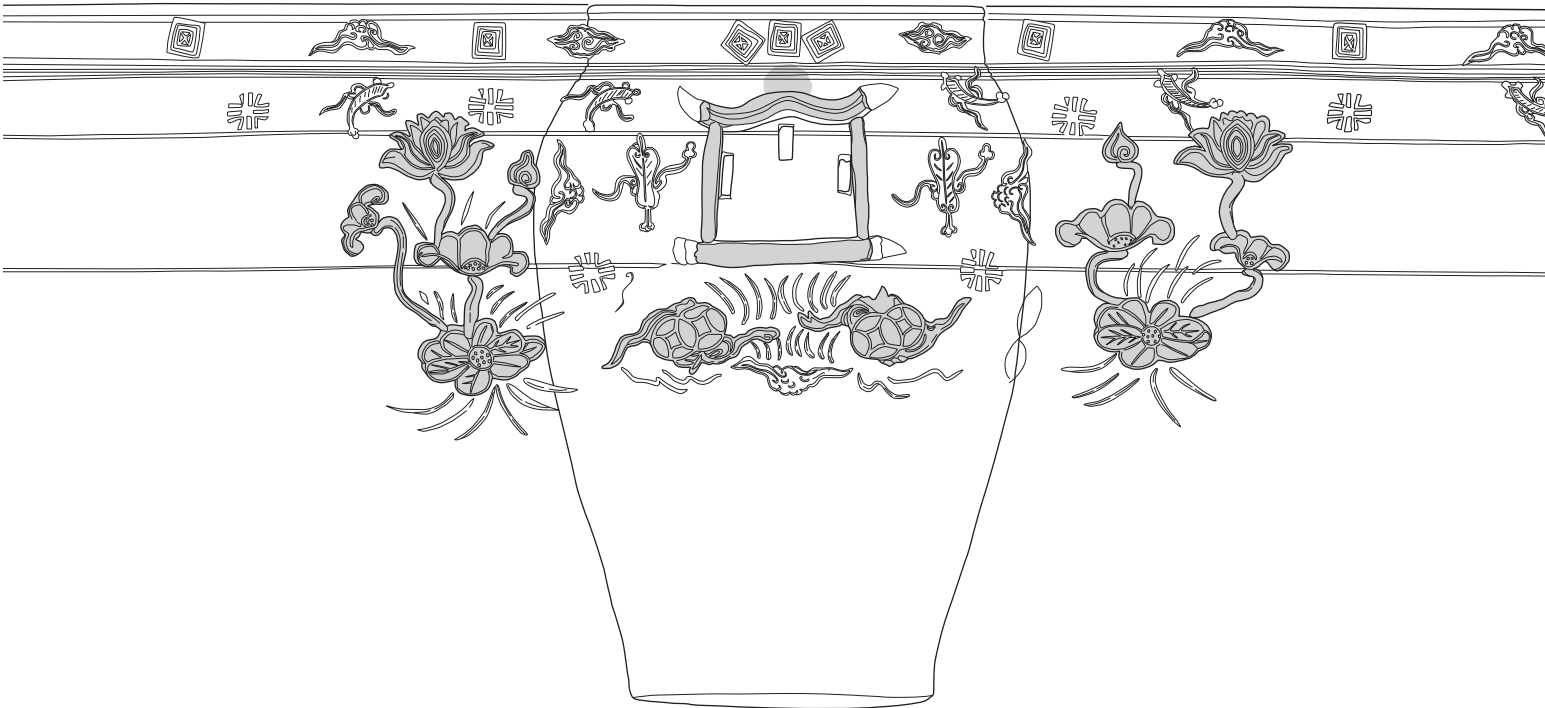


まえだ きょうづか きんせいぼぐん
前田・経塚近世墓群 5

経塚南小島原A丘陵

一浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書一



2014(平成26)年3月
うらそえし
沖縄県 浦添市教育委員会

まえ だ きょう づ か きん せい ぼ ぐん
前田・経塚近世墓群 5

経塚南小島原A丘陵

－浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書－

2014(平成26)年3月

うらそえ し
沖縄県 浦添市教育委員会



卷頭 1 062号墓出土藏骨器



巻頭 2 調査区丘陵南側（西から）



巻頭 3 009号墓遺物出土状況



巻頭 4 055号墓遺物および一次葬人骨出土状況



卷頭 5 056号墓遺物出土状況



卷頭 6 057号墓遺物出土状況

序 文

本調査報告書は、浦添南第一土地区画整理事業に先立ち、平成21年度および平成22年度に浦添市教育委員会が実施した、埋蔵文化財「前田・経塚近世墓群」の経塚南小島原A丘陵の発掘調査の成果をまとめたものです。

前田・経塚近世墓群は、浦添市字前田と経塚に分布する丘陵に横穴を掘り込んで造られる伝統的な掘込墓を主とする墓群です。これまでの発掘調査で1,000基を超える墓が発見されており、調査成果によるとこれらの多くは近世琉球期に造営されたと考えられています。近世墓には数世代にわたる洗骨した人骨、それを納める蔵骨器やそこに記された銘書、副葬品類が伴うことが多く、まさにタイムカプセルのように情報が残されています。これらの情報からは、近世期に暮らした人々について実に多くの情報を得ることができます。このことは、文献資料が少ない近世琉球の人々や家族の歴史にとどまらず、当時の浦添の歴史、ひいては琉球全体の歴史を明らかにできる歴史資料であるともいえます。今回の調査によって、このような貴重な資料の一端を得ることができたと考えております。

本報告書が沖縄・浦添の近世から近代を通じた墓制・葬制を知る上で、市民をはじめ多くの方々に活用されますとともに、文化財の保護と活用についてより一層の関心を持って頂けるものになれば幸いに存じます。

末尾になりますが、現地調査および資料整理にあたってご指導・ご協力を賜りました方々、並びに事業実施にあたりご協力を賜りました方々に深く感謝申し上げます。

平成26年 3 月

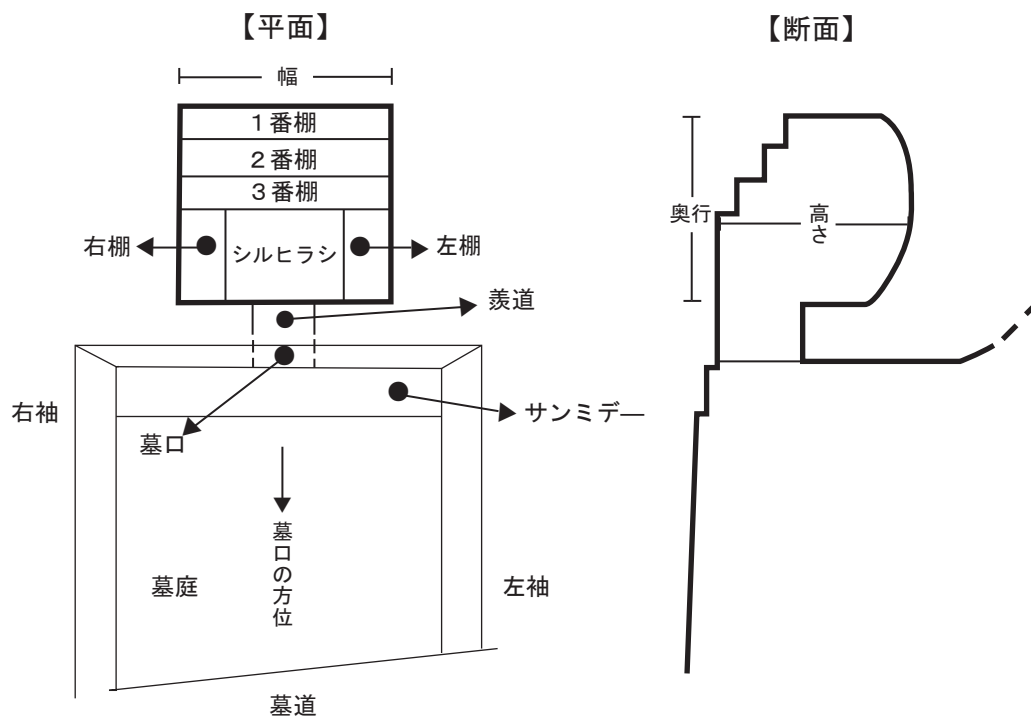
浦添市教育委員会
教育長 池原 寛安

例 言

1. 本報告書は、浦添南第一土地区画整理事業に先立ち、沖縄県浦添市経塚に所在する埋蔵文化財「前田・経塚近世墓群」経塚南小島原A丘陵の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 「前田・経塚近世墓群」は、沖縄県浦添市の字前田から経塚の丘陵一帯に所在する墓群である。大字経塚小字南小島原のほぼ中央部に所在する丘陵をA丘陵と呼称する。なお、発掘調査地点の所在地は、沖縄県浦添市経塚南小島原707-1ほか14筆である。
3. 発掘調査は、浦添南第一土地区画整理事業に伴うものであり、浦添市都市建設部区画整理課の委託を受けて、浦添市教育委員会文化課が実施した。
4. 資料の整理にあたり、下記の方々の指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げる。
陶磁器 倉成多郎氏・吉田健太氏（那覇市立壺屋焼物博物館）
5. 発掘調査に係る現場作業は、平成21年度および平成22年度にかけて実施した。調査期間は、平成21（2009）年8月17日～平成21（2009）年11月4日、平成22（2010）年6月9日～9月21日である。調査の実施にあたっては、株式会社 シン技術コンサル 沖縄営業所の支援を受けた。
6. 報告書作成は、平成22年度～平成25年度の4ヶ年にわたって実施し、浦添市教育委員会文化課職員及び臨時・嘱託職員がこれにあたった。
7. 蔵骨器の実測及び写真撮影等については、株式会社 シン技術コンサル 沖縄営業所に委託した。
8. 副葬品および戦争遺物、人骨の写真撮影については、上原 千明が行った。
9. 表紙・裏表紙の蔵骨器は、本紙掲載の資料（062号墓蔵骨器5）の実測図を編集して作成したものである。作成については、宮城 明恵が行った。
10. 本書の執筆を以下のように分担した。編集は、安斎 英介・宮城 明恵が行った。
安斎 英介 第1章、第2章1・2節・第3章1・2節、第4章（遺構）、第7章1・6
宮城 明恵 第3章3節（蔵骨器）、第4章（蔵骨器）、第7章2
上原 千明 第3章3節（副葬品・戦争遺物）、第4章（副葬品）、第7章5
鈴木 悠 第2章3節、第5章、第7章3
菅原 広史 第6章、第7章4
11. 本文中で使用した引用・参考文献は、各章末に記した。
12. 調査に関わる実測図や写真等の記録は、浦添市教育委員会文化課において保存している。

凡 例

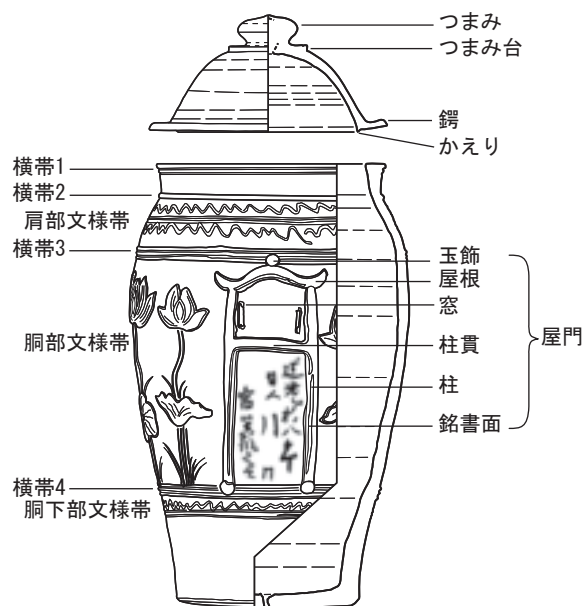
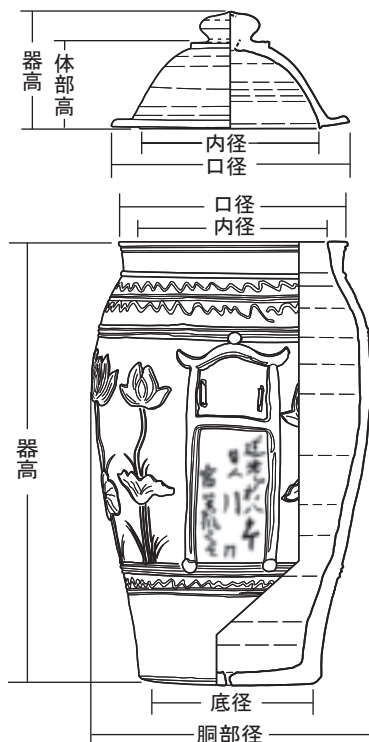
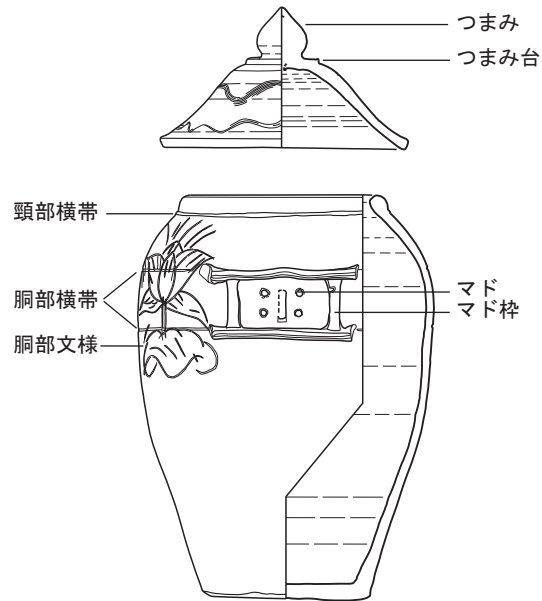
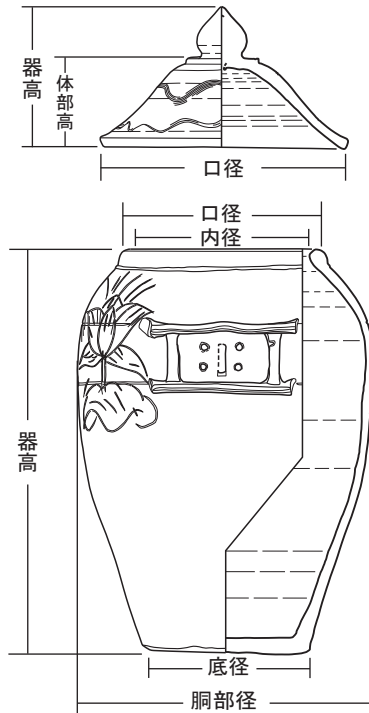
1. 本書に表示した基準高はすべて海拔高を用い、メートル単位で表した。
2. 地形測量図に記した座標は、世界測地系を用いた。
3. 平面図に記した方位は、基本的には座標北を示す。
4. 遺構断面図を作成した位置は、遺構平面図に横断ラインを示し、方向は英字で表した。
5. 地形測量図については1/200を基本として作成し、1/400の縮尺で掲載した。
6. 遺構図については、1/20を基本として作成し、1/50の縮尺で掲載した。
7. 一次葬人骨の出土状況図については、1/5を基本として作成し、1/10の縮尺で掲載した。
8. 遺物の実測図は、出土品のうち蔵骨器は1/6、それ以外は、1/3や1/2、1/1で掲載した。それらについては、掲載頁に明示した。
9. 掘込墓の各部名称と計測位置については以下のとおりである。



- ・ 墓口から墓室に至る通路の名称については、伝統的・一般的な呼称が確認されていないことから「羨道」と仮称した。
- ・ 墓口の方位は、座標北を表す。主軸方位は墓室奥壁を背にして墓口方向をみている。

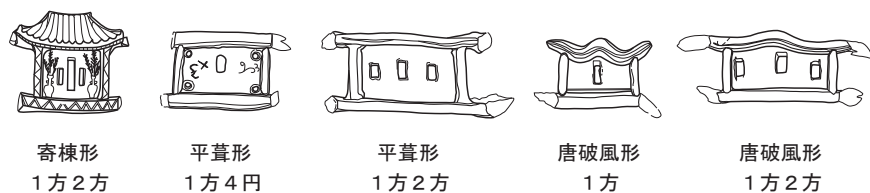
10. 蔵骨器の分類及び名称と、各部名称・計測位置については、浦添市教育委員会刊行の浦添市文化財調査研究報告書第25集『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』（1997年）および浦添市文化財調査研究報告書『比嘉門中墓の家族史—家族の数だけ歴史がある—比嘉門中墓の調査概要』（2006年）を参考にした。

・蔵骨器の各部名称と計測位置（上段：ボージャー形、下段：マンガン釉甕形）



11. マド枠・屋門の部位名称と計測位置

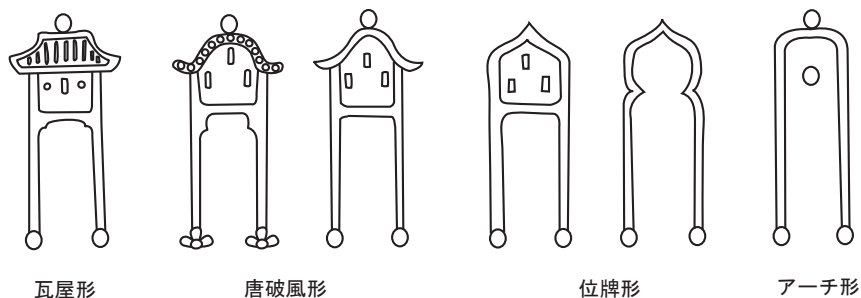
マド枠の分類（ボージャー）



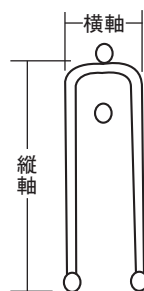
マド枠計測部位



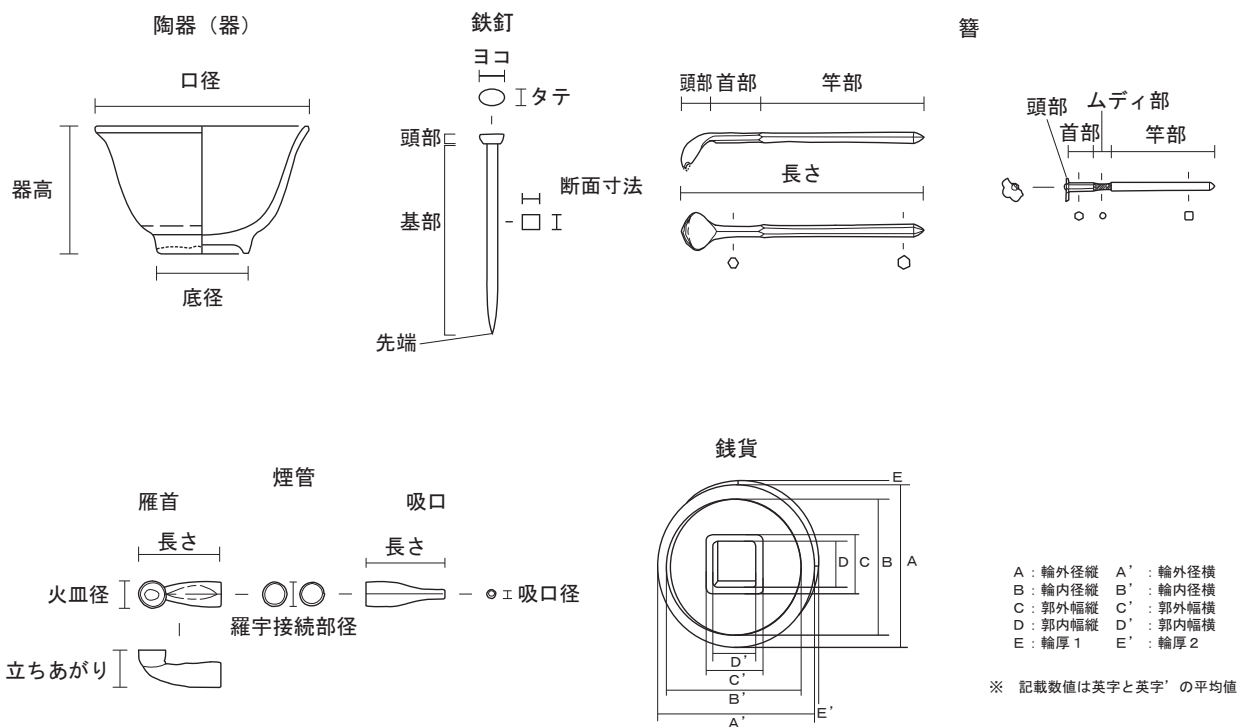
屋門の分類（マンガン軸廻形）



屋門計測部位



12. 下記の遺物の各部名称と計測位置は以下のとおりである。



目 次

巻頭図版

序文・例言・凡例・目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	2

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 浦添市の地理的環境	5
第2節 遺跡の地理的環境	5
第3節 遺跡周辺の歴史的環境	7

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査の方法	10
第2節 層序と遺構	10
第3節 遺物	13

第4章 調査の成果

第1節 001号墓・041号墓	22	第10節 056号墓	58
第2節 004号墓・005号墓	26	第11節 057号墓	64
第3節 009号墓	29	第12節 058号墓	68
第4節 019号墓	37	第13節 059号墓	71
第5節 027号墓	39	第14節 062号墓	73
第6節 049号墓・050号墓	45	第15節 070号墓	81
第7節 051号墓・052号墓	48	第16節 071号墓	82
第8節 054号墓	51	第17節 その他の墓	84
第9節 055号墓	53		

第5章 銘書の分析

第1節 資料の概要	105
第2節 銘書からわかる各墓の様相	105
第3節 056号墓蔵骨器5に記された「伝記」について	108

第6章 人骨の分析

第1節 資料について	115
第2節 分析結果	115
第3節 形態観察に基づく本調査区の特徴について	123
第4節 まとめ	125
付 記 001号墓蔵骨器1から出土した動物骨	126

第7章 総括

写真図版

報告書抄録

挿図目次

表 紙	062号墓蔵骨器5の実測図を一部改変
第1図	遺跡の位置……………6
第2図	前田・経塚の小字図……………6
第3図	前田・経塚近世墓群調査地区の位置……………8
第4図	地目別土地面積……………9
第5図	戦後の本籍地別所有筆数並びに墓地数……………9
第6図	経塚南小島原A丘陵の位置図……………11
第7図	調査地地形と各墓の位置図……………12
第8図	001号墓遺構図……………23
第9図	041号墓遺構図……………23
第10図	001号墓出土遺物……………25
第11図	004号墓・005号墓遺構図……………27
第12図	005号墓墓庭土抗出土遺物……………28
第13図	009号墓遺構図……………29
第14図	009号墓出土遺物1……………31
第15図	009号墓出土遺物2……………32
第16図	009号墓出土遺物3……………33
第17図	009号墓出土遺物4……………35
第18図	009号墓出土遺物5……………36
第19図	019号墓遺構図……………37
第20図	019号墓出土遺物……………38
第21図	027号墓遺構図……………40
第22図	027号墓出土遺物1……………41
第23図	027号墓出土遺物2……………43
第24図	027号墓出土遺物3……………44
第25図	049号墓・050号墓遺構図……………46
第26図	049号墓出土遺物……………47
第27図	051号墓・052号墓遺構図……………49
第28図	051号墓出土遺物……………50
第29図	054号墓遺構図……………52
第30図	055号墓遺構図……………54
第31図	055号墓一次葬人骨出土状況……………55
第32図	055号墓出土遺物1……………56
第33図	055号墓出土遺物2……………57
第34図	056号墓遺構図……………58
第35図	056号墓出土遺物1……………60
第36図	056号墓出土遺物2……………61
第37図	056号墓出土遺物3……………62
第38図	056号墓出土遺物4……………63
第39図	057号墓遺構図……………64
第40図	057号墓出土遺物1……………65
第41図	057号墓出土遺物2……………67
第42図	058号墓遺構図……………68

第43図	058号墓出土遺物……………70
第44図	059号墓遺構図……………71
第45図	059号墓出土遺物……………72
第46図	062号墓遺構図……………74
第47図	062号墓出土遺物1……………75
第48図	062号墓出土遺物2……………76
第49図	062号墓出土遺物3……………78
第50図	062号墓出土遺物4……………79
第51図	070号墓遺構図……………81
第52図	070号墓出土遺物……………81
第53図	071号墓遺構図……………82
第54図	071号墓出土遺物……………83
第55図	その他の墓の出土遺物……………84
第56図	復元した家系図……………110

表目次

第1表	墓室平面形の類型……………14
第2表	遺構観察一覧表(1)～(3)……………15～17
第3表	出土遺物一覧表(1)～(2)……………18～19
第4表	戦争遺物集計表……………21
第5表	蔵骨器観察一覧表(1)～(20)……………85～104
第6表	銘書一覧表(1)～(4)……………111～114
第7表	出土人骨一覧表(1)～(5)……………127～131
第8表	検出された人骨の最小個体数一覧(墓別)……………131
第9表	上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況(1)～(2)……………132～133
第10表	骨にみられる変異等の観察表……………134
第11表	齧歯一覧表……………135
第12表	下顎犬歯に観察されるエナメル質減形成一覧表……………135
第13表	身長推定……………135
第14表	脳頭蓋計測値①～③……………136
第15表	上腕骨計測値①～③……………137
第16表	橈骨計測値①～③……………138
第17表	尺骨計測値①～③……………139
第18表	大腿骨計測値①～③……………140
第19表	脛骨計測値①～③……………141
第20表	腓骨計測値①～③……………142

写真図版

巻頭 1	062号墓出土蔵骨器	
巻頭 2	調査区丘陵南側（西から）	
巻頭 3	009号墓遺物出土状況	
巻頭 4	055号墓遺物および一次葬人骨出土状況	
巻頭 5	056号墓遺物出土状況	
巻頭 6	057号墓遺物出土状況	
写真 1	062号墓蔵骨器 5 の身裏面の線彫りで描かれた 進貢船……………	77
写真 2	056号墓出土の蔵骨器5蓋裏の銘書……………	109

図版 1	調査区丘陵南側……………	151
図版 2	調査区丘陵北側……………	152
図版 3	001号墓～004号墓……………	153
図版 4	005号墓～009号墓……………	154
図版 5	010号墓～017号墓……………	155
図版 6	019号墓～023号墓……………	156
図版 7	024号墓～027号墓……………	157
図版 8	028号墓～035号墓……………	158
図版 9	036号墓～041号墓……………	159
図版10	042号墓～047号墓……………	160
図版11	048号墓～051号墓……………	161
図版12	052号墓～055号墓……………	162
図版13	056号墓～059号墓……………	163
図版14	060号墓～062号墓……………	164
図版15	063号墓～071号墓……………	165
図版16	丘陵下の壕検出状況……………	166
図版17	001号墓出土遺物……………	167
図版18	005号墓出土遺物・009号墓出土遺物（1）………	168
図版19	009号墓出土遺物（2）……………	169
図版20	009号墓出土遺物（3）……………	170
図版21	009号墓出土遺物（4）……………	171
図版22	009号墓出土遺物（5）・019号墓出土遺物………	172
図版23	027号墓出土遺物（1）……………	173
図版24	027号墓出土遺物（2）……………	174
図版25	049号墓出土遺物・051号墓出土遺物……………	175
図版26	055号墓出土遺物……………	176
図版27	056号墓出土遺物（1）……………	177
図版28	056号墓出土遺物（2）……………	178
図版29	057号墓出土遺物（1）……………	179
図版30	057号墓出土遺物（2）・058号墓出土遺物（1）	180
図版31	058号墓出土遺物（2）・059号墓出土遺物 ・062号墓出土遺物（1）……………	181

図版32	062号墓出土遺物（2）……………	182
図版33	062号墓出土遺物（3）……………	183
図版34	062号墓出土遺物（4）……………	184
図版35	070号墓・071号墓・その他の墓の出土遺物 ・戦争遺物（1）……………	185
図版36	戦争遺物（2）……………	186
図版37	009号墓出土人骨……………	187
図版38	027号墓・054号墓出土人骨……………	188
図版39	055号墓出土人骨……………	189
図版40	062号墓出土人骨……………	190

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

浦添南第一土地区画整理事業は、浦添市を事業主体とする字前田、経塚にまたがる総面積824ヘクタールの土地区画整理事業である。本事業は平成3年度に都市計画決定し、平成4年度より同事業が着手されている。

当該事業の実施に伴い浦添市教育委員会は現地踏査を実施し、更に平成6～9年度にかけて同事業地内の分布調査を実施した。その結果、地内の丘陵各所において方言名で「フィンチャー」と称する横穴式の古墓を多数確認した。その総数は事業地内に約1,000基の墓が所在するものと推定された（浦添市教育委員会1998）。その後、事業の進捗に従って随時範囲確認調査を実施し、実数の把握に努めるとともに（浦添市教育委員会2007a、2010、2013a）、開発スケジュールとの整合性をとりながら順次緊急発掘調査を実施し、その調査成果をまとめている（浦添市教育委員会2007b、2011、2012、2013b）。

同区画整理事業地の経塚地区に位置する経塚南小島原A丘陵付近においても道路・宅地造成工事が予定されていたことから、浦添市教育委員会は平成21年度、平成22年度の2ヶ年にわたり範囲確認調査を行い、71基の墓等の遺構を確認した。この範囲確認調査の内容については、既に報告を行ったので参照頂きたい（浦添市教育委員会2013a）。今回の報告は、前述の報告書掲載の「経塚南小島原地区」で確認した遺構についての発掘調査成果を「経塚南小島原A丘陵」として報告するものである。

上記の範囲確認調査の結果を受けて、平成21年および平成22年度調査箇所については、確認された遺構について記録保存のための発掘調査を実施することとなり、平成21年度：平成21年5月28日付、平成22年度：平成22年5月31日付で市区画整理課と市教育委員会の間に、他の地区の埋蔵文化財の緊急発掘調査を含む業務委託契約が締結された。平成21年度から平成24年度については、新規現場の調査依頼と共に過年度調査分の資料整理を含む形で市区画整理課と市教育委員会の間で業務委託契約を締結して行い、平成25年度に本報告書刊行のための業務委託契約を締結した。

第2節 調査体制

調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会	教育長	西原 廣美（平成21～23年度）
	同	同	津波 清（平成23～24年度）
	同	同	池原 寛安（平成25年度）
事業所管	浦添市教育委員会文化部	部長	下地 安広（平成21～25年度）
事業総括	同 文化課	課長	當間 眞榮（平成21～24年度）
	同	同	松川 章（平成25年度）
事業調整	同	文化財係長	宮里 信勇（平成21～22年度）
	同	同	松川 章（平成23～24年度）
	同	同	渡久地 政嗣（平成25年度）

事業事務	同	文化財係主任	仁王 浩司（平成21～22年度）
	同	文化財係主事	安斎 英介（平成23～25年度）
	同		菅原 広史（平成24～25年度）
	同	文化振興係主任	石川 美代子（平成21年度）
	同	臨時職員	名渡山 俊幸（平成22・24年度）
	同	同	當間 弘子（平成23年度）
	同	文化振興係主事	松田 奈津子（平成25年度）
	同	臨時職員	宮里 磨（平成25年度）
調 査 員	同	文化財係主事	安斎 英介（平成21～25年度）
	同	同	菅原 広史（平成24～25年度）
	同	嘱託職員	鈴木 悠（平成24年度）
	同	同	宮城 明恵（平成25年度）
	同	同	上原 千明（平成25年度）

資料整理臨時・嘱託職員

平成21年度（臨時職員） 城間 孝子、照屋 葉史、島澤 由香、比嘉 由紀子、照屋 芳美
平成22年度（嘱託職員） 新城 茂人、飯沼 由紀子
平成23年度（嘱託職員） 木下 秋海、金城 礼子、比嘉 美智子、澤岨 永子
平成24年度（嘱託職員） 比嘉 美智子、澤岨 永子、池宮城 聡子、前田 あやの、鈴木 悠
調 査 協 力（嘱託職員） 宮城 かの子、洲鎌 典子、眞喜志 悠

委託業務

平成21年度 地形測量・遺構実測業務委託 株式会社 シン技術コンサル 沖縄営業所
平井 貢（所長）、半浦 聖智（現場代理人）、喜多 亮輔（調査員）、
兼城 浩太（管理技術者）
平成22年度 発掘支援業務委託 株式会社 シン技術コンサル 沖縄営業所
平井 貢（所長）、半浦 聖智（現場代理人）、喜多 亮輔（調査員）、
兼城 浩太（管理技術者）
平成25年度 遺物実測等業務委託 株式会社 シン技術コンサル 沖縄営業所
平井 貢（所長）、喜多 亮輔（主任技術者）、志良堂 恵（遺物実測作業員）、
小池 雄利亜（写真技師）

第3節 調査の経過

現場での発掘作業については、平成21年度に丘陵の南側半分、平成22年度に丘陵の北側半分の調査を実施した。

○平成21年8月17日～9月29日

丘陵南側の現場の伐採を行い、その後墓の基数確認のための範囲確認調査を行った。

○平成21年10月6日～10月14日

測量基準点の設置、地形測量図の作成、墓の観察カード作成のための写真撮影および観察事項の記入を行った。

○平成21年10月15日～10月23日

引き続き観察カードの作成と地形測量を行った。022号墓の戦争遺骨の検出状況の写真撮影を行った（15日）。また、蔵骨器が入っている墓（001・004・009・019・023・041号墓）の現況の写真撮影を行った。23日は台風のため作業を中止した。

○平成21年10月26日～11月4日

台風後の現場復旧から各遺構の掘削を進め、順次遺物出土状況の写真撮影を行った（023・027号）。また、022号墓（空き墓）の写真撮影と観察カードの作成も行った。001・004・009・019・023・027・041号墓については順次遺物を取り上げ、完掘写真の撮影を行った。その後、墓の平面図および断面図の作成を行った。上記と同時に地形測量を行い、11月4日に全景撮影を行った。

○平成22年6月9日～8月3日

丘陵北側の現場の伐採を行い、その後墓の基数確認のための範囲確認調査を行った。

○平成22年8月4日～8月11日

現場の全景と個別の遺構について現況撮影を行った。9日と10日については、大雨のため作業を中止し、11日は現場の復旧作業を行った。

○平成22年8月12日～8月19日

遺構の掘削作業を開始し、終了次第遺物の検出状況の撮影を行った（049・050・051・052・054・055・058・059・061・062・070・071号墓）。055号墓からは、蔵骨器とともに一次葬人骨が検出された。撮影後、遺物の取り上げ作業を行い完掘写真の撮影を行った（071号墓）。

○平成22年8月20日～8月29日

引き続き、遺構の掘削（057号墓）と遺物の取り上げ作業（051・054・058・059号墓）を行い、完掘写真の撮影を行った（058・059号墓）。055号墓については、一次葬人骨の写真測量のための撮影を行った。

○平成22年8月30日～9月6日

遺物の取り上げ作業の残りを行い（050・051・070号墓）、遺構の測量を行った（051・052・054・058・059号墓）。台風接近のため30日の午後は対策を行った。31日は台風のため作業を中止、9月1日は現場の復旧作業を行った。056号墓の遺構掘削と遺物検出状況の撮影を行った。また、遺物の取り上げ（049・050・056号墓）と、完掘写真の撮影を行った（049・051・054・070号墓）。9月3日には055号墓の人骨の取り上げ作業も行った。9月4・5日は台風接近のため、6日は現場の復旧作業から開始した。

○平成22年 9 月 7 日～ 9 月15日

引き続き、遺物の取り上げ作業（057・061・062号墓）と完掘状況（050・055・056・057・061・062号墓）の撮影を行った。写真撮影後に順次遺構の測量図の作成を行った。13～15日には、全景撮影のための清掃と遺物の現場外への搬出作業を行った。

○平成22年 9 月16～ 9 月21日

16日に全景撮影を行った。また、17日と21日に補足の撮影を行った。

○平成22年 4 月～平成25年 3 月

現場作業が終了次第、順次遺物の洗浄・注記・接合作業を行った。その後、遺物の集計・計測作業を行った。平成24年度には蔵骨器の銘書の判読作業を行った。また、出土人骨についてはクリーニング作業を行った。

○平成25年 4 月～平成26年 3 月

平成25年度は、蔵骨器の実測および写真撮影を行った。蔵骨器の実測および写真撮影に関しては、株式会社 シン技術コンサル 沖縄営業所に委託を行った。また、副葬品類と戦争遺物の実測および写真撮影、人骨の分類・整理および写真撮影を行った。それらと並行して原稿執筆および版組作業を行い、年度末にそれらの成果を取りまとめた報告書を刊行した。

〈引用・参考文献〉

浦添市教育委員会1998『浦添間切前田村・沢岬村域の近世墓と水田跡分布調査』

浦添市教育委員会2007a『市内遺跡発掘調査報告書（1）－平成13～18年度調査報告－』

浦添市教育委員会2007b『前田・経塚近世墓群』

浦添市教育委員会2010『市内遺跡発掘調査報告書（2）－平成14～20年度調査報告－』

浦添市教育委員会2011『前田・経塚近世墓群 2 首里大名地区』

浦添市教育委員会2012『前田・経塚近世墓群 3 前田真知堂B丘陵（1）・前田真知堂C丘陵（1）』

浦添市教育委員会2013a『市内遺跡発掘調査報告書（3）－平成18～23年度調査報告－』

浦添市教育委員会2013b『前田・経塚近世墓群 4 経塚子の方原A丘陵（1）』

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 浦添市の地理的環境

前田・経塚近世墓群が所在する浦添市は、沖縄本島中南部の西海岸に位置し、南側に県都である那覇市、東側に西原町、北側に宜野湾市が隣接する。西側は東中国海に面しており、遠くには慶良間諸島を望むことができる。市域は東西8.4km、南北4.6km、面積は約19.09km²で、人口は114,217人、46,458世帯（平成26年1月末現在）を擁する市である。市の西部には国道58号線、市中央部には県道330号線と県道那覇宜野湾線、東部には沖縄自動車道がそれぞれ南北に走り、島の南北を結ぶ主要交通路が縦貫する。海浜部は、約270ヘクタールの地域を米軍牧港補給基地が占めている（第1図）。

市の地形は、標高約40m前後でほぼ二分され、東部は起伏の小さな丘と浅い谷が連なる波浪状の丘陵地、西部は東中国海に続く東高西低の地形である。北部には、北西－南東方向に標高120～140mの浦添断層崖が形成されている。本市の最高点は、字仲間から前田に所在する国指定史跡浦添城跡内の138.4mである。それらの丘陵を分水嶺に北流する牧港川、シリ川、西流する小湾川、安謝川の四河川はいずれも東中国海へ注いでいる。海岸線は沖合にかけて、豊かなサンゴ礁が発達している。

本市に分布する地層は、下位から上位に島尻層群、琉球層群、海浜堆積地及び沖積層に大別することができる。島尻層群は、本市の基盤を形成し市の中央部から南東部に広く露出するが、市西部や北部では、それにかわって琉球層群が広く分布する。沖積層や海浜堆積物は四つの河川の河口付近や海岸沿いにみることができる。植生については、本市全域が去る大戦の激戦地であったために、ほとんど焼け野原の状態になり、現在残っている植被は二次林となっている。気象は隣接する那覇市において年平均気温22.3度、降水量2107.8ミリメートルで、冬は北東、夏は南東の季節風が卓越する。気候的には亜熱帯で降水量は多く、特に梅雨期や台風期に多い。風は東アジア季節風帯に属している。

第2節 遺跡の地理的環境

前田・経塚近世墓群は、浦添市の南東に位置する字前田と那覇市に隣接する字経塚一帯の丘陵地に分布する墓群の総称である。この地域は小湾川と安謝川の上流域で、その分水嶺にまたがる地域であり、一帯の地形はそれに由来する幾筋もの狭く浅い谷底低地と尾根から構成される。そのため、土地の起伏に富む丘陵地となっており、幾つもの舌状の小丘陵が入り組む複雑な地形が形成されている。これらの表層の地質は、豊見城層（小禄砂岩層）で構成されている。この砂岩は固結度が低い細粒の砂岩層であり、方言名で「ニービ」と呼ばれている。この地域の谷筋は、尾根の森を水源涵養林として古くから水田や畑として開発されてきたが、その斜面にはニービを掘り込んだ多くの掘込墓（方言名：フィンチャー墓）が形成されている。

現在、区画整理事業が進められている前田・経塚近世墓群が所在する丘陵地一帯は、地形上小湾川上流の安波茶川水系と安謝川上流の沢岬川水系に分かれ、現在の行政区域では字前田と字経塚に属している。この地区の小字は、安波茶川水系に属する山川原、前田原、前原、東前田原、西前田原、黒島原、真和志堂原、真知堂、西小島原、南小島原と沢岬川水系に属する子ノ方原、上平良大名原、下平良大名原の14小字からなる（第2図）。かつては、安波茶川水系の全ての小字と沢岬川水系の最上流



第1図 遺跡の位置

域の子ノ方原が字前田に属し、沢岬川水系の上・下平良大名原が字沢岬に属していたが、大正5年の字経塚の新設にあたり、字沢岬・字前田・字安波茶の小字をそれぞれ割いて設立した時より、現在の帰属になっている。

この地域一帯は、平成3年に浦添市が実施する浦添南第一土地区画整理事業が都市計画決定され、その翌年から着手された。同事業が進行する過程で、上記の墓群が次々に発見され、現在までにその数が1,000基を超えている。墓は、西前田原、東前田原、真和志堂原、前原、真知堂、南小島原、下平良大名原、子ノ方原に主に分布し、特に真知堂に集中している。また、平成21年度調査では、前田・経塚近世墓群が市域をまたいで南側の那覇市大名区域まで広がることが明確になった（浦添市教育委員会2011）。

今回報告を行う経塚南小島原A丘陵は、浦添市字経塚のほぼ中央に位置する。周辺はすでに宅地化が進んでいる地域で、同丘陵は道路と周辺施設の用地に囲まれている。丘陵は砂岩（二一ピ）の地山であり、南北方向に伸びるひょうたんのような形状をしている（第3図）。

同丘陵は、周辺開発の関係上、平成21年度に丘陵南側の開発に先立つ発掘調査を実施し、平成22年度には丘陵北側の発掘調



第2図 前田・経塚の小字図

査を実施した。調査地は、概ね標高98mから108mで、丘陵頂部と裾の平坦部の比高差が10mの斜面地であり、その斜面部に横穴を掘り込んだ墓などの遺構が71基確認された（浦添市教育委員会2013）。調査面積は約3,550㎡の範囲である。

第3節 遺跡周辺の歴史的環境

浦添市が所在する沖縄本島中南部の遺跡分布の特徴としては、貝塚時代後期には海浜部に遺跡群が形成され、比較的内陸部の遺跡は少ない。グスク時代には、畑作や稲作が行われるようになり、遺跡も内陸部の石灰岩台地周辺に展開した。前田・経塚地区のように石灰岩台地がなく谷底低地が発達した地域は、グスク時代遺跡の分布が希薄な地域であると言われている。

古琉球期の状況については不明な点が多い。「浦添城の前の碑文」によると、1597（万暦25）年に尚寧王が「宿道」と呼ばれる街道の整備を行い、この街道が首里から浦添に至る道を石畳にした。この時、木橋だった安波茶橋が石橋に替わり、経塚を通る「宿道」が石畳に改められたとされる。なお、1609（万暦37）年に島津軍が琉球に侵攻した際には、首里への侵攻路として利用された。

近世には地方統治制度として「間切・村制度」が採用され、1649（順治3）年に作成された『琉球国絵図郷村帳』には、南第一地区一帯に「前田村」・「沢岬村」・「あはき村」（安波茶村）の3ヶ村の名が見える。経塚は行政単位の「村」として成立していないため同図には登場しない。「経塚」の地名は1524（嘉靖3）年に日秀上人が、現在「経毛」と呼ばれる場所に経塚を建立したことに由来する。同集落は首里土族の屋取集落として成立、発展した。その成立年代は明らかではないが、1800年代前半には屋取集落が成立していたとされる。その後、1879（明治12）年のいわゆる「廃藩置県」によって職を失った土族が多く移り住んだことによって、現在の字経塚の基ができた。1916（大正5）年には、沢岬から「洗江良原」「経塚原」「上平良大名原」「下平良大名原」、安波茶から「北経塚原」「南経塚原」、前田から「南小島原」「西小島原」「子の方原」が分割されて字経塚が成立した。

前田・経塚近世墓群では1700年頃の銘書がある蔵骨器もみられることから、この頃には墓地としての利用が始まったと考えられる。これまで確認されている同墓群の墓の所有者については、概ね北側の前田一帯の墓は、前田の人のものが多く、南側の経塚一帯の墓は、首里の人の墓が多いというデータがある。経塚は首里の近郊に位置するため、首里の土族層を中心に多くの墓が建立された。そして、近世以降も現在に至るまで墓の造営は続けられ、墓域としての利用が続いている。

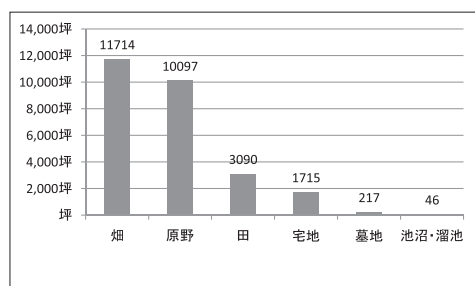
また、去る沖縄戦において前田・経塚地域は激戦地となった前田高地（浦添城跡）と首里の軍司令部との中間地点に位置したため、多くの部隊が戦闘の経過とともに入れ替わり駐留したようである。その際に丘陵斜面に坑道式の壕を構築することもあれば、墓を転用することもあり、これまでの調査で戦争に関連する遺構が確認されている。また、墓は民間人の避難場所になっており、これらの墓については多くの証言が得られている。

さて、今回の調査地である南小島原は現在、字経塚に属し、字前田との境に位置する。字経塚成立以前は字前田（前田村）に属していた。南小島原は方言名をフェーウジマーバルといい、同地の北に隣接する西小島原（ニシウジマーバル）と合わせて一帯はウジマーと呼ばれる。なお、ウジマーとはニービ（細粒砂岩）からなる土地を意味する。

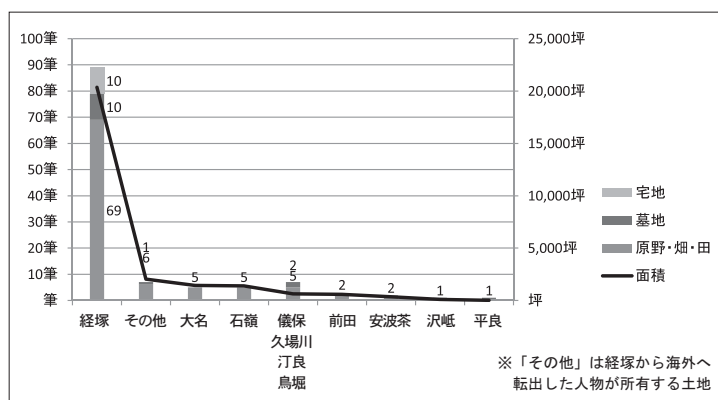
南小島原の近世から近代にかけての土地利用については史料的制約から不明である。同地の土地利用状況が把握できる資料は戦後に作成された「一筆限調書」である。該資料は戦災によって土地台帳

が焼失したために不明確になった土地の所有権や境界を再度確定する目的で作成された。該資料より戦後の南小島原の土地利用状況を図化すると第4図の通りである。この図からは同地が主に田畑と原野で構成され、その他は宅地と墓地が僅かにあることがわかる。ただし、沖縄戦によって破壊・埋没した墓地の多くが原野に組み込まれている可能性が高く、このデータがただちに近代以前の土地利用状況を示すわけではない。

また、同地を所有する人々の原籍地別の所有筆数と墓数を図化すると第5図の通りである。図からは南小島原が主に経塚の人々によって利用されてきたことがわかる。一方で、隣接する字前田の人々がほとんど土地を所有していない点も見逃せない。



第4図 地目別土地面積



第5図 戦後の本籍地別所有筆数並びに墓基数

〈引用・参考文献〉

- 浦添市教育委員会1980『うらそえの文化財』
- 浦添市史編集委員会1981『浦添市史 第二巻 資料編1』浦添市
- 浦添市史編集委員会1984『浦添市史 第五巻 資料編4 戦争体験記録』浦添市
- 浦添市史編集委員会1987『浦添市史 第六巻 資料編5』浦添市
- 浦添市史編集委員会1987『浦添市史 第七巻 資料編6』浦添市
- 浦添市史編集委員会1989『浦添市史 第一巻 通史編』浦添市
- 浦添市教育委員会 1998『浦添間切前田村・沢岨村域の近世墓と水田跡分布調査』
- 経塚自治会2006『字経塚史』
- 浦添市教育委員会2011『前田・経塚近世墓群2 首里大名地区』
- 浦添市教育委員会2013『市内遺跡発掘調査報告書（3）－平成18～23年度調査報告－』
- 浦添市2014『広報うらそえ 平成26年3月号』

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査の方法

調査については、開発の工程の関係で平成21年度に南側半分を、平成22年度に北側半分の発掘調査を行った。位置と範囲は、第6図に示したとおりである。

本地区の調査前は、丘陵の上部や裾部、中央の谷状の部分などに、近年移転が終了したコンクリート墓が点在しており、その周囲は地表に腐葉土・崩落土などが堆積している状況であった。その中で、墓口上部が僅かに確認できるものや、墓室の内部が崩落したと想定される地形上の窪みが確認される状況が散見された。これらの表土の除去や除根作業については、作業効率上バックホウを用いた機械掘削で行った。掘削の過程では、沖縄戦時のものと思われる砲弾片や戦後のガラスビン片が多数確認されたことから、調査区では近現代の攪乱が著しいことが想定された。そのような中で、墓正面や袖部が検出されると、順次人力掘削に切り替えて遺構細部の検出作業を行った。前田・経塚近世墓群の遺構は、そのほとんどが地山である細粒砂岩（二一ビ）の丘陵に掘り込まれていることから、地山を検出することで概ね墓築造時および使用時の遺構面を検出することができる。人力掘削の結果、その調査地の丘陵からは、頂部から複数段にわたって横並びに墓が検出され、合計71基の遺構を検出した。遺構番号は、確認した順に付しており、同年に実施した範囲確認調査時の番号と共通する（浦添市教育委員会2013）。また、調査は2ヶ年にわたっているが、遺構番号は連番にしている。

これらの遺構を検出した後、順次遺構内の掘削を進めた。その結果、遺構や遺物の残存状態が良好で比較的情報量の多い21基の墓と、戦後まで使われた上で移転が済んだ墓や、後世の攪乱などの影響から遺構や遺物の残存状態が悪い「空き墓」とそれに近い状態の48基の墓の計69基の墓であることが判明した。前者の遺物を伴い、かつ遺構との関係性が明確な墓については、1/20の実測図の作成を行い、その内一次葬人骨については、1/5で実測図の作成を行った。後者の墓については、略測図の作成を行った。写真撮影は適宜、調査開始から完掘まで行った。また、これ以外に戦時中に造られた防空壕が2基確認されており、これらについても測量調査を実施した。

第2節 層序と遺構

前節に記したとおり、本調査地は戦時中もしくは近現代の攪乱が著しいことが確認されたため、墓の上部や墓前については、重機と人力による掘削によってこれらの土層の除去作業を行い、遺構面の検出を行った。天井部分が崩壊している遺構は、墓室内に墓の天井部分を形成していた細粒砂岩のブロックと表土層（戦後の土層）が混在して厚く堆積している状態であり、墓の入り口のみが埋没した墓については、墓の内部にはほとんど埋土がない状態が確認された。このような状況であることから、本調査区では明確な層序関係を把握することはかなわなかった。

検出された遺構は、69基が横穴式の掘込墓であった（第7図）。そのほとんどについては天井が崩落した埋没墓であり、墓が機能していた頃の状態がバックされた状態で検出された。遺構は、上段から下段まで二段になっており、それぞれの段で墓が横並びに位置する。それぞれの遺構の特徴については、第2表にその概要を記した。なお、墓室の類型については、浦添市教育委員会2007『市内遺跡発



第6図 経塚南小島原A丘陵の位置図



第 7 図 調査地地形と各墓の位置図

掘調査報告書（1）』掲載の第1表に準拠している。また表中の蔵骨器の有無は、比較的良好な状態で出土したものを「蔵骨器有」としている。なお他に、範囲確認調査時に検出された開口部2基を調査したところ、これらが防空壕であることが判明した（018号・033号遺構）。これらの遺構は、丘陵内部で連結しており、戦時中に構築された防空壕であることが判明した。その様相については、第7図の地形図と巻末の写真（図版16）を参照頂きたい。

第3節 遺物

遺物は、総計で1,978点が出土した。出土遺物の数量と内訳は、第3表のとおりである。主たるものとしては、陶製および石製の蔵骨器、副葬品と思われる陶磁器類、煙管や簪、銭貨などの金属製品、一次葬時の木製の棺箱のものと思われる鉄釘や木片などが出土している。また表土層からは、戦時中の砲弾片などの戦争遺物も多く出土した。遺物については、基本的に墓毎に取り上げ作業を行った。以下に種類ごとにその概要を述べる。

（1）蔵骨器

出土遺物の中で、最も多かったのが蔵骨器である。総点数では1,533点が検出された。そのうち、接合・復元できたものは蓋と身をあわせて227点である。その種類と数量は第3表、概要は第5表に記したとおりである。蔵骨器はほとんどが陶製蔵骨器であり、沖縄の那覇市壺屋産のものであると考えられる。外国産のものとしては、蔵骨器に転用された中国製の小壺1点（第32図70・71）と中国南部もしくは東南アジア産と思われる小壺1点（第52図118）が出土している。

蔵骨器の種類に目を向けると、家形・甕形・転用品に大別できる。その内訳は、甕形蔵骨器のマンガン釉甕形が圧倒的に多数である。復元できた個体は蓋68点、身71点を数える。次いでボージャー形が多く、復元できた個体は蓋14点、身19点で、マンガン釉甕形の数量と比較すると約3分の1ほどである。それ以外には底が付いたマンガン釉甕形が4セット、無釉甕形が3セット、赤焼の小型甕形が2セットである。家形または御殿形の場合は蓋9点、身9点という出土状況である。また、それらは全て蓋と身のセット関係が把握できており、石製家形のものが2セット、陶製御殿形のものが7セットである。

日常雑器などが蔵骨器に転用された「転用蔵骨器」については蓋10点、身9点であった。転用蔵骨器の身は、水甕や小さなアンダーガーミを利用しているものがみられる。蓋は先にあげた蔵骨器として転用された水甕やアンダーガーミとセット関係になるもの以外にも、専用蔵骨器であるボージャー形の身とセット関係になる蓋として皿や鉢が利用されるものがある。

蔵骨器の時期としては、ボージャー形は安里分類（安里・新里2006）の蓋・身ともⅡ～Ⅶ型式の資料が出土している。また、マンガン釉甕形は安里編年（安里1997）のⅠ～Ⅵ期の資料が出土している。これらのことなどから、本調査の出土資料は概ね17世紀終わりから20世紀（現代）の時間幅で捉えることができる。

次章では、比較的状态が良い墓を取り上げた上で墓ごとに詳細について報告を行うが、その中で蔵骨器についても状態の良いものを中心に、その特徴について報告を行う。それ以外の蔵骨器については、第4章章末の第5表に観察表を掲載したので、参照頂きたい。またこれらの蔵骨器には、墨書の銘書が記されたものや人骨資料が多数確認されている。その詳細については、第5章と第6章に記すためここでは割愛する。

第 1 表 墓室平面形の類型（浦添市教育委員会2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）』を一部改変）

類型		棚の形状	墓室 平面形	墓室及び棚の特徴・構築方法
1 類	a	—		棚は無い。楕円またはいびつな形状。
	b			棚は無い。直線的な規格性で造る。
	c			棚は無い。蔵骨器が2～3基置ける広さ。墓口から奥壁まで直線的。主に一次葬人骨を安置する墓。棺箱は縦置き。側壁を拡張して蔵骨器を安置する場合もある。
	d			棚は無い。蔵骨器が2～3基置ける広さ。平面観は楕円形状。主に一次葬人骨を安置する墓。棺箱は横置き。
2 類	a	出窓状		正面の奥壁を凸状（＝出窓状）に成形。棚幅がシルヒラシ幅より短い。
	b			正面の奥壁と左右側壁を凸状に成形。
3 類	a	「コ」字状		平面観が「コ」字を横にした形状。棚の高さは均一。
	b			平面観は3類aと同じだが、正面と左右の棚に段差を造る。
	c	「L」字状		奥壁（正面）と側壁片側のみ棚を造る。平面観は「L」字を横にした形。
4 類	a	段状 （階段状）		平面観が楕円またはいびつな形。奥壁とほぼ平行する棚を1段造る。
	b			墓室内は直線的な規格で成形。正面に1段の棚を造る。
	c			墓室内は直線的な規格で成形。正面に2～3段の棚を造る。
5 類	a	「コ」字状＋ 階段状		3類a＋4類c
	b			3類b＋4類c
	c	「L」字状＋ 階段状		3類c＋4類c

第2表 遺構観察一覧表 (1)

番号	外観形式	墓室類型	墓室(㎡)	墓口方位	法量 (m)			蔵骨器の出土状況	一次葬の出土状況	備 考
					高さ	幅	奥行			
001	掘込墓	2b変形	1.09	N19° W 北北西	—	1.45	1.60	○	×	天井が崩落した埋没墓。奥側に直線状に掘り込まれた後に、左右に蔵骨器1基分を掘り掘げられた墓。4基の蔵骨器が出土。
002	掘込墓	1d	2.39	N63° W 西北西	—	1.46	1.77	×	×	丘陵頂部近くに造られた遺構。墓室の入り口と墓庭部が崩落しており、遺構の残存状況が良くない。蔵骨器2〜3基分の大きさ。
003	掘込墓	3a	5.45	N18° E 北北東	1.73	2.90	1.88	×	×	天井が残存する墓。墓室には、コノ字状に棚が一段造られる。墓室内に戦争遺物が出土。沖縄戦時に避難壕として利用された可能性有り。
004	掘込墓	1d?	—	N5° E 北	—	(1.80)	(0.90)	○	×	005号墓奥壁上部に位置する遺構。天井などが崩落し、墓室奥壁と床の一部のみが残存。蔵骨器1基が出土。
005	掘込墓	5c	(3.73)	N14° E 北北東	—	(1.86)	2.22	×	×	天井が崩落した埋没墓。墓室の床面のみ残存。向かって右側に006号墓が隣接している。005号墓の墓底土坑より副葬品が出土。
006	掘込墓	4a	1.36	N15° E 北北東	—	1.36	1.13	×	×	天井が崩落した埋没墓。005号墓に隣接する。墓室の床面と右壁のみ残存。残存状況が良くないため、詳細は不明である。
007	掘込墓	1c	1.29	N39° W 北西	0.76	0.68	1.89	×	×	008号と009号墓の間に位置する墓。墓室形状は長方形。小規模であり、009号墓の脇墓や一次葬用の墓である可能性がある。
008	掘込墓	1c	0.48	N123° W 西南西	0.57	0.54	0.94	×	×	007号墓に隣接して造られた小規模な遺構。007号、009号墓と墓庭が共通である、関連する遺構である可能性が高い。
009	掘込墓	4a	3.72	N16° W 北北西	—	1.90	2.00	○	×	墓室の天井が崩落した埋没墓。墓室内より18基の蔵骨器が出土。墓室形状は、概ね方形を呈するが隅はそれほど丁寧に造られず、不定形な方形である。
010	掘込墓	5a変形	1.22	N35° W 北西	—	1.26	1.89	×	×	天井や壁が崩落しており、残存状況が良くない。墓室内から戦争遺物が出土。墓室の壁が一部破壊されており、戦時に壕として改造されたものと考えられる。
011	掘込墓	1c	1.57	N151° E 南南東	0.78	0.89	1.88	×	×	010号墓の墓庭に位置する小規模な遺構。墓口付近は天井が残存していない。遺物の出土は無く、詳細な利用の形態は不明。
012	掘込墓	1a	0.19	N147° W 南南西	—	0.39	0.52	×	×	013号墓の墓庭に造られた小規模な遺構。遺構の一部のみが残存。位置や規模からは013号墓の脇墓の可能性が想定される。
013	掘込墓	1a	4.49	N54° W 北西	—	2.08	2.29	×	×	014号、016号と横並びに位置する。天井が崩落し、墓室の下半部のみが残存。蔵骨器片と戦争遺物が多数出土。014号・016号墓と連結されており、戦時に壕として利用されたと考えられる。
014	掘込墓	3b	2.62	N65° W 西北西	—	1.77	1.63	×	×	013号、016号と横並びに位置する。天井が崩落し、墓室の下半部のみが残存。棚が一段造られる。戦争遺物が出土。014号・016号墓と連結されており、壕として利用されたと考えられる。
015	掘込墓	1c	0.42	N62° W 西北西	0.85	0.72	0.93	×	×	016号墓の墓室奥壁上部に掘り込まれた小規模な遺構。016号墓とその周囲が埋没した後に造られたものと考えられる。
016	掘込墓	4b	2.84	N58° W 西北西	—	1.62	1.85	×	×	013号、014号と横並びに位置する。天井が崩落し、墓室の下半部と閉塞石の一部のみが残存。棚が一段造られる。014号・016号墓と連結されており、壕として利用されたと考えられる。
017	掘込墓	1d	1.30	N83° W 西	—	1.31	1.07	×	×	016号墓の墓庭に位置する墓。墓室下半部のみが残存。016号の墓庭に天井が切られており、それ以前の遺構であると考えられる。
018	—	—	—	—	—	—	—	—	—	防空壕。調査終了後の立会い調査で、丘陵内部で033号の開口部との連結が確認された。内部では戦争遺物が多数確認された。
019	掘込墓	1d	2.54	N115° W 西南西	—	2.04	1.61	○	×	天井が崩落した埋没墓。墓室形状は横長の楕円形。墓口に閉塞石とサンミデーの一部が残存。墓室内より1基の蔵骨器が出土。
020	掘込墓	1a	1.20	N109° W 西南西	—	0.85	1.60	×	×	天井が崩落した遺構。遺構の床面と墓室の壁面の一部のみ検出。形状は縦長で不定形。遺構の性格も含め詳細は不明。
021	掘込墓	4c	4.81	N113° W 西南西	—	2.16	2.12	×	×	天井が崩落した埋没墓。遺構の一部のみが残存。墓口付近に閉塞石およびサンミデーの一部が検出された。墓室の床面に土坑有り。土坑からはスコップが出土している。
022	掘込墓	1a	4.96	N118° W 西南西	—	2.58	2.01	×	×	天井が崩落した埋没墓。墓室床面と壁面の下半部のみが残存。墓室内より、戦争遺物と遺骨が出土。それらの出土状況からは、沖縄戦時に避難壕として利用されたと考えられる。
023	掘込墓	4a?	(0.77)	—	—	—	—	○	×	天井が崩落した埋没墓。墓室床面と壁面、棚の一部が残存。墓室形状は不明。概ね2基分の蔵骨器片や人骨が検出された。
024	掘込墓	1a	0.43	N115° W 西南西	—	0.79	0.62	×	×	天井が崩落した遺構。墓室床面と閉塞石の一部が残存。墓室内に四角い土坑が造られている。023号墓の遺構を切って造られる。

第2表 遺構観察一覧表 (2)

番号	外観形式	墓室類型	墓室 (㎡)	墓口方位	法量 (m)			蔵骨器の出土状況	一次葬の出土状況	備 考
					高さ	幅	奥行			
025	掘込墓	1a	0.35	N33° W 北北西	—	0.64	0.65	×	×	天井が崩落した遺構。墓室の奥壁の一部と思われる箇所のみが検出された。残存状況が悪く、形状不明瞭なため詳細は不明。
026	掘込墓	4a	2.19	N76° W 西北西	—	—	2.29	×	×	天井が崩落した遺構。墓室の一部のみが残存。022号墓の墓庭に切られており、遺構のほとんどが残存していない。
027	掘込墓	3c	3.19	N109° W 西南西	—	2.00	1.80	○	×	天井が崩落した埋没墓。墓室の下半部のみが残存。墓室内より15基の蔵骨器が出土している。墓室形状は、不定形な方形でL字状に棚が一段造られる。
028	掘込墓	3a	1.35	N139° W 南西	—	1.24	1.11	×	×	天井が崩落した遺構。027号と029号の間に位置する。墓室の床面のみ残存。墓室のシルヒラン部分はほぼ方形に造られている。
029	掘込墓	5a	5.60	N164° W 南南西	—	2.28	2.41	×	×	天井が崩落した埋没墓。墓室の床面のみが残存する。墓室には3段の棚が造られる。墓室内より戦争遺物が出土しており、戦時中に二次的に利用されたと考えられる。
030	掘込墓	3a	(1.47)	N123° E 東南東	—	1.55	1.14	×	×	天井が崩落した遺構。墓室の奥壁と床面のみが残存する。コノ字状の棚が1段造られる。
031	掘込墓	4b	2.96	N99° E 東	—	1.13	1.45	×	×	天井が崩落した遺構。墓室の床面の一部のみが残存する。遺構の残存状況が悪く、形状は不明瞭である。遺構の直下に戦時中の防空壕が掘られているため、入り口付近は破壊されている。
032	掘込墓	4c	(1.89)	N140° E 南東	—	2.21	0.93	×	×	天井が崩落した遺構。墓室の床面の一部のみが残存する。遺構の崩落が激しく、形状は不明瞭である。
033	—	—	—	—	—	—	—	—	—	防空壕。調査終了後の立会い調査で、丘陵の内部で033号の開口部と連結していることが確認された。壕の内部では戦争遺物が多数確認された。
034	掘込墓	3a	3.51	N90° E 東	—	2.02	1.90	×	×	天井が崩落した遺構。墓室の床面と壁面が残存。墓室の奥壁が掘り込まれ空間が造られている。戦時中に壕として利用されたと考えられる。
035	掘込墓	5a	3.90	N82° E 東	1.32	2.22	1.85	×	×	天井が残存する墓。墓室の壁面に灯り取りが造られており、戦時中に壕として利用されたとと思われる。
036	掘込墓	1b	(1.87)	N102° W 西南西	—	1.67	0.89	×	×	天井が崩落した遺構。遺構の床面と壁面の一部のみ残存。037号墓と墓庭を共有する。戦争遺物が出土した。
037	掘込墓	1a	(1.95)	N60° W 西北西	—	1.94	1.15	×	×	天井が崩落した遺構。遺構の床面と壁面の一部のみ残存。036号墓と墓庭を共有する。戦争遺物が出土した。
038	掘込墓	1b	(0.77)	N131° E 南東	—	1.59	(0.54)	×	×	天井が崩落した遺構。壁面は直線的に造られる。残存状況が非常に悪いいため詳細は不明。
039	掘込墓	1b	(0.77)	N170° E 南	—	1.59	(0.54)	×	×	天井が崩落した遺構。壁面は直線的に造られる。残存状況が非常に悪いいため詳細は不明。
040	掘込墓	1b	(0.85)	N156° W 南南西	—	1.37	1.01	×	×	天井が崩落した遺構。壁面は直線的に造られる。残存状況が非常に悪いいため詳細は不明。
041	掘込墓	1d	(0.43)	N0° 北	—	(0.90)	(0.65)	○	×	001号墓の墓庭左袖部に造られた小規模な遺構。天井が崩落しており、遺構の形状は不明瞭。001号墓の脇墓の可能性有。4基の蔵骨器が出土。
042	掘込墓	1b	2.36	N53° E 北東	0.80	2.16	0.90	×	×	068号墓の上部に掘り込まれた小規模な遺構。内部は横長の長方形である。068号墓が埋没後に造られた遺構であると考えられる。
043	掘込墓	5a	5.69	N73° E 東北東	—	2.07	2.38	×	×	天井が崩落した埋没墓。墓室の床面と壁面が残存する。墓室には3段の棚がつくられる。墓庭に脇墓と思われる小規模な遺構がある。
044	掘込墓	5b	5.51	N71° E 東北東	0.95	2.05	2.41	×	×	天井が残存する墓。墓室には左右に1段、奥に2段の棚が造られる。各棚の高さは0.2～0.3mである。
045	掘込墓	1a	2.35	N63° E 東北東	0.86	1.29	1.36	×	×	天井が残存する墓。墓室形状は不定形で、墓室内に棚は造られていない。043号から046号墓は横並びに位置する。
046	掘込墓	3a	3.99	N71° E 東北東	1.22	2.07	1.52	×	×	天井が残存する墓。墓室形状は方形で、墓室には1段のコノ字状の棚が造られる。棚の高さは0.2～0.3mである。
047	掘込墓	3c	5.14	N164° E 南南東	—	2.21	2.10	×	×	天井が崩落した埋没墓。墓室の下半部のみ残存。墓室には石灰岩が並べられ、埋土で棚が造られる。また閉塞石の一部が残存する。
048	掘込墓	1a	11.40	N168° E 南南東	—	2.01	4.02	×	×	天井が崩落した埋没墓。墓口と思われる付近からサンミデーの一部分と思われる石が出土。墓室は崩壊が著しく、形状は不明瞭である。

第2表 遺構観察一覧表 (3)

番号	外観形式	墓室類型	墓室 (㎡)	墓口方位	法量 (m)			蔵骨器 の出土 状況	一次葬 の出土 状況	備 考
					高さ	幅	奥行			
049	掘込墓	1a	1.38	N75° W 西北西	—	1.09	1.27	○	×	天井が崩落した埋没墓。他の墓より羨道が長く造られている。墓室形状は、不定形である。墓室内より2基の蔵骨器が出土。
050	掘込墓	4b	1.89	N14° E 北北東	—	1.28	1.48	○	×	天井が崩落した埋没墓。049号墓に隣接して造られている。墓室の床面と壁面の一部が残存する。墓室内より5基の蔵骨器が出土。
051	掘込墓	4b	2.95	N50° W 北西	—	1.58	1.87	○	×	天井が崩落した埋没墓。墓室形状は方形で、奥に1段の棚が造られる。棚の上から3基の蔵骨器が出土。
052	掘込墓	1a	0.90	N10° E 北	—	0.75	1.20	○	×	天井が崩落した埋没墓。051号墓の墓庭に造られた小規模な遺構。蔵骨器の蓋1基が出土。051号墓の脇墓であると思われる。
053	掘込墓	1a	8.40	N65° W 西北西	—	2.27	1.86	×	×	遺構の床面と思われる部分のみ残存。残存状況が悪く、遺構の形状が不明瞭ある。墓庭部分から070号墓が出土している。
054	掘込墓	4c	2.64	N47° W 北西	—	1.32	2.00	○	×	天井が崩落した埋没墓。墓室形状は方形で、奥に2段に棚が造られる。棚の上から4基の蔵骨器が出土しているが、残存状況は良くない。
055	掘込墓	5a	6.55	N30° W 北北西	—	2.55	2.57	○	○	天井が崩落した埋没墓。墓内には3段の棚が造られる。また、9基の蔵骨器が出土。シルヒラシに一次葬人骨1体が出土。
056	掘込墓	1b	2.37	N4° W 北	—	1.67	1.42	○	×	天井が崩落した埋没墓。概ね方形の墓室で蔵骨器を安置するための棚は造られていない。墓室内より8基の蔵骨器が出土した。
057	掘込墓	3b	3.86	N84° E 東	—	2.30	1.86	○	×	天井が崩落した埋没墓。墓室の半分と墓庭が崩落のため残存していない。墓室に1段の棚が造られる。墓室内より15基の蔵骨器が出土。
058	掘込墓	3b	3.75	N21° W 北北西	—	2.39	1.58	○	×	天井が崩落した埋没墓。横長の長方形の墓室に、コノ字状に棚が造られる。棚上とシルヒラシに7基の蔵骨器が出土した。
059	掘込墓	1a	1.17	N12° W 北北西	—	1.24	0.95	○	×	天井が崩落した埋没墓。墓室は不定形な楕円形状。3基の蔵骨器が出土した。蔵骨器の下には台石が出土。
060	掘込墓	3b	2.97	N4° W 北	1.73	2.05	1.45	×	×	天井が残存する墓。墓室内にはコノ字状に1段の棚が造られる。蔵骨器の出土はなし。サンミデーの石の一部が残存。
061	掘込墓	1c	0.09	N13° W 北北西	—	0.16	0.61	○	×	天井が埋没した小規模な墓。丘陵斜面に蔵骨器1基が直立した状態で出土した。遺構の残存状況が悪く、形状が不明瞭。
062	掘込墓	5a	6.92	N71° W 西北西	—	2.78	2.49	○	×	天井が崩落した埋没墓。墓室はほぼ方形で、墓口付近に閉塞石の一部が残る。墓室内より13基の蔵骨器が出土。
063	掘込墓	3類	2.79	N81° W 西	—	(1.48)	1.45	×	×	天井が崩落した埋没墓。墓室の床面の一部のみ検出された。墓室の一部が削られており、形状不明瞭。
064	掘込墓	2a	3.08	N88° W 西	0.79	1.82	1.41	×	×	天井が残存する墓。墓室の形状は不定形。わずかな段差の不明瞭な棚が一段つくられ、更にその奥が掘りこまれる。出窓状である。
065	掘込墓	4b?	3.42	N102° W 西南西	—	1.86	2.50	×	×	天井が崩落した埋没墓。遺構の壁面の一部のみが残存。隣の066号墓との間の壁面が取り払われ、墓室が連結されたと思われる。
066	掘込墓	4b?	3.42	N102° W 西南西	—	1.86	2.50	×	×	天井が崩落した埋没墓。遺構の壁面の一部のみが残存。隣の065号墓との間の壁面が取り払われ、墓室が連結されたと思われる。
067	掘込墓	1c	0.20	N100° W 西	—	0.28	0.25	×	×	天井が崩落した埋没墓。047号墓の墓庭に造られた小規模の遺構で脇墓の可能性はある。
068	掘込墓	5a	5.10	N73° E 東北東	—	1.84	1.93	×	×	天井が崩落した埋没墓。042号墓の直下にある。奥に1番棚が造られ、2番棚はコの字状に造られる。
069	掘込墓	1c	0.45	N144° W 南西	—	0.33	1.39	×	×	天井が崩落した埋没墓。062号墓の墓庭に造られた縦長の遺構。性格不明。
070	掘込墓	1a	(0.14)	不明	—	(0.41)	(0.35)	○	×	天井が崩落した小規模な埋没墓。053号墓の墓庭前方から検出された。小壺1個分の大きさの遺構。
071	掘込墓	1a	(0.57)	不明	—	(1.15)	(0.50)	○	×	天井が崩落した埋没墓。丘陵北端の裾部から検出。遺構の一部のみ残存。2基の蔵骨器が出土。

第3表 出土遺物一覧表 (1)

墓 種類			001号		003号		004号		005号		006号		007号		009号		7・8・9号墓底	010号	011号	013号	017号	019号	020号	021号	023号		024号	026号	027号	小計1	
			墓室	墓底	墓室	墓室	墓底	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	土坑	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓底	墓室	墓室	墓室		
蔵骨器	ボー ジャー 形	蓋												1								1							1	3	
		身												1								1							2	4	
		破片		31					26	67									7	58									7		196
	無釉甕形	蓋												1																1	2
		身												1																	1
	マンガ ン釉 甕形	蓋	2			1								10																11	24
		身	2			1								10																11	24
		破片		97					343	204						3					125	2		5		5	1	3	3	1	792
	マンガ ン釉 底付 甕形	蓋	1											2																	3
		身	1											2																	3
		破片																							1						1
	家形 (石製)	蓋																													0
		身																													0
	御殿形 (陶製)	蓋												2																1	3
		身												2																1	3
	転用	蓋	1											1																	2
		身	1											2																	3
		破片																													0
	その他	蓋																												1	1
		身																												1	1
	不明	破片		2																24											26
陶磁器	瓶	完形					3																						1	4	
		破片											1																	1	
	皿	破片			1																									1	
	小杯	完形					2															1								3	
		破片												2																2	
	湯のみ	破片									4																			4	
	碗	破片		10					7																					17	
	壺	破片		6																										6	
	アンダ ガーミ	完形																												0	
		破片		2															1												3
	水注・ 急須	完形																													0
		破片		15																											15
	不明	破片		1											2									1							4
陶質土器																														0	
キセル	雁首						2							1																3	
	吸口						1																							1	
簪																		1											1	2	
指輪							3																							3	
櫛																														0	
銭貨																													2	2	
瓦																														0	
釘																													5	5	
硯				1																										1	
石																													19	19	
サング													36																	36	
貝																														0	
木片			3	36	1		11			7	4	9	4	2	1	24	1			1	1	1	1						5	111	
合計			11	201	2	2	22	369	285	8	80	11	4	9	231	4	2	7	2	7	1	3	10	64						1,335	

第3表 出土遺物一覧表(2)

種類			墓																			小計2	合計 (小計1+2)
			029号	035号	039号	041号	049号	050号	051号	052号	054号	055号	056号	057号	058号	059号	061号	062号	068号	070号	071号		
			墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓口		
蔵骨器	ボージャー形	蓋					1						4	4				2				11	14
		身					1						3	9				2				15	19
		破片		1	7									16					2	5			31
	無釉甕形	蓋							1													1	3
		身							1									1				2	3
	マンガン釉甕形	蓋				1	1	3		1	4	6	3	3	7	3	1	9			2	44	68
		身				4	1	4			4	6	4	2	7	3	1	9			2	47	71
		破片		1		3		170			1			16	1	1	1	56	1		2	253	1,045
	マンガン釉底付甕形	蓋																1				1	4
		身																1				1	4
		破片																			2	2	3
	家形(石製)	蓋												2								2	2
		身												2								2	2
	御殿形(陶製)	蓋										2	1					1				4	7
		身										2	1					1				4	7
	転用	蓋				1		1			1	1		3						1		8	10
		身						1	1			1		2						1		6	9
		破片															1		1			2	2
	その他	蓋							1													1	2
		身							1													1	2
	不明	破片												2				1				3	29
陶磁器	瓶	完形																				0	4
		破片										1										1	2
	皿	破片	2																			2	3
	小杯	完形												1								1	4
		破片																				0	2
	湯のみ	破片																				0	4
	碗	破片	4	1												4				1	10	27	
	壺	破片																				0	6
	アンダガーミ	完形																				0	0
		破片																				0	3
	水注・急須	完形																				0	0
		破片																				0	15
	不明	破片	2																			2	6
	陶質土器													1								1	1
キセル	雁首																				0	3	
	吸口																				0	1	
簪																					0	2	
指輪								1				2			1					2	6	9	
櫛												2									2	2	
銭貨																				1	1	3	
瓦				2													1				3	3	
釘				2								9	1	1	1		2				16	21	
硯																					0	1	
石														1	48						49	68	
サンゴ														48					48		96	132	
貝																			1		1	1	
木片			8	3																	11	122	
合計			16	10	7	9	4	180	5	1	10	31	18	113	65	11	4	89	7	51	12	643	1,978

（２）蔵骨器以外の陶磁器

蔵骨器以外では、陶磁器の小物類が多く出土している。これらの多くは、一次葬時の副葬品や墓が機能していた際に墓前などに供献されたものであると考えられる。その種類と数量は第３表に記した。そのほとんどが沖縄産であり、瓶、碗、皿、小杯、壺などがみられ、主体は瓶と碗であった。多くは破片での出土だが、瓶、小杯などは完形の資料が割合多い。技法や彩色から、これらは近世末～近代に流通したものであると考えられる。また、瓶のなかには近代に流通する「琉球古典焼」もみられた（第24図58）。そのほか、焼成はなされるが釉掛けの施されない簡素な造りの煙管（第12図13・14）も出土しており、使用された形跡もないことからおそらく副葬する際の模造品であった可能性が高いと考えられる。

（３）金属製品

金属製品は、銅製の煙管、簪、銭貨、釘が出土した。煙管は吸口のみであるが、丁寧な造りで文様らしきものも確認できる資料である。銭貨は計３枚出土しており、寛永通宝（第54図121）と康熙通宝が確認できた。なかでも康熙通宝は二枚が裏面同士接着した状態で出土しており、おそらく副葬段階で重ねていたものが、長い年月で石灰により接着してしまったものであると考えられる（第24図56・57）。釘は一次葬人骨の木棺にともなうものであると考えられるが、いずれも状態が悪く全形が伺えないため本報告では数量のみの報告にとどめた。

（４）指輪

本調査地区では、さまざまな材質の指輪が出土した。副葬品として比較的一般的な銅製指輪は、幅を大きく取って研磨加工を施すタイプ（第12図16・17）と細い環を重ねて造るタイプ（第54図119・120）の二つのタイプがみられ、そのほかジュラルミン製（第33図72）や、近現代と思われるプラスチック製（第43図96）のものなどがあつた。これらの出土傾向からは、墓が近現代まで使用されていたことがわかる。また、プラスチック製の指輪の中には指の骨とともに出土しているものもあり、指に装着された状態であると考えられるものも出土している（図版26指輪2）。

（５）その他の製品

その他の副葬品として、055号墓の一次葬人骨に伴って櫛２点が出土している。これらはプラスチック製であることから近現代のものであると判断し、写真掲載のみとした（図版26櫛1・櫛2）。また、003号墓から石製の硯が１点出土している（第55図122）。硯は海部を大きく欠損した破片ではあるが、擦痕や刃物でつけられたような痕が見られるのが特徴である。

また、蔵骨器の中から小石（027号墓蔵骨器9・058号墓蔵骨器7）やサンゴ・貝（009号墓蔵骨器6・070号墓蔵骨器1）などが入っている事例が数点みられた。これらは何らかの理由で骨を納骨できない場合の代用として入れられたものと思われる。

（６）戦争遺物

本調査区では、副葬品のほか多くの戦争遺物が出土した。それらの種類と数量を第４表に記した。そのうち比較的残存状態の良い遺物を図版35および36に掲載した。

本調査で得られた戦争遺物は概して薬瓶（図版36-j・k・l）が多く、なかには薬が入ったままのもの

のも出土した（図版36-j）。内容物についての分析は行っていないが、形状からおそらく正露丸であると考えられる。薬瓶は掲載資料以外にも多数出土しており、その中には上記のような薬が残存するものもいくつかみられた。

そのほか靴底（図版36-i）、軍服のボタン（図版36-m・n・o・p・q・r）、銃剣（図版35-b）、ラッパ（図版35-a）、防毒マスクのレンズ（図版36-d・e）、除毒剤（図版36-v）、鉛筆（図版36-f）、石鹼箱（図版36-g・h）、剃刀（図版36-s）、歯ブラシ（図版36-t）、眼鏡のフレーム（図版36-u）、鈴がついた簪（図版36-c）、櫛、砲弾の破片であると考えられる金属片などが確認された。また、碗・皿・湯のみなどの陶磁器類も数点が出土している（第4表参照）。

上記のなかでも比較的珍しい資料として、箱に入った状態の剃刀（図版36-s）とラッパ（図版35-a）が挙げられる。ラッパについては、013号墓と014号墓から出土した破片を接合した結果、概ね形状を復元することができた。両遺構は、墓室の壁が取り払われ連結されていたことから、戦時中に防空壕として転用された遺構であると考えられる。

第4表 戦争遺物集計表

種類	号墓	003号	7,8,9号	010号	011号	013号	014号	021号	029号	030号	034号	035号	036号	合計
		墓室	墓庭	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	
陶磁器	碗								4					4
	皿								2					2
	蓋								1					1
	湯のみ								2					2
	破片								20					20
	ガラス瓶	1							6	2	1	1	1	12
	簪					1								1
	櫛				1									1
	メガネ										1			1
	レンズ						3		1					4
	ハブラシ				1				1					2
	靴底			1					1	4	1		1	8
	ボタン								12					12
	ヘルメット						1							1
	スコップ	1		1				1						3
	銃剣						1							1
	ペンチ											1		1
	ラッパ					1								1
	簪箱												1	1
	石鹼箱						2		1					3
	カミソリ								1					1
	鉛筆			1			1							2
	工具								2					2
	金具								3		1			4
	金属片		1		1		5							7
	皮						1							1
	薬品										1			1
	不明								3					3
	合計	2	1	3	3	2	14	1	60	6	5	2	3	102

以上が今回の発掘調査の出土遺物の概要である。第4章各節では、遺構と遺物の残存状態が比較的良好な墓について、実測図などを図示しつつその詳細について報告を行う。

また前述したように、本調査地区は、同年に範囲確認調査を行っており、その時に墓庭を中心に多くの遺物が得られている。それらについては、浦添市教育委員会刊行の『市内遺跡発掘調査報告書（3）』（2013年）の第4表を参照されたい。よって、同調査地区の遺物の総数量は、第3表・第4表に上記の数量を加えたものであることを付記しておく。

〈引用・参考文献〉

- 安里進1997「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－」『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』浦添市文化財調査研究報告書第25集
- 安里進・新里まゆみ2006「比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－」『比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書
- 上江洲均1981「第五章 沖縄の厨子甕」『紀年銘（年号のある）民具・農具調査等－西日本－』日本常民文化研究所報告第8集 日本常民文化研究所
- 浦添市教育委員会2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）－平成13～18年度調査報告－』
- 浦添市教育委員会2013『市内遺跡発掘調査報告書（3）－平成18～23年度調査報告－』

第4章 調査の成果

調査では、合計69基の墓が検出された。これらの遺構と出土遺物の概要については、第3章の第2表と第3～4表にすでに示したとおりである。本章では、これらの墓の中から遺構と遺物の残存状況が良好である特徴的な遺構を図示した上で、その詳細の報告を行うこととする。なお、遺物の取り上げ番号については遺構図中に番号を図示した。

本章で詳細な報告を行う以外の墓については、第7図と第2～5表及び巻末に掲載した写真図版をもって報告とする。

第1節 001号墓・041号墓

(1) 遺構（第8図・第9図）

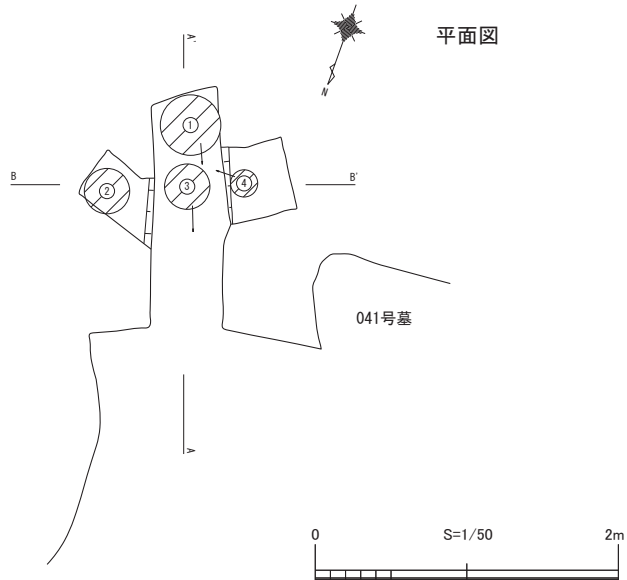
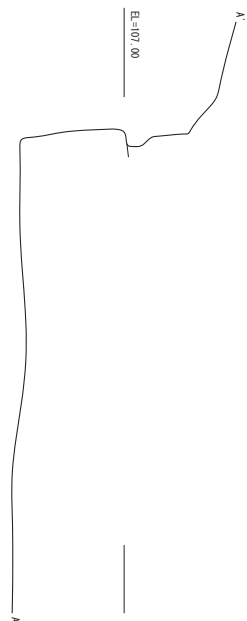
001号墓は、丘陵南側頂上付近の斜面部に位置する横穴式の掘込墓である（第7図）。同丘陵の中では、最も標高の高い場所に位置する。周辺は比較的傾斜がある斜面であるが、北側にかけて尾根状に緩やかになっており、その平場から南側に向けて墓室が掘り込まれている。001号墓は天井が崩落し埋没した墓で、埋土を除去したところ墓室から蔵骨器が出土した。墓口方位は、北北西（N19° W）である。墓室の形状は、墓口から奥に向けて直線的に1.6mほど掘り込まれ、左右に蔵骨器1基分のスペースが出窓状に掘り広げられている。左右のスペースはわずかな段差が設けられている。墓室の直線部分の奥行きは1.60m、幅は0.50mで左右に広げられた部分も含めると幅は1.45mほどである。天井は崩落して残存しないため、墓室の高さは不明である。

墓室からは、合計4点の蔵骨器が直立した状態で出土した。墓室中央と左棚にはマンガン釉甕形が各1点、墓室奥にマンガン釉底付甕形が1点、右棚には蔵骨器に転用された水甕が1点出土した。墓室の規模や蔵骨器の数から、1～2世代分の小規模な家族墓であると考えられる。001号墓の明確な造営年代は不明であるが、蔵骨器1から「同治二年・・・洗骨」（同治2年＝1863年）の銘書が確認されたことや、それ以外の蔵骨器から判断して19世紀中頃に墓が造られ、戦前までは墓が機能していた可能性が高い。その後、沖縄戦の前後に天井が崩落して埋没したのではないかと推測される。蔵骨器の詳細については後述する。

また、001号墓の西側に隣接して小規模な掘り込みが検出された。掘り込みからは蔵骨器が出土したことから、掘込墓であることが確認された（041号墓）（第9図）。天井や墓室の壁面が崩落したために埋没し、蔵骨器も破損した状態で出土した。ただし、蔵骨器は直立していたと思われ、かつ蔵骨器の単位は把握できたことから、墓室内に安置された状態であったと考えられる。蔵骨器は4点であると推測される。

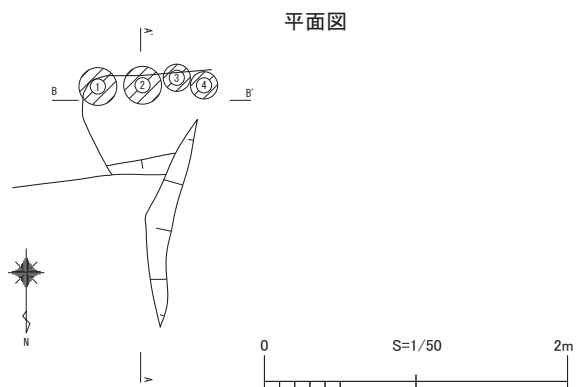
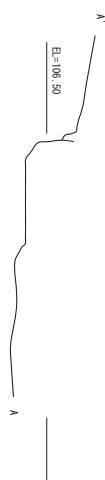
041号墓の墓口方位は、北（N0°）である。墓室の形状は、遺構の残存状況が良くないため判然としないが、横長の楕円形状を呈していたと思われる。墓室の壁面の一部は、丘陵斜面とともに崩落し残存していない。墓室部分の奥行きは残存部で0.65m、幅0.90m、高さは不明である。001号墓の墓庭に隣接していることから、001号墓と関連する墓である可能性が高いと考えられる。遺構の明確な造営および使用時期は不明であるが、蔵骨器の特徴から安里編年の第V～VI期（1900年代以降）の資料が出土している。

縦断面図



第8図 001号墓遺構図

縦断面図



第9図 041号墓遺構図

(2) 遺物 (第10図)

001号墓と041号に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。ここでは、001号墓・041号の遺物のうち、比較的残存状況の良い001号墓の墓室内から出土した蔵骨器4点について図化した。041号墓の蔵骨器の観察一覧表については、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細については、第5章および第6章を参照頂きたい。

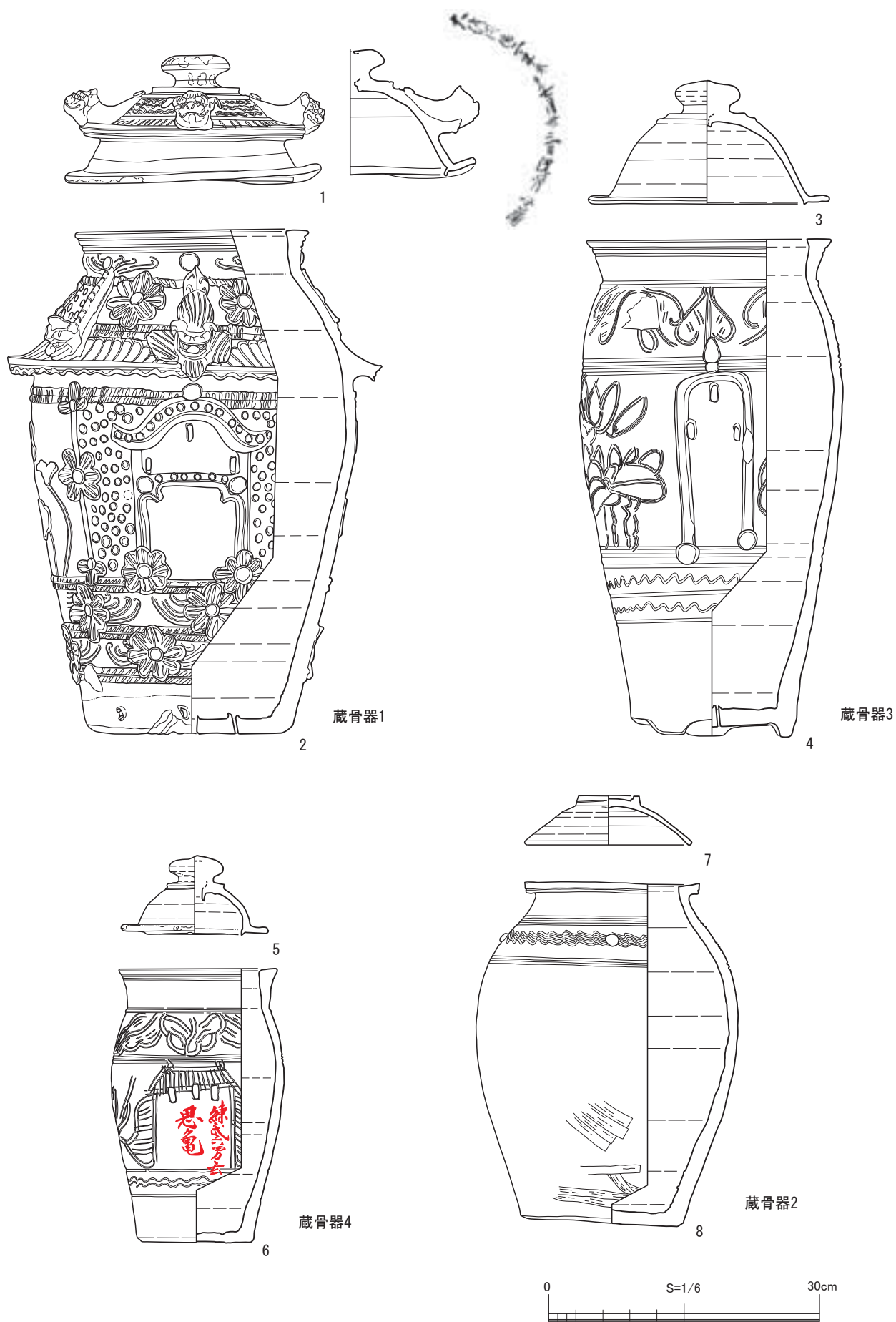
001号墓から出土した蔵骨器は、甕形3点、転用蔵骨器が1点である。甕形はマンガン釉甕形、マンガン釉底付甕形が得られた。墓室内で直立した状態で出土したことからほぼ安置された状態を保っていると考えられる。そのため、蓋と身のセット関係を把握することができた。

蔵骨器1 (第10図1・2) はマンガン釉底付甕形の資料である。蓋 (第10図1) のつまみは扁平形で、つまみ台はヘラによる削り出しで成形され、上部に2条圈線を廻らせる。体部半分程の高さに底が廻らされ、上部には波状文を描き、底には瓦と思われる文様が描かれる。4箇所隅棟部の先に獅子頭が付けられる。鐳の端部は丸く、かえりは成形がやや雑である。身 (第10図2) は、口縁部が外反し、口唇部は平坦に成形される。肩部文様帯は上部に花文や小さな円文を貼り付け、その下に底がめぐらされる。底には半裁竹管を強く引いて立体的な瓦が表現され、4箇所に隅棟を付け、隅棟の先と中央には龍が貼り付けられる。胴部文様帯は、隅棟からの延長線上に縦位に区画する。中央の区画に唐破風形の屋門を貼り付け、柱の玉飾は花文が貼り付けられる。左右の区画には蓮華文を貼り付ける。胴下部文様帯にも花文が貼り付けられる。マンガン釉は焼成時の影響か斑状になり、口縁内側まで施釉されるが胴下部は露胎する。蓋裏に、同治2 (1863) 年に洗骨したという内容の銘書が記される。

蔵骨器3 (第10図3・4) と蔵骨器4 (第10図5・6) は、マンガン釉甕形の資料である。ともに身の肩部の張り出しが弱く縦に長い寸胴形の器形である。蔵骨器3の蓋 (第10図3) のつまみは扁平形で、つまみ台はヘラによる削り出しで成形される。鐳はやや反り、鐳端部は丸くなる。かえりの成形はやや雑である。身 (第10図4) は口縁部が外反し、口唇部は平坦に成形される。屋門はアーチ形で貼り付け、玉飾は略三角形と円形を組み合わせて表現される。横帯2のみ突帯状になり、横帯1、3、4と文様は沈線で描かれる。底部に逆台形状の粘土を貼り付けた脚が3つ付けられている。外面は水挽きロクロ成形とみられ、マンガン釉が全面に施釉されるが口唇部は露胎する。安里編年の第V期 (1900～1920年代) の資料である。

蔵骨器4 (第10図5・6) は小型のマンガン釉甕形の資料である。蓋 (第10図5) のつまみは扁平形で、つまみ台はヘラによる削り出しで成形される。鐳は平坦に、鐳端部は丸く成形され、断面三角形のかえりがつくられる。つまみ頂部はマンガン釉が掛けられない。身 (第10図6) は、口縁部がゆるやかに外反し、口唇部が平坦に成形される。屋門は沈線で瓦屋形が描かれ、柱の左右に蓮弁文を描く。横帯2のみ突帯状になり、横帯1、3、4とそれぞれの文様は沈線で描かれる。マンガン釉が口縁部内面まで施釉される。屋門が沈線で描かれることから、安里編年の第VI期 (1930年代以後) の資料である。銘書面に朱墨で銘書が記されるが、朱墨を使用しているのは今回の調査地の資料ではこの1点のみである。銘書の詳細については、第5章を参照頂きたい。

蔵骨器2 (第10図7・8) は、蓋は皿、身は水甕を蔵骨器に転用した資料である。蓋 (第10図7) は「赤焼」と呼ばれる素焼の皿である。全体をロクロ成形した後に、高台はヘラで削り出してつくられる。口唇部はやや丸くなる。器面は全体的に滑らかである。身 (第10図8) は、無釉陶器の水甕で口縁部がL字状になり肩部が張る器形である。肩部からやや上位に横位の沈線と櫛描波状文を廻らせ、円文を4つ貼り付ける。



第10図 001号墓出土遺物

第2節 004号墓・005号墓

(1) 遺構 (第11図)

004号墓は、001号墓の墓庭東側に位置する遺構で横穴式の掘込墓である(第7図)。丘陵斜面部の機械掘削中に蔵骨器と遺構の壁面の一部が検出されたため精査したところ、遺構の床面と奥壁であることが判明した。墓室の天井や壁面、入り口側が崩落しており遺構の残存状況が良くないため、法量を含めて詳細な形状は不明である。墓室の形状を残存部から判断すると、墓室内には棚は形成されておらず、おおむね楕円形状を呈すると思われる。墓室内からは1点の蔵骨器が直立した状態で出土した。蔵骨器の種類はマンガン釉甕形である。蔵骨器が1点のみであることや墓室の規模などから、個人墓であると考えられる。検出された蔵骨器に銘書は確認されていないが、安里編年の第Ⅱ～Ⅲ期(1770～1850年代)の資料であることから、004号墓は、18世紀後半から19世紀半ばに機能していた可能性が高い。なお、埋没年代は不明である。

005号墓は、004号墓の墓庭前庭部の下方に墓室が造られている。005号墓も天井や墓室の壁面が崩落して埋没した墓であり、崩落した埋土を除去したところ墓室の床面が検出された。墓室より蔵骨器の小破片や人骨片が多数出土したことから、墓室内に納骨された蔵骨器が安置された状態で天井が崩落して埋没したものと思われる。墓口方位は、北北東(N14°E)である。墓室の形状は、シルヒラシ部の周囲にコの字状に棚が造られ、さらに奥棚が一段造られる。向かって右側には壁を挟んで006号墓が隣接するが、壁面が崩落しており遺構の形状が不明瞭になっている。005号墓の墓庭には土坑が1基あり、副葬品と思われる遺物が多数出土している。それらは、一次葬時に副葬品として供えられた後に、遺骨を蔵骨器に納骨する際(二次葬時)に廃棄されたと思われる。

(2) 遺物 (第12図)

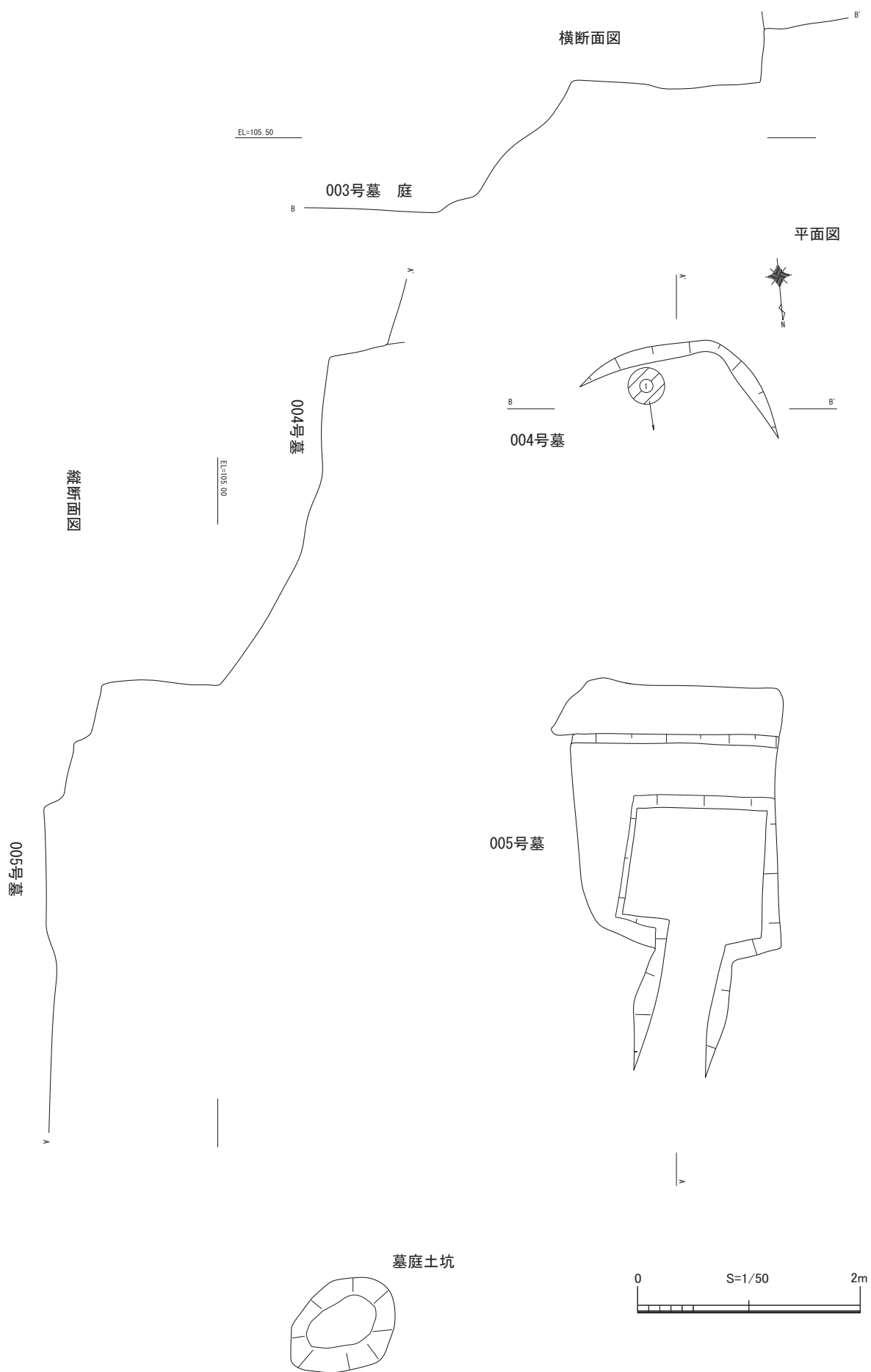
004号墓と005号に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。ここでは、005号の遺物のうち、墓庭の土坑より出土した陶磁器や金属製品9点について図化した。また蔵骨器の観察一覧表については章末の第5表を、人骨の詳細については第6章を参照頂きたい。

005号墓からは瓶(瓶子)、小杯、煙管、指輪など多数の遺物が墓庭の土坑埋土より出土した。以下はそのうち9点についての詳細である。

第12図9は、沖縄産施釉陶器の瓶子である。白灰色の素地に透明釉が施され、胴部には呉須で草花文が描かれる。頸部から口縁部にかけて若干傾き、器形は左右非対称である。内面は口縁部のみ施釉され、脚部に白土が一部付着している。法量は口径5.6cm、底径8.2cm、器高17.2cmである。第12図10は、沖縄産施釉陶器の瓶である。全面に白化粧ののち透明釉が施され、口縁部及び頸部、胴下部にも一条呉須を巡らせている。胴部中央には「飛しガンナ」と呼ばれる技法で、一定の間隔で釉が掻き落とされ下の釉が露出している。素地はにぶい黄橙色である。畳付や高台に白土や目砂が付着する。法量は口径2.5cm、底径5.9cm、器高15.3cmである。

第12図11と12は沖縄産施釉陶器の小杯である。ともに素地は白色で、透明釉が施されている。第12図11は口径3.35cm、底径1.60cm、器高1.78cmで、高台に釉剥ぎがみられる。第12図12は口径3.40cm、底径1.81cm、器高1.80cmで、高台に釉剥ぎとアルミンが認められる。

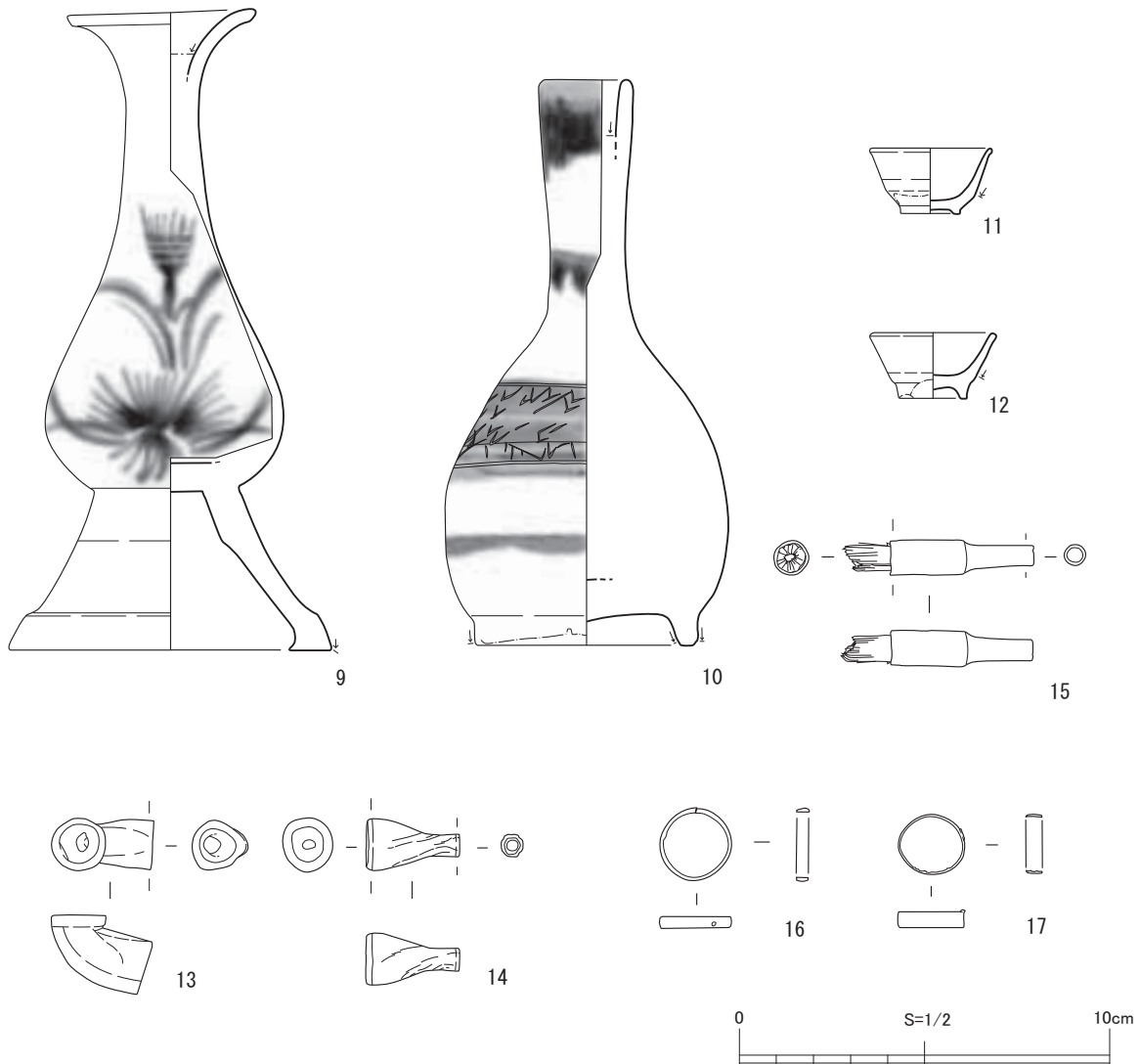
第12図13と14は、セット関係にある陶製の煙管である。雁首、吸口ともに素地は白灰色で、焼成はなされるが無釉である。火皿・羅字接合部などに歪みがあり、糸切りのあと手ナデ調整の際に生じた



第11図 004号墓・005号墓遺構図

と思われる。吸口は指で時計回りにねじって作った工程が見てとれる。雁首（第12図13）は全長2.7cm、火皿内径1.0cm、外径1.42cm、羅字接合部内径0.95cm、外径1.41cm、現重量3.92gである。吸口（第12図14）は全長2.5cm、羅字接合部内径0.4cm、外径0.6cm、吸口内径0.92cm、外径1.45cm、現重量2.47gである。第12図15は、銅製の煙管の吸口である。全体に青錆が付着しており、大きな歪みはないものの一部欠損している。竹製の羅字が比較的良好な状態で残存する。法量は、全長5.0cm、羅字接合部内径0.78cm、外径0.90cm、吸口の内径0.42cm、外径0.61cm、現重量6.24gである。

第12図16、17は銅製の指輪である。第12図16は、全体に青錆が付着し錆膨れが生じている。全面に文様らしき沈線もみられるが、錆の侵食により不明である。比較的輪の歪みは小さい。法量は、直径1.9cm、内径1.75cm、幅0.13cm、厚さ0.3~0.32cm、現重量は1.80gである。第12図17も同様に全体に青錆が付着し、内側は青錆が石灰化している。輪は歪みが生じているが、研磨加工が全面になされ、比較的丁寧な造りである。法量は、直径約1.8cm、内径約1.69cm、幅0.06cm、厚さ0.31cm、現重量は1.65gである。



第12図 005号墓基庭土坑出土遺物

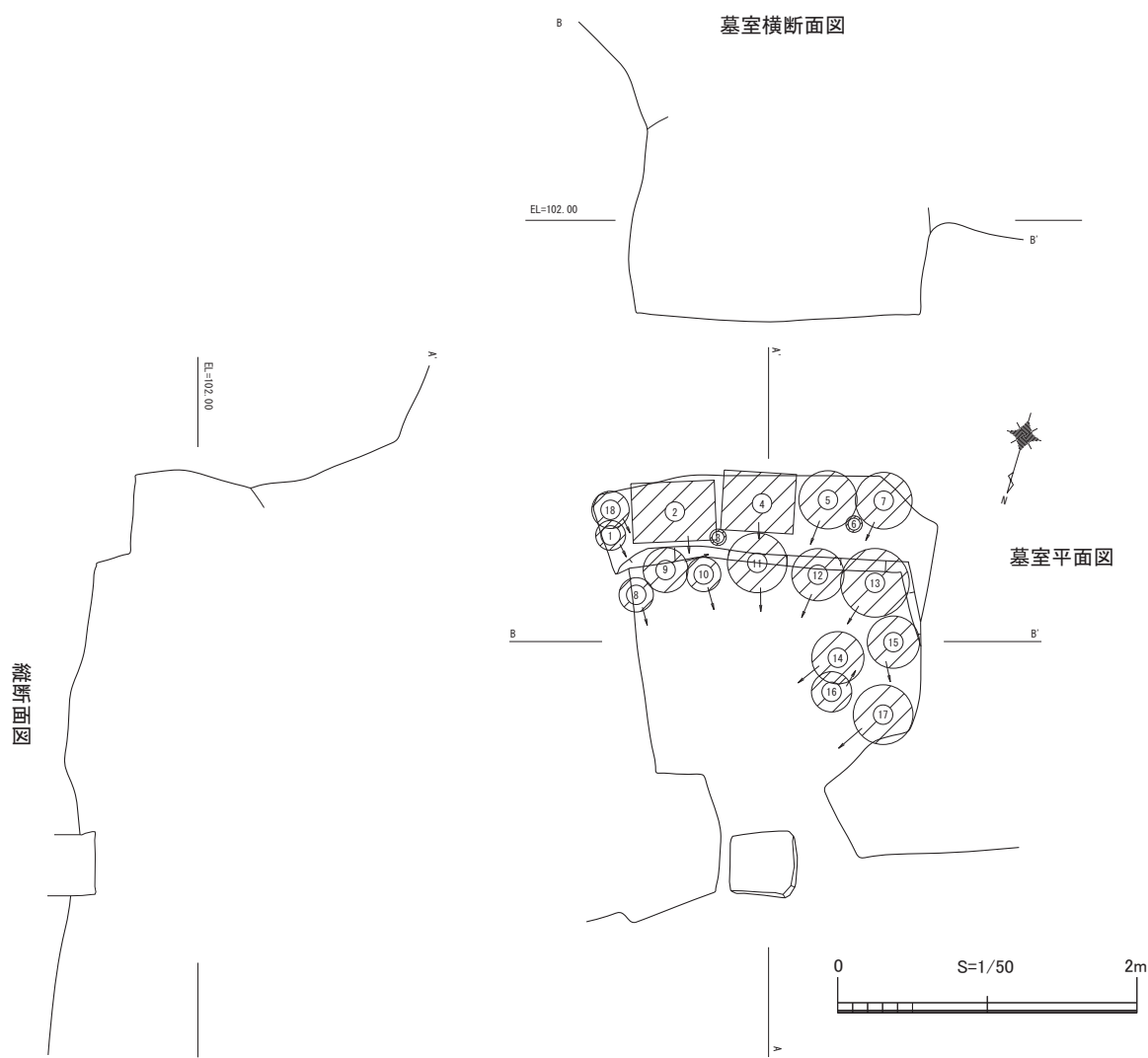
第3節 009号墓

(1) 遺構 (第13図)

009号墓は、丘陵南側下段の裾部北西側に位置する横穴式の掘込墓である（第7図）。周辺は南東側に丘陵の頂部があり、周辺には001号から006号墓が位置する。丘陵裾部には同様の高さに墓が横並びに造られている。墓周辺は標高101～102mで、墓庭を共有するかたちで007号・008号墓が位置する。

009号墓は天井が崩落した埋没墓で、埋土を除去したところ墓室から18点の蔵骨器が検出された。墓口方位は、北北西（N16° W）である。墓室形状は、概ね方形を呈するが隅はそれほど丁寧に造られず不定形な方形である。奥行きは約2.0m、幅は約1.9mである。天井は崩落しているため高さは不明である。墓室の奥壁側に蔵骨器を安置するための棚が一段造られている。棚の高さは約0.3mである。

墓室には奥側の棚に8点と、シルヒラシの奥壁または左壁側に10点の合計18点の蔵骨器が安置されていた。蔵骨器のほとんどはマドおよび屋門が、シルヒラシの方向を向けて安置されていた。墓室の規模や蔵骨器の数から、数世代分の家族墓であると考えられる。009号墓の明確な造営年代は不明であるが、蔵骨器は赤焼御殿形、荒焼御殿形、甕形はボージャー形やマンガン釉甕形の各種が確認され



第13図 009号墓遺構図

たこと、蔵骨器 9 から「乾隆四拾六年・・・洗骨」（乾隆46年＝1781年）の銘書が確認されたこと、その後の各年代の銘書があり、蔵骨器12からは「昭和十九年・・・合葬」の銘書が確認されたことなどから、18世紀終盤から20世紀の沖縄戦時まで継続的に使用された墓であると考えられる。戦後の銘書が確認されておらず、沖縄戦時に天井が崩落して埋没した可能性が想定される。

また、009号墓と墓庭を共有する形で、007号墓と008墓が隣接する（第7図）。これらは、小規模な遺構であり、009号の脇墓などの機能を有する遺構である可能性が考えられる。なお007号墓や008号墓からは、蔵骨器は出土していない。遺構の詳細は第2表を参照されたい。

（2）遺物（第14図～第18図）

009号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。ここでは、009号の遺物のうち、比較的残存状況の良い墓室内から出土した蔵骨器13点について図化した。またそれ以外の蔵骨器の観察一覧表については、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細については、第5章と第6章を参照頂きたい。

009号墓から、御殿形、甕形、転用蔵骨器が合計18点得られた。甕形はボージャー形、マンガン釉甕形、マンガン釉底付甕形が確認された。009号墓から出土した蔵骨器は墓室内で直立した状態で出土したことや、窓や屋門と呼称される部位が概ねシルヒラシ部を向いていることなどから、ほぼ安置された状態を保っていると考えられる。そのため、蓋と身のセット関係については概ね把握できた。

第14図は御殿形で、009号墓からは2点が検出され、どちらも唐破風の入母屋形である。蔵骨器2（第14図18・19）は、赤焼御殿形で全体的に風化し脆くなっている。身の正面からみて左側は特に脆く、脚部分を欠失する。蓋（第14図18）は、降り棟に獅子をそれぞれ1つずつ配し、大棟に丁寧につくられた一對の鯨を配する。鯨の唇の部分は朱で彩色されている。身（第14図19）は、口縁部直下に沈線を巡らせ、5cmほど空けて底をつける。中央に瓦屋形の屋門を貼り付け、その左右に蓮華文を貼り付ける。側面にも蓮華文を貼り付けるが、背面は無文である。外器面に靱殻痕が見られる。赤焼御殿形は、上江洲均の編年（1981）において1690～1780年代相当の資料とされる。

蔵骨器4（第14図20・21）は完形の荒焼御殿形で、全体にマンガン釉が掛けられる。蓋（第14図20）は、大棟に一對の鯨を配するが、下り棟と隅棟が1本に繋がる点で蔵骨器2と異なる。身（第14図21）は、中央に瓦屋形の屋門を貼り付け、左右に蓮華に乗った法師を貼り付ける。側面も蓮華に乗った法師を貼り付けるが、背面は無文である。屋門の柱は短く、下位に位牌状に銘書面をつくる。荒焼御殿形は上江洲編年（1981）で1810～1870年代とされているが、銘書には、被葬者が嘉慶二（1797）年に死亡し、同四（1799）年に洗骨したとある。

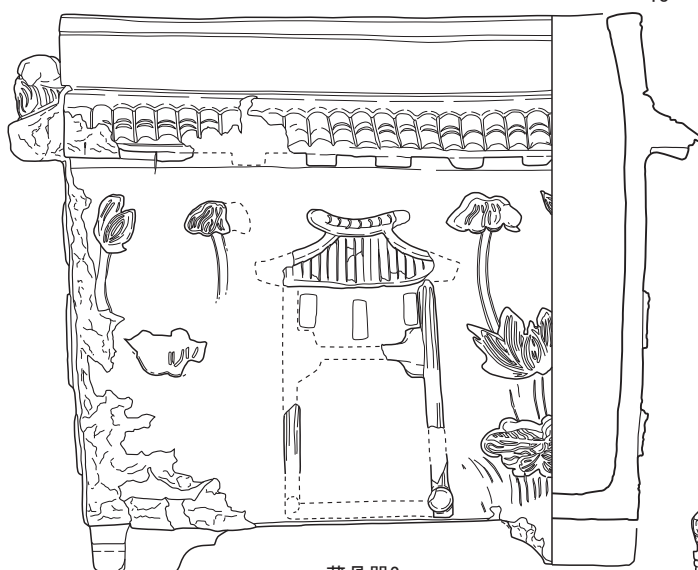
蔵骨器9（第15図22・23）はボージャー形で、同墓ではこのタイプで唯一の資料である。蓋（第15図22）はつまみ台のない笠形で、焼成不良のためか一部が内面へ曲がる。身（第15図23）は、口縁部が内傾し口唇部は玉縁状になる。頸部横帯が3本で、マド枠は平葺形である。マド枠の横には、漢数字の七を右に90°回転させた形の窯印がある。安里分類（2006）のボージャー蓋Ⅶ（1750～1820年）、ボージャー身Ⅳ（1770～1810年）の資料である。蓋には、乾隆46（1781）年洗骨の銘書がある。

蔵骨器5（第15図24・25）は無釉甕形の蔵骨器である。蓋（第15図24）のつまみは饅頭形で、つまみ台はヘラで削り出して成形される。鋳端部とかえりの端部は平坦につくられ丁寧に調整される。身（第15図25）は、直口する口縁で口唇部はやや平坦に成形される。屋門は瓦屋形で、やや縦長の長方形状に沈線を描きマドを囲う。屋門の左右に蓮華文を貼り付ける。横帯1は沈線、横帯2～4が貼り付



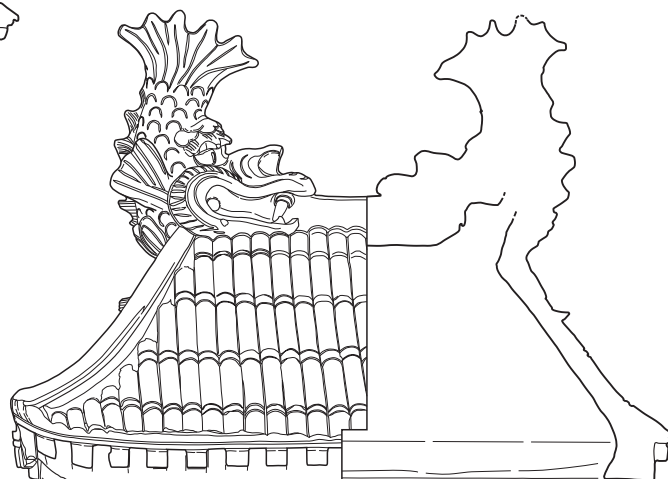
18

嘉慶二年三月十五日
元使川觀其後作
明年四月五日此石遷葬
事
同治元年正月分遷葬
嘉慶二年三月十五日
快若如大神

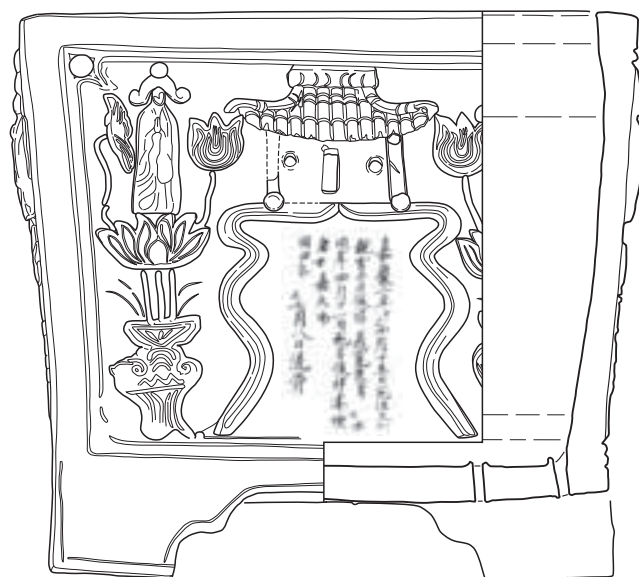


藏骨器2

19



20



21

藏骨器4

0 S=1/6 30cm

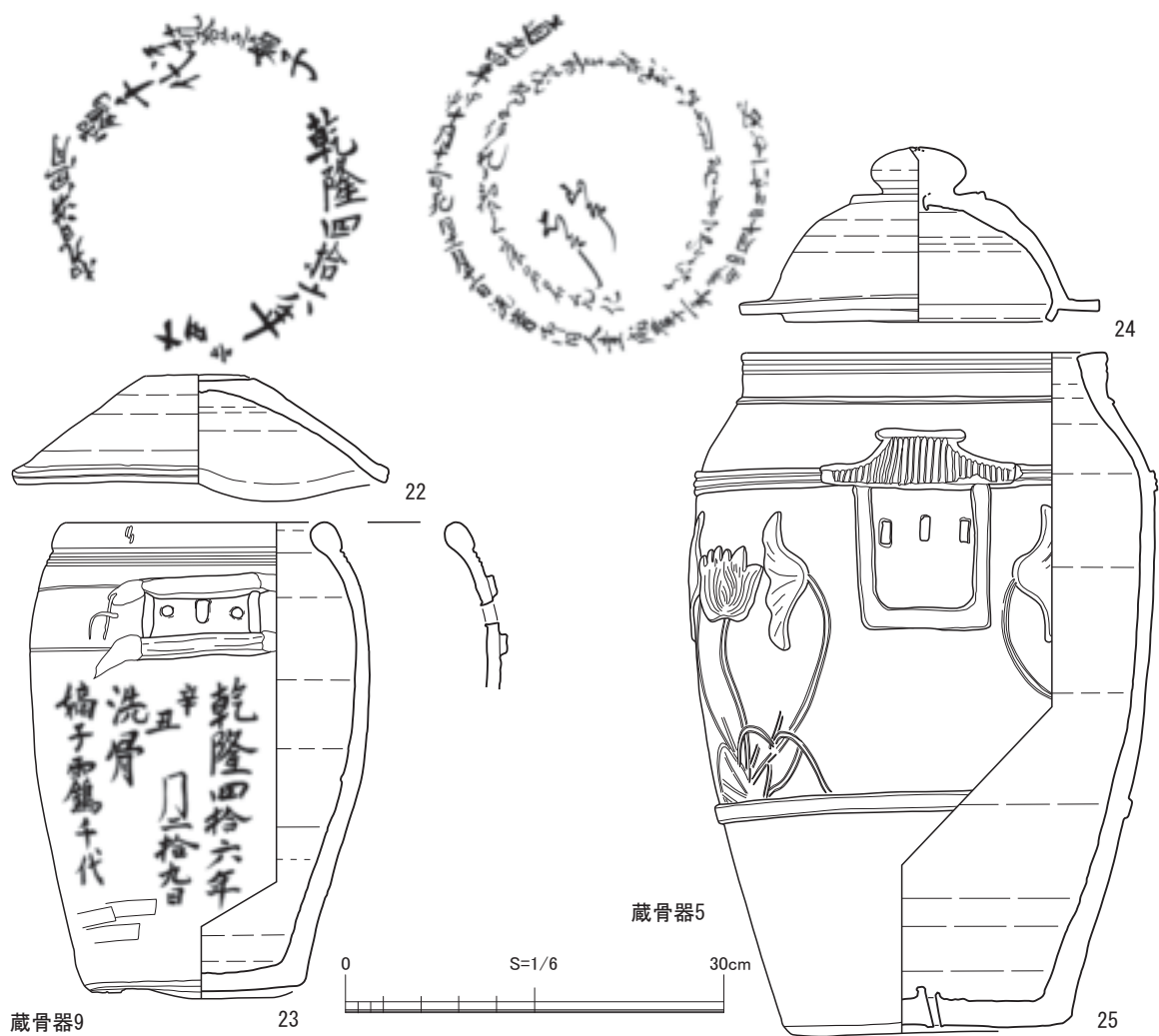
第14図 009号墓出土遺物 1

けの突帯である。蓋・身ともに器形はマンガン釉甕形と類似するが、マンガン釉が掛からない点で異なる。マンガン釉甕形の年代観をまとめた安里編年（1997）では第Ⅰ期（1760～70年）に、また同氏のボージャー身の分類（2006）では、「甕形的口縁」の特徴からⅦ式に相当する資料である。

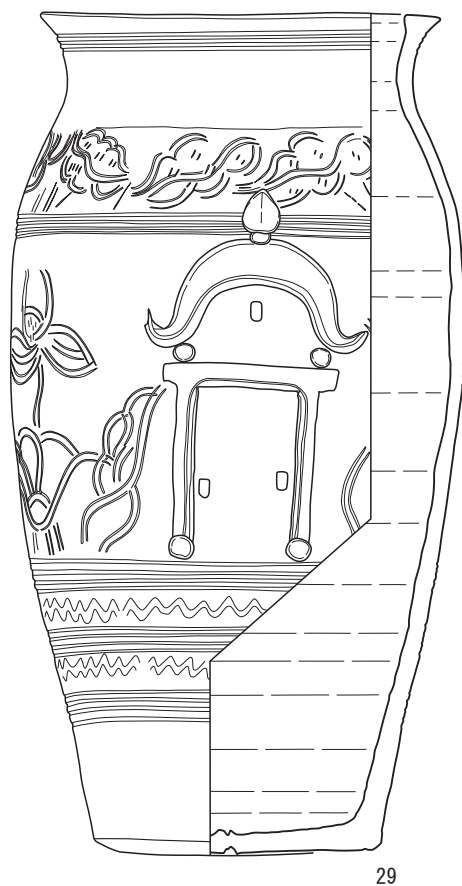
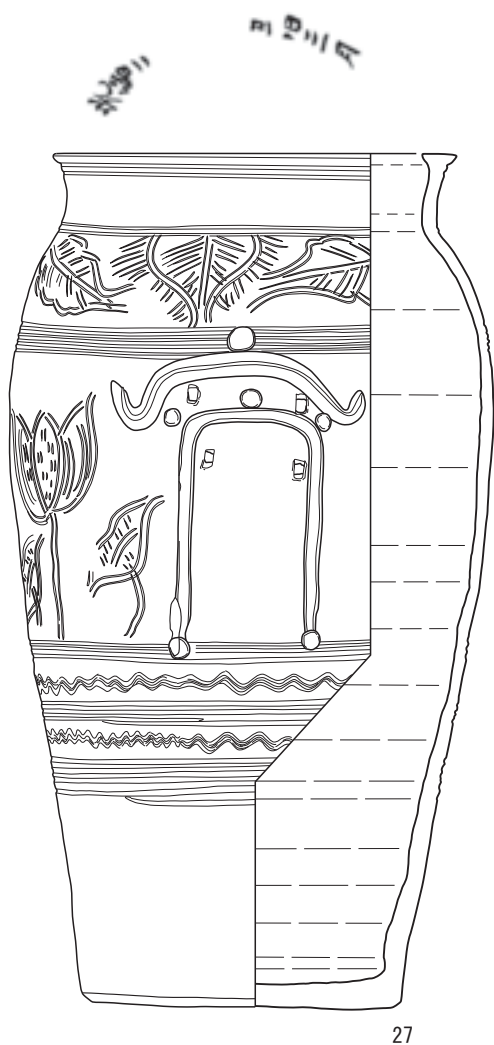
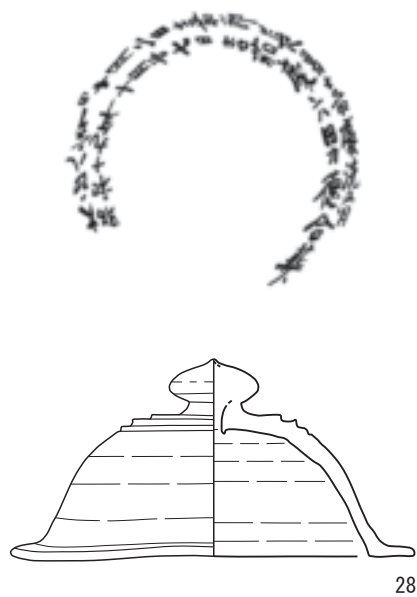
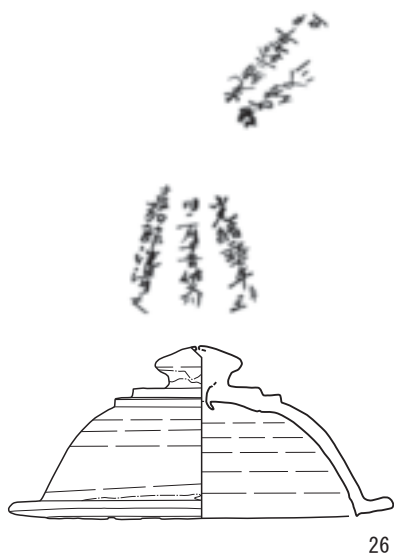
第16図26～第18図38はマンガン釉甕形である。器高が、65cm以上の大型、50cm以上の中型、40cm以下小型に分けられる。以下に特徴的なものについて、サイズごとにその特徴を述べる。

大型は、得られた2点を図化した（第16図）。蔵骨器11の蓋（第16図26）はつまみが扁平形で、鏝は反り端部は丸く成形される。かえりがつくられるが、粗雑である。身（第16図27）の口縁部は外反し、口唇部は平坦に成形される。屋門は唐破風形だが、柱貫から下が別単位で作られる。アーチ状の粘土帯を貼り付け、その上部に唐破風状の粘土帯を貼り付ける、マンガン釉を全面に施釉するが、口唇部は露胎する。横帯3～4と文様が沈線であることから、安里編年の第Ⅴ期（1900～1920年代）の資料である。蓋に光緒27（1901）年洗骨の銘書がある。

蔵骨器12の蓋（第16図28）は、つまみが宝珠形で、鏝端部は丸くやや下向きに成形される。かえりはない。身（第16図29）は、口縁部が外反し口唇部が平坦になる。屋門は唐破風形だが、柱貫から下は別単位で貼り付けられる。文様は全て沈線で描かれる。横帯2の位置に沈線や突帯がない。安里編

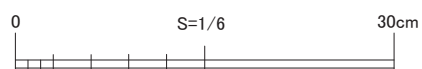


第15図 009号墓出土遺物2



蔵骨器11

蔵骨器12



第16図 009号墓出土遺物 3

年の第Ⅴ期（1900～1920年代）の資料である。蓋に大正8（1919）年洗骨および昭和19年（1944）合葬の銘書がある。

中型は4点中3点を図化した。蔵骨器7の蓋（第17図30）は、つまみが饅頭形で、鏝端部は平坦になる。かえり端部も平坦につくられるなど、全体的に丁寧な調整がされる。身（第17図31）の口縁部は直口し、口唇部は平坦である。屋門は瓦屋形で、頂部に玉飾はない。屋門の左右には、蓮華文の上に法師を貼り付ける。横帯2～3が突帯で、肩部と胴下部文様帯は無文である。マンガン釉が全体に掛けられるが、胴下部は露胎する。安里編年のⅡ期（1770～1800年代）の資料であると考えられる。嘉慶7（1802）年洗骨の銘書がある。

蔵骨器15の蓋（第17図32）のつまみは宝珠形になるとみられ、鏝は平坦に、鏝端部は丸くつくられる。かえりは成形がやや雑である。身（第17図33）は、口縁部が外反し、口唇部は中央よりやや内側がくぼむ。屋門は貼り付けの唐破風形で、頂部には玉飾が付く。胴部文様帯の蓮華文は沈線で描かれ、横帯2～4は突帯である。マンガン釉が全体に掛けられるが、屋門内と胴下部には掛けられず露胎する。安里編年の第Ⅲ期（1810～1850年代）の資料であると考えられる。蓋と身に、道光25（1854）年洗骨の銘書がある。

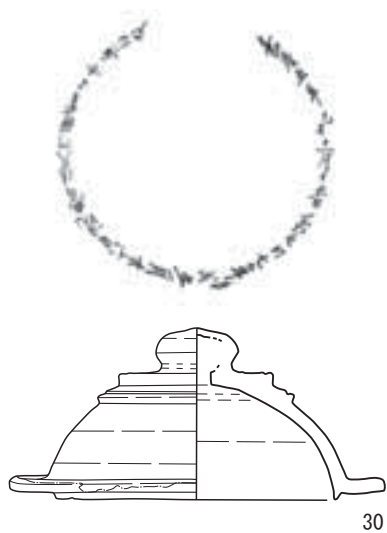
蔵骨器14の蓋（第17図34）のつまみは宝珠形で、鏝端部は丸くやや平坦になる。かえりは成形が粗雑である。身（第17図35）は、口縁部が外反し、口唇部は中央よりやや内側がわずかにくぼむ。屋門は貼り付けのアーチ形で、文様は沈線で描かれる。横帯3は突帯であるが、横帯4は沈線である。安里編年の第Ⅴ期（1900～1920年代）の資料である。蓋と身に光緒5（1879）年の銘書がある。

小型は4点中2点を図化した。蔵骨器8の蓋（第18図36）は、つまみが宝珠形である。鏝は平坦に、鏝端部は丸く成形され、かえりはやや丁寧な調整がされる。身（第18図37）は、口縁部は外反し、口唇部は平坦でやや下に傾く。屋門は貼り付けのアーチ形で、器体の文様と横帯3～4は沈線であることから、安里編年の第Ⅴ期（1900～1920年代）の資料であると考えられる。蓋と身に光緒5（1879）年の銘書がある。第18図36に図示した蓋は、蔵骨器10の身の上から出土が確認されたが、銘書の内容が蔵骨器8の身と一致することや、形式的に蔵骨器10の身と年代差が認められること等から、蔵骨器8の身とセット関係にあると判断した。このことから、同墓は後世に蓋が入れ替えられている可能性が想定される。

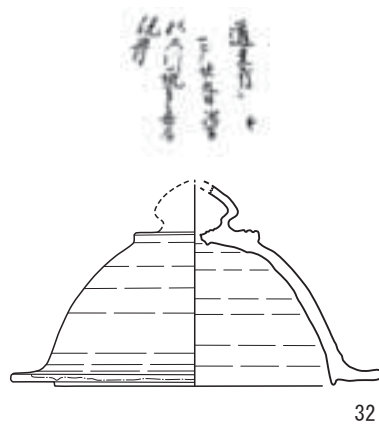
蔵骨器10の身（第18図38）は、口縁部が外反する器形で、口唇部は平坦になりやや下に傾く。底部に円形の脚を3つ付ける。屋門と文様は沈線で描かれ、胴部文様帯の蓮華文は簡略化される。同資料は、器形の特徴から安里編年の第Ⅵ期（1930年代以降）に位置づけられる。

蔵骨器13（第18図39・40）は、マンガン釉底付甕形である。蓋・身とも上部を底状に成形し、瓦が表現される。隅棟には4箇所獅子頭が貼り付けられる。蓋（第18図39）は、底の下位に円形のマドがある。身（第18図40）は口縁部がやや外反し、口唇部は平坦に成形されるが中央がやや膨らむ。胴部文様帯は左右に2条1組の刻目突帯で縦位に区画する。中央には屋門と、屋門の左右に蓮華に乗った法師を配し、背面にも蓮華文を配する。胴下部文様帯に葉文を廻らす。文様は全て貼り付けである。全体に施釉されるが、胴下部は露胎する。銘書には道光27（1847）年洗骨とある。

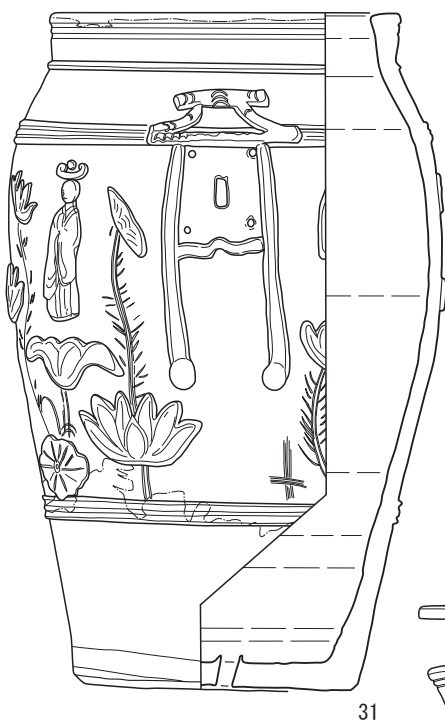
蔵骨器3（第18図41・42）は、転用蔵骨器である。第18図41の蓋は「アカムヌー」と呼ばれる軟質陶器である。頂部はゆるやかな弧状を呈す器形で、器面は滑らかである。第18図42の身は、沖縄産無釉陶器で「アンダーガーミ」と称される。口縁部はL字状に折れ、やや直口する頸部がつくられる。胴部は上部が張る器形である。同丘陵では、同じタイプの転用蔵骨器が3点得られている。



30

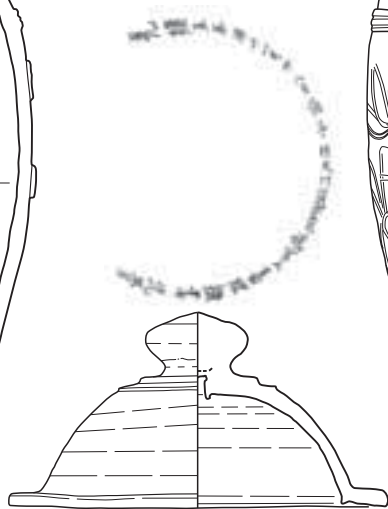


32

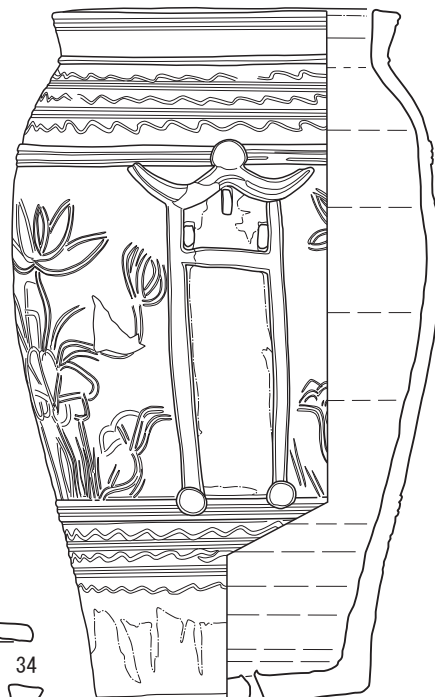


藏骨器7

31

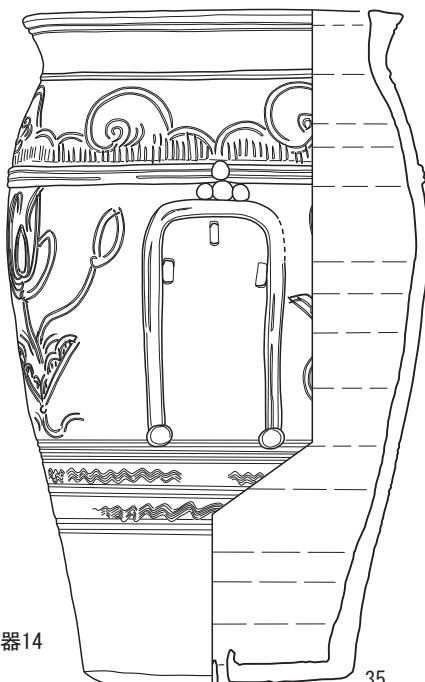


34



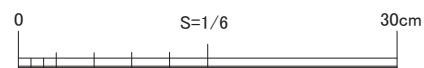
藏骨器15

33



藏骨器14

35



通元二十五年三月二十九日次男佐久門地之墓所記

光緒二十五年十一月廿六日次男佐久門地之墓所記

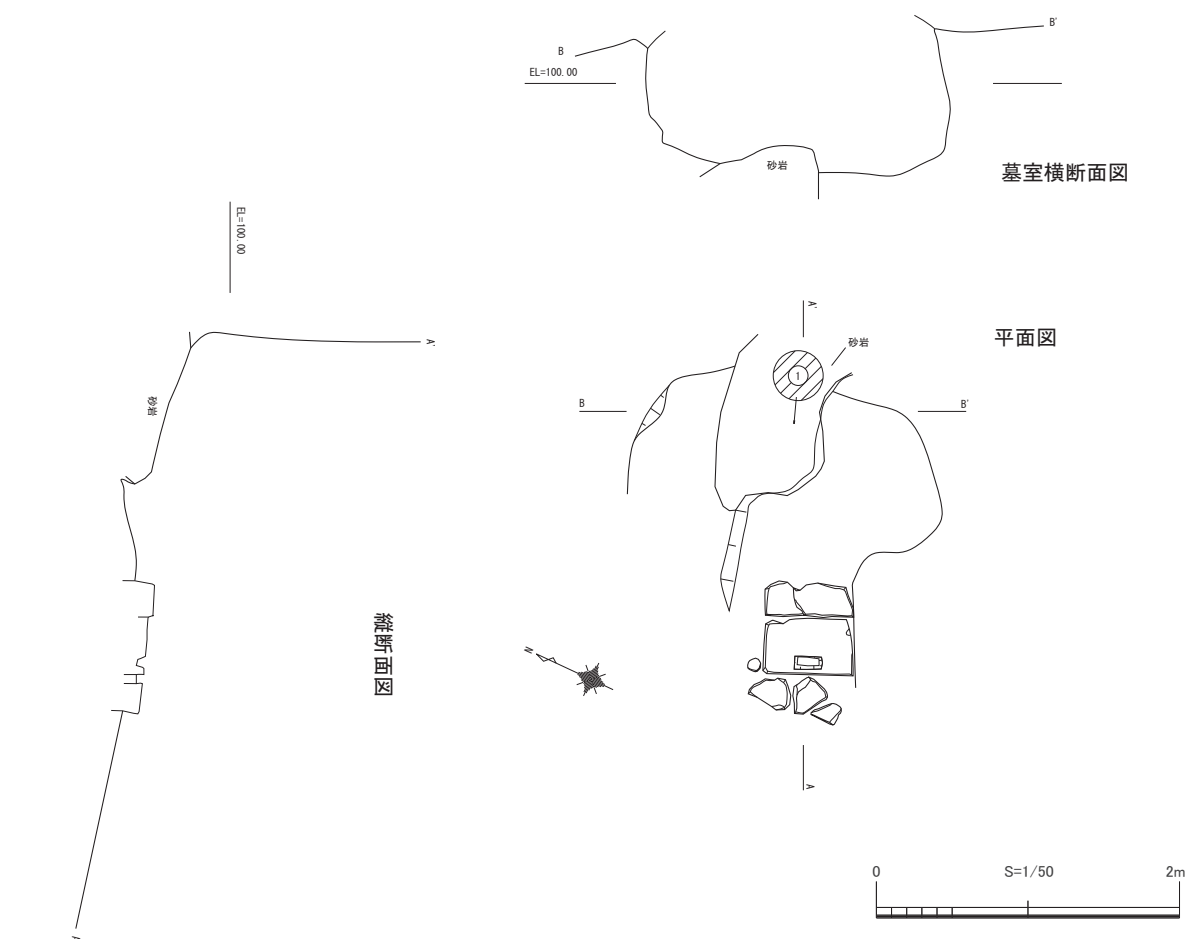
第17図 009号墓出土遺物4

第4節 019号墓

(1) 遺構 (第19図)

019号墓は、丘陵南側下段の裾部西側に位置する横穴式の掘込墓である（第7図）。周辺は標高99～100mで、西側にかけて緩く傾斜している。南側には、020号、021号墓が位置する。019号墓は天井が崩落し埋没した墓で、埋土を除去したところ墓室内から1点の蔵骨器が検出された。墓口方位は、西南西（N115° W）である。墓室形状は、概ね横長の楕円形状である。奥行きは約1.6m、幅は約2.0mである。天井は崩落しているため高さは不明である。墓室内には棚は造られていないが、墓室奥側の床面に砂岩の硬い部分があり、周囲より少し高くなっている箇所蔵骨器が安置されていた。蔵骨器の蓋は、蔵骨器前方に滑り落ちている状態で出土し、身はマドが墓口方向に向けて安置されていた。また墓口付近には、平らに成形された石が敷かれた状態で検出された。これらは閉塞石とサンミデーの一部であると考えられる。また、石の一部に四角に掘り込まれて成形されている箇所があり、これは石を香炉にするために成形したものと考えられる。

019号墓の造営年代は不明であるが、蔵骨器はボージャール形であることや、出土した蔵骨器に「乾隆二十七年」（乾隆27年＝1762年）の文字が見られることから、18世紀中頃には使用されていた可能性がある。墓室内から検出された蔵骨器は1点のみであり、個人用の墓であると考えられる。蔵骨器は、



第19図 019号墓遺構図

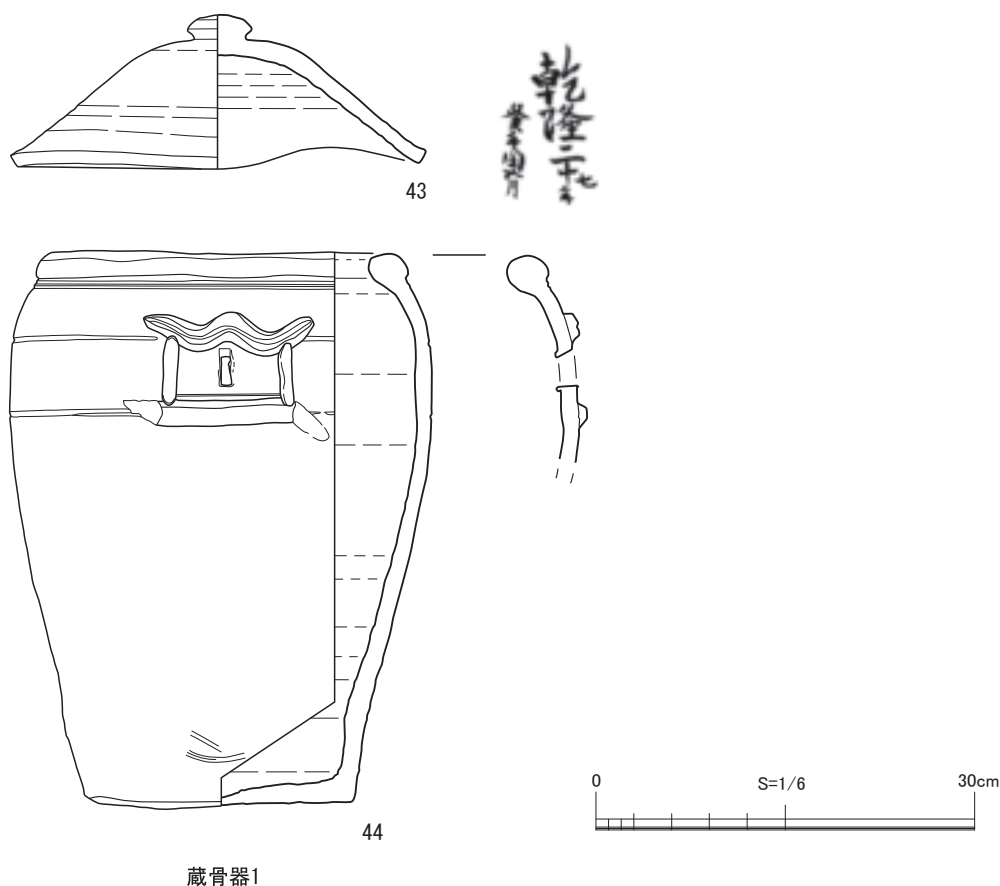
上記の1点のみでそれ以降に墓が使用された痕跡が認められない。その後、いつの時期かは不明であるが、埋没したものと考えられる。

(2) 遺物 (第20図)

019号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。ここでは、019号の遺物のうち、墓室から出土した蔵骨器1点について図化した。また蔵骨器の観察一覧表については、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細については、第5章と第6章を参照頂きたい。

019号墓から出土した蔵骨器は蓋と身がそれぞれ1点のみであり、出土状態から蓋と身のセット関係を把握することができた。

蔵骨器1 (第20図43・44) は、ボージャ形(boja)の蔵骨器である。蓋(第20図43)は、つまみが扁平で小形のもので、蓋裏のつまみ中心部は無孔である。鏝の端部は平坦に仕上げられるが、焼成不良により一部が反り返る。身(第20図44)は、口縁部が玉縁状につくられ内傾するが、先端はやや平坦に成形される。マド枠は唐破風形で滑らかに仕上げられる。胴下部が焼成不良のため一部に膨らみがある。安里分類(2006)では、蓋がV式(1740～1770年代)、身は頸部横帯が2本でマド枠が唐破風形であることからⅢ式(1700～1800年代)にあたる資料である。蓋と身を合わせると、1740～70年代の年代観があたえられる。なお、蓋に乾隆27(1752)年の銘書がある。



第20図 019号墓出土遺物

第5節 027号墓

(1) 遺構 (第21図)

027号墓は、丘陵南側下段の裾部南西側に位置する横穴式の掘込墓である(第7図)。周辺は東側に丘陵の頂部がある。丘陵の裾部には同様の高さで墓が横並びに造られている。027号墓周辺は標高101～103mである。027号墓は天井が崩落し埋没した墓で、埋土を除去したところ墓室内より15点の蔵骨器が検出された。墓口方位は、西南西(N109°W)である。墓室形状は概ね方形を呈するが、隅は丁寧に造られず奥壁は丸みをおびる。奥行きは約1.8m、幅は約2.0mである。天井は崩落しているため高さは不明である。墓室の奥壁側から左壁にかけて蔵骨器を設置するための棚がL字状に一段造られている。棚の高さは約0.4～0.5mである。また、墓口付近からは閉塞石やサンミデーの一部と思われる拳大から頭大の石灰岩が出土した。このことから墓口が閉塞された状態で天井が崩落し埋没したものと考えられる。

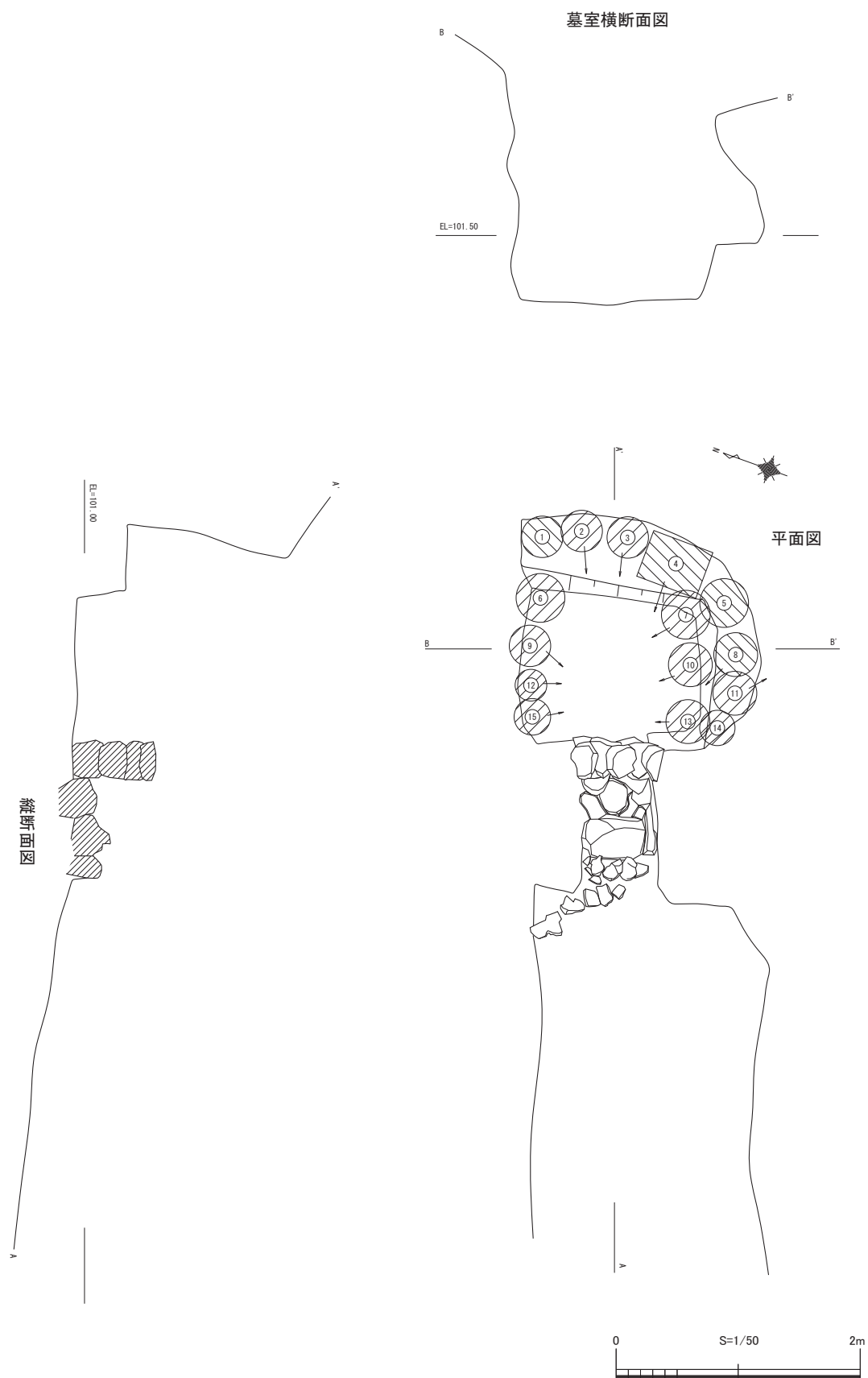
墓室部分からは、棚の上に8点と棚の下のシルヒラシの左右に7点の合計15点の蔵骨器が安置されていた。蔵骨器のほとんどはマドおよび屋門と呼ばれる部分が、シルヒラシに向けて安置されていた。墓室の規模や蔵骨器の数から、数世代分の家族墓であると考えられる。027号墓の明確な造営年代は不明であるが、蔵骨器の出土傾向は、甕形ではボージャー形からマンガン釉甕形、御殿形では上焼御殿形が出土していること、蔵骨器5からは「乾隆二十・・・」(乾隆20年代=1755～1764年)の銘書が確認されたこと、その後の1800年代から1900年代の各年代の銘書が確認されたこと、蔵骨器7からは「昭和参年・・・」の銘書が確認されたことなどをふまえると、1700年代後半から1900年代の昭和初期まで継続的に使用された墓であると考えられる。戦後の銘書が確認されないことから、おそらく沖縄戦時に天井が崩落して埋没した墓である可能性が想定される。

(2) 遺物 (第22図～第24図)

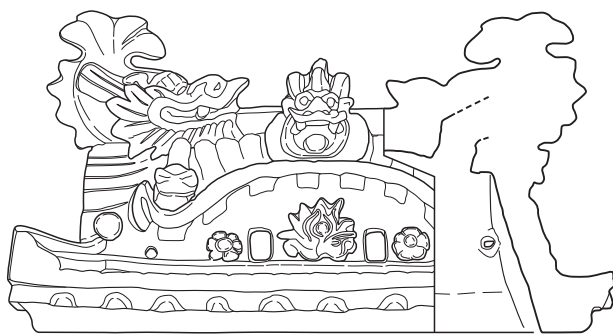
027号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。ここでは、027号墓の遺物のうち、比較的残存状況の良い墓室内から出土した蔵骨器5点について図化した。またそれ以外の蔵骨器の観察一覧表については、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細については、第5章・第6章を参照頂きたい。

027号墓から出土した蔵骨器は蓋と身がそれぞれ15点で、墓室内で直立した状態で出土したことや、マドや屋門と呼称される部位が概ねシルヒラシ部を向いていることなどからほぼ安置された状態を保っていると考えられる。蔵骨器の種類は御殿形1点、甕形13点、赤焼の蔵骨器が1点検出された。甕形はボージャー形、マンガン釉甕形である。出土状態などから蓋と身のセット関係は概ね把握することができた。

蔵骨器4(第22図45・46)は、上焼本御殿形である。蓋(第22図45)は、入母屋形で正面と側面は唐破風となる。屋根の大棟に一對の鯨、正面の唐破風の頂部に龍と思われる飾り、降棟の先には獅子頭が貼り付けられる。唐破風の妻部分と両側面に花文がある。正面には2つの長方形のマドと、降棟の外側に円形のマドがあり、両側面には円形のマドが2つある。背面は瓦と降棟のみで、降棟も獅子ではなく円文になる。文様は全て貼り付けである。身(第22図46)は、隅棟と正面の中央に獅子頭を置く。中央に屋門があり、左右に蓮華文を貼り付ける。その上部を区画し獅子を貼り付けており、この区画とその上の庇が屋門の一部となっているように見える。マドの形状は長方形で2つあり、マド



第21图 027号墓遺構図



45

東漢永初二年四月廿五日

年九月廿五日

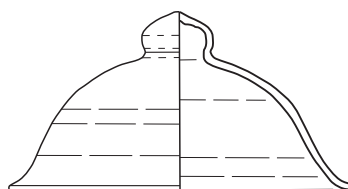
永初二年四月廿五日

永初二年四月廿五日

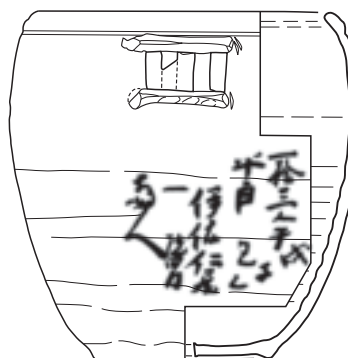


46

藏骨器4

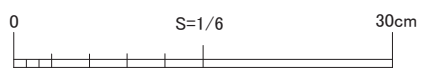


47



48

藏骨器14



第22図 027号墓出土遺物 1

の間に花文がある側面には蓮華の上に法師像を貼り付ける。蓋・身ともに白化粧の後に彩色される。そのため、文様は全て貼り付けであるが、輪郭がやや不明瞭である。内面にも、蓋と身の接する面は白色、内側は茶色で施釉されるが、透明釉は掛けられない。上焼本御殿形は上江洲編年(1981)で1810～1950年代相当とされている。蓋裏に咸豊8(1858)年洗骨の銘書がある。

蔵骨器14(第22図47・48)は、赤焼の蔵骨器である。形状は甕形で小型のボージャリー形に類似する。蓋(第22図47)のつまみは宝珠形で中が空洞になる。内面にねじって成形した痕がみられ、外面にも頂部に向かって螺旋状に成形した痕が薄く見られる。器面は滑らかに仕上げられる。端部はやや折って鰐状に成形され、先端はやや丸くなる。身(第22図48)の口縁部はやや内傾し先端は丸く成形される。マド枠は上下に断面三角の底を付けた後にマドを切り取る。マド枠に成形時に指でつまんだ痕が残る。底部は基筒底に近い形になる。胎土や滑らかに調整される点は「アカムヌー」と類似する。また、身の正面マド枠下に銘書が記され、墨が薄くなっているが「…拾三年戊子」と読み取ることができ、乾隆33(1768)年の年代が該当する(銘書の詳細は第5章参照)。

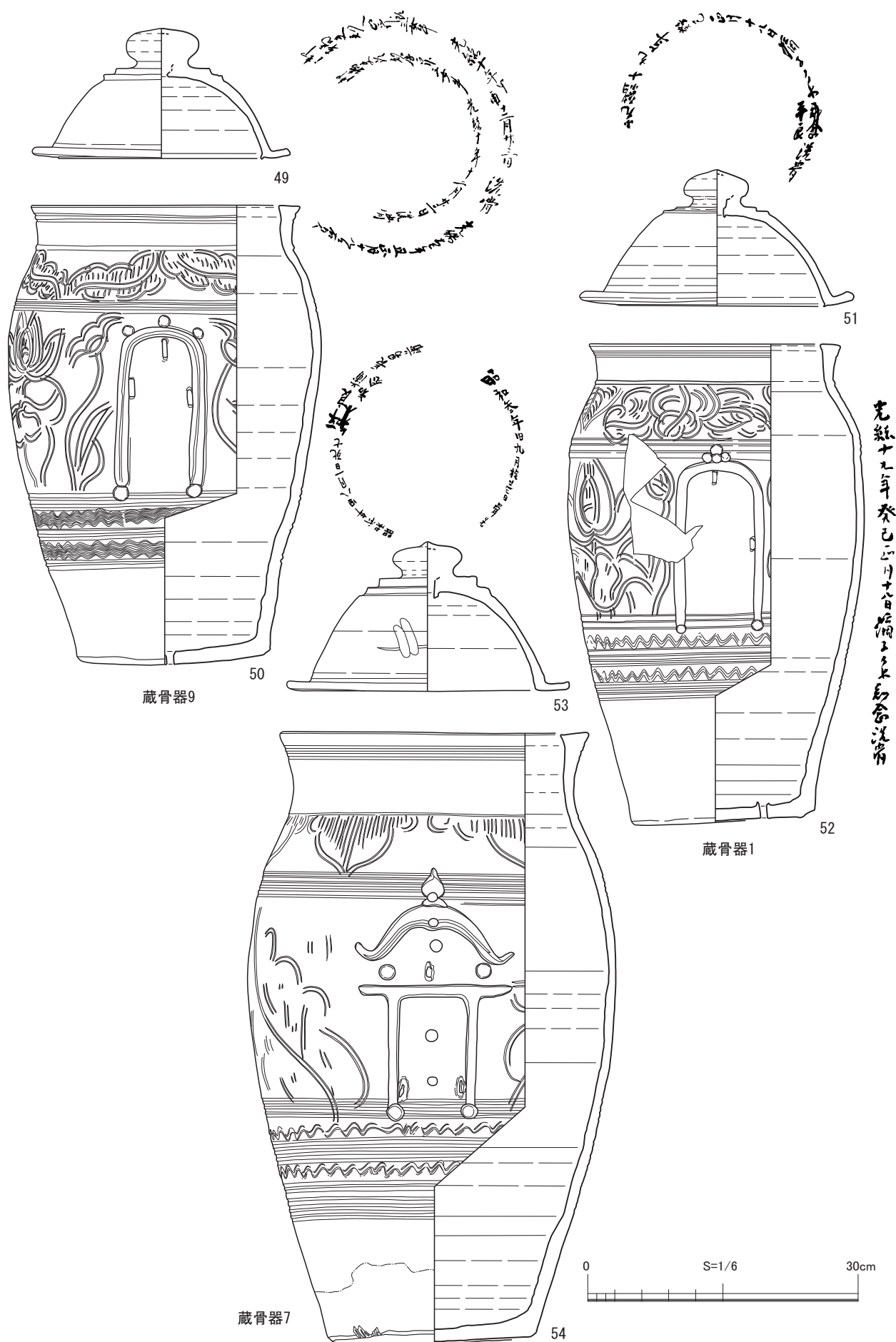
第23図49～54は、マンガン釉甕形である。このタイプは合計11点出土しており、そのうち特徴的な3点を図化した。蔵骨器9は、蓋(第23図49)のつまみが饅頭形である。鰐は上に反り、端部はやや平坦になるが、部分的に断面が丸くなる箇所もある。小さいかえりがつくが、成形がやや雑である。身(第23図50)は、口唇部が平坦に成形され、わずかに中央がくぼむ。屋門は貼り付けのアーチ形である。横帯3、4と文様が沈線になることから、安里編年の第Ⅴ期(1900～1920年代)にあたる資料である。銘書には、光緒10(1884)年洗骨と記されている。また、「御輿夫頭」の文字があることから被葬者の職業がわかる点において特筆される。銘書の詳細については、第5章を参照頂きたい。また、蔵骨器の中には骨とともに小石が入れられていた。

蔵骨器1の蓋(第23図51)のつまみは宝珠形で、鰐は上に反り、端部はやや舌状になる。かえりは小さく、成形も雑である。身(第23図52)は、口縁部が外反する器形で、口唇部が平坦でやや下へ傾く。屋門は貼り付けのアーチ形で、文様は沈線で描かれる。横帯3が突帯であり、安里編年の第Ⅳ期(1850～1890年代)の資料である。光緒19(1893)年洗骨の銘書がある。

蔵骨器7の蓋(第23図53)は、扁平化した宝珠形のつまみである。鰐は端部で反り、先端は丸くなる。かえりはつくられない。身(第23図54)は、口縁部が外反する器形で、口唇部が平坦に成形されるが、内側がわずかにくぼむ。頸部が他の資料と比較して長くなる。屋門は貼り付けの唐破風形だが、柱貫から下が別単位でつくられている。マンガン釉が全体に施釉されるが胴下部は釉が搔きとられるようである。横帯1～4と文様が沈線になることから、安里編年の第Ⅴ期(1900～1920年代)にあたる資料である。蓋裏に、昭和3(1928)年洗骨の銘書がある。

マンガン釉甕形は上記の図化したもの以外に、安里分類の第Ⅲ期(1810～1850年代)の資料が4点、第Ⅳ期(1850～1890年代)の資料が3点、第Ⅴ期(1900～1920年代)の資料が1点得られている。これらのことから、この墓が継続的に使用された事が蔵骨器から伺えるが、蔵骨器の配置に着目すると、墓の入り口側に比較的年代の古い蔵骨器が安置されたり、咸豊年間の御殿形とマンガン釉甕形の間に乾隆年間のボージャリー形が安置されたりしていることから、後世における蔵骨器の配置替えが行われたと想定される。また027号墓からは、図化した他にボージャリー形が2セット出土しているが、うち1セットは蓋がマンガン釉甕形である。どちらも口縁部がやや直口し、肩部の張りが弱くなるタイプである。

副葬品については、図化可能な以下の3点について報告を行う。なお、簪と銭貨はいずれも蔵骨器



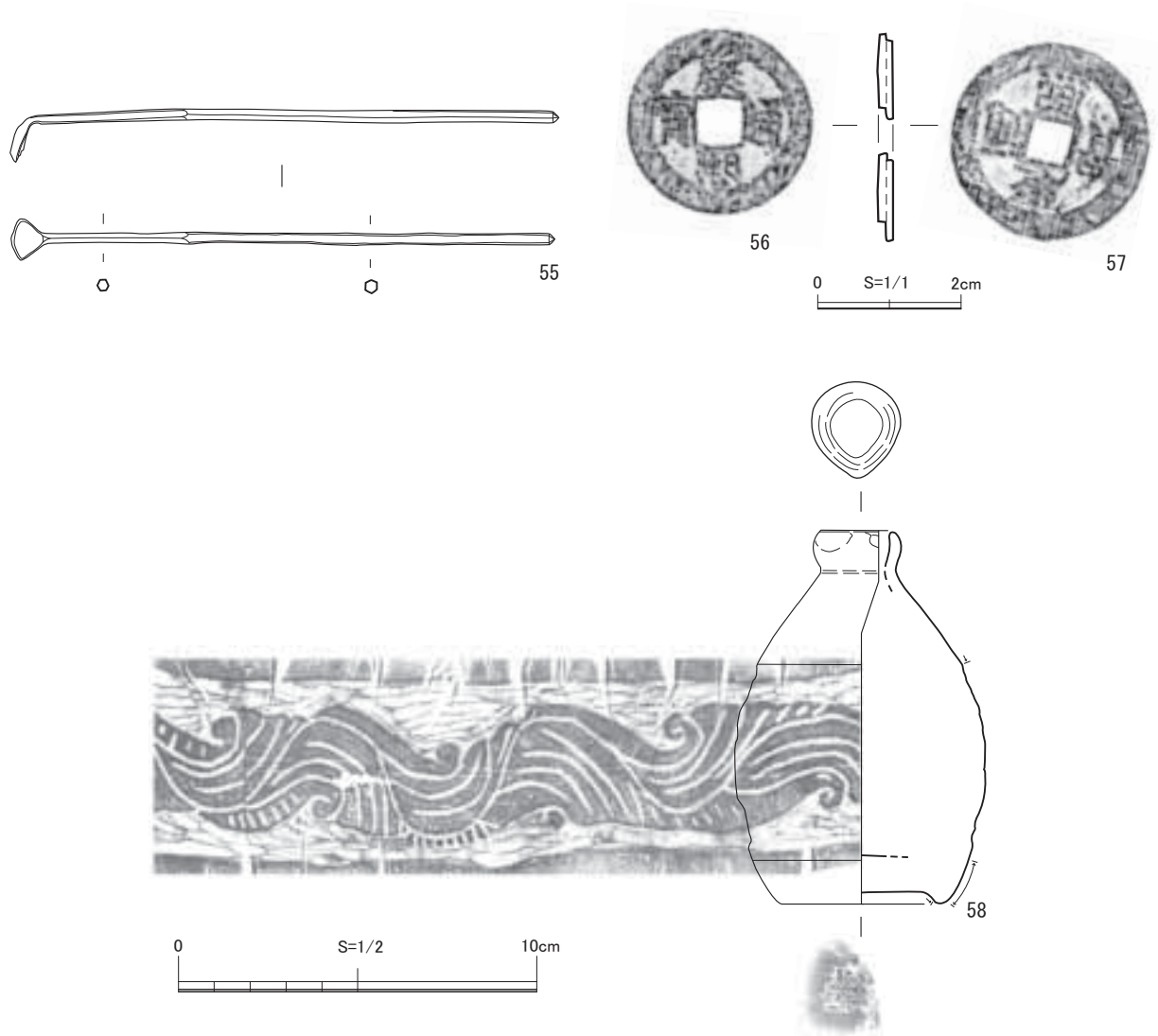
第23图 027号墓出土遺物 2

14内から出土したものである。

第24図55は銅製の簪である。全体に青錆が付着し、錆膨れが生じている。頭部は匙形で、首部と竿部がともに六角形をなし、先端は緩やかな六角錐を呈する。法量は、全長15.21cm、頸部1.1cm、首部3.8cm、竿部10.2cm、現重量8.91gである。蔵骨器14内より検出された。

第24図56・57は康熙通宝である。2枚裏面同士を重ねるように接着しており、重ねて副葬していたものが、時間の経過とともに石灰により接着してしまったものと考えられる。よって、背文の有無は確認できない。第24図56が輪外径26.4mm、輪内径19.2mm、郭外幅7.65mm、郭内幅6.35mm、輪厚1.34mm、第24図57が輪外径28.0mm、輪内径20.8mm、郭外幅7.7mm、郭内幅5.7mm、輪厚1.1mmで、現重量は2点あわせて9.11gである。蔵骨器14内より検出された。

第24図58は沖縄産施釉陶器の瓶である。大正から昭和初期にかけて壺屋で焼かれた「琉球古典焼」と称されるもので、本資料は黒釉をかけ、掻き落とし技法で文様を施している。文様は唐草文と考えられる。底面には「琉球」の印がみられ、高台には釉剥ぎがなされる。法量は口径2.1cm、底径4.6cm、器高10.5cmである。墓室内埋土より出土した。過去の前田・経塚近世墓群の調査でも多くの古典焼が出土している（仁王2009）。



第24図 027号墓出土遺物3

第6節 049号墓・050号墓

(1) 遺構 (第25図)

049号墓と050号墓は、丘陵北側裾部西側に位置する横穴式の掘込墓である(第7図)。これらの墓を含めて、丘陵裾部の標高100m付近に横並びに墓が造られている。049号墓と050号墓は、それら一連の並びの最も西よりに造られた墓である。ともに天井が崩落して埋没した墓で、全体的に遺構の崩落の度合いが大きく残存状況が良くない。

049号墓は、遺構の天井部分が崩落しており、埋土を除去したところ墓室より蔵骨器が出土した。墓口方位は、西北西(N75°W)である。墓室の形状は、墓口付近の遺構が崩落しておりその形状が明確ではないが、羨道が比較的細長く造られ、更にその奥側が左右に堀り広げられ幅約1.09m×奥行き約1.27mの広さの墓室が造られている。墓室内には、蔵骨器を安置するための棚は造られていない。墓室の天井は残存していないため、高さは不明である。墓室部分は、蔵骨器が3～4点安置できるほどの広さに造られており、実際には2点の蔵骨器が安置されていた。うち1点は直立した状態で、1点は横倒しになった状態で出土した。蔵骨器の種類は、ボージャ形(蔵骨器2)が1点とマンガン釉甕形(蔵骨器1)が1点である。これらには、ともに「嘉慶二十一年九月二十三日・・・洗骨」(嘉慶21年=1816年)の銘書が確認されたことから、同日に洗骨され納骨されたと考えられる。銘書からこれらは親子であることが判明したことから、同遺構は家族墓であると考えられる。これより古い年代の蔵骨器がないことから、この蔵骨器を安置した時期にこの墓が仕立てられた可能性が高い。埋没の時期についての詳細は不明である。

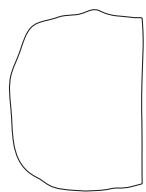
050号墓も遺構の天井部分が崩落しており、埋土を除去したところ墓室より蔵骨器が出土した。墓口方位は、北北東(N14°E)である。遺構の残存状況が非常に悪く、天井や墓口付近、墓室右壁などが残存していない。わずかに残る遺構の壁面から推測すると、墓室は幅1.28m×奥行き1.48mほどの広さを有し、方形に近い形状であったと考えられる。天井は残存していないため、墓室の高さは不明である。墓室の奥側に高さ10cmに満たないわずかな段差が造られ、その上に3点の蔵骨器が出土している。段差の下にも2点の蔵骨器が出土しているが、いずれも破損の度合いが大きく残存状況が良くない。蔵骨器の種類は、マンガン釉甕形が4点と転用蔵骨器が1点である。転用蔵骨器は、蓋は赤焼きの皿で、身は水甕を転用したものである。050号墓の明確な造営年代は明らかではないが、蔵骨器2から「嘉慶三年・・・」(嘉慶3年=1798年)の銘書がみられることや、隣接する049号墓の蔵骨器からもそれに近い年代の銘書がみられることから、1800年前後以降に機能していた可能性が高い。遺構の残存状況が悪いが、付近から砲弾穴のような窪みが検出されていることから、沖縄戦時の砲撃で崩落し、埋没した可能性が想定される。

049号墓と050号墓は、隣接して造られていることなどから親縁関係などが想定されるが、詳細は不明である。

(2) 遺物 (第26図)

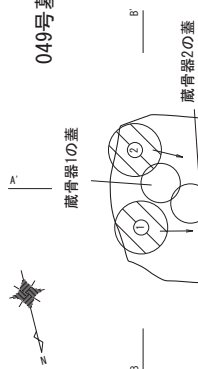
049号墓と050号に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。ここでは、049号墓・050号の遺物のうち、比較的残存状況の良い049号墓の墓室内から出土した蔵骨器2点について図化した。また050号墓の蔵骨器の観察一覧表については、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細については、第5章と第6章を参照頂きたい。

墓室横断面図



EL=100.20

049号墓



平面図

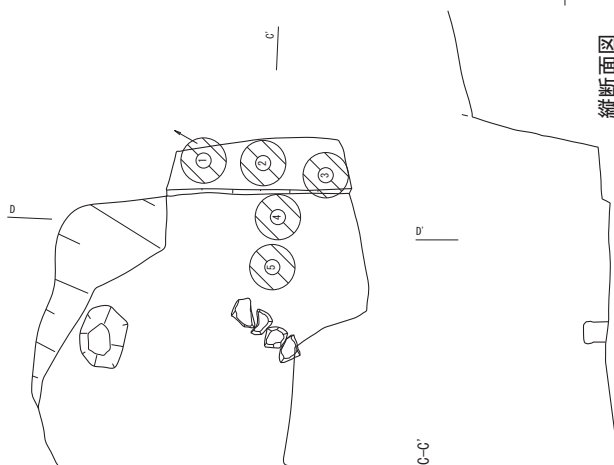
A'-A

EL=100.00

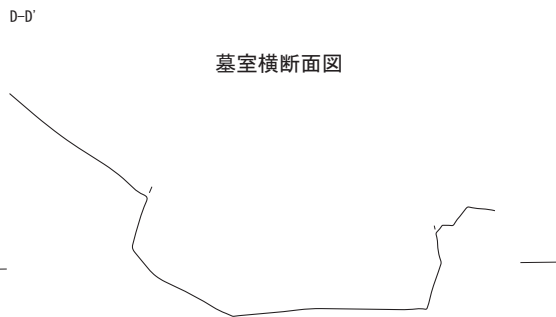
縦断面図



050号墓

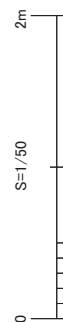


墓室横断面図



EL=100.00

EL=100.00



縦断面図

C-C'

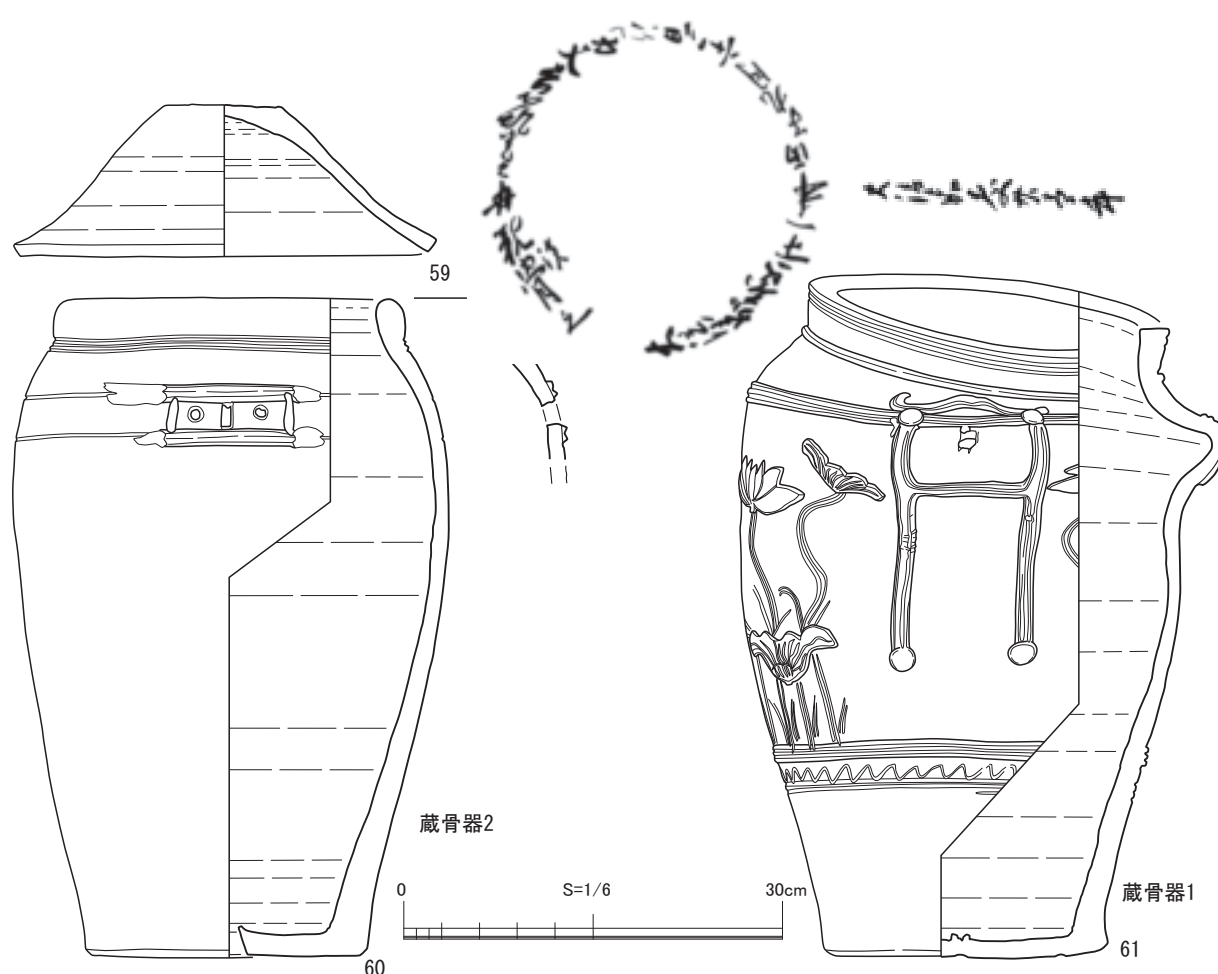
第25図 049号墓・050号墓遺構図

049号墓からは、ボージャー形とマンガン釉甕形の蔵骨器2点が出土した。蓋は身から落ちていたが、各種の蔵骨器が1点ずつであったため蓋と身のセット関係は把握できた。

蔵骨器2はボージャー形で、蓋(第26図59)はつまみと、つまみ台の無い笠形になり、端部は平坦である。外面の上部は調整が粗雑であるが、下部は内外面ともにやや丁寧に調整が行われる。身(第26図60)は、頸部が直口し、口縁が玉縁状になる。頸部の横帯は3本で、マド枠は平葎形で縦軸が他に比べて短くなる。安里分類(2006)で蓋はⅦ式、身はⅣ式にあたり、蓋と身の年代観から1750~1820年代の資料であると考えられる。なお、蓋に嘉慶21年(1816年)洗骨の銘書がある。

蔵骨器1はマンガン釉甕形の蔵骨器である。特徴的な形状の身のみ図化した。身(第26図61)は、口縁部が直口し、口唇部は平坦に成形される器形だが、焼成不良により肩部が大きく歪む。屋門は唐破風形で頂部は玉飾がない。胴部の蓮弁文は貼り付けである。マンガン釉は、胴部文様帯まで掛けられ、口唇部は露胎する。器面には施釉時の刷毛目が残る。上記の特徴などから、安里編年の第Ⅱ~Ⅲ期(1770~1850年代)の資料である。蓋と身の両方に嘉慶21年(1816年)洗骨の銘書がある。

上記の2点は、ボージャー形とマンガン釉甕形の共伴例である。蔵骨器2はボージャー形の中でも終末期に近い1750~1820年に相当する資料で、蔵骨器1のマンガン釉甕形は1770~1850年相当の資料であることから、この2点はほぼ同時期の資料であると考えられる。



第26図 049号墓出土遺物

第7節 051号墓・052号墓

(1) 遺構 (第27図)

051号墓と052号墓は、丘陵北側裾部北西側に位置する横穴式の掘込墓である (第7図)。049号墓・050号墓の北隣に位置し、標高もほぼ同様の100m付近に造られている。ともに天井が崩落して埋没した墓である。051号墓の墓庭から掘り込まれた小規模な遺構を052号墓とした。この2基の墓についてはあわせて報告を行う。

051号墓は、遺構の天井部分が崩落しており、埋土を除去したところ墓室より蔵骨器が出土した。墓口方位は、北西 (N50° W) である。墓室の形状はほぼ方形で、幅が1.58m、奥行きが1.87mである。奥壁側に蔵骨器を安置するための棚が一段造られている。墓室の天井は残存していないため、高さは不明である。墓庭から墓室に至る羨道が比較的長く造られており、約1.5mほどである。羨道部には、閉塞石の一部と思われる石灰岩が検出された。

墓室の棚の上から3点の蔵骨器が出土しており、うち2点は直立した状態で1点は横倒しの状態で出土した。蔵骨器の種類は、赤焼の蔵骨器が1点 (蔵骨器3) と無釉甕形が1点 (蔵骨器2)、転用蔵骨器が1点 (蔵骨器1) である。墓の造営年代の詳細は明らかではないが、蔵骨器2の蓋には、「乾隆五拾七年・・・洗骨」 (乾隆57年=1792年) の銘書があることなどから、この時期には墓が機能していたことが想定される。また、周辺の地形の崩落状況などから考えて、沖縄戦時に埋没した可能性が高い。

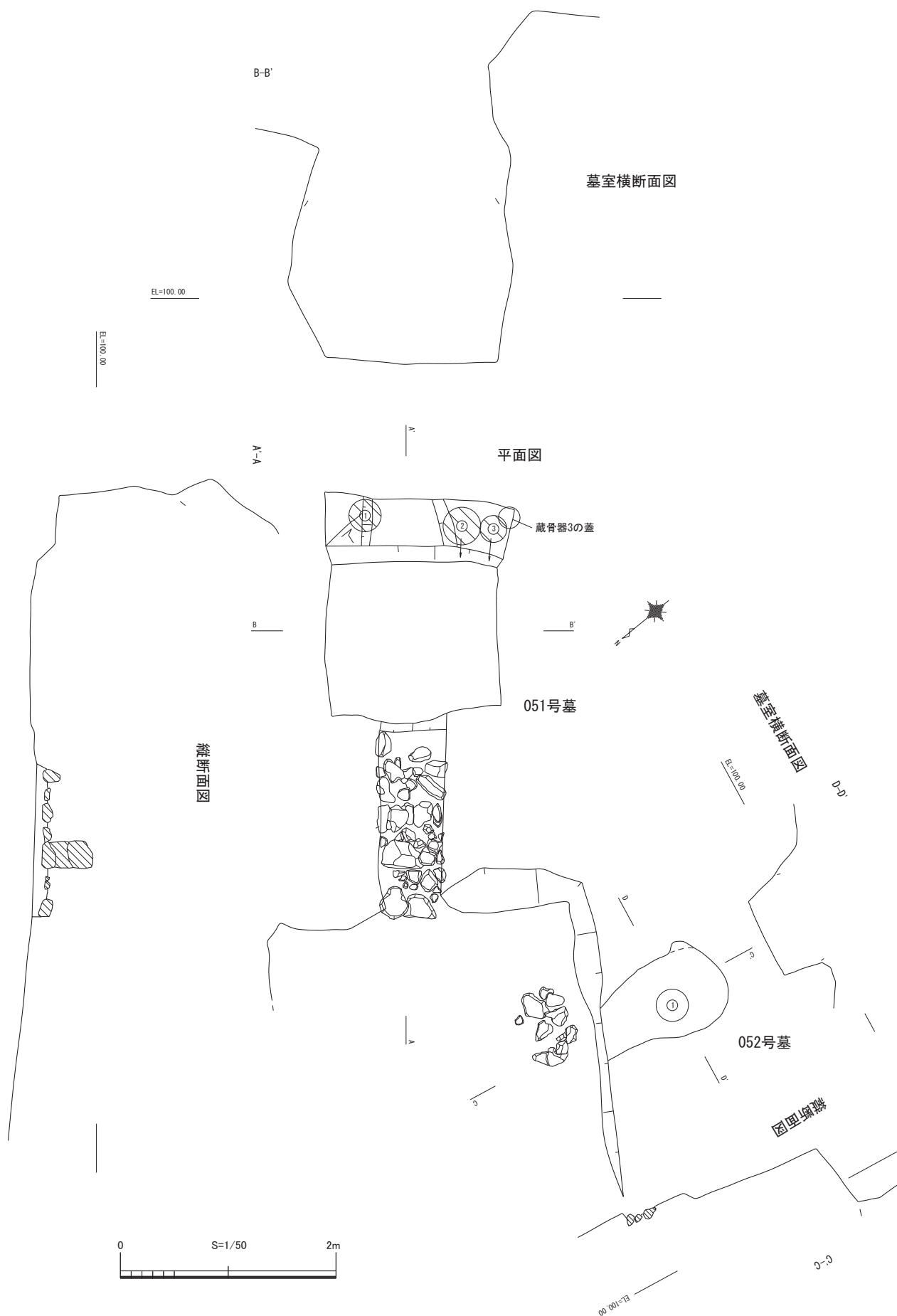
052号墓は、051号墓の墓庭から掘り込まれた小規模な遺構である。墓口方位は、北 (N10° E) である。墓室の形状は、羨道が短く円形の墓室である。墓室部分は幅0.75m、奥行き1.20m、天井が残存していないため、高さは不明である。墓室の規模は蔵骨器1基分の大きさである。実際に埋土中から蔵骨器の蓋のみが1点出土している。その位置や規模から051号墓の脇墓である可能性が考えられるが、遺物の出土状況などからはその詳細は不明である。

(2) 遺物 (第28図)

051号墓と052号に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。ここでは051号墓・052号の遺物のうち、比較的残存状況の良い051号墓の墓室内から出土した蔵骨器2点について図化した。またそれ以外の蔵骨器の観察一覧表については、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細については、第5章と第6章を参照頂きたい。

051号墓からは、赤焼の蔵骨器1点、無釉の甕形蔵骨器1点、水甕を転用した蔵骨器1点の計3点が出土した。そのうち形状が特徴的な2点を図化した。出土状態などから、蓋と身のセット関係は把握することができた。

蔵骨器3 (第28図62・63) は、赤焼の蔵骨器である。形状は甕形のボージャー形に類似する。蓋 (第28図62) のつまみは宝珠形である。つまみは、蓋の本体部とは別単位で作った後に接合されたとみられる。身 (第28図63) は、口縁部が玉縁状に成形され内傾する。マド枠は平葺形に成形されており、指でつまんで成形された痕がみられる。上下の底をつけた後にマド部分がつくられており、マドをつくる際にわずかだが底も一緒に削られている。底面には、粘土から切り離された際の糸切り痕が明瞭に残る。全体的に丁寧に作られており、器面は内外面ともに滑らかである。年代は不明である。027号墓出土の蔵骨器14 (第22図47・48) と器形や胎土が類似する資料であるが、大きさは同資料よ

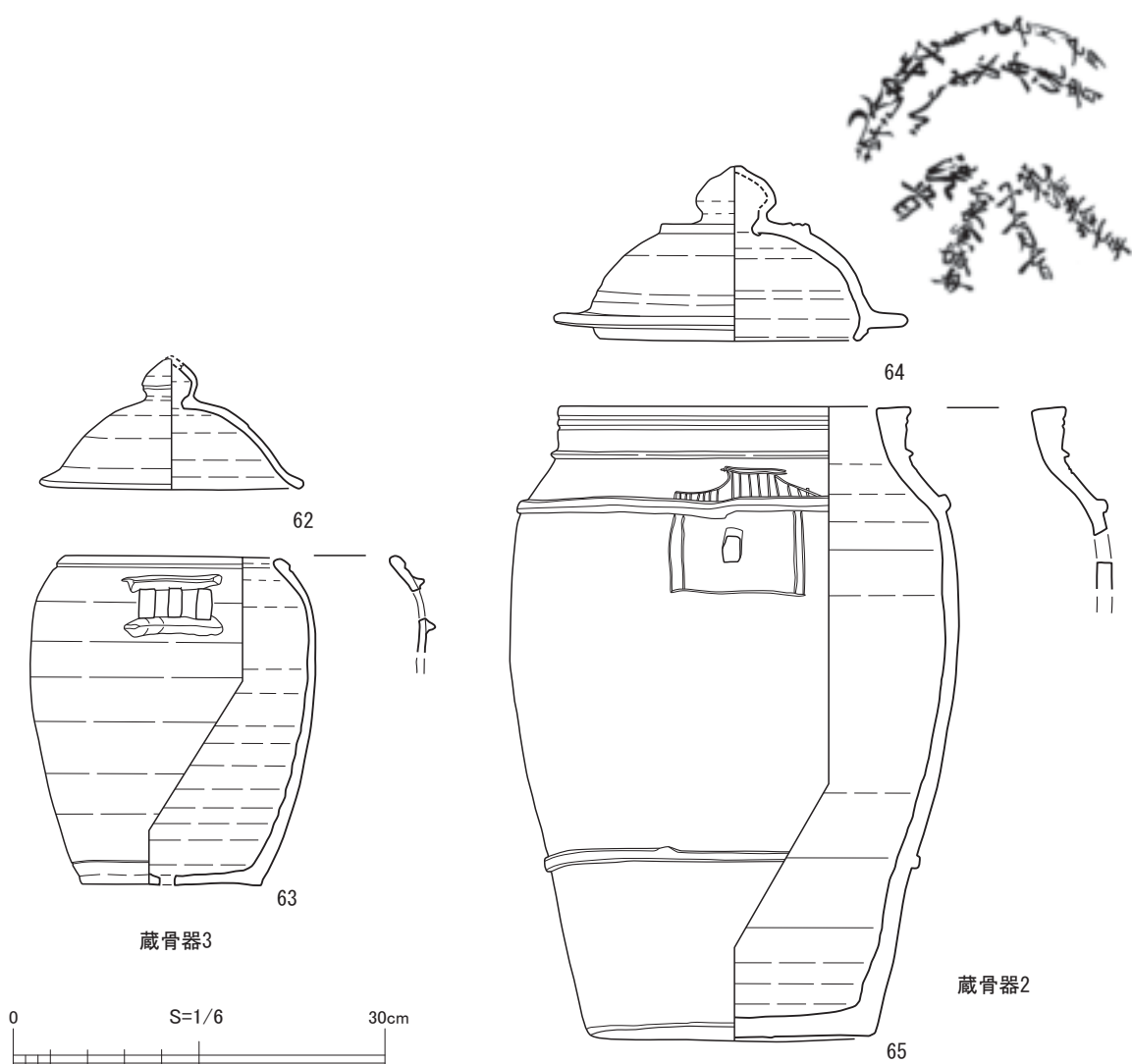


第27図 051号墓・052号墓遺構図

りも一回りほど小さい。

蔵骨器2（第28図64・65）は、器形はマンガン釉甕形と類似するが、器面にマンガン釉が掛けられず焼き締められている点で異なる。蓋（第28図64）のつまみの形状は宝珠形だが、先端に工具痕が付きややつぶれている。鏝はわずかに上へ反り、鏝端部は丸く成形される。かえりは内側へすぼまるようにつくられ、断面は隅丸方形である。身（第28図65）は、口縁部が直口する器形で、口唇部が平坦につくられる。屋門は柱の短い瓦屋形で、貼り付けではなく沈線で描かれる点が特徴である。屋門以外には施文は見られない。横帯が口縁部・頸部・胴上部・胴下部の4つある点はマンガン釉甕形と共通する。安里編年では、マンガン釉の甕形の第Ⅰ期（1760～1770年代）に該当する資料であり、ボージャー形の分類（2004）では甕形的口縁であることからⅦ式（1750～1820年代）にあたる資料である。なお、銘書には乾隆57（1792）年洗骨と記されている。

図化した以外に、水甕の転用蔵骨器が得られている。同資料は胴部に焼成時にあいたと見られる大きな亀裂の周りに漆喰が見られ、漆喰を貼り付けて使用していた事がわかる資料である。資料の詳細については、章末の第5表を参照頂きたい。



第28図 051号墓出土遺物

第8節 054号墓

(1) 遺構 (第29図)

054号墓は、丘陵北側裾部北西側に位置する横穴式の掘込墓である (第7図)。051号墓と後述する055号墓の間に位置し、これらの墓とほぼ同様に標高約100m付近に造られている。054号墓は天井が崩落して埋没した墓で、埋土を除去したところ墓室から蔵骨器が出土した。墓口方位は、北西 (N47° W) である。墓室の形状はほぼ方形で、幅が1.32m、奥行が2.00m、奥壁側に蔵骨器を安置するための棚が二段造られている。棚の高さは、1番棚と2番棚はいずれも約0.3mである。墓室の天井は残存していないため、高さは不明である。墓庭から墓室に至る羨道の長さは約1.0mである。

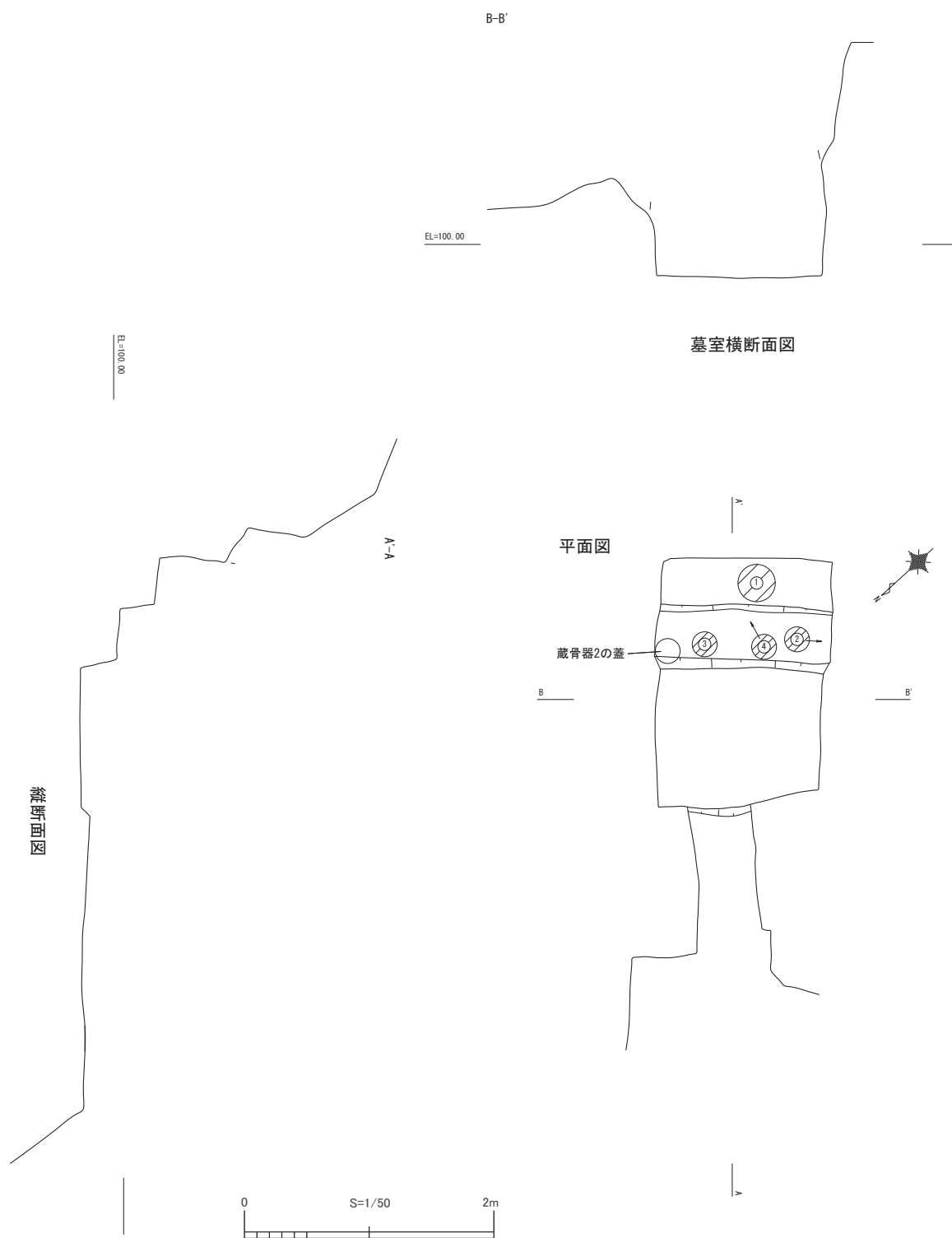
墓室奥の1番棚の上から1点、2番棚の上から3点の蔵骨器が出土している。1番棚から出土した蔵骨器1は、蔵骨器の床面が棚に着いており、位置はほぼ安置された状態であると考えられるが、蓋や蔵骨器の身の半分以上が破損しており、検出時には蔵骨器中から納骨された骨が露出した状態であった。また、一部の蔵骨器片や骨が2番棚に落ちている状態であった。2番棚から出土した蔵骨器2から4として取り上げたものは、いずれもマンガン釉甕形の小型の蔵骨器である。蔵骨器3は大きく破損しており、蔵骨器2や4は大きく横倒しになっている状態で検出された。これらの蔵骨器の破損状況が著しいことや、それらの出土状態からいずれも安置された状態の現位置ではなく、崩落などの影響で大きく攪乱を受けていると考えられる。

054号墓の詳細な造営年代は明らかではないが、蔵骨器の種類がすべてマンガン釉甕形であることや、蔵骨器2の蓋には「明治二十七年・・・洗骨」(明治27年=1894年)の銘書があること、他の蔵骨器も大正や明治期の銘書があることなどから、主に近代に利用されていた墓である可能性が高い。また周辺の地形の崩落状況などから考えて、沖縄戦時に砲撃などの影響を受けて崩落し埋没した可能性が高い。

(2) 遺物

054号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。また、蔵骨器の観察一覧表については、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細については、第5章と第6章を参照頂きたい。

蔵骨器については、残存状況が良くなかったが破片資料を復元したところ、マンガン釉甕形4点と転用蔵骨器の蓋1点が確認された。マンガン釉甕形は大型の資料が1点と、小型の資料が3点である。残存状況が良くないために図化していないが、以下に資料の概要を述べる。出土状況では、蓋と身のセット関係が明確にわかるものは蔵骨器3のみであったが、器形や大きさ、銘書などからセット関係を概ね把握することができた。蔵骨器1は屋門部分を欠失するが安里分類の第V期(1900~1920年代)の資料で、大きさ等から墓室の埋土から出土した蓋の一つとセット関係であると考えられた。なお、蓋には大正12(1924)年の銘書がある。小型のマンガン釉甕形の資料は、蔵骨器3については出土状況から蓋と身のセット関係が判明していたが、蔵骨器2と4はそれぞれバラバラに出土していた身と蓋に書かれた銘書の内容からセット関係が判明した。これらは、3点とも屋門が沈線になる安里分類第VI期(1930年代以後)の資料である。このほかに蓋として転用された皿が1点出土しているが、セットの身にあたる遺物は出土していない。



第29図 054号墓遺構図

第9節 055号墓

(1) 遺構 (第30図)

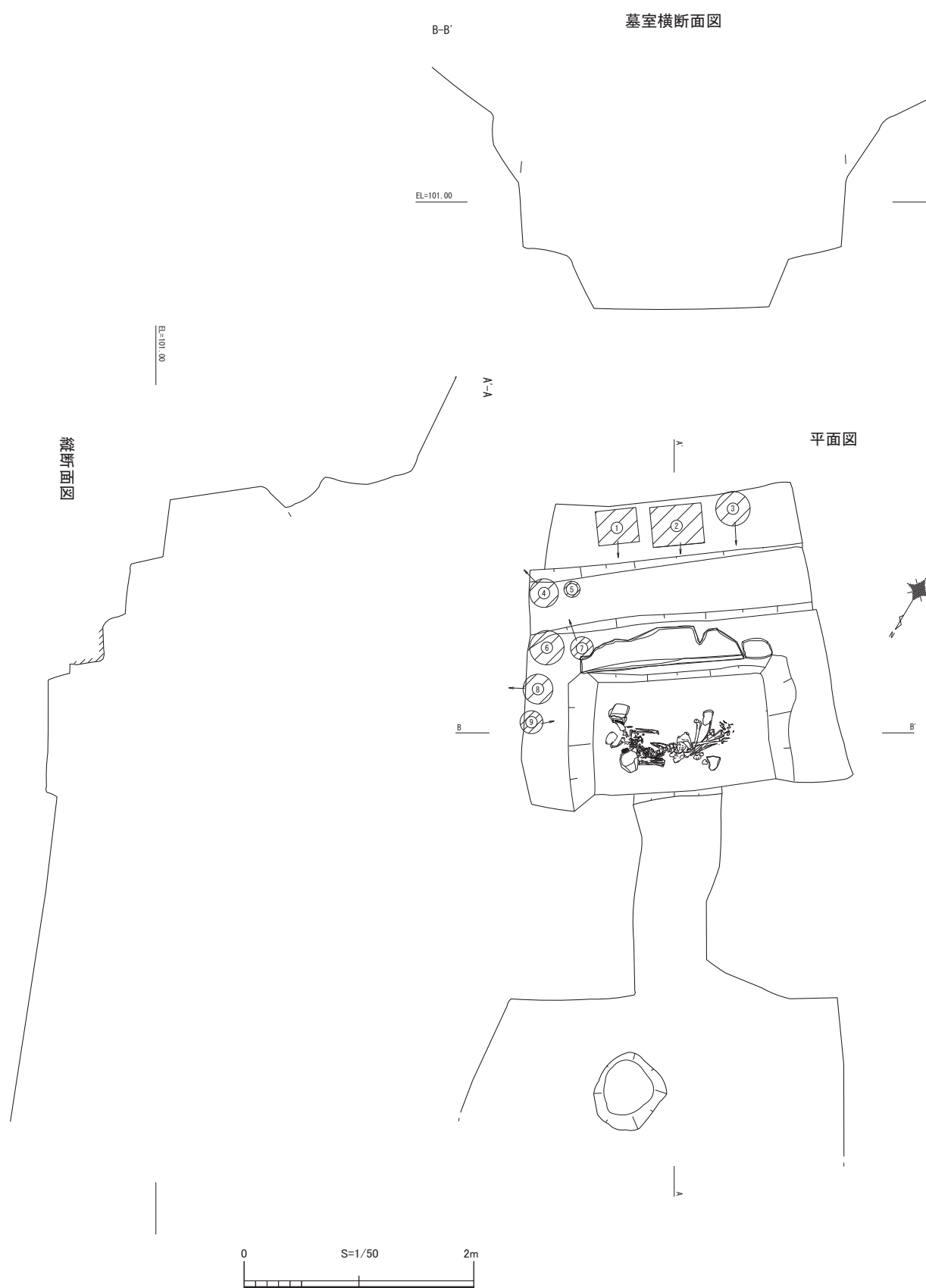
055号墓は、丘陵北側裾部北側に位置する横穴式の掘込墓である(第7図)。055の墓とほぼ同様に標高約100m付近に横並びに造られている。055号墓は天井が崩落して埋没した墓で、埋土を除去したところ墓室の棚の上より蔵骨器が、またシルヒラシからは蔵骨器に納骨される前の状態である一次葬人骨1体が出土した。遺構は比較的崩落の度合いが高く、墓の天井だけではなく墓前面は床面付近を除いてほとんど残存していない。

055号墓の墓口方位は、北北西(N30°W)である。墓室の形状は方形であるが、墓口側が広く奥壁側が狭く造られているために、平面観は台形状になる。墓室の幅が2.55m、奥行きが2.57mで、奥壁側に蔵骨器を安置するための棚が造られている。棚は全部で3段が造られ、墓口側の3番棚のみ石灰岩の切石が詰め込まれた上でコの字状に造られ、表面に漆喰が塗られている。墓口の羨道部からシルヒラシにかけて若干の段差があり、シルヒラシが一段低く造られている。墓室の天井は残存しておらず、高さは不明である。また、墓の前面も残存していないため、墓口の形状などについても不明である。

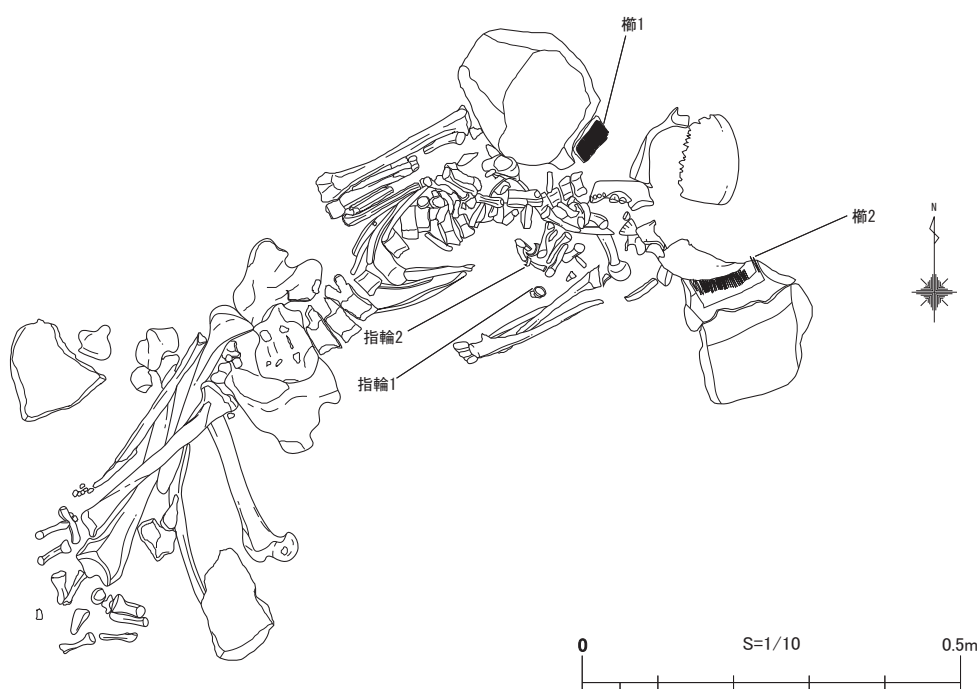
墓室奥の1番棚の上から3点、2番棚の上から2点、3番棚の上から4点の蔵骨器が出土している。1番棚から出土した蔵骨器1から3は、蔵骨器の床面が棚に着いていること、蓋が身に載った状態であること、屋門が墓口方向を向けて置かれていることからほぼ墓に安置された状況を保っていると考えられる。2番棚と3番棚には、墓室の右棚側に蔵骨器が集中して出土しており、蔵骨器が傾いていたり、屋門の方向がバラバラであることから、後世に寄せられて置かれたか、もしくは崩落の影響を受けている可能性が高い。

また、シルヒラシからは一次葬人骨1体が安置された状態で出土した(第31図)。人骨は墓口方位に対して、直交するように横向きに安置されている。人骨の出土状態から、仰向けで手足を折り畳まれた状態であったと考えられる。人骨出土地点の四隅より頭大の石灰岩が出土している。これらは遺骨を納めた木製の棺箱を置くための台石であると考えられる。人骨周辺からは、木製の棺箱に使われていたと考えられる鉄釘が出土していることから、かつては木製の棺箱が置かれていたが、検出時には木が朽ちた状態であると考えられる。また、人骨の頭骨付近から櫛が、手の付近から金属製やプラスチック製の指輪が出土している。これらは被葬者が木製の棺箱に安置された際に、副葬品として身につけられたものであると考えられる。これらの出土状態から、この墓の最後の被葬者が木製の棺箱に安置され、洗骨が行われる前に天井の崩落によって埋没したと考えられる。なお、墓庭から小規模な土坑が出土しているが遺構の中から遺物は出土していない。検出された一次葬人骨の詳細については、第6章を参照頂きたい。

055号墓の詳細な造営年代は明らかではないが、蔵骨器1と2が上焼コバルト釉御殿形であり、それ以外は、小壺を転用した蔵骨器5を除いてマンガン釉甕形である。また、銘書は確認できたものでは、蔵骨器8の蓋から確認された「同治六年・・・洗入」(同治6年=1867年)が最も古く、それ以外にも「光緒」「大正」「昭和」などの年号の銘書がみられる。またこの墓の中で、最も新しい時期の被葬者であると考えられる一次葬人骨の副葬品の素材にもプラスチックが使用されていることから、おそらく戦前まで使用されていた墓であると考えられる。また周辺の地形の崩落状況などから考えて、沖縄戦時もしくはその前後に埋没した可能性が高い。



第30图 055号墓遺構図



第31図 055号墓一次葬人骨出土状況

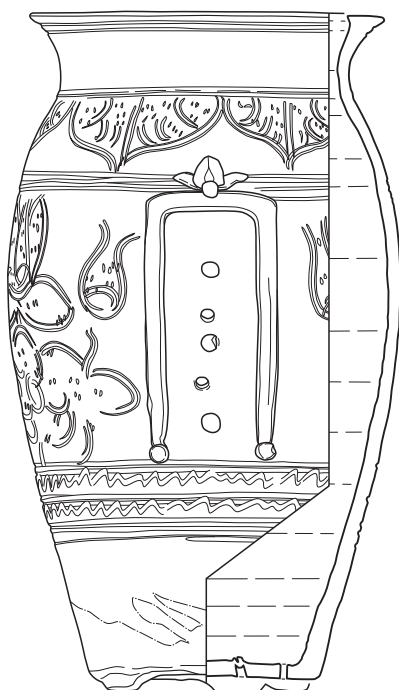
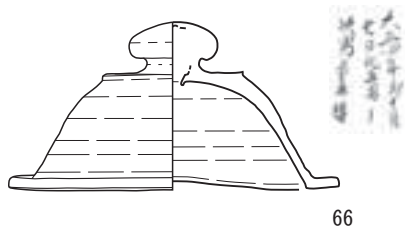
(2) 遺物 (第32図・第33図)

055号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。ここでは、055号の遺物のうち、比較的残存状況の良い墓室内から出土した蔵骨器3点について図化した。またそれ以外の蔵骨器の観察一覧表については、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細については、第5章・第6章を参照頂きたい。

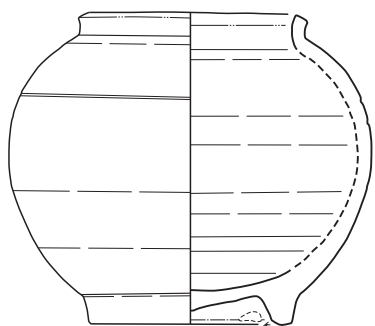
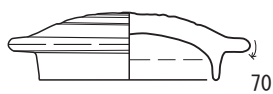
055号墓からは、上焼コバルト釉御殿形2点、マンガン釉甕形6点、転用蔵骨器1点が出土した。そのうちの3点を図化した。出土状態などから蓋と身のセット関係は概ね把握することができた。

蔵骨器3 (第32図66・67) は、マンガン釉甕形の蔵骨器である。蓋 (第32図66) は、つまみは饅頭形で、かえりにつくられない。鏝はわずかに上に反り、端部はやや平坦である。焼成不良のため一部が反る。身 (第32図67) は、口縁部が外反し、口唇部が平坦に成形される。底面に逆台形の脚が3つ貼り付けられる。器面全体にマンガン釉が施釉されるが、塗り方が雑で部分的に斑になっており、口唇部と胴下部は釉が掛けられずに露胎する。屋門は貼り付けのアーチ形で、横帯2以外は沈線であることから、安里編年の第V期 (1900～1920年代) の資料であると考えられる。銘書には大正4 (1915) 年と記される。055号墓から出たマンガン釉甕形は、図化したものも含め、第V期 (1900～1920年代) の資料が2点、第VI期 (1930年代以後) の資料が3点、屋門は沈線で描かれるが、横帯2と3が突帯になり、年代観のはっきりしない資料が1点である。

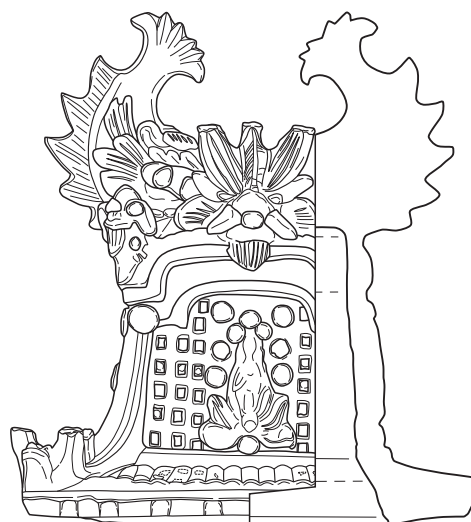
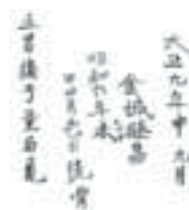
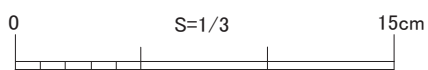
蔵骨器1 (第32図68・69) は、上焼コバルト釉御殿形である。蓋 (第32図68) は入母屋形で、正面は唐破風形に作られる。大棟に一对の鯨を配し、唐破風の頂部には龍と思われる飾りがつけられる。龍の頭の先端は重ね焼き様のツノが付く。また、隅棟も重ね焼き用のツノになり、前面のツノの根元



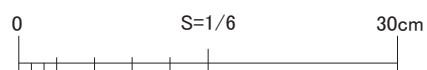
藏骨器3



藏骨器5



藏骨器1



第32図 055号墓出土遺物 1

には、簡略化された龍と思われる頭がつくが、背面は獅子頭になる。唐破風の下には不明瞭であるが、蓮華の上に法師が乗るとされる文様を貼り付け、その周りに格子文様が表現される。背面の唐破風の下は飴釉と緑釉で円文を描く。身（第32図69）は、胴下部が小さくなり、正面観が逆台形状の器形である。アーチ形の屋門を中央に貼り付け、その左右に蓮華に乗った法師と思われる文様を貼り付ける。施釉技法は、蓋と身ともに、白化粧の後にコバルト釉や緑釉、飴釉で彩色し、透明釉をかける。内面と銘書面とツノ先端は白化粧されるが、透明釉は掛けられない。また、蔵骨器1はツノ以外にも重ね焼きをした痕が各部位にみられる。蓋の屋根部分には、器の高台と思われる直径約5cmの円形の痕が、正面に2つ、右側面に1つみられる。身の内側底面の中央にも、直径約9cmの円形の痕が1つみられる。なお、上焼コバルト釉御殿形は、上江洲編年（上江洲1981）において、上焼コバルト掛けとして1880～1950年の年代観が与えられている。なお蓋裏に書かれた銘書には、昭和6（1931）年洗骨と記されている。

図化した以外に、もう1点類似した上焼コバルト釉御殿形が確認された。同資料には、丸めた粘土の上に、製品を置いて重ね焼きした痕がみられた。

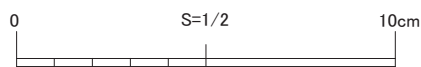
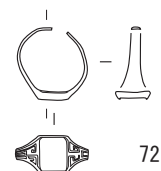
第32図70・71は、近代の中国産と思われる蓋付の小壺を転用したものである。外面全体に緑釉が掛けられる。蓋（第32図70）はつまみの無い形で、頂部が緩やかな弧状になり、鍔がつけられる。鍔は水平に伸び、端部は丸く成形される。かえりは比較的しっかりとしたつくりになっている。外面頂部から直径3.5cmほど螺旋状に沈線を引き、その外側に一条の沈線をめぐらせる。身（第32図71）は、頸部が短くつくられ直口する。また、口唇部が削られ外傾する。内外面にロクロ成形の痕が見られるが、丁寧なつくりである。蓋は外面のみを施釉、身は内外面ともに全体的に施釉される。口唇部には白化粧がみられ、釉薬は掛けられない。また高台の端部は露胎するが、見込み部には施釉される。素地は赤褐色である。蓋裏に昭和11（1936）年洗骨の銘書がある。

副葬品類については、特徴的な遺物として指輪1点を図化した。

第33図72は、ジュラルミン製の指輪である。中央部が肥厚し、長方形を呈するがそこに文様や何かが貼付された跡は見られない。輪は歪になり、一部欠損している。外面には線彫の文様がみられ、左右は非対称である。しかし全体に青錆が付着し、文様組成は判然としない。法量は直径1.89cm、内径1.66cm、幅0.08cm（最大0.19cm）、厚さ最大0.91cm、現重量2.10gである。シルヒラシから出土した一次葬人骨に伴い出土している（第31図指輪1）。一次葬人骨に伴う指輪については、指の骨にはまった状態のプラスチック製のものも出土している（第31図指輪2）。これについては、写真のみ掲載した。巻末の写真図版を参照頂きたい（図版26指輪2）。

上記の遺物以外には、一次葬人骨の頭部付近からプラスチック製の櫛が2点出土している（第31図櫛1・櫛2）。これらについては頭骨付近から出土していることから、被葬者の髪に刺した状態で安置されていたと考えられる。これらの櫛については、写真のみ掲載した（図版26櫛1・櫛2）。

上記のシルヒラシより出土した一次葬人骨に伴い出土した各種の遺物は、それらの素材から概ね近現代のものと考えられる。



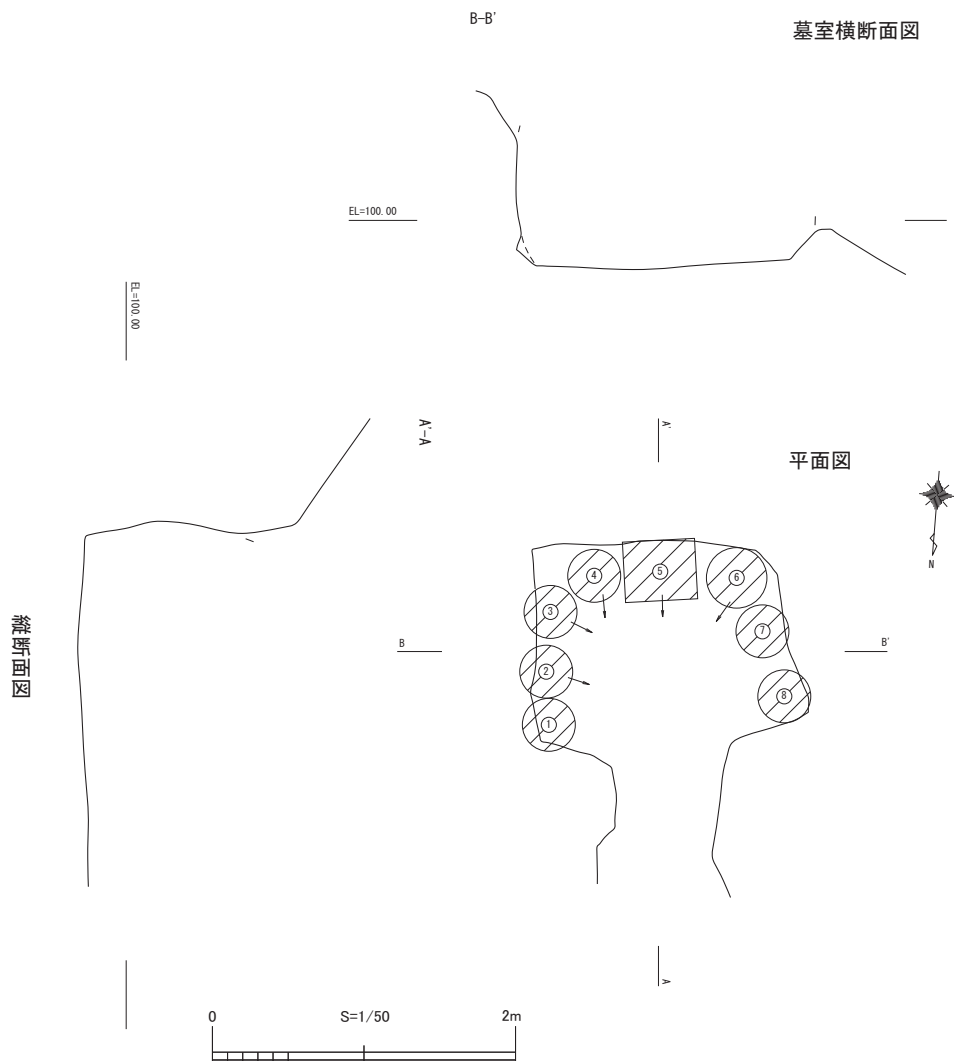
第33図 055号墓出土遺物2

第10節 056号墓

(1) 遺構 (第34図)

056号墓は、丘陵北側裾部の北側に位置する横穴式の掘込墓である（第7図）。周辺には同様の墓が、標高約100m付近に横並びに造られている。056号墓は天井が崩落して埋没した墓で、埋土を除去したところ墓室の中より蔵骨器が8基出土した。遺構の天井や前面はほとんど残存しておらず、墓室の奥壁と左右壁面の下半部のみが残存していた。墓口方位は、北（N4°W）である。墓室の形状は概ね方形であるが、定型的な方形ではなく若干角が丸く造られている。墓室の幅が1.67m、奥行が1.42mで、墓室に蔵骨器を安置するための棚は造られていない。墓室の天井は残存していないため、高さは不明である。墓口付近の墓前面部および墓庭については、周辺の地形が北側に崩落しているため残存していない。

墓室の壁面に沿って、蔵骨器が安置されており合計8基の蔵骨器が出土した。ほとんどの蔵骨器は、底面が遺構に着いていること、蓋が身に乗った状態であること、屋門が墓口方向を向けて置かれていることからほぼ墓に安置された状況を保っていると考えられる。ただし、天井の崩落などの影響によ



第34図 056号墓遺構図

り一部の蔵骨器の蓋に破損がみられ、蔵骨器 7 と 8 については上半部がほとんど破損した状態で出土した。蔵骨器は、墓室奥壁の中央に御殿形が安置され、左右に甕形が向かって右側に 3 点、左側に 4 点が並ぶ形である。

056号墓の詳細な造営および使用年代は明らかではないが、蔵骨器 5 が赤焼御殿形、蔵骨器 4 と 6 がボージャー形、それ以外の蔵骨器がマンガン釉甕形といった各種蔵骨器が出土していることや、銘書は確認できたものでは蔵骨器 5 の蓋から確認された「雍正五年・・・洗骨・・・」（雍正五年＝1727年）が最も古く、それ以外にも「乾隆」「嘉慶」「道光」などの年号の銘書がみられることから、18世紀始め頃から19世紀中頃にかけて洗骨された被葬者が葬られていることがわかる。また、銘書で最も新しいものは、蔵骨器 2 の「道光十四年・・・洗骨」（道光14年＝1834年）であり、これ以降のものはないことから造営以後19世紀前半にかけて使用され、その後埋没したと考えられる。蔵骨器 5 の銘書には墓を仕立てた経緯が記されているが、その場所が「真嘉比村」であり、もともとこの蔵骨器は別の墓に入っていた可能性が想定されることから、この蔵骨器の年代を墓の造営年代とみるのは無理がある。しかし、この蔵骨器が中心に安置されていることを考えると、墓の造営年代は銘書に記載されているこの蔵骨器に他の人を追葬したと思われる18世紀中頃から後半にかけてとみるのが妥当ではなかろうか。銘書の詳細な解説については、第 5 章を参照されたい。

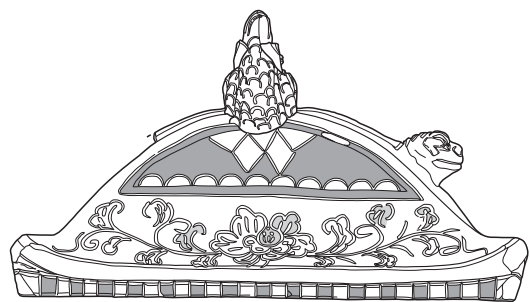
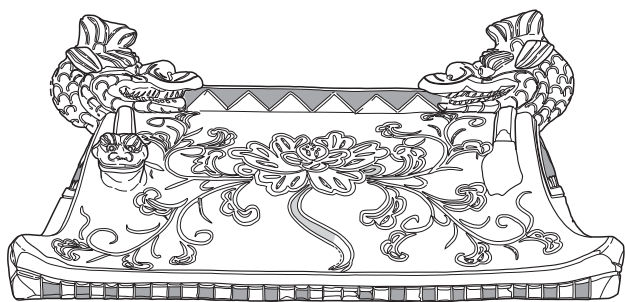
（2）遺物（第35～38図）

056号に伴う遺物の種類と数量の内訳は第 3 表のとおりである。056号墓からは赤焼御殿形が 1 点、甕形が 7 点出土している。甕形はボージャー形とマンガン釉甕形である。残存状況が良くないものもあるが、蓋と身のセット関係は概ね把握できた。そのうちの 4 点を図化した。またそれ以外の蔵骨器の観察一覧表については、章末の第 5 表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細については、第 5 章と第 6 章を参照頂きたい。

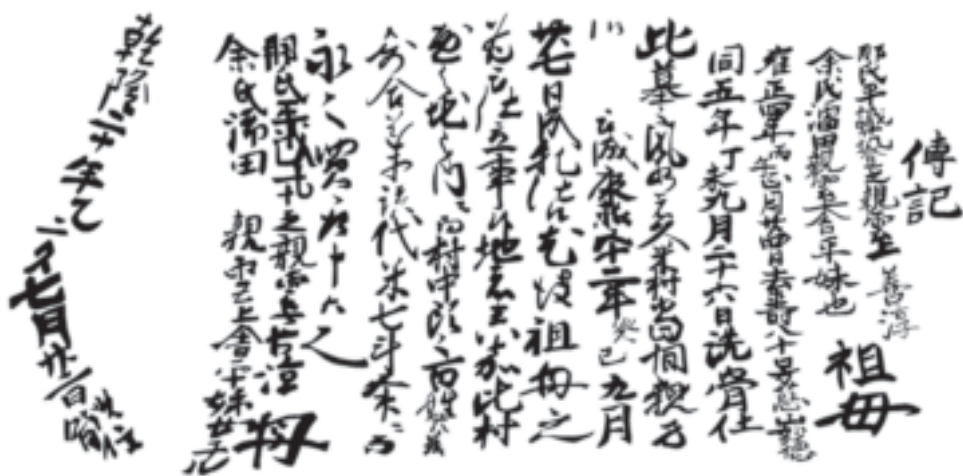
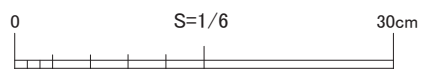
蔵骨器 5（第35図73・第36図74）は赤焼御殿形である。蓋（第35図73）は、入母屋形が意識されているが、瓦を強調した文様ではなく、全面的に花文を描く。大棟には鋸歯状に文様を描き、上段になる部分を黒く彩色、両端には一対の鯉を配する。降棟の先は獅子頭になるが、右側は降棟の半分程から先を欠失する。背面の降棟も正面から見た際に、右の下側半分程を欠失している。前面と背面とで同じ装飾が施されているのが特徴的である。側面の妻部分を黒く彩色し、上端には菱形と三角形を合わせた文様を描き、下端には横方向に半円を連続させそれぞれに白化粧をする。また、妻部の下には牡丹唐草文を描く。文様の中に彩色が施された痕跡があるが、退色によりその範囲については不明瞭である。蓋裏には銘書があり、墓が仕立てられた経緯などが記されている（第35図下段）。詳細については、第 5 章第 3 節を参照されたい。

身（第36図74）は、前面と背面で装飾が異なる。前面は中央上部に唐破風形のマド枠、その両脇に一段低くして法師を貼り付け、法師の足元とマド枠の下に蓮の花を 3 つ並べて沈線で描く。両側面には沈線で描かれた蓮華の上に法師が貼り付けられ、その上部に牡丹唐草を沈線で描く。背面は牡丹唐草が沈線で描かれる。全ての面を菱形と鋸歯文で縁取りをする。全体的に白化粧を施し、黒を使って彩色しているようであるが、沈線の内部も白くなる事から、文様を施文した後に白化粧と彩色をしているようである。また黒に濃淡を付けて彩色するなど、意匠が凝らされている。蓋と身どちらも内面まで白化粧がされる。内面はナデ消されずに工具痕が残る。

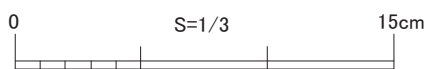
第37図はボージャー形である。蔵骨器 6 は、蓋（第37図75）はつまみ台のみになるタイプで、頂



蔵骨器5



蓋裏銘書 (S=1/3)





藏骨器5

74-正面



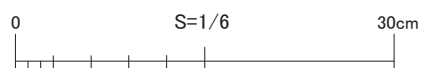
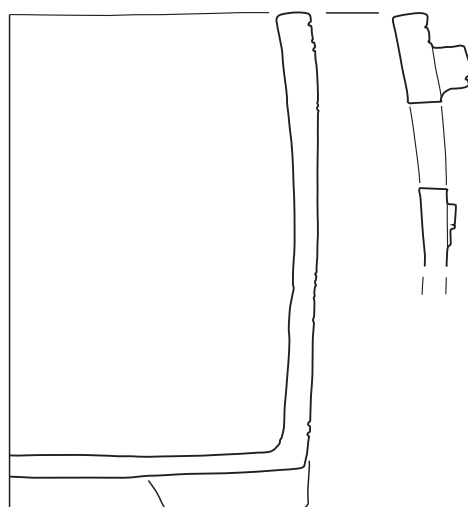
74-左側面



74-背面



74-右側面

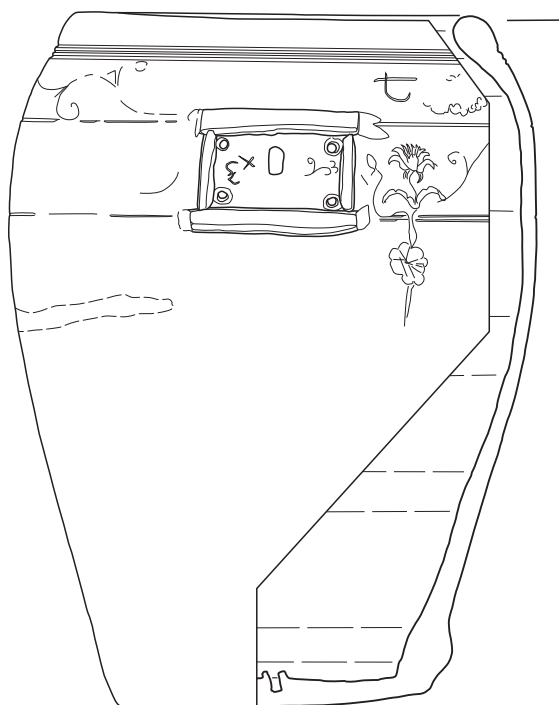


第36図 056号墓出土遺物2

明氏王識
 新嘉坡二十二年丙子十二月十八日
 同人壽辰
 洗骨
 孫女年 洗骨



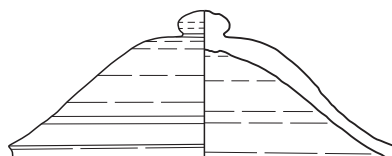
75



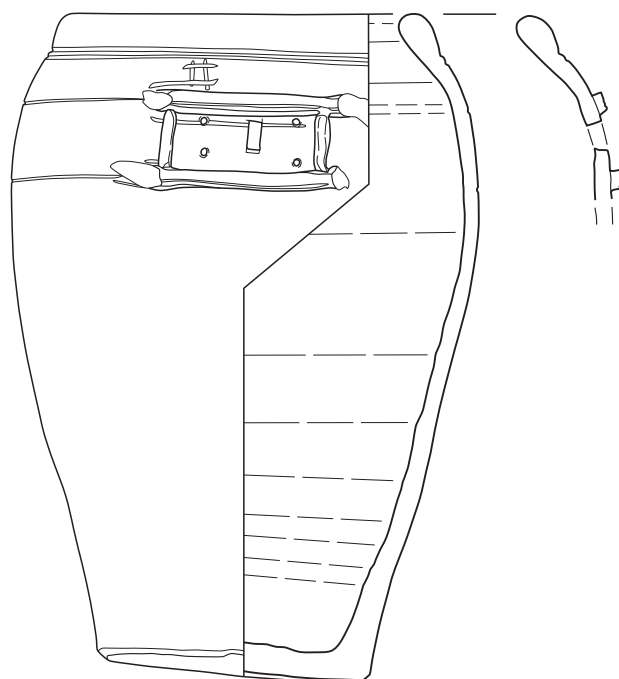
76

藏骨器6

明氏王識
 新嘉坡二十二年丙子十二月十八日
 同人壽辰
 洗骨
 孫女年 洗骨

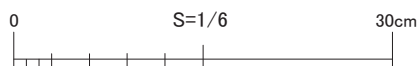


77



78

藏骨器4



第37图 056号墓出土遺物3

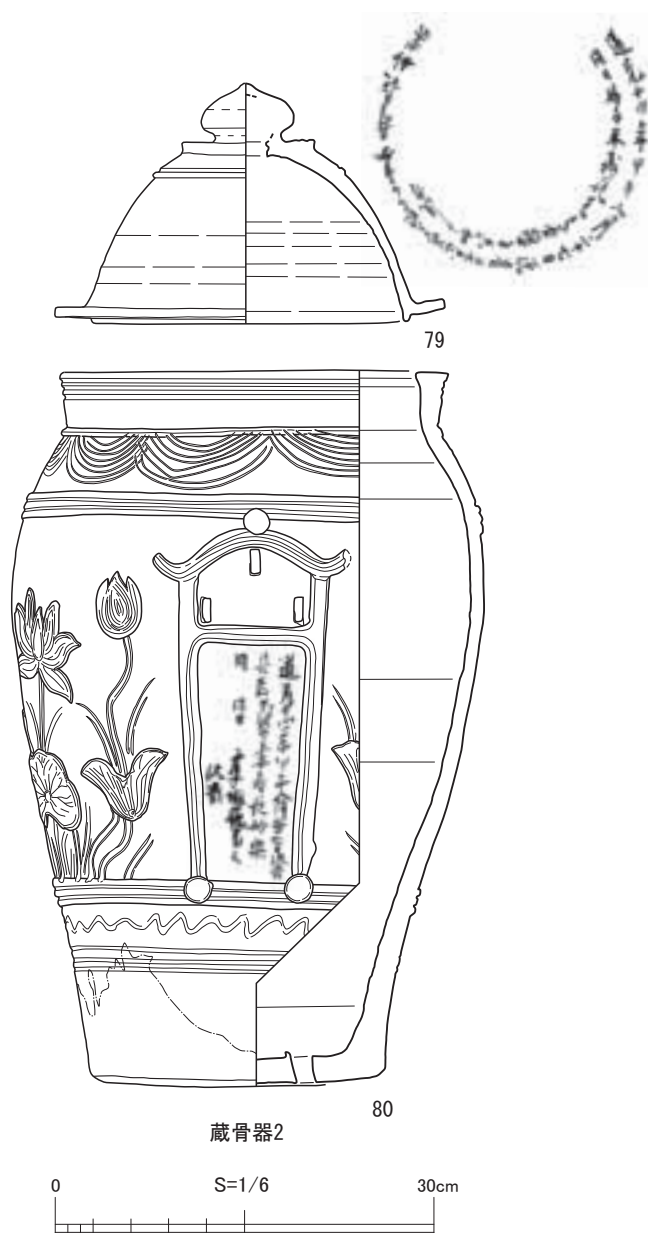
部に糸切り痕が見られる。端部は平坦になる。外面はロクロ痕が顕著に残るが、内面はナデ調整が行なわれややなめらかである。身（第37図76）は口縁部が玉縁状になり内傾する。マド枠は平葺形で、中とその周囲に細い線で蓮華文と唐草とみられる文様が描かれる。マド枠の上に窯印がある。全体的につくりは丁寧で、ロクロ成形後にナデ調整が行われるが、胴下部は横位にケズリの痕が残る。内面と外面の両方に漆喰が帯状に付着していた痕がみられ、ヒビが入っていた箇所を補修して使用したと思われる。器形から、蓋は安里分類（2006）のⅥ式（1760～1790年代）であり、身は概ねⅣ式（1720～1820年代）にあたると思われることから、蓋と身の年代観をあわせると1760～1790年代の年代観が与えられる。なお、銘書には乾隆22（1757）年洗骨とあり、銘書に書かれた年代は、上記の年代観よりも若干古い。

蔵骨器4の蓋（第37図77）は、つまみ台が無いタイプである。つまみは小さな扁平形で、接合部には工具痕が残る。端部は中央がくぼむ。器面調整は、内外面ともに滑らかに仕上げられる。身（第37図78）は口縁部が玉縁状になり内傾する。外面はロクロによる成形後、ヘラ削りと回転ナデ調整が行われる。蓋は安里分類（2006）のⅤ式（1740～1770年代）、身はⅢ式（1700～1800年代）に相当する資料である。蓋裏には、乾隆20年代（1755～1764年）と思われる銘書がある。

ボージャー形の資料は上記以外にも2点あり、これらの資料は形状などからいずれも18世紀後半の資料であると考えられる。なお、銘書は名前のみが記される。

蔵骨器2（第38図79・80）は、マンガン釉甕形である。蓋（第38図79）のつまみは宝珠形で、つまみ台はヘラで削り出す。鏝の端部は平坦で、かえりは丁寧につくられる。上部には回転ヘラ削りの痕が見られ、全体的に器面は滑らかである。身（第38図80）は、口縁部がわずかに外反し口唇部が平坦に成形される。マンガン釉が全体に掛けられるが、胴下部と銘書面は釉が掛けられずに露胎する。文様は蓮華文を貼り付け、横帯の2～4が突帯となる事から、安里編年の第Ⅲ期（1810～1850年代）の資料であると考えられる。銘書は道光14（1834）年洗骨とある。

図化した他には、安里編年の第Ⅲ～Ⅳ期（1810～1890年代）の資料が1点、第Ⅳ～Ⅴ期（1850～1890年代）の資料が1点出土している。

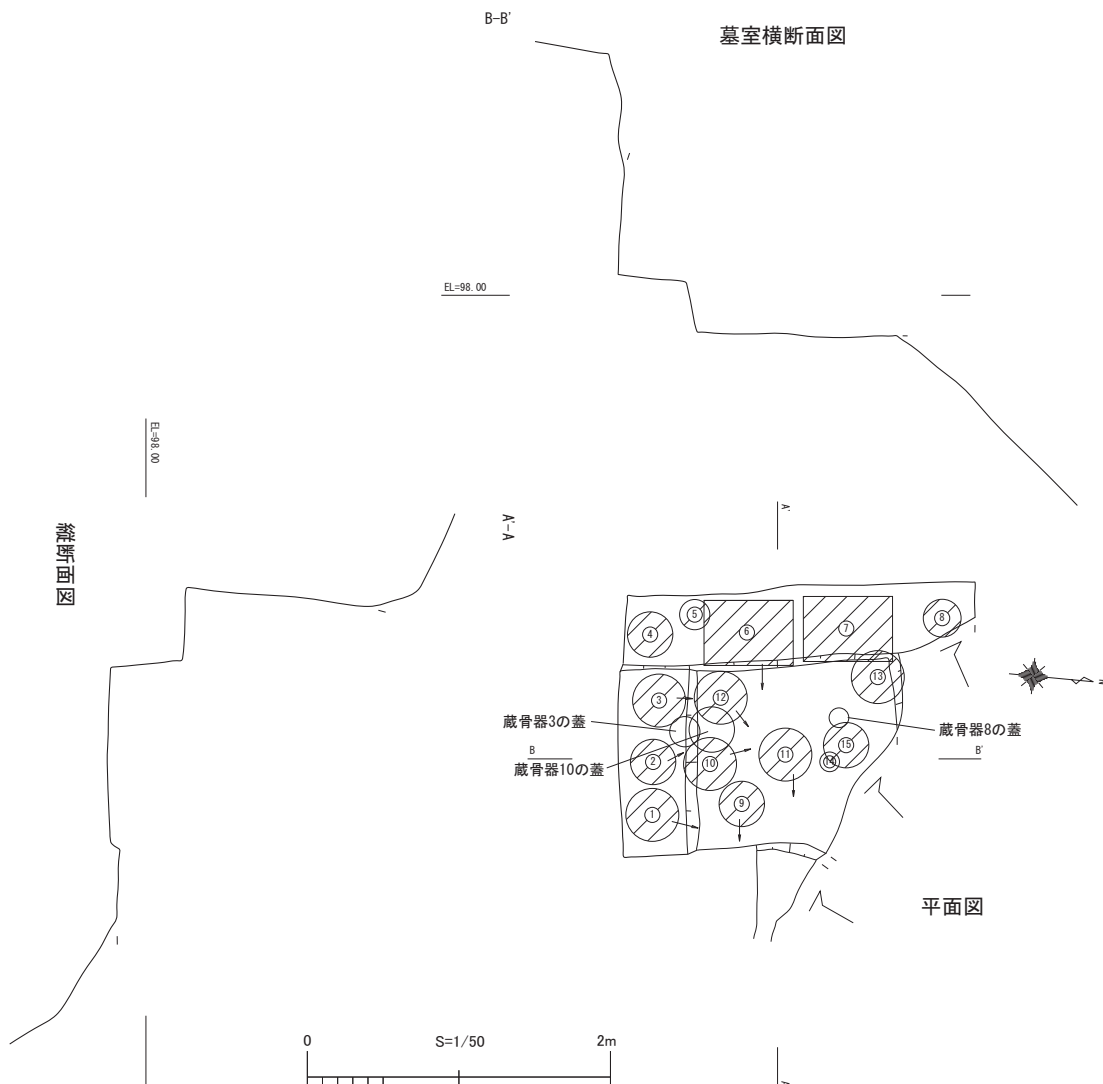


第38図 056号墓出土遺物4

第11節 057号墓

(1) 遺構 (第39図)

057号墓は、丘陵北側裾部の北東側に位置する横穴式の掘込墓である（第7図）。周辺は標高は概ね98m付近で、北側から057号墓と068号墓、その南側に043号墓から046号墓が横並びに造られている。057号墓は天井が崩落した埋没墓で、丘陵の斜面部を機械掘削中に蔵骨器が発見されたため、遺構であることが判明した。墓室の左半分と墓庭はほとんど残っていないため丘陵の斜面部に墓室が中空の状態で検出された。埋土を除去したところ墓室の残存部より多数の蔵骨器が出土した。墓口方位は、東（N84° E）である。墓室の形状は、残存部からみると横長の長方形であったと考えられる。墓室の幅が2.30m、奥行きが1.86mであった。棚は奥に一段と多少の段差をもって右棚が一段確認された。墓室の形状から判断すると、おそらく左右対称に左棚もあったと考えられる。墓室の天井は残存していないため、高さは不明である。墓口付近の墓前面部および墓庭については、周辺の地形が削平および崩落しているため詳細は不明である。



第39図 057号墓遺構図

墓室の棚およびシルヒラシからは多数の蔵骨器が出土した。出土状態からは、崩落の影響か一部が破損していたり、傾いていたりする様子が確認されたが、蔵骨器の位置については概ね安置された状態に近いと思われるかたちで検出された。蔵骨器は、墓室奥壁に石製の家形が安置され、右棚とシルヒラシ部分には甕形蔵骨器が多く検出された。

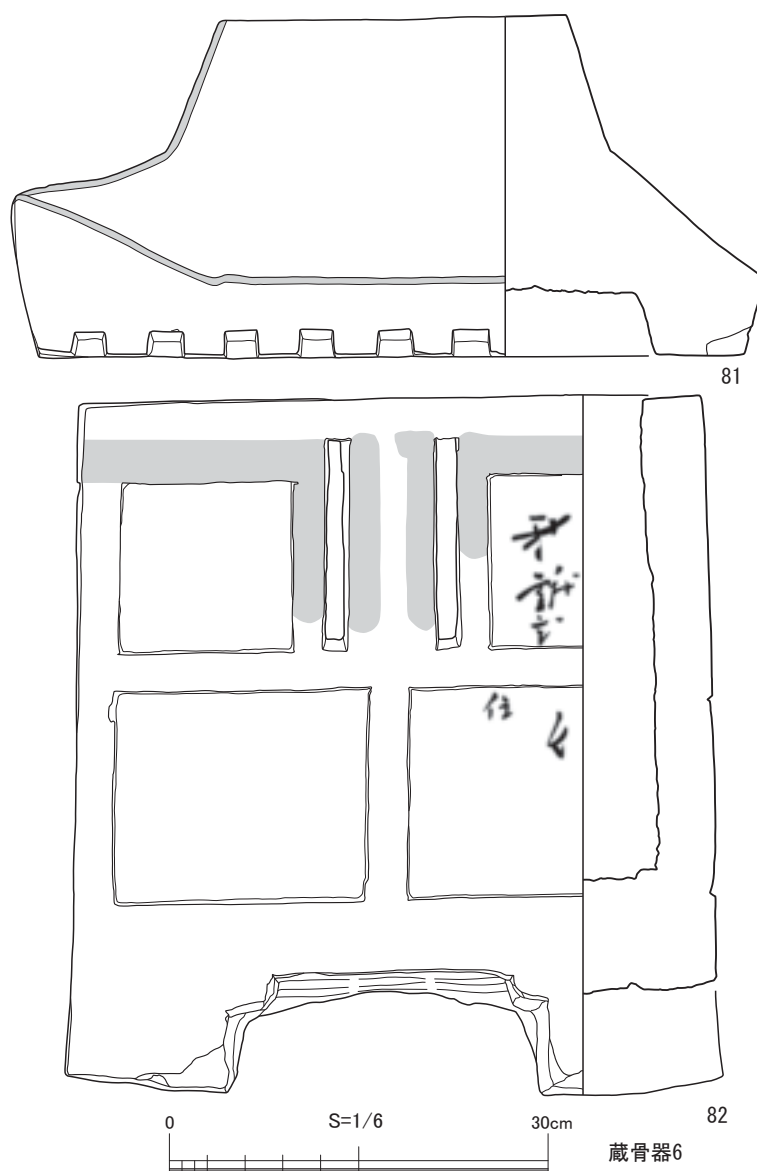
057号墓の詳細な造営年代および使用年代は明らかではないが、石製の家形蔵骨器やボージャー形、マンガン釉甕形といった各種蔵骨器が出土していることや、銘書から確認できたものでは蔵骨器1の蓋から確認された「康熙四十年・・・肉みかき候」（康熙40年＝1701年）が最も古く、それ以外にも「乾隆」「嘉慶」「道光」「光緒」などの年号がみられることから、18世紀初めから19世紀中頃にかけて洗骨された被葬者が葬られていることがわかる。この時期に使用された墓であると考えられるが、墓の左半分が崩落しているため、年代の上限や下限についての詳細は不明である。埋没時期については周辺の地形の崩落状況などから考えて、沖縄戦時に埋没した可能性が高い。

（2）遺物（第40～41図）

057号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。また、蔵骨器の詳細は、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細は、第5章・第6章を参照頂きたい。

057号墓からは、家形2点、甕形11点、転用2点の計15点が出土した。家形は石製で、甕形はボージャー形、マンガン釉甕形、ボージャー形の身と転用蓋のセットがあり、転用蔵骨器は水甕を身として転用したものである。出土状態などから蓋と身のセット関係については、概ね把握することができた。

蔵骨器6（第40図81・82）は、サンゴ石製の家形蔵骨器である。蓋（第40図81）は入母屋形を模っている。大棟、降棟、隅棟部分を縁取るように赤色で彩色するが、退色により薄くなっている。外面は丁寧に仕上げられ器面は滑らかになるが、内面はノミ痕が顕著に残る。身（第40図82）は、中央上側に縦位のマドを2つあける。マドの左右と下位に四角形に浅い掘り込みを入れ、その周



第40図 057号墓出土遺物 1

りを赤で彩色する。また、側面にも掘り込みを入れ、周りを赤で彩色する。背面は無文になる。内面は蓋と同様に成形時のノミ痕が残る。四角い掘り込み部には、銘書や彩色による文様が描かれていた痕跡があるが、退色しているため文字および文様を読み取ることはできなかった。

第41図83～88は、ボージャー形である。蔵骨器10の蓋（第41図83）は、宝珠形のつまみがつき、つまみ台はヘラで削り出して成形される。つまみ台の直下は回転ヘラ削りの跡がみられるが、全体的には丁寧なナデ調整をしている。外面には櫛描波状文を巡らせ、内面は回転ヘラ削りの後にナデ調整をするが、ややヘラの痕が残る。蓋は身から滑り落ちた状態で検出された。身（第41図84）は口縁部が玉縁状になり、内傾する。マド枠の上の底は、中央が指で押し上げられて唐破風のようなになる。頸部横帯は2本廻らされ、マド枠と頸部横帯の間に窯印が見られる。胴部には、調整時の指ナデ痕が残る。内面に漆喰が付着している箇所があり、外面の同じ部位に漆喰が剥がれた痕が見られるため、ひび割れた箇所を補修して使用したと考えられる。胎土は他のボージャーと比べて暗い色を呈する。口唇部にはサンゴの目痕が付くが、今回の調査で得られた資料でサンゴの目痕が付くのはこの1点のみである。安里分類（2006）では、蓋はⅡ式（1680～1750年代）、身はⅢ式（1700～1800年代）であることから1700～1750年代に相当する資料である。蓋裏に康熙40（1701）年の銘書がある。

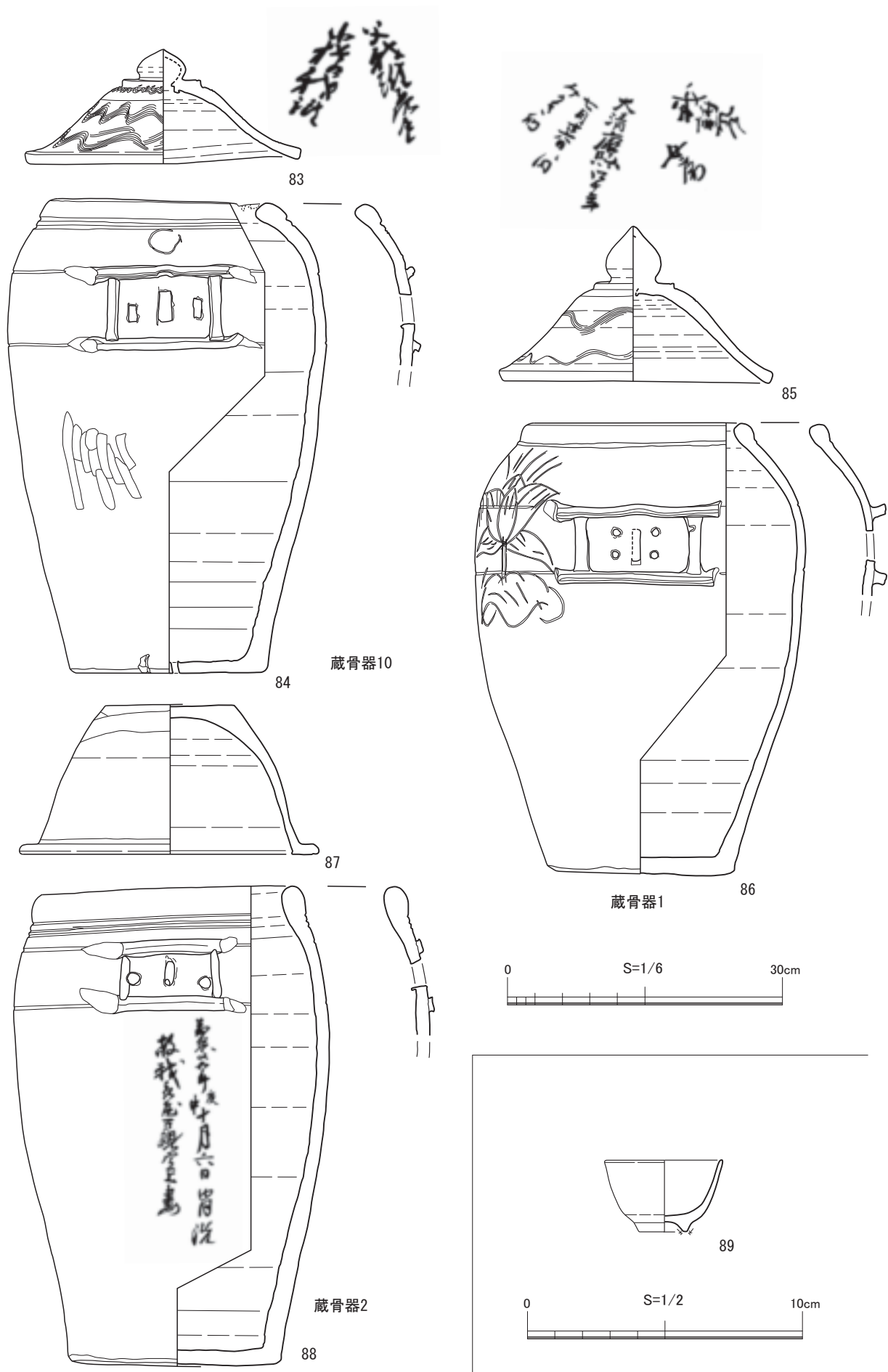
蔵骨器1の蓋（第41図85）は、丁寧に成形された宝珠形のつまみがつく資料である。つまみ台はヘラによる削り出しで、端部は平坦に成形される。外面に櫛描による沈線波状文をめぐらせる。内外面ともに丁寧なナデ調整が見られ器面は滑らかである。同資料は身から滑り落ち、蔵骨器10の身の上より検出されたが、蔵骨器10の蓋は第41図83であると思われることや、出土状況や銘書の情報などから第41図85を蔵骨器1の蓋と判断した。身（第41図86）は口縁部が玉縁状になり、内傾する。器面は丁寧に調整される。マド枠は平葎形で丁寧につくられ、マドの左右には蓮華文が描かれる。頸部横帯は強く2本引かれて突帯状になる。器面は丁寧に調整される。安里分類（2006）では、蓋はⅡ式（1680～1750年代）、身はⅡ式（1680～1740年代）で、1680～1740年代の資料である。

蔵骨器2（第41図87・88）は、ボージャー形の身に、壺屋焼の荒焼の捏鉢が蓋としてかぶせられている。蓋（第41図87）は、口折れの鉢を鐳付きの蓋のように使用している。口唇部は平坦に成形される。ロクロ成形で、底部はヘラ削り調整の痕が明瞭に残るが、全体的には丁寧な調整である。身（第41図86）は、口縁部が玉縁状になる器形で、頸部はやや直口し長めである。全体的に丁寧に調整される。身は安里分類（2006）のⅣ式（1720～1820年代）の資料である。また、身に嘉慶5（1800）年洗骨の銘書がある。057号墓では、ボージャー形の身に鉢を蓋として転用しているものが他に2点が確認された。

図化した蔵骨器以外にも、ボージャー形、マンガン釉甕形、転用蔵骨器が得られている。マンガン釉甕形には、身の特徴から安里編年の第Ⅲ期（1810～1850年代）の資料が1点、第Ⅳ期（1850～1890年代）の資料が1点ある。そのほか、身の底部のみの資料1点と、蓋の胴体部のみの資料が1点あるが年代については不明である。また、転用蔵骨器の身が2点あり、沖縄産陶器の水甕1点と、サイズは一回り小さいが009号墓出土蔵骨器3（第18図42）と類似する壺1点が出土している。

057号墓からは副葬品と思われる遺物が数点出土している。そのうち比較的残存状況の良い以下の1点について図化した。

第41図89は、沖縄産施釉陶器の小杯である。素地は白色で、全面に透明釉が施される。法量は口径4.30cm、底径1.75cm、器高2.60cmである。畳付に目砂の付着が認められる。蔵骨器3内から検出された。



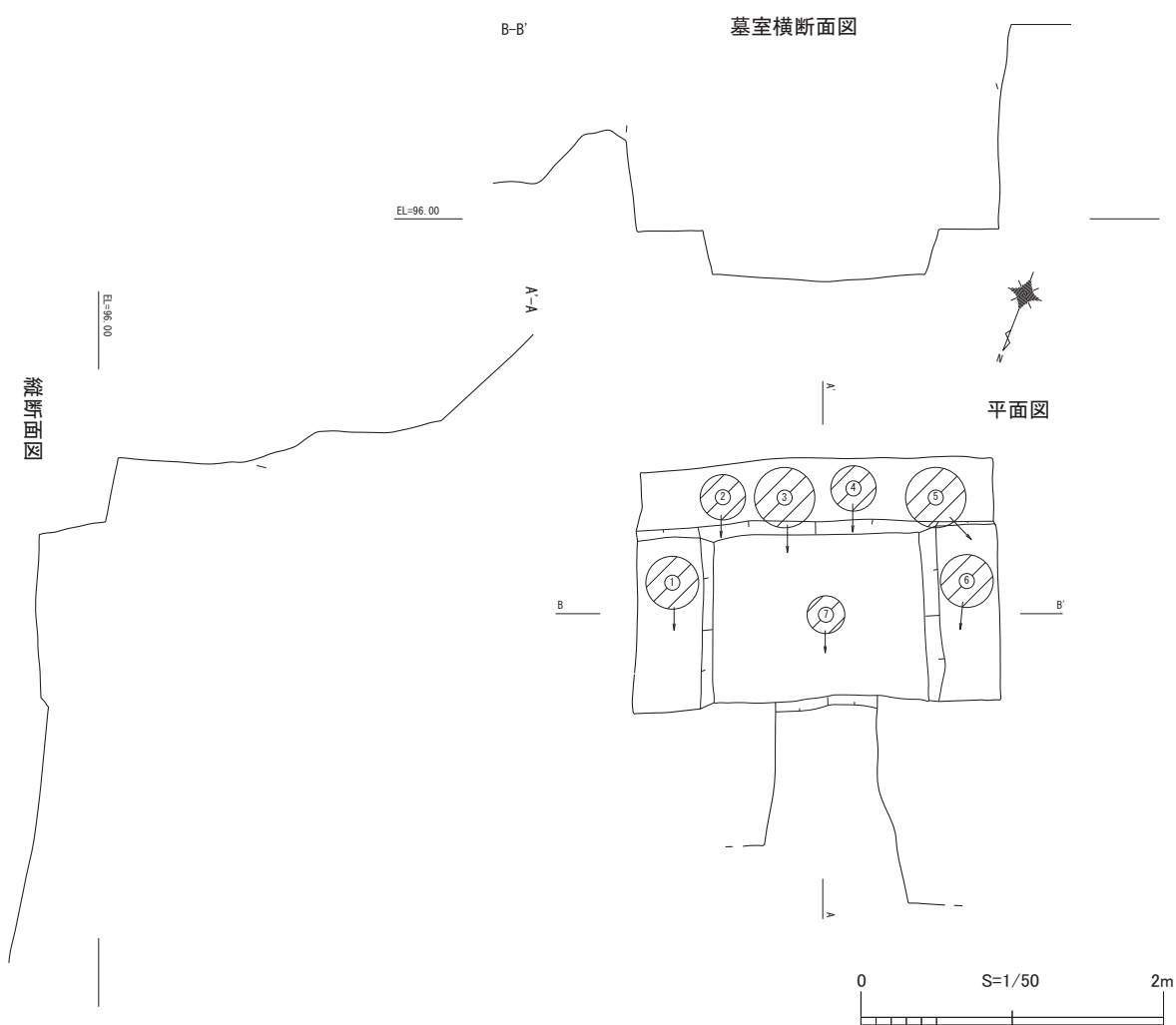
第41图 057号墓出土遗物 2

第12節 058号墓

(1) 遺構 (第42図)

058号墓は、丘陵北側裾部の北側端に位置する横穴式の掘込墓である（第7図）。標高約95～98m付近と周辺の墓より低い箇所に造られており、西側には059号墓が隣接する。058号墓は天井が崩落して埋没した墓で、埋土を除去したところ墓室より蔵骨器が出土した。墓口方位は、北北西（N21° W）である。墓室の形状は横長の長方形で幅が2.39m、奥行きが1.58mで、墓室には棚を安置するための棚が1段造られている。棚の高さは約40cmである。また、奥棚が高く造られ、多少の段差をつけて左右の棚が造られている。墓室の天井は残存していないため、高さは不明である。墓室から墓庭にかけては羨道が造られるが、墓庭は丘陵の裾部が削られており形状は不明である。

墓室の棚およびシルヒラシから7点の蔵骨器が出土した。奥棚に4点、各左右棚に1点、シルヒラシのほぼ中央に1点である。シルヒラシから出土した蔵骨器1点を除いて6点は棚に底部がついた状態で出土したため、ほぼ安置された状態を保ったものと考えられる。なお、出土した蔵骨器は全てマンガン釉甕形であった。



第42図 058号墓遺構図

058号墓の詳細な造営年代および使用年代は明らかではないが、出土した蔵骨器が全てマンガン釉甕形であることや、銘書は確認できたものでは蔵骨器5の身の「道光十二年・・・死同二十三年・・・洗骨」（道光23年＝1843年）が最も古く、「咸豊」「同治」「明治」の年号も確認される。最も新しいものは「明治廿五年・・・洗骨」（明治25年＝1892）で、これ以降の銘書は確認されていない。このことから、19世紀中頃から末にかけて使用された墓であると考えられる。埋没年代については、明治中頃以降であると考えられるが、詳細は不明である。

（2）遺物（第43図）

058号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。また、蔵骨器の詳細は、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細は、第5章と第6章を参照頂きたい。

058号墓から出土した蔵骨器は全てマンガン釉掛甕形である。合計7点得られ、そのうち3点を図化した。蓋と身のセット関係は、概ね把握することができた。

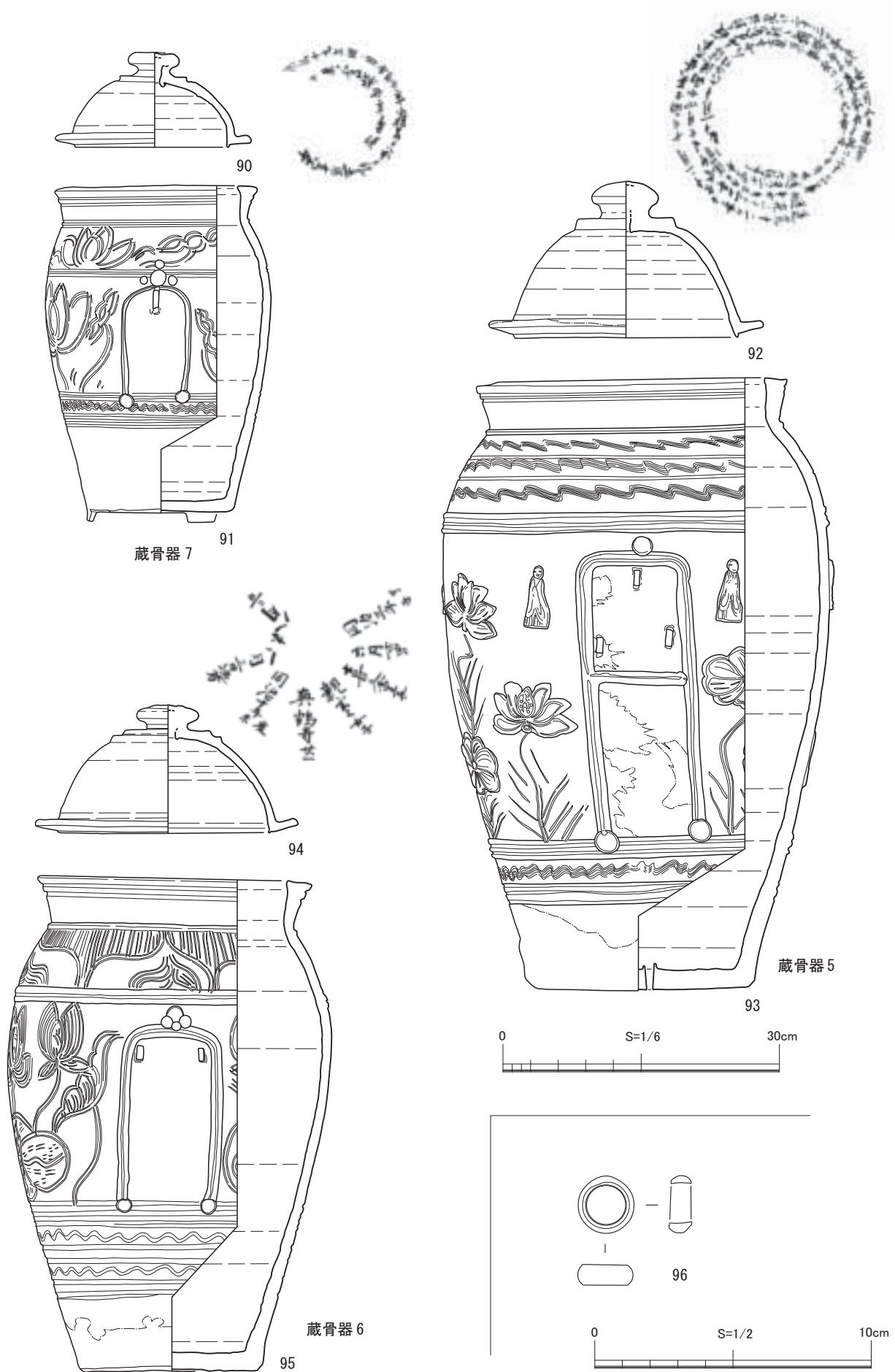
蔵骨器7の蓋（第43図90）はつまみが扁平形である。つまみの頂部が窪み、中央に孔があく。つまみ台はヘラによる削り出しで成形され、鐔は反り、鐔の端部は丸く成形される。鐔内外面ともにナデ調整を行うが、回転痕が残る。かえりは成形が雑である。身（第43図91）は、口縁部が外反する器形で、口唇部は平坦になりやや外傾する。底部は角を面取りしたあとに長方形の脚が3つ付けられる。内面はやや明瞭に回転成形の痕が見られる。マンガン釉が器面全体に施釉されるが、口唇部は露胎する。安里編年の第Ⅴ期（1900～1920年代）に相当する資料である。蔵骨器内には骨は入っておらず、代わりに小石が入れられていた。

蔵骨器5の蓋（第43図92）のつまみは饅頭形で、つまみ台はヘラで削り出してつくられる。鐔の端部は丸く、かえりの成形は丁寧である。上部には回転ヘラ削りによる調整の痕が見られる。マンガン釉を施釉した際の刷毛目が残る。身（第43図93）は、口縁部が外反する器形である。口唇部は平坦に成形され、中央がわずかに窪む。屋門は貼り付けのアーチ形で柱貫が付く。肩部文様帯は、櫛描波状文と沈線を組み合わせたものを廻らせている。胴部文様帯には蓮華文と法師を貼り付けるが、蓮華文の茎は沈線である。内外面ともにロクロ成形の後にナデ調整を施す。マンガン釉を全体に施釉するが、口唇部と胴下部は露胎し、屋門の銘書面は釉葉が斑に掛かる。安里編年のⅢ期（1810～1850年代）の資料である。蓋裏に、道光23（1843）年洗骨の銘書がある。

蔵骨器6の蓋（第43図94）のつまみは扁平形で、頂部は調整が徹底されていない。つまみ台は削り出しで成形されるが、角はやや丸味を持つ。かえりは小さい。マンガン釉を施釉する際の刷毛目が残る。身（第43図95）は、口縁部が外反する器形で、口唇部は平坦に成形されるが中央がややくぼむ。屋門は貼り付けのアーチ形で、文様は沈線で描かれる。内外面ともに丁寧に調整が施され滑らかである。マンガン釉が全面に掛けられるが、口唇部と胴下部は露胎する。安里編年の第Ⅳ～Ⅴ期（1850～1920年代）の資料である。蓋裏に、同治10（1871）年洗骨の銘書がある。図化した資料以外には、安里編年の第Ⅲ～Ⅳ期（1810～1890年代）の資料が1点、第Ⅳ～Ⅴ期（1850～1920年代）の資料が1点、第Ⅴ期（1900～1920年代）の資料が2点ある。

058号墓からは、上記以外にも遺物が出土している。そのうちの指輪1点について図化した。

第43図96は、プラスチック製の指輪である。内径は綺麗な円を描くが、外径の一部は歪み、変形している。材質、形状から近現代の製造と考えられる。法量は、直径2.0cm、内径1.4cm、厚さ0.25cm、幅0.8～0.86cm、現重量3.79gである。蔵骨器5内から検出された。



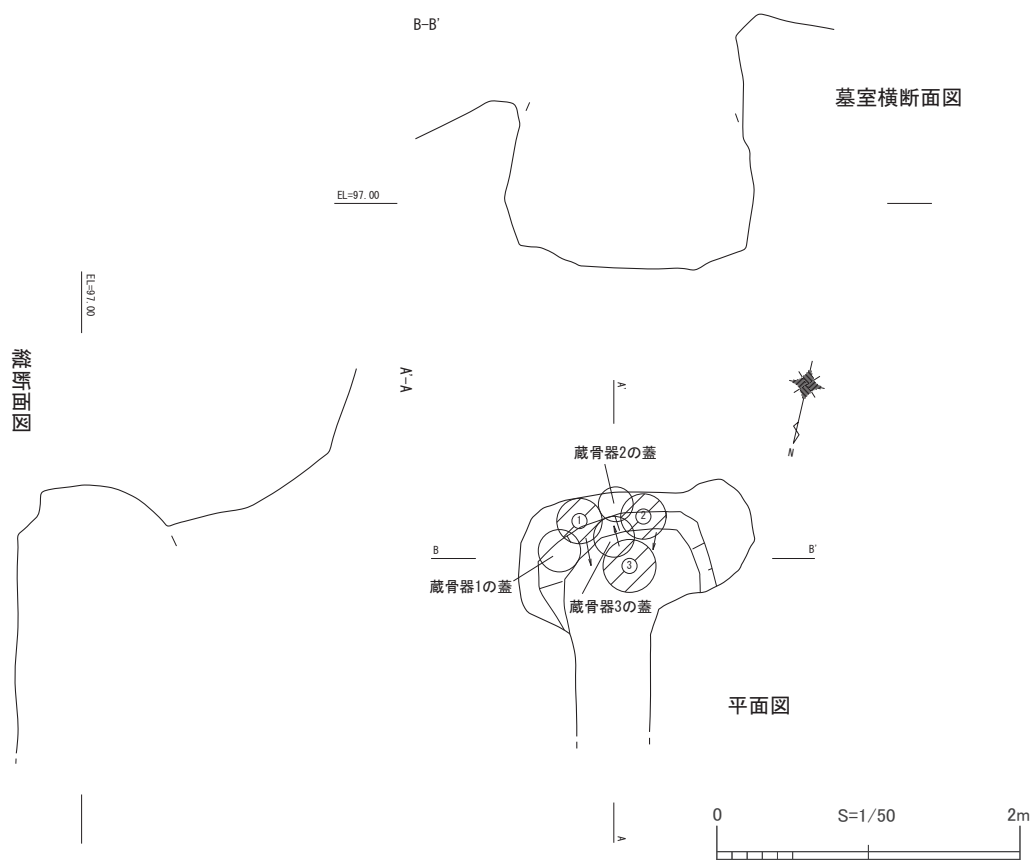
第43图 058号墓出土遗物

第13節 059号墓

(1) 遺構 (第44図)

059号墓は、丘陵北側裾部の北側端に位置する横穴式の掘込墓である(第7図)。標高約95～98m付近と周辺の墓より低い箇所には造られており、東側には058号墓が隣接する。059号墓は天井が崩落して埋没した墓で、埋土を除去したところ墓室より蔵骨器が出土した。墓口方位は、北北西(N12°W)である。墓室の形状は、横長の不定形な楕円形状を呈す。墓室の幅が1.24m、奥行きが0.95mで、墓室には蔵骨器を安置するためのわずかな段差が設けられる。墓室の天井は残存していないため、高さは不明である。墓室から墓庭にかけて羨道が造られる。墓庭は丘陵の裾部が削平されており形状は不明である。

墓室の棚およびシルヒラシから3点の蔵骨器が出土した。蔵骨器の身は直立した状態であったが、蓋はすべて床面に落ちている状態で出土した。蔵骨器の底面の下には、蔵骨器を据えるための台石が置かれていた。出土した蔵骨器の種類は、全てマンガン釉甕形であった。059号墓の詳細な造営年代および使用年代は明らかではないが、出土した蔵骨器が全てマンガン釉甕形であることや、蔵骨器2の蓋から「嘉慶貳拾五年・・・洗骨」(嘉慶25年=1820年)の銘書が確認されたことから、同墓は19世紀初め頃には機能していたと考えられる。遺構の規模や蔵骨器の数から小規模な家族墓であると考えられる。埋没年代については、詳細は不明である。



第44図 059号墓遺構図

(2) 遺物 (第45図)

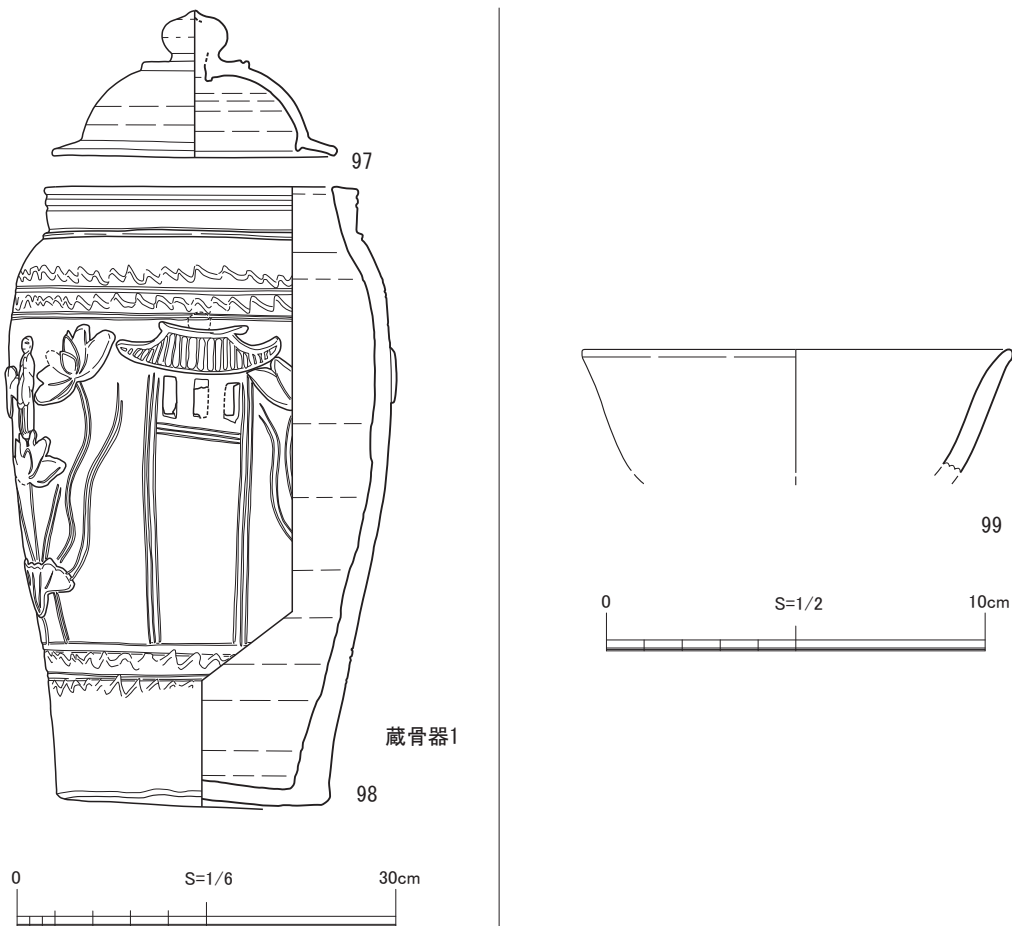
059号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。また、蔵骨器の詳細は、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細は、第5章・第6章を参照頂きたい。

059号墓から出土した蔵骨器は全てマンガン釉甕形である。合計3点得られ、そのうち特徴的な1点を図化した。蓋が身から落ちていたが、出土時の状況などからセット関係は把握できた。

蔵骨器1 (第45図97・98) は、マンガン釉甕形の蔵骨器である。蓋 (第45図97) のつまみは宝珠形で、つまみ台はヘラで削り出して成形される。鏝は下向きにつくられ、焼成不良により一部にゆがみが見られる。かえりはやや丁寧な調整がされる。身 (第45図98) は、口縁部が直口する器形で、口唇部は平坦に成形される。屋門は貼り付けの瓦屋形で、柱と柱貫は沈線で描かれる。屋門の頂部には玉飾が剥離した痕が見られる。文様は、蓮華文と法師が貼り付けられ、蓮華文の茎は沈線で描かれる。内外面ともに丁寧なナデ調整がみられる。マンガン釉が全体に掛けられるが、口唇部と屋門の銘書面が露胎する。器形から安里編年の第Ⅲ期 (1810～1850年代) の資料であると考えられる。図化した以外の資料2点は、安里分類第Ⅲ期の資料で、うち1点の蓋の銘書に嘉慶25 (1820) 年洗骨とある。

059号墓からは蔵骨器以外に数点の遺物が出土している。そのうち以下の1点について図化した。

第45図99は、沖縄産施釉陶器の碗である。素地は淡黄で、透明釉を施すが無文である。破片のみであるが、推定口径は11.32cmである。墓室内からの出土である。



第45図 059号墓出土遺物

第14節 062号墓

(1) 遺構 (第46図)

062号墓は、丘陵北側の中央頂部付近に位置する横穴式の掘込墓である(第7図)。標高約101～103m付近と周辺に造られた墓と比較して高い地点に造られている。062号墓は天井が崩落し埋没した墓で、埋土を除去したところ墓室より多数の蔵骨器が出土した。墓口方位は、西北西(N71°W)である。墓室の形状は、概ね方形で棚は1番棚が奥壁側に1段と、2番棚がコの字状に造られる。墓室の幅は2.78m、奥行きは2.49mである。墓室の天井は残存していないため高さは不明である。墓室から墓庭にかけては約1.9mの比較的長い羨道が造られ、閉塞石と思われる石が一部残存していた。

墓室の棚から13点の蔵骨器が出土した。蔵骨器の数点は傾いていたが、ほとんどの蔵骨器は底面が遺構に着いた状態であり、蓋の幾つかは身から落ちた状態で出土したものの、ほぼ墓室に安置された位置を保った状態で出土した。1番棚の中央に荒焼御殿形の蔵骨器が置かれ、それ以外は甕形でボージャー形とマンガン釉甕形およびマンガン釉底付甕形の蔵骨器であった。

062号墓の詳細な造営年代および使用年代は明らかではないが、数点のボージャー形を除いてマンガン釉甕形が多数を占めることや、銘書は確認できたもので蔵骨器2の蓋の「乾隆二十三年・・・洗骨」(乾隆23年=1758年)が最も古く、その後の「嘉慶」「道光」「咸豊」「光緒」の年号もみられることから、18世紀中頃から19世紀中頃まで使用された墓であると考えられる。明治・大正期のものがみられないことから、その時期にはすでに使用されていなかった可能性も想定される。

また、墓庭の袖部に長方形の掘り込み遺構が確認された(069号墓)。遺構の形状や位置から062号墓の脇墓や一次葬のための墓である可能性が想定されるが、その性格は不明である。

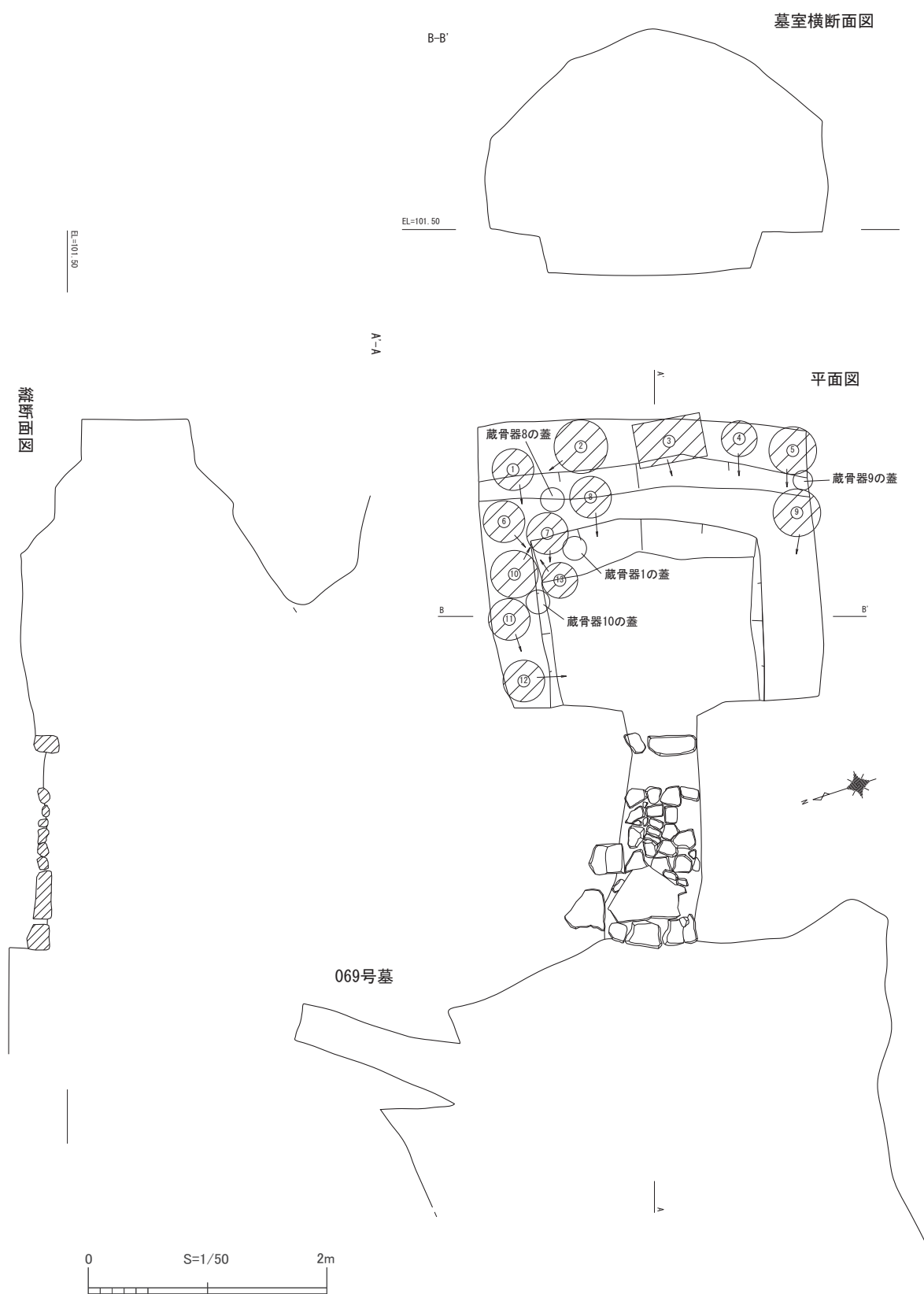
(2) 遺物 (第47～50図)

062号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。また、蔵骨器の詳細は、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細は、第5章・第6章を参照頂きたい。

062号墓からは、荒焼御殿形1点、甕形13点が得られた。甕形はボージャー形、マンガン釉甕形、マンガン釉底付甕形などが得られている。そのうちの特徴的な9点を図化した。062号墓の蔵骨器の蓋と身のセット関係の把握については、出土状況や形態などから概ね判断を行ったが、後述するとおり、銘書の書き足し例などが数例みられることなどから、後世に墓室内の見直しなどが行われたと考えられる。その際に蔵骨器の置き換えなどもあった可能性も想定され、蓋と身のセット関係の把握が難しいものもあった。以下に各資料の概要を述べる。

第47図の2点は、ボージャー形の蔵骨器である。蔵骨器1の蓋(第47図100)はつまみ台のないタイプで、鋸端部は平坦に成形される。外面上部は回転ヘラ削りの痕が見られ、内外面にロクロ成形の痕が残る。焼成不良により一部が反る。身(第47図101)は口縁部が玉縁状になり内傾する。マド枠は平葺形でマド枠の延長線上の正面からみて、左側面に蓮華文を沈線で描く。頸部横帯は強めに2本引かれて突帯状になる。蓋は安里分類(2006)のV式(1740～1770年代)、身はⅡ式(1680～1740年代)であることから、1740年代前後の資料であると考えられる。

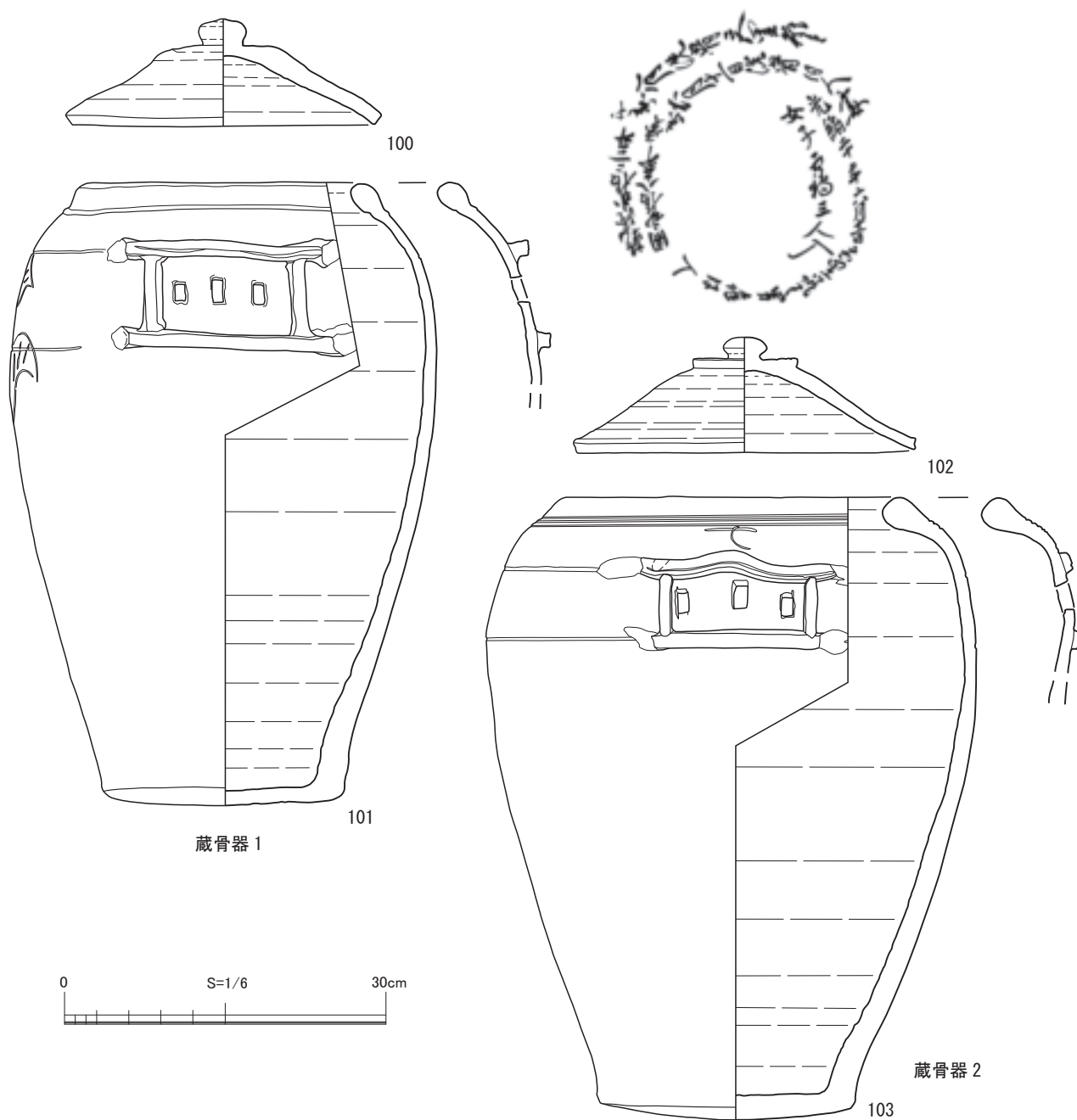
蔵骨器2の蓋(第47図102)は、つまみ台をヘラで削り出し、頂部には扁平形の小さなつまみが付く。鋸端部は中央が窪み、外面はヘラ削りとナデ調整が見られる。焼成不良のため一部が反る。身(第47図103)は口縁部が玉縁状で内傾するが、他のボージャー形に比べると頸部横帯から折れるため、



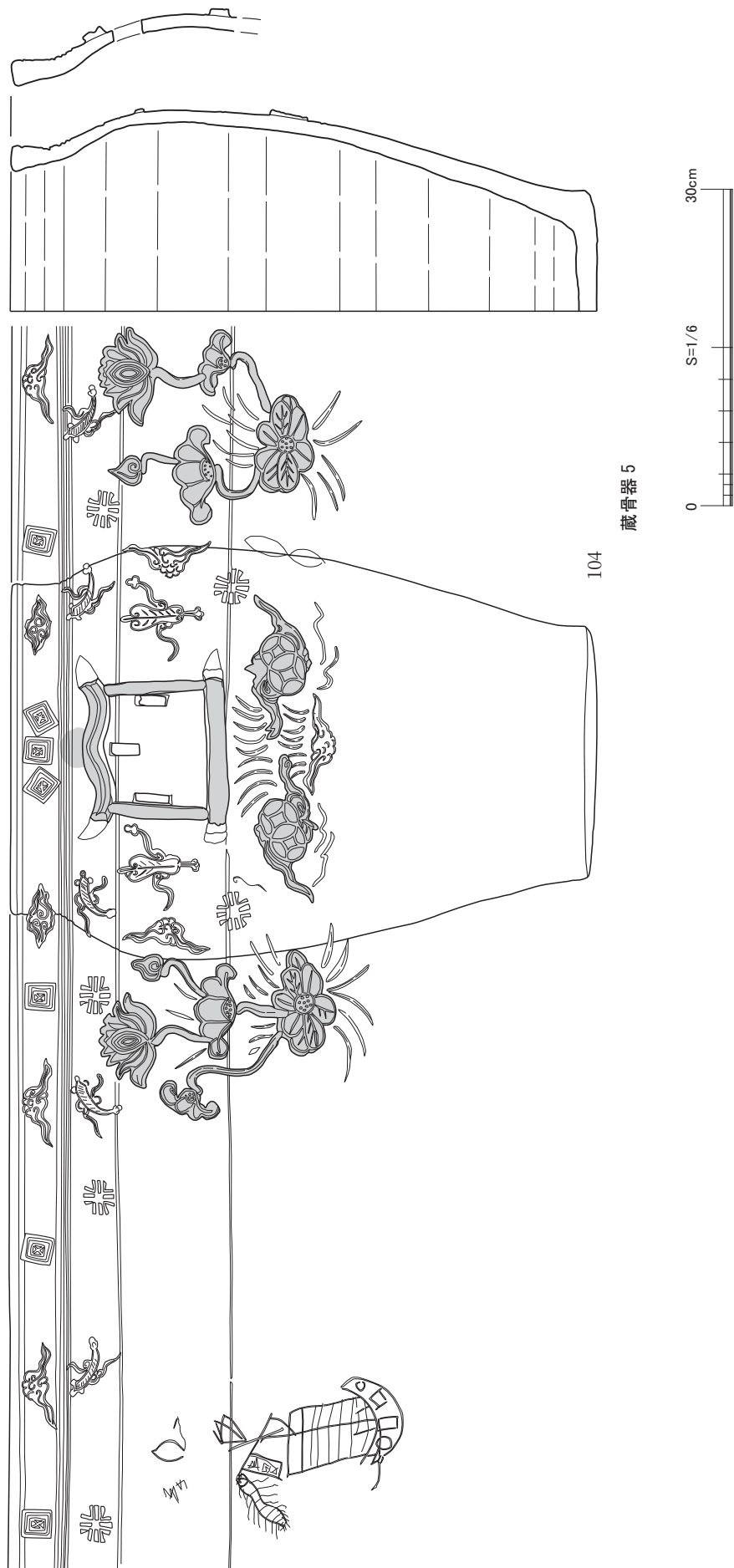
第46図 062号墓遺構図

急なカーブを描く。マド枠は貼り付けの唐破風形で、上の庇が厚くつくられ下の庇と左右の柱は一段低くなる。底面が焼成不良のため膨れており不安定である。蓋は安里分類（2006）のIV式（1740～1750年代）、身はV式（1720～1780年代）の資料である。蓋には乾隆23（1758）年洗骨の銘書がある。

蔵骨器5（第48図104）は、頸部が直口する甕形蔵骨器の身である。器面全体は無釉の焼き締めであるが、マドを含め貼り付け部分のみにマンガンで彩色が施されるのが特徴である。口唇部の形状は平坦でわずかに内側に傾く。口唇部付近に横帯がめぐらされるが、上下のマド枠に沿うように肩部横帯が1条ずつ廻る点は、ボージャ形に類似する。マド枠は唐破風形で、粘土で貼り付けた後にマンガン釉で彩色し、頂部の玉飾もマンガン釉で描かれる。肩部横帯がマド枠の中まで引かれている。器



第47図 062号墓出土遺物 1



第 48 图 062 号墓出土遗物 2

面調整は内外面ともにロクロ成形後、丁寧にナデ消される。外面胴下部は縦位と横位にヘラ削りによる調整の痕がみられる。文様は、口縁部から胴部にかけて数種類の印刻と貼り付けで施文される。マド枠の左右の蓮華文とマド枠下の雲文は貼り付けた後にマンガンで彩色され、マド枠横の唐団扇形の印刻にも薄く同様の彩色が施される。また特筆されるのは背面やや左に船が沈線で描かれることである。船の形状やムカデ旗が表現されていることから、進貢船であると考えられる（写真1）。

同資料の形態はボージャー形に類似しており、安里分類（2006）身のⅦ式の特徴である甕形的口縁を有することから、当該期にあたる18世紀末から19世紀初めの資料であると考えられる。同資料にはマンガン釉甕形の蓋が上に乗った状態で出土したが、サイズや形態および年代的な特徴が異なることなどから後世に入れ替えが行われた可能性が高い。

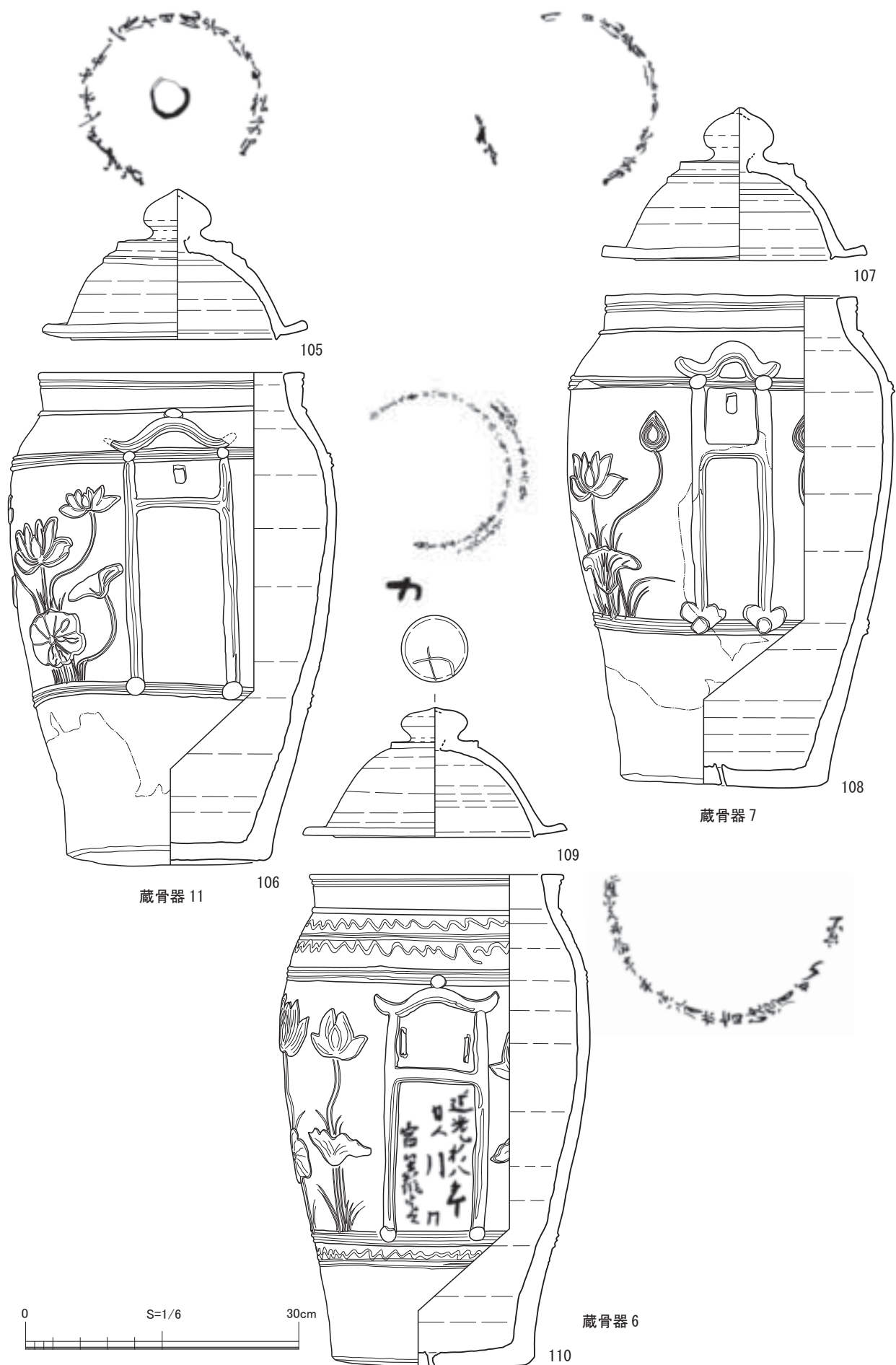
第49図105～第50図114はマンガン釉甕形である。蔵骨器11の蓋（第49図105）は、宝珠形のつまみで、つまみ台はヘラで削り出して2段に成形される。鏝は上方へ反り、端部は丸く成形される。宝珠は丁寧に成形されるが、かえりはやや雑につくられる。内面はロクロ成形の痕が見られる。蓋裏に墨書による銘書があるが、つまみ接合部の孔の周りを丸印で囲っている。身（第49図106）は、口縁部が直口する器形で、口唇部は平坦に成形される。屋門は貼り付けの唐破風形で、玉飾と柱貫が付けられる。肩部と胴下部文様帯は無文で、胴部文様帯には蓮華文を貼り付ける。内外面ともにナデ調整がされている。マンガン釉がほぼ全面に掛けられるが、口唇部と胴下部、屋門の銘書面は露胎する。また、マンガン釉を掛けた際の刷毛目が残る。安里編年の第Ⅲ期（1810～1850年代）の資料である。蓋に嘉慶17（1812）年洗骨の銘書がある。

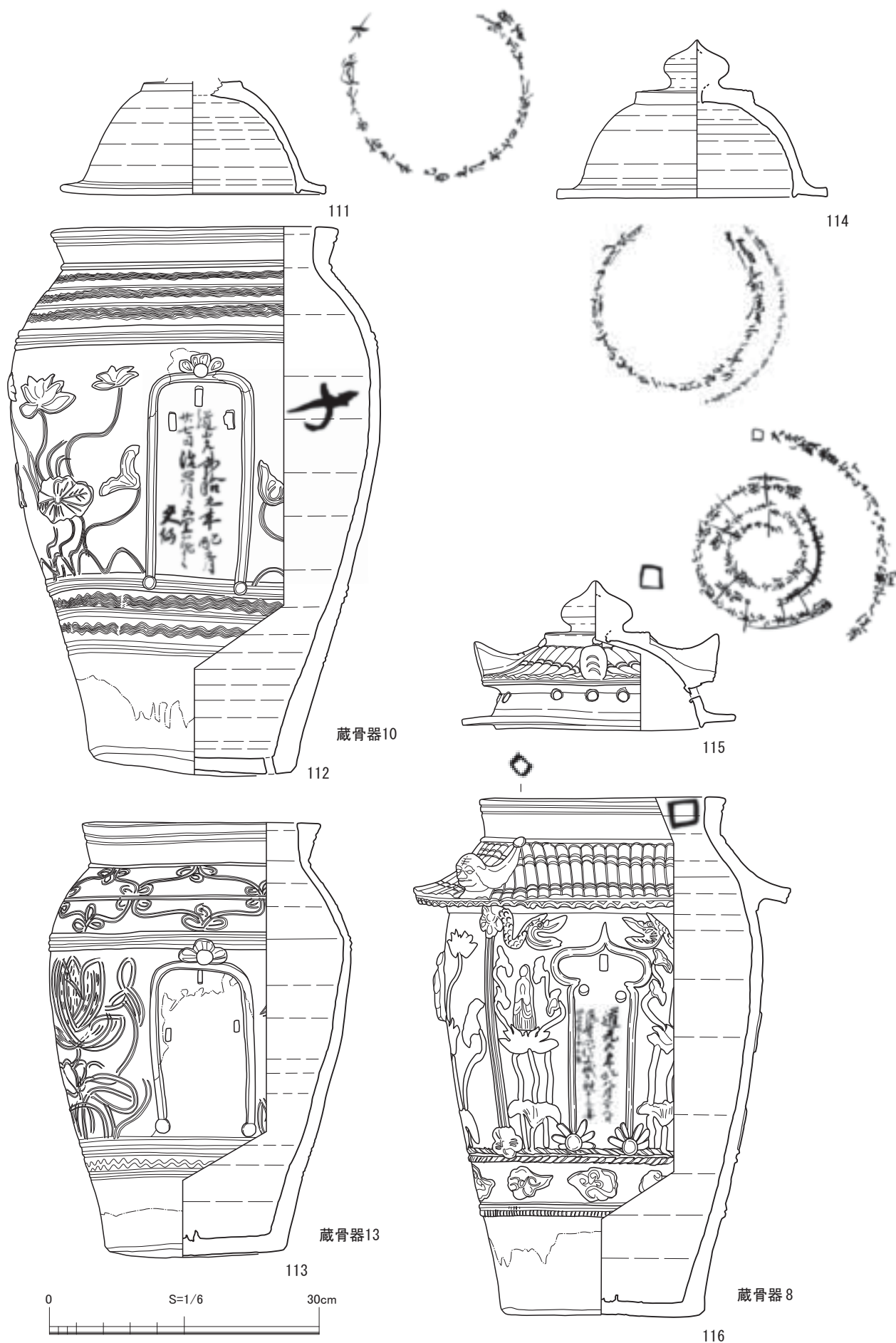
蔵骨器7の蓋（第49図107）は宝珠形のつまみで、つまみ台はヘラで削り出して2段に成形される。鏝は上へ反り、端部は丸く成形される。宝珠は丁寧に成形されるが、かえりはやや雑に作られる。内面にはロクロ成形の痕が見られる。身（第49図108）は、口縁部が直口する器形で、口唇部は平坦に成形される。屋門は貼り付けの唐破風形で、頂部に玉飾はつかない。柱の根元に花卉に類似した飾りが付けられる。肩部と胴下部文様帯は無文で、胴部文様帯には蓮華文を貼り付ける。マンガン釉がほぼ全面に掛けられるが、口唇部と胴下部、屋門の銘書面は露胎する。マンガン釉を掛けた際のものと思われる刷毛目が残る。安里編年の第Ⅱ期（1770～1800年代）の資料である。銘書は退色し不鮮明な部分があるが、嘉慶年間（1796～1820年）である事が読み取れる。

蔵骨器6の蓋（第49図109）は扁平形のつまみで、つまみ台はヘラで削り出して成形される。接合部孔は粘土が削り取られる。かえりの成形はやや雑である。身（第49図110）は、口縁部がわずかに外反する器形で、口唇部は平坦に成形される。屋門は貼り付けの唐破風形で、頂部に玉飾が付けられる。肩部と胴下部文様帯に沈線の波状文と圈線を廻らせ、胴部文様帯は蓮華文が貼り付けられる。内外面ともに回転ヘラ削り後にナデ消され、外面胴下部はヘラ削り痕が残る。器面全体にマンガン釉が掛けられるが、口唇部と胴下部、屋門の銘書面は露胎する。安里編年の第Ⅲ期（1810～1850年代）の資料である。蓋と身の銘書が違っており、蓋には同治2（1863）年洗骨とあり、身には道光18



写真1 062号墓蔵骨器5の身裏面の線彫りで描かれた進貢船





第50图 062号墓出土遗物4

(1838) 年の銘書がある。出土状況では、蓋が身に乗っている状態で出土したことが確認されており、蓋と身が後世における墓室内の改変などの影響で入れ違っている可能性がある。

蔵骨器10の蓋(第50図111)は、つまみが欠失するため形状は不明である。つまみ台は削り出しによる成形で、鐳はやや下へ傾き、先端は丸くつくられる。かえりは丁寧に成形され、断面は丸くなる。内外面ともに丁寧に調整される。身(第50図112)は口縁部が外反する器形で、口唇部が平坦に成形される。屋門は貼り付けのアーチ形である。肩部と胴下部文様帯は櫛描による波状文と圈線が廻らされ、胴部文様帯には蓮華文が貼り付けられる。マンガン釉がほぼ全面に施釉されるが、口唇部、胴下部、屋門の銘書面は露胎し、胴下部は釉が流れたようになっている。内外面ともにロクロ成形の後にナデ消される。内面に窯印と思われる墨書がある。横帯2～4が突帯であることから、安里編年の第Ⅲ期(1810～1850年代)の資料である。また身と蓋には、道光29(1849)年の銘書がある。

蔵骨器13(第50図113)は、マンガン釉甕形の身である。口縁部が外反する器形で、口唇部は平坦に成形されるが、焼成不良のため一部がゆがむ。屋門は貼り付けのアーチ形である。肩部文様帯には蓮弁文と唐草文が合わさった様な文様が描かれ、胴部文様帯には蓮華文が描かれる。マンガン釉を口唇部を含むほぼ全体に施釉した後に、胴下部から下は釉が掻き取られる。また、銘書面は釉が掛けられない。内外面ともにナデ調整がみられる。横帯3が突帯で文様が沈線になることから、安里分類の第Ⅳ期(1850～1890年代)の資料である。同資料は、セット関係となる蓋が不明である。

第50図114は、マンガン釉甕形の蓋である。つまみの宝珠は丁寧に成形されており、宝珠の先端が尖る器形である。つまみ台はヘラで削り出して成形される。鐳端部は平坦だが、ナデ調整は徹底されず器面が粗くなる。かえりは断面が略三角状になる。全体的に器壁が厚くつくられる。マンガン釉が外面全体に掛けられるが、刷毛目が残りまだらになる。蓋裏に、嘉慶21(1816)年洗骨の銘書がある。墓室内の埋土中から出土した資料であるが、大きさや形状、成形の類似性などから、蔵骨器5とセット関係に当たる資料であると推測される。マンガン釉甕形は、図化した以外には安里分類の第Ⅳ～Ⅴ期(1850～1920年代)の資料が3点得られている。

蔵骨器8(第50図115・116)は、マンガン釉底付甕形である。蓋と身それぞれに底がつけられる。蓋(第50図115)は、つまみが宝珠形でつまみ台は削り出しでつくられる。鐳は平坦になり、端部は丸く成形されるが、焼成不良のため一部がゆがむ。底の上面には半裁竹管を強めに押して立体的な瓦が描かれ、4箇所の隅棟の先は楕円形で表現される。隅棟の下位には3つ1組の円形のマドがあげられる。身(第50図116)は、口縁部がわずかに外反する器形で、口唇部が平坦に成形される。屋門は貼り付けの位牌形である。肩部文様帯が底となり、瓦の施文方法は蓋と同技法だが、隅棟には獅子頭が付く。隅棟から下に延長するように縦位の区画が引かれる。胴部文様帯は屋門の両脇に蓮華に乗った法師を貼り付け、その上部には龍が貼り付けられる。背面も蓮華に乗った法師像の上部に龍を貼り付けるが、側面は蓮華文のみが貼り付けられる。横帯4は刻目突帯になり、胴下部文様帯には雲文が貼り付けられる。全体的に施釉するが、口唇部と胴下部、銘書面は露胎する。口縁部内側と口唇部に窯印と思われる墨書がある。内外面ともにロクロ成形後、丁寧にナデ消される。また、蓋と身の両方に道光5(1825)年の銘書があるが、蓋の銘書は後世に書き足しが行われている。

図化した以外に、道光5(1825)年洗骨の銘書がある荒焼御殿形が1点出土している。

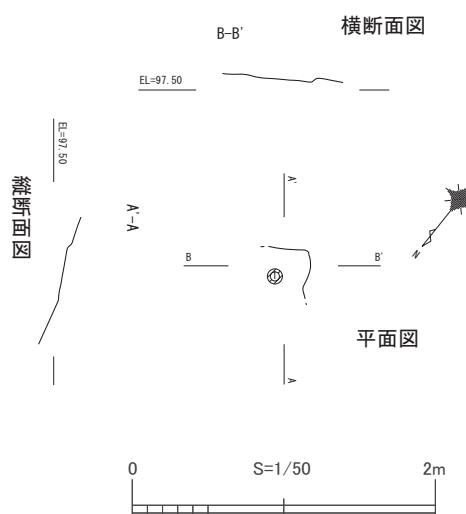
上記に述べたように、062号墓については、蓋と身の型式があわない資料が数点みられ、かつ銘書の書き直しや書き足しなども複数みられることから、後世に墓の見直しなどが行われ、その際に蔵骨器の蓋と身が入れ違った可能性が想定される。これらの銘書の詳細については第5章を参照頂きたい。

第15節 070号墓

(1) 遺構 (第51図)

070号墓は、丘陵北側の北東端に位置する小規模な掘込墓である(第7図)。053号墓の墓庭前方の斜面部を精査中に遺構と蔵骨器が検出された。遺構は標高約97.5m付近に造られている。070号墓は小規模な墓で、蔵骨器が1点安置されている状態であった。遺構が小規模でかつ残存状態が良くないため、横穴墓か土抗を掘り込んだのかは定かではない。墓口方位や、遺構の高さもしくは深さについては不明である。遺構の大きさは非常に小さく、小壺が1点置けるほどの大きさである。

蔵骨器は直立し、かつ蓋が載っていたため概ね遺構内に安置された状態であると考えられる。出土した蔵骨器は、陶器製の小壺である。070号墓の詳細な造営年代および使用年代は不明である。また、この墓は蔵骨器の小壺1個分の大きさであることから、この蔵骨器を安置するために造られた墓であり、かつ遺構の規模が極めて小規模であることから、個人墓もしくは他の墓の脇墓である可能性がある。なお、遺構の埋没年代は不明である。



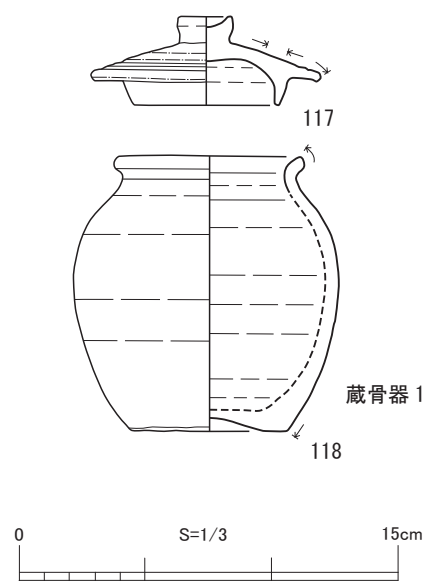
第51図 070号墓遺構図

(2) 遺物 (第52図)

070号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。また、蔵骨器の詳細は、章末の第5表を参照頂きたい。

070号墓からは、転用蔵骨器が1点得られた。蓋(第52図117)は沖縄産陶器で、いわゆるアンダーガーミと呼ばれるものである。中央が大きく窪んだつまみが付く。外面は飴釉をかけた後に蛇の目状に掻きとり、内面は露胎する。

身(第52図118)は中国南部もしくは東南アジア産と思われる小壺で、いわゆる「シャム南蛮」と呼ばれるものである。口縁部が外反し肩部から丸く張り出す器形で、最大径は胴上部にある。底面は見込みが窪む。ほぼ全面に褐色の釉が掛けられるが、口唇部は無釉になる。底面には斑に釉が掛かる。蔵骨器内には、骨は入っておらず、サンゴと貝が入れていた。



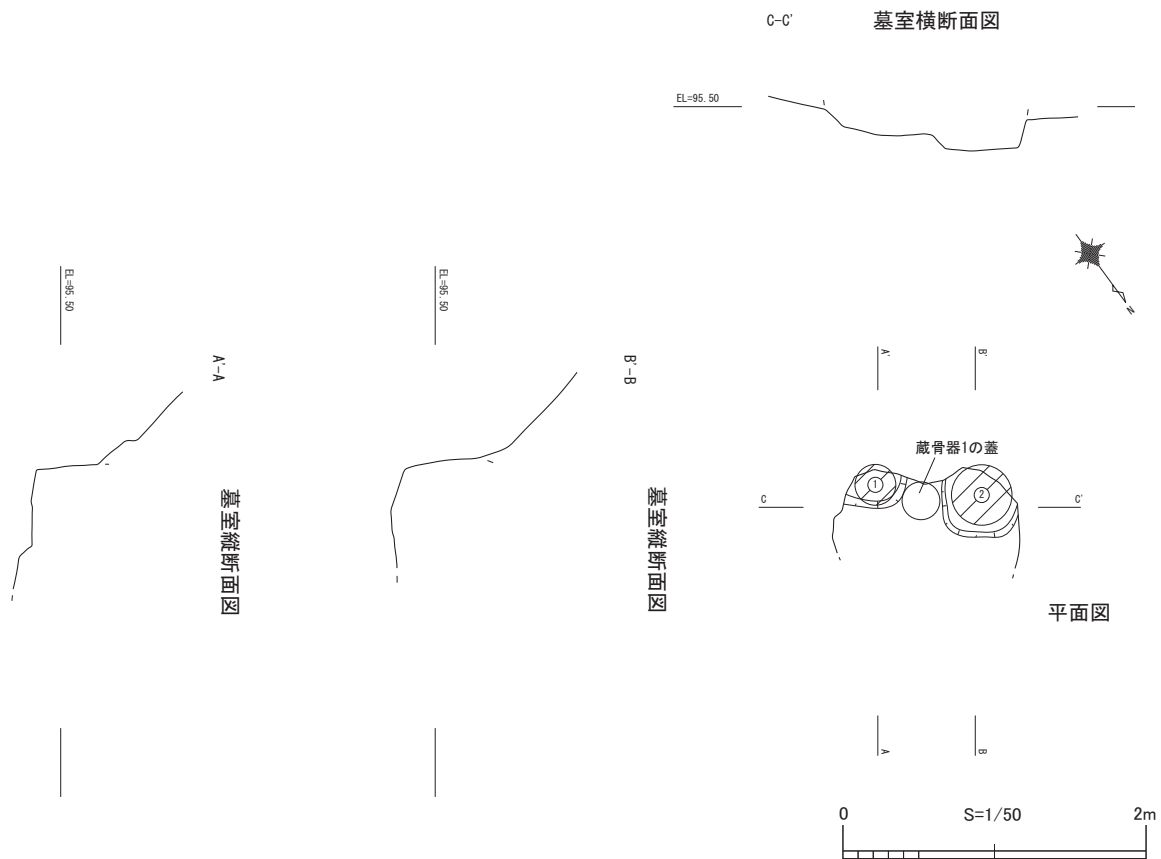
第52図 070号墓出土遺物

第16節 071号墓

(1) 遺構 (第53図)

071号墓は、丘陵北側北端の裾部に位置する横穴式の掘込墓である（第7図）。今回調査を実施した本丘陵のなかで最も低い標高約95m付近に造られている。071号墓は小規模な遺構で、埋土を除去したところ遺構中に蔵骨器2点が安置されている状態であった。遺構の状態がよくないが、残存部から推測すると、墓室の形状は平面観が概ね横長の楕円形を呈すと考えられる。また、墓口方位は不明である。墓室中には、奥壁側の2ヶ所に掘り込みがあり、その掘り込みの中に蔵骨器が据えられていた。遺構の大きさは不明瞭であるが、残存部で幅1.15m、奥行きが0.50mである。墓室の天井は残存していないため高さは不明である。検出された蔵骨器は、天井の崩落の影響を受けたと思われ、大きく破損している状況であった。

出土した蔵骨器は2点ともマンガン釉甕形であった。071号墓の詳細な造営年代および使用年代は、不明であるが、蔵骨器1の蓋にある「咸豊八年・・・洗骨」（咸豊8年＝1858年）という記載から、19世紀中頃には墓が機能していたと考えられる。遺構の規模から小規模な家族墓であると考えられる。埋没年代については不明である。



第53図 071号墓遺構図

(2) 遺物 (第54図)

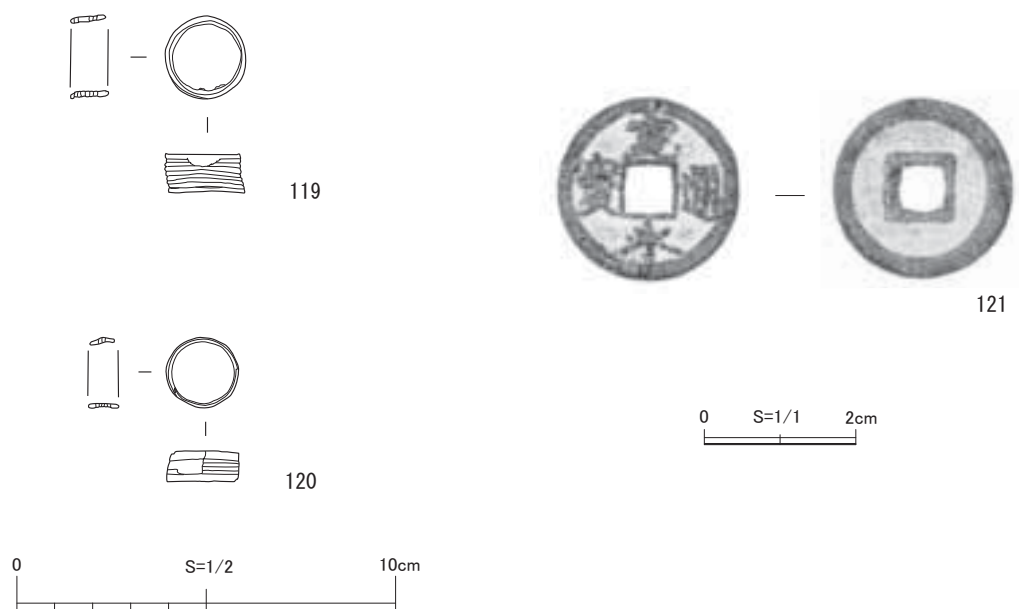
071号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第3表のとおりである。また、蔵骨器の詳細は、章末の第5表を参照頂きたい。なお、蔵骨器の銘書や人骨の詳細は、第5章と第6章を参照頂きたい。

出土した蔵骨器は、マンガン釉甕形が2点であった。出土状態などから蓋と身のセット関係は把握することができた。2点とも残存状況が良くないため、以下に記載のみの報告を行う。2点とも屋門の部分に欠失するが、突帯や文様の特征などから1点は安里分類の第Ⅲ期(1810~1850年代)の資料で、もう1点は第Ⅳ期(1850~1890年代)の資料であると考えられる。なお後者には、蓋に咸豊8(1858)年洗骨の銘書が書かれる。

071号墓からは蔵骨器以外にも副葬品と思われる遺物が数点出土している。そのうち以下の1点について図化した。

第54図119、120は銅製の指輪である。第54図119は、約1mm幅の環を9本重ねて形成している。全面に錆が付着し、輪にゆがみが生じている。法量は直径2.2cm、内径1.84cm、厚さ約0.08cm、幅約1.0cm、現重量2.3gである。第54図120は、約0.7mmの細い環を8本重ね形成する。青錆の付着が著しく、環の境目が一部不明瞭になっている。法量は直径1.9cm、内径1.55cm、厚さ約0.1cm、幅0.8cm、現重量2.02gである。上記の2点はともに蔵骨器2内から検出された。

第54図121は、寛永通宝である。背文はみられない。一部錆で不明瞭だが、古寛永と思われる。法量は、輪外径23.8mm、輪内径19.9mm、郭外幅7.5mm、郭内幅6.4mm、輪厚1.2mm、現重量4.47g、銅製である。蔵骨器1内より検出された。



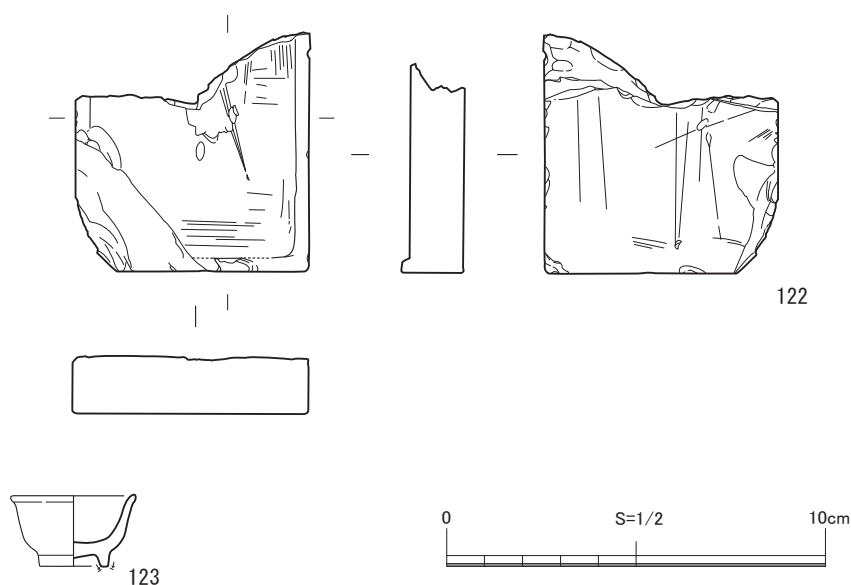
第54図 071号墓出土遺物

第17節 その他の墓

ここまで状態が良い墓を中心に、それぞれの墓ごとにその詳細の報告を行った。それ以外の墓で出土した遺物のうち特徴的なものや状態の良いものについて、以下に図示して報告する。各遺構の詳細については、第2表と巻末の写真を参照頂きたい。

第55図122は、石製の硯の一部である。海部を大きく欠損し、陸部のみが残る。表面に縁部が形成されており、裏面は無地である。表裏に擦痕がみられ、表面には中央に刃物のような痕が見受けられる。粘板岩製であると思われる。全長6.2cm、厚さ1.45cm、幅6.1cm、縁部0.35cm、現重量101.9g。003号墓の墓庭埋土より出土。

第55図123は、沖縄産施釉陶器の小杯である。素地は白色で、透明釉が施される。口径3.30cm、底径1.80cm、器高1.90cmで、高台の裏側にも釉剥ぎがみられるが一部釉が残る。020号墓の墓室内埋土より検出された。



第55図 その他の墓の出土遺物

〈引用・参考文献〉

安里進1997「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－」『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』浦添市文化財調査研究報告書第25集

安里進・新里まゆみ2006「比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－」『比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書

上江洲均1981「第五章 沖縄の厨子甕」『紀年銘（年号のある）民具・農具調査等－西日本－』日本常民文化研究所報告第8集 日本常民文化研究所

仁王浩司2009「墓から出土する古典焼」『壺屋焼物博物館紀要』第10号 那覇市立壺屋焼物博物館

第5表 蔵骨器観察一覧表 (1)

No.	蔵骨器番号	図版番号	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ・隠線	鐳 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印 銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
			身	身	マド枠 (底部 cm) / 屋根形	縦軸×横軸 (cm)	窓数/形	横帯	底面孔								
1	1	第10図1 図版17-1	マンガン釉座付蓋形	蓋	扁平形	あり	2段・1条	3.1	0.6	9.6 28.4 20.8 14.0 10.4	体部の半分あたりの高さに底を付け、底の上半分は流状文を、描き、下半分は縦位の流線で瓦を描く。4つの隅棟に獅子頭を付ける。	つまみ台は回転削り出し。髷端部はやや平坦。かえりはやや丁寧な成形。内外面ともに丁寧な調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	なし	
2		第10図2 図版17-2	マンガン釉座付蓋形	身	唐破風形貼付	19.8×13.0	3個 1方2方	—	11個 三日月形	26.0 36.0 21.2 55.8	底部：半載竹管押し引きの立体的な瓦+隅棟の先と中央に龍 (貼付) 胴部：法華+蓮華文 (貼付) 胴下部：花文+唐草文 (貼付)	外反口縁で、口唇部は平坦。口クロ成形で、胴下部はへう削り調整。調整は内外面ともにやや丁寧。	マンガン釉を表面全体と内面口縁部に施釉する。焼成不良の為に釉は斑。	なし	—	—	胴下部に三日月形の孔が9個ある。
3	2	第10図7 図版17-7	転用	蓋	なし	なし	1段	なし	なし	6.8 18.5 17.6 5.5 —	沖繩産陶器のいわゆるアカムヌの皿。高台はへうによる削り出し。端部はやや丸い。口クロ成形後、丁寧に調整。器面はなめらか。	なし	なし	なし	—	—	
4		第10図8 図版17-8	転用	身	—	—	—	—	—	19.4 29.0 18.0 37.8	頭部直下：5条隠線 (沈線) 肩部：櫛歯波状文 (沈線) + 円文 (貼付)	沖繩産無釉陶器の水甕。口縁部が丸手状になり肩部が張る。口縁部の作りはやや稚。口クロ成形で、一部へう削り調整。	なし	なし	—	—	
5	3	第10図3 図版17-3	マンガン釉蓋形	蓋	扁平形	あり	2段	2.4	0.4	8.4 26.8 21.6 13.7 10.0	なし	つまみ台は回転削り出し。髷はやや反り、髷端部は丸い。かえりはつくりがやや稚。口クロ成形。	マンガン釉を表面全体に施釉。髷端部は露胎する。	なし	—	—	
6		第10図4 図版17-4	マンガン釉蓋形	身	アーチ形貼付	19.1×8.6	3個 1方2方	凹2 凸1 凹3 凹3	13個 三日月形	27.2 29.0 17.6 55.2	肩部：華文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部は平坦。水抜口クロ成形で、胴下部はへう削り調整。内外面ともに器面はやや滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	—	—	
7	4	第10図5 図版17-5	マンガン釉蓋形	蓋	扁平形	あり	1段	8.9	0.4	6.4 16.3 10.4 8.9 5.5	なし	つまみ台は回転削り出し。髷は平坦で、髷端部は丸い。かえりはつくりがやや丁寧で逆三角形になる。口クロ成形。	マンガン釉を表面全体に施釉するが、つまみ頂部は露胎。	なし	—	—	
8		第10図6 図版17-6	マンガン釉蓋形	身	瓦屋根形沈線	11.2×9.2	3個 3方	凹2 凸1 凹3 凹1	9個 円形	17.6 19.1 12.0 30.4	肩部：華文+蓮華文 (沈線) 胴部：蓮華文+法師像 (貼付) 胴下部：波状文 (沈線)	ゆるやかな外反口縁で、口唇部は平坦。口クロ成形後、へう削り調整。器面は滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉。内面も口唇部まで掛かる。	あり	—	—	
9	004 号墓	—	マンガン釉蓋形	蓋	宝珠形	あり	1段	3.5	0.5	11.1 29.5 21.7 — 12.0	なし	髷はやや平坦で端部は丸い。かえりは削り出し。口クロ成形後、丁寧に調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	大正12 (1923)	—	
10		—	マンガン釉蓋形	身	唐破風形貼付	26.8×12.0	3個 長方形	凹2 凸1 凹2 凹2	6個 円形	— 22.0 54.6	肩部：波状文 (貼付) 胴部：蓮華文+法師像 (貼付) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部はやや平坦。髷門は柱書が付くタイド。口クロ成形後にへう削り調整とナデ調整。	マンガン釉が表面に全体的に施釉するが、口唇部と胴下部、屋根銘書面は露胎。	なし	—	—	
11	009 号墓	—	マンガン釉蓋形	蓋	宝珠形	あり	1段	2.5	なし	8.7 19.0 14.0 8.7 6.3	なし	つまみ台は回転削り出し。髷端部は丸い。かえりは作りが稚で不明瞭。口クロ成形後、内外面ともに丁寧に調整するが、器面は粗い。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	明治37 (1904)	
12		—	マンガン釉蓋形	身	アーチ形貼付	10.5×6.0	3個 方形	凹2 凹2 凹3 凹2	5個 三日月形	24.9 27.5 15.3 49.3	肩部：蓮華文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部は平坦でやや下へ傾く。口クロ成形後、丁寧に調整とナデ調整を施す。胴部文様帯は簡略化が窺い。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	—	—	

※大きさ (cm) は、ポージャー形・甕形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高/胴高/底径/底径/器高である。家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) / 底部 (長軸×短軸) / 器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (2)

No.	蔵骨器番号	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏線窓数/形	鐫(㎝)	かえり(㎝)	大きさ(㎝)※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	死去年(西暦)	洗骨年(西暦)	備考
13	第14図18 図版18-18	赤焼御殿形	身	マド枠(庇部cm)/屋門形	縦長軸×横長軸 (cm)	—	—	—	53.9 55.0 40.2 43.3	大棟に一对の龕。階棟に獅子頭。瓦は立体的で、半截竹管押し引きによるものと思われる。	型成形後、外面は丁寧なナデ調整。釉薬の痕が全体的にみられる。内面には横位のナデ調整痕。龕は丁寧につくられ、器面は滑らか。	なし	なし	—	—	側面に方形のマドが3個ずつ付く。
14	2	赤焼御殿形	身	瓦屋形貼付	—	3個 1方2方	—	76個 円形	46.0× 32.6 42.9× 26.2 44.0	口縁部から約5cm下に底をつける。瓦上面には立体的な瓦。屋門の左右に蓮華文を貼付け、側面にも蓮華文を貼付る。背面は無文。	型成形後、外面は丁寧な調整をするが、釉薬の痕が全体的にみられる。内面は縦方向と口縁部には横位のナデ調整の痕が見られる。	なし	なし	—	—	底面にうち、3つは未貫通。
15	第18図41 図版22-41	転用	蓋	—	—	—	—	1.2	6.9 6.5 2.3	なし	沖縄産陶器のいわゆるアカムスーの蓋。ロクロ成形後、丁寧なナデ調整がされ、器面は滑らか。	なし	なし	—	—	
16	3	転用	身	—	—	—	—	—	11.0 15.4 7.9 22.6	なし	沖縄産無釉陶器のいわゆるアンタカミー。口縁部は字状、頸部はやや直口。口唇部は平坦だが焼成不良の為一部反る。ロクロ成形の痕が残る。	なし	なし	—	—	
17	第14図20 図版19-20	荒焼御殿形	蓋	入母屋形	—	—	—	—	36.9 52.2 42.2 37.3	大棟に一对の龕。階棟と隅棟が1本に繋がって先端には装飾されない。瓦は立体的で半截竹管の押し引きによるものと思われる。	型成形後、龕は丁寧にナデ調整する。内外面ともに丁寧な調整がされ、器面は滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉。蓋との接合面は露胎する。	なし	嘉慶2 (1797)	嘉慶4 (1799)	側面にマドが2個ずつ付く。
18	4	荒焼御殿形	身	瓦屋形貼付	—	3個 1方2方	—	34個 円形	49.2× 41.9 42.3× 32.0 45.2	屋門の左右と側面に蓮華に乗った法師を貼り付ける。背面は無文。屋門の下位には、位牌状に銘書面がつくられる。	型成形後、外面は丁寧な調整がされ器面は滑らかだが、内面は縦方向と口縁部には横位のナデ調整の痕がある。	マンガン釉を表面全体に施釉。身との接合面は露胎。	なし	嘉慶2 (1797)	嘉慶4 (1799)	
19	第15図24 図版19-24	無釉臺形	蓋	饅頭形	あり	1段・1条	3.2	1.0	10.4 28.5 10.5 13.9 10.4	なし	つまみ台は回転削り出し。頸部とかえり端部は平坦。ロクロ成形後、ナデ調整され、丁寧に滑らかにされる。	なし	なし	—	嘉慶2 (1797)	
20	5	無釉臺形	身	瓦屋形貼付	16.0×10.6	3個 3方	凹2 凸1 凸3 凸1	4個 半円形	29.0 36.4 21.8 54.2	肩部：なし 胴部：蓮華文(貼付) 胴下部：なし	直口縁で、口唇部はやや平坦。ロクロ成形後、外面は丁寧な調整がされ器面が滑らかになるが、内面は上部は滑らかだが下部は回転痕が明瞭に残る。	なし	なし	—	—	
21	6	転用	身	—	—	—	—	—	— 8.0 19.7	なし	沖縄産無釉陶器、いわゆるアンタカミーの転用。口縁部は字状で、口唇部はやや平坦。頸部は短い、ロクロ成形後、丁寧なナデ調整。	なし	なし	—	—	1/3程を欠失する。骨の代わりにサングが入る。
22	第17図30 図版21-30	マンガン釉臺形	蓋	饅頭形	あり	2段・2条	3.4	0.7	12.3 29.8 21.6 13.6 10.0	なし	つまみ台は回転削り出し。頸部とかえり端部は平坦。全体的に丁寧に滑らかにされる。	マンガン釉を表面全体に刷毛で施釉する。	なし	嘉慶5 (1800)	嘉慶7 (1802)	
23	7	マンガン釉臺形	身	瓦屋形貼付	23.8×9.2	5個 1方4円	凹1 凸1 凸3 凸3	5個 半円形	27.8 34.4 21.4 53.8	肩部：なし 胴部：蓮華文+法師(貼付) 胴下部：なし	直口縁で、口唇部は平坦。ロクロ成形後、内外面ともに丁寧な調整がされる。文様もやや丁寧に施文。	マンガン釉を表面全体に施釉するが、口唇部と胴下部は露胎する。	なし	—	—	

※大きさ (cm) は、ボージャー形・臺形は、蓋が上から上部径/口径/器高/体部高、身は上から口徑/口径/器高/底高である。
 冢形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/梁長/器高、身は上から上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (3)

No.	墓番号	蔵骨器番号	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏線窓数/形	鏝 (cm)	かえり (cm)	底面孔	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
24	8	第18図36 図版21-36	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段・1条	2.5	0.5	なし	6.8 21.2 14.4 10.6 7.0	なし	つまみ台は回転削り出し。鏝は平坦で端部はやや丸い。かえりは丁寧なナデ調整で、全体的にやや丁寧なつくり。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	光緒5 (1879)	
25			マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	11.8×6.8	5個1方4円	凹2凸1凹2凹4凹6	8個円形	23.0 24.8 15.4 36.4	肩部：鋸歯文+葉文? (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部は平坦でやや下へ傾く。ロクロ成形後ナデ調整。外面はやや滑らかに仕上げられるが、内面は回転痕が残る。つまみとつまみ台のない笠形。鏝端部は平坦で角は丸い。ロクロ成形で、内外面ともに回転痕がやや明瞭に残る。焼成不良のため、一部反る。	マンガン釉を表面全体に施釉するが、口唇部は露胎する。	なし	あり	光緒5 (1879)			
26	9	第15図22 図版19-22	ボージャー形	蓋	なし	なし	なし	なし	なし	なし	8.6 29.8 29.2 8.6 —	なし	つまみとつまみ台のない笠形。鏝端部は平坦で角は丸い。ロクロ成形で、内外面ともに回転痕がやや明瞭に残る。焼成不良のため、一部反る。	なし	なし	あり	—	乾隆46 (1781)	
27			ボージャー形	身	平蓋形貼付 0.5cm	6.4×8.4	3個1方2円	凹3凸1凹1凹1	6個円形	20.8 26.9 16.4 37.2	なし	肩部：蓮弁文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：櫛描波状文 (沈線)	口唇部は玉縁状だが、やや内傾する。ロクロ成形。外面に線位の指ナデの痕と胴下部にへう削り調整がみられる。内面にも回転痕。	なし	あり	あり	—	乾隆46 (1781)	蓋印は七を回転させたような形である。
28	10	—	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	1段	2.6	0.2	なし	6.8 20.7 15.7 8.5 6.5	なし	つまみ台削り出し。鏝端部はやや平坦。かえり削り出し。回転成形後、丁寧なナデ調整。	マンガン釉を全体に施す。釉。内面も剛毛で薄く施釉する。	なし	なし	—	—	
29			マンガン釉壺形	身	アーチ形沈線	11.8×8.6	1個方形	凹2凸1凹3	20個三日月形	23.0 25.6 16.0 39.4	肩部：蓮弁文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：櫛描波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部は平坦でやや下へ傾く。底部に円形の跡が3つ付く。ロクロ成形後、外面はナデ調整するが、内面は回転痕が残る。	マンガン釉を表面全体に施釉するが、口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—		
30	11	第16図26 図版20-26	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	2段	2.7	0.3	なし	9.9 30.4 24.2 13.6 10.3	なし	つまみ台は回転削り出し。鏝は反り、端部は丸い。かえりは、粗雑なつくり。体部は上部は回転削り削り残るが下部はナデ消される。	マンガン釉を表面全体に施釉する。鏝端部は露胎する。	なし	あり	—	光緒27 (1901)	つまみ頂部に1孔あり。
31			マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	17.4×11.4	4個方形	凹2凹2凹4凹5凹3	9個半月形	32.0 38.2 23.8 68.0	肩部：蓮弁文+葉文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：櫛描波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部は平坦でやや下へ傾く。水挽ロクロ成形。外面は滑らかで、内面は回転痕がやや明瞭に残る。	マンガン釉を表面全体に施釉するが、口唇部は露胎する。	なし	あり	光緒年間 (1875-1908)			
32	12	第16図28 図版20-28	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	3段	3.6	なし	なし	10.2 32.0 24.9 15.6 11.2	なし	つまみ台は回転削り出し。鏝はやや下向きで、端部は丸い。かえりはつくりきれない。ロクロ成形で内外面ともに器面はやや滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	大正8 (1919)	
33			マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	13.6×11.2	3個方形	凹3凸1凹4凹4	11個三日月形	31.8 35.8 21.0 67.0	肩部：蓮弁文+葉文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部は平坦でやや下へ傾く。水挽ロクロ成形。外面は滑らかで、内面は回転痕がやや明瞭に残る。	マンガン釉を表面全体に施釉するが、口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—		
34	13	第18図39 図版22-39	マンガン釉底付壺形	蓋	宝珠形	あり	2段	3.4	0.4	なし	11.0 31.2 23.2 20.2 15.8	なし	つまみ台は回転削り出し。鏝は焼成不良のため一部大きく反るが、全体的にやや反る。外面は水挽きロクロ成形。内面は回転痕が明瞭に残る。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	道光27 (1847)	底の下部に円形のマドが8個ある。
35			マンガン釉底付壺形	身	瓦屋形貼付	22.4×11.1	1個方形	凹2凸1凸1凸3	4個三日月形	30.8 40.8 22.4 63.2	底部：半載竹管押し引きの立体的な瓦+隅棟の先に獅子頭 (貼付) 胴部：法師+蓮華文 (貼付) 胴下部：葉文+円文 (貼付)	口唇部はやや外反し、口唇部は平坦だが中央がやや膨らむ。ロクロ成形後、文様を貼り付ける。内面には回転痕がやや明瞭に残る。	マンガン釉を表面全体に施釉するが、口唇部は露胎。と胴下部は露胎。	なし	なし	—	—		

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高/器高/器高である。胴部は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (4)

No.	墓 番号	蔵 骨器 番号	図版番号	種類	蓋	つまみ/屋根 形状	接合部孔	つまみ 台・圈縁	鐳 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
36			第17図34 図版21-34	マンガン釉薬形	蓋	宝珠形	あり	2段	3.2	0.4	9.2 30.0 22.7 15.6 10.4	なし	鐳は平坦で、端部は丸い。つまみ台とかえりは削り出したが粗雑。口縁成形で、外面はナデ調整されるが、内面は回転痕が明瞭に残る。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	光緒5 (1879)	
37		14	第17図35 図版21-35	マンガン釉薬形	身	アーチ形貼付	19.0×11.3	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凹4	9個 半円形	30.2 33.4 19.6 53.6	肩部：雲文（沈線） 胴部：蓮華文（沈線） 胴下部：柳描波状文（沈線）	外反口縁で、口唇部は平坦だが中央がわずかに窪む。外面は水掻き口縁成形と見られが滑らかだが、内面は回転痕が残る。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	光緒5 (1879)	
38		15	第17図32 図版21-32	マンガン釉薬形	蓋	宝珠形？	あり	1段・2条	3.7	0.4	9.9 29.5 21.8 16.0 12.3	なし	つまみ台は削り出し。鐳は平坦で、端部は丸い。かえりは成形がやや粗。全体的に工具による回転痕がやや明瞭に残る。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	道光20 年代 (1840- 1849)	つまみは半分程欠けるが残存部から宝珠形と推測。
39			第17図33 図版21-33	マンガン釉薬形	身	唐破風形貼付	26.0×9.4	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凸3	9個 半円形	27.8 34.0 20.4 55.2	肩部：波状文（沈線） 胴部：蓮華文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	外反口縁で、口唇部は平坦だが中央がやや窪む。内外面ともに口縁成形後、ヘラ削りとナデによる調整をし、器面はやや滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉し、内面にも施釉する。	なし	あり	—	道光25 (1845)	
40	009 号墓		—	マンガン釉薬形	蓋	扁平形	あり	2段	2.6	0.1以下	10.0 27.0 22.0 10.0 8.4	なし	つまみ台削り出し。鐳は上へやや反り、端部は丸い。かえりは鐳に作られ不明瞭。	マンガン釉を表面全体に施釉し、内面にも施釉する。	なし	あり	—	光緒27 (1901)	
41		16	—	マンガン釉薬形	身	アーチ形貼付	20.4×10.0	3個 方形	凹2 凸1 凹4 凹3	5個 半円形	24.9 27.5 15.3 49.8	肩部：雲文？（沈線） 胴部：蓮華文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	ゆるやかな外反口縁で、口唇部は平坦でやや下へ傾く。底部には逆台形状の脚が3つ付く。口縁成形後、ヘラ削り調整とナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	—	
42			—	マンガン釉底付薬形	蓋	宝珠形	あり	1段・1条	3.8	0.5	11.5 32.0 25.5 21.7 14.0	底部：半載竹管を強めに押し立て体的な瓦を作る。瓦の上部に2条の沈線が廻る。	つまみは丁軍。鐳の端部は丸い。かえりは削り出しでやや丁寧なナデ調整。	マンガン釉を剛毛で表面全体に施釉する。	なし	あり	道光4 (1824)	道光11 (1831)	表面の蓮華文の葉は貼付、裏面は沈線で描かれる。
43		17	—	マンガン釉底付薬形	身	唐破風形貼付	27.5×10.8	3個 方形	凸3 凸1 凸1 凸3	10個 円形	31.5 38.8 22.7 58.8	底部：半載竹管を強めに押し立て体的な瓦を作る。 (貼付) 胴部：蓮華文+法師 (貼付) 胴下部：花文+唐草文 (貼付)	外反口縁、口唇部は中央がやや反り、端部は丸い。柱の玉飾りは花文になる。口縁成形後、丁寧なナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉し、口唇部、胴下部、屋門銘書面は露胎する。	なし	あり	道光4 (1824)	道光11 (1831)	
44			—	マンガン釉薬形	蓋	扁平形	なし	1段	2.2	なし	8.5 18.5 14.0 9.57	なし	つまみ台削り出し。鐳の端部は丸い。かえりは作られない。口縁成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	—	
45		18	—	マンガン釉薬形	身	瓦屋形沈線	10.0×9.6	3個 円形	凹2 凹1 凹2 凹2	5個 円形	15.7 18.0 12.0 30.4	肩部：蓮弁文+銀歯文（沈線） 胴部：雲文（沈線） 胴下部：柳描波状文（沈線）。右側は施文されない。	ゆるやかな外反口縁。口唇部は中央がやや窪む。内外面ともに口縁成形。胴下部までは丁寧なナデ調整を行うがそれより下部は調整が粗い。	マンガン釉を表面全体に掛け流して施釉。	なし	なし	—	—	
46	019 号墓		第20図43 図版22-43	ボージャー形	蓋	扁平形	なし	なし	なし	なし	33.0 31.4 12.2 10.2	なし	つまみは扁平で小型。鐳の端部は平坦だが、焼成不良により一部が反る。外面上部は回転ヘラ削り、下部は回転ナデ成形の痕が見られる。	なし	なし	あり	乾隆27 (1762)		
47			第20図44 図版22-44	ボージャー形	身	唐破風形貼付 0.8cm	8.9×10.2	1個 方形	凹2 凹1 凹1 凹1	1個 円形	27.0 33.4 20.6 43.6	なし	口縁部は玉縁状で内傾し、先端は指で押さえたようにやや平坦になる。マシは滑らか。口縁成形後、ナデ調整と胴下部はヘラ削り調整。	なし	なし	なし	—	—	底面孔は未貫通。

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身が上から口径/口径/口径/器高/器高である。
家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (5)

No.	墓 番号	蔵 骨器 番号	図版番号	種類	蓋	つまみ/屋根 形状	マド枠 (庇部 cm) / 屋門形	接合部孔	つまみ 台・圏線	窓数/形	鐳 (cm)	横帯	かえり (cm)	底面孔	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
48	1		第23図51 図版24-51	マンガン釉薬形	蓋	宝珠形	あり	縦長軸×横 長軸 (cm)	2段	窓数/形	3.1	横帯	0.2		8.8 30.4 23.8 15.1 11.0	なし	鐳は上へ反り、端部はやや舌状 になり、つまみ台とかえりは削 り出したが粗雑。ロクロ成形だ が、全体的につくりが雑で回転 痕が残る。	マンガン釉を表面全体 に施釉するが、鐳端部 は露胎する。	なし	あり	—	光緒19 (1893)	
49				マンガン釉薬形	身	アーチ形貼付		3個 円形	凹2 凸1 凸3 凹3	17個 円形	27.8 32.8 19.6 53.2	肩部：蓮弁文+葉文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：櫛描波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部が平坦でや や下へ傾く。ロクロ成形後、外 面はナデ消し、内面は上駒はナ デ消すが下部は回転痕が残る。	マンガン釉を表面全体 に施釉する。	なし	あり	—	光緒19 (1893)					
50	2		—	マンガン釉薬形	蓋	—	あり		1段		3.9		0.2		9.8 27.6 19.3 —	なし	上部欠失の為つまみ、つまみ台 は不明。鐳は下へ傾き端部は丸 い。鐳内面にマンガンの指痕が 4本付く。ロクロ成形後、ナデ調 整。	マンガン釉を表面全体 に剛毛で施釉すると思 われる。	なし	あり	—	—	上部を欠 失する。
51				マンガン釉薬形	身	唐破風形貼付		3個 方形	凹2 凸1 凸3 凹3	6個 円形	25.0 30.5 21.5 54.0	肩部：波状文 (沈線) 胴部：蓮華文 (貼付) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は中央がやや 窪む。唇門は柱書が付く。ロク ロ成形後、ヘラ削り調整とナデ 調整。	マンガン釉を剛毛で表 面全体に施釉。口唇部、口唇部 、胴下部、唇門銘書面は 露胎する。	なし	なし	—						
52	3		—	無軸薬形	蓋	宝珠形	あり		1段		3.2		0.5		10.8 29.2 22.0 17.5 11.0	なし	つまみは丁寧に作られる。つま み台削り出し。鐳端部はやや平 坦。ロクロ成形後、ナデ調整。 全体的に丁寧に作られる。	なし	なし	あり	—	—	
53				ボージャー形	身	平葦形貼付 0.5cm		1個 方形	凸2 凹1 凹1	6個 円形	27.8 33.3 21.7 52.0	なし	口唇部は玉縁状だが、唇部が 3.8cmと長くなり直口する。ロ クロ成形後、ヘラ削り調整とナ デ調整。	なし	あり	なし	—						
54	4		第22図45 図版23-45	上焼本御殿形	蓋	入母屋形	—	7.0×11.6	—	—	—	—	—		42.6 48.2 33.7 25.4	大棟に一羽の鱗。隆起の先に獅子頭。 正面唐破風の頂部に龍頭と、唐破風 と施釉がされる。釉が厚く掛か るため文様は輪郭がやや不明瞭。 型成形後、内外面ともに白化粧 と施釉がされる。釉が厚く掛か るため文様は輪郭がやや不明瞭。 型成形後、内外面ともに白化粧 と施釉がされる。釉が厚く掛か るため文様は輪郭がやや不明瞭。 を施釉する。	白化粧後、緑、茶色の釉 薬で彩色し、透明釉を 施釉。内面も茶褐色の 釉を施釉する。	なし	あり	咸豊4 (1854)	咸豊8 (1858)	マドが正 面に2方、背 面に2円。	
55				上焼本御殿形	身	その他貼付		正面4個 2方2円 側面2個 2円	—	12個 円形	43.6× 29.8 41.6× 28.3 40.1	口縁部から約5cm下に底をつける。 底上面には立体的な瓦、中央と隣 りに獅子頭。正面は立ち獅子と連 した文様は法師と蓮華文を張り 付ける。	なし	なし	なし	なし	—						
56	5		—	ボージャー形	蓋	扁平形	なし		1段		なし		なし		9.7 31.5 31.0 11.5 10.0	なし	小形扁平のつまみが付く。つま み台は削り出し。端部は平坦。 ロクロ成形後、ヘラ削り調整と ナデ調整。	なし	なし	あり	乾隆20年代 (1755-1764)		
57				ボージャー形	身	平葦形貼付 1.1cm		5個 1方4円	凹2 凹1 凹1	6個 円形	29.3 37.5 21.8 51.0	なし	口縁部は玉縁状で内傾。ロクロ 成形後、ヘラ削り調整とナデ調 整。	なし	なし	なし	—						
58	6		—	マンガン釉薬形	蓋	扁平形	なし	8.5×12.2	2段		4.0	なし		12.5 35.0 27.6 14.5 10.9	なし	つまみは中央がやややくぼむ。鐳 端部は丸い。焼成不良により鐳 の一部がゆがむ。ロクロ成形後、 ナデ調整。	マンガン釉を表面全体 に施釉。	なし	あり	—	大正7 (1918)		
59				マンガン釉薬形	身	唐破風形貼付		3個 円形	凹2 凹1 凹4 凹4	8個 半円形	37.5 43.3 24.0 74.0	肩部：葉文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：櫛描波状文 (沈線)	口縁部はゆるやかな外反。口唇部 は平坦に付くられ、やや下に傾く 。唇部2は不明瞭。唇門は銘書面に も貼付の円文が付く。ロクロ成形 。	マンガン釉を表面全体 に施釉。口唇部は露胎 する。	なし	なし	—						

※大きさ (cm) は、ボージャー形・薬形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身は上から口径/胴径/底径/器高である。
家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (6)

No.	蔵骨器番号	種類	蓋 身	つまみ/屋根 形状 cm)	接合部孔 縦長軸×横 長軸 (cm)	つまみ 台・圈線 窓数/形	鐫 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
60	7	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	2段	3.8	なし	10.8 31.4 24.0 16.6 12.6	なし	つまみ台は回転削り出し。鐫は 端部で反り、先端は丸い。かえ りはない。口クロ成 形で、外面には指ナデの痕がみら れる。	マンガン釉を表面全体 に施釉する。	なし	あり	昭和2 (1927)	昭和3 (1928)	
61		マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	21.8×9.9	3個 半円形	凹3 凸1 凹6 凹4	8個 半円形	34.3 40.8 22.0 68.0	肩部：蓮弁文 (沈線) 胴部：葉文 (沈線) 胴下部：楠描波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部は平坦だが、 内側に窪む。頸部が成 と比較して長い。水挽口クロ成 形で器面は滑らか。	マンガン釉を表面全体 に施釉する。	なし	なし	—	—	マドと底 面孔は同 じ工具で 穿孔か。
62	8	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段	3.0	0.2	10.5 28.3 21.8 16.9 10.2	なし	つまみ台は回転削り出し。頸端 部は平坦。口クロ成 を、やや雑である。	マンガン釉を表面全体 に施釉する。	なし	あり	咸豊4 (1854)	咸豊9 (1859)	
63		マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	23.4×10.1	3個 方形	凹2 凸1 凸2 凹3	11個 円形	31.0 36.1 22.0 52.4	肩部：楠描波状文+蓮弁文+不明 文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：楠描波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部はやや平坦で 下に傾く。口クロ成 削り調整とナデ調整。	マンガン釉を表面全体 に施釉する。	なし	なし	—	—	
64	9	マンガン釉壺形	蓋	饅頭形	あり	2段・2条	3.0	0.2	10.4 28.2 22.2 14.4 10.0	肩部：楠描波状文+蓮弁文+不明 文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：楠描波状文 (沈線)	つまみ台回転削り出し。鐫は上 に反り、端部はやや平坦だが部 分的に丸くなる。小さいかえり がつくがやや雑。口クロ成 全体の粗い。	マンガン釉を表面全体 に施釉するが、頸端部 は露胎する。	なし	あり	光緒17 (1875)	光緒10 (1884)	
65	027 号墓	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	18.4×9.8	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凹3	7個 円形	29.8 34.7 20.5 51.2	肩部：葉文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は平坦だが中 央がわずかに窪み、やや下に傾 く。口クロ成 整とナデ調整。	マンガン釉を表面全体 に流し掛けて施釉。口 唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	骨の代わ りに小石 が入れら れている。
66	10	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	1段	2.8	0.1	8.4 27.4 20.5 12.0 10.0	なし	つまみ台削り出し。鐫はやや上 に反り、端部は丸い。口クロ成 形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体 に施釉する。	なし	あり	光緒16 (1890)	—	
67		マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	22.3×10.8	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凹3	8個 半円形	30.3 34.9 21.0 52.0	肩部：蓮弁文+波状文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は中央がやや 凹み、外へ傾く。唇門は柱貫が 付くタイプ。口クロ成 デ調整。	マンガン釉を表面全体 に流し掛けて施釉。口唇部は 露胎する。	なし	なし	—	—	
68	11	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	1段	2.8	0.3	30.3 34.9 21.0 52.0	なし	つまみ台削り出し。鐫は反り、 端部は丸い。かえりは削り出し だが雑。口クロ成 整。	マンガン釉を表面全体 に施釉する。	なし	あり	同治6 (1867)	—	
69		マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	21.2×9.2	3個 方形	凹2 凸1 凹3 凹4	14個 半円形	28.5 32.0 19.5 48.0	肩部：葉文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (楠描)	外反口縁。口唇部は中央がやや 凹む。口クロ成 調整。	マンガン釉を表面全体 に施釉。口唇部は露胎 する。	なし	なし	—	—	
70		マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	1段	3.3	なし	8.0 21.4 16.0 11.0 9.6	なし	つまみは作りが雑で、つまみ頂 部に土の塊がつく。つまみ台削 り出し。頸端部はやや丸い。口 クロ成 ナデ調整。	マンガン釉を表面全体 に施釉する。	なし	あり	—	大正7 (1918)	
71	12	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	10.0×6.9	3個 方形	凹2 凸1 凹2 凹2	14個 三日月形	23.8 27.1 14.0 43.7	肩部：葉文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。頸部が長くなる。口 唇部は中央がやや凹み、下へ傾 く。口クロ成 れるが、背面は調整が雑。	マンガン釉を表面全体 に施釉。口唇部は露胎 する。	なし	なし	—	—	胴下部に 三日月型 の孔が14 個めぐら される。

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から口徑/内径/器高/体部高、身は上から口徑/胴径/底径/器高である。
 冢形・御殿形は、蓋が上から横長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (7)

No.	蔵骨器番号	種類	蓋	つまみ/屋根形状 マド枠(底部cm)/屋根形	接合部孔 縦長軸×横長軸 (cm)	つまみ台・圏線窓数/形	鐫 (cm) 横帯	かえり (cm) 底面孔	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
			身														
72	13	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段	3.2	0.2	10.1 28.4 21.7 16.2 11.5	なし	つまみ台削り出し。鐫端部は丸い。外面の付け根を凹ませて成形。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	咸豊9 (1859)	
73		マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	22.3×11.3	3個 方形	凸1 凸2 凹4	21個 円形	30.8 35.8 21.0 53.8	肩部：葉文+唐草文？ 胴部：蓮華文(沈線) 胴下部：波状文(沈線)	外反口縁。口唇部は平坦で、やや下へ傾く。回転へう削りで、胴下部は横位にへう削り調整が見られる。	マンガン釉を刷毛で表面全体に施釉。口唇部、口唇部は露胎する。	なし	あり	—	—	
74	14	赤焼	蓋	宝珠形	あり	なし	なし	なし	— 27.2 26.8 14.2 10.4	なし	沖繩産のアカムヌーに胎土が類似。内面に捺って成形した痕があり外面にも頂部に螺旋状の痕が薄く見られる。ロクロ成形で器面は滑らか。	なし	なし	なし	—	—	
75		赤焼	身	平葺形貼付 1.2cm	5.4×6.3	3個 方形	凹1	1個 円形	23.2 27.6 14.0 27.6	なし	口縁部は内傾し、口唇部は丸い。マド枠に成形時の指の痕がある。底部は基部底状。ロクロ成形で器面は滑らか。	なし	なし	あり	乾隆33? (1788?)	銘書は一部、墨が薄くなり不鮮明。	
76	15	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段	2.8	0.1以下	10.3 26.0 20.5 14.0 10.0	なし	つまみ台削り出し。鐫端部は丸い。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	大正7 (1918)	
77		マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	20.0×8.0	3個 方形	凸1 凸1 凸3 凹3	12個 三日月形	25.3 28.1 18.5 48.0	肩部：葉文+蔓？(沈線) 胴部：蓮華文(沈線) 胴下部：櫛描波状文(沈線)	外反口縁。口唇部は平坦で下へ傾く。頸部がやや長くなる。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	胴下部に三日月形の孔が9個めぐらされる。
78	1	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	14.0×6.5	3個 方形	凹2 凹2 凹4 凹4	9個 半月形	22.8 27.0 18.0 45.0 0.1	肩部：櫛描波状文+蓮弁文(沈線) 胴部：蓮華文(沈線) 胴下部：波状文(沈線)	外反口縁。口唇部は中央がやや凹むが、平坦で下へ傾く。頸部がやや長くなる。底部に脚が3つ付く。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	
79	2	マンガン釉壺形	身	唐破風形沈線	16.0×9.5	3個 円形	凹2 凸1 凹2 凹2	9個 半月形	19.5 21.9 13.0 36.7	肩部：草文+波状文(沈線) 胴部：蓮華文(沈線) 胴下部：波状文(沈線)	外反口縁。口唇部はやや中央が凹むが、平坦に成形。頸部はやや長い。全体的に丁寧なナデ調整。胴下部にはへう削りの痕。脚は逆台形。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	
80	3	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	なし	1段・1条	2.5	なし	6.0 18.1 13.0 8.9 6.8	なし	つまみ台削り出し。鐫は平坦になり頸端部は丸い。ロクロ成形で、内面には回転痕が明瞭に残るが、外面は丁寧なナデ調整がされる。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	—	
81		マンガン釉壺形	身	唐破風形沈線	11.5×6.8	3個 方形	凹2 凸2 凹3 凹3	6個 三日月形	17.5 19.9 10.5 31.0	肩部：鋸歯文+葉文or波状文(沈線) 胴部：蓮華文+葉文(沈線) 胴下部：波状文(沈線)	外反口縁。口唇部は平坦で下へ傾く。頸部がやや長くなる。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	
82	4	マンガン釉壺形	身	その他形状 沈線	13.5×8.3	4個 円形	凹2 凹1 凹3 凹3	13個 円形	— 20.2 12.4 31.8	肩部：葉文(沈線) 胴部：蓮華文+葉文(沈線) 胴下部：波状文(沈線)	外反口縁。口唇部は中央がやや凹むが、平坦に成形。頸部はやや長くなる。内面は丁寧な調整が見られ、外面は釉薬が厚く掛かり調整は不明。	マンガン釉を表面全体に薄く施釉する。	なし	なし	—	—	蓋も出土しているが、破片のため未接合。
83	墓室内一括	転用	蓋	あり	なし	1段	なし	1.2	3.3 12.3 6.4 4.2 3.4	なし	沖繩産陶器のいわゆるアンダーガーミの蓋を転用したと思われる。内面は丁寧な調整が見られ、外面は釉薬が厚く掛かり調整は不明。	褐色の釉を表面全体に掛け、頂部の釉を蛇の目状に掻き取る。	なし	あり	—	—	

※大きさ (cm) は、ポージャー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高である。家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (8)

No.	墓 番号	蔵 骨器 番号	図版番号	種類	蓋 身	つまみ/屋根 形状	接合部孔	つまみ 台・圏線	鐫 (cm)	かえり (cm)	底面孔	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
84		1	—	マンガン釉壺形	蓋	—	あり	1段・2条	2・6	0.5	なし	なし	鐫端部はやや丸い。かえりは削り出し。ロクロ成形。	マンガン釉を表面全体に胴毛で施釉する。	なし	あり	嘉慶21 (1816)	つまみ部 分を欠失。	
85	049 号墓		第26図61 図版25-61	マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	—	—	1個方形	凹2 凸1 凸3	5個 円形	肩部：なし 胴部：蓮華文（貼付） 胴下部：波状文（沈線）	直口縁で、口唇部は平坦に成形されるが、焼成不良により肩部が大きく歪む。ロクロ成形後、へう削りによる調整を施す。	マンガン釉を表面全体に胴毛で施釉。口唇部、胴下部は露胎。	なし	あり	—	嘉慶21 (1816)	底面孔は 未貫通。
86			第26図59 図版25-59	ボージャー形	蓋	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	つまみ、つまみ台のない空形。端部は平坦。ロクロ成形。外面は上部は調整が粗雑だが、下部は、ない外面ともにやや丁寧な調整。	なし	なし	あり	—	嘉慶21 (1816)	
87		2	第26図60 図版25-60	ボージャー形	身	平臺形貼付 1.2cm	4.9×10.0	3個 1方2円	凹3 凸1 凹1	6個 半円形	なし	なし	口縁部は玉縁状で、直口する。マド枠が他の資料に比べて柱が短い。ロクロ成形後、丁寧な調整がされ外面は滑らか。内面は回転痕が残る。	なし	なし	なし	—	—	
88			—	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	あり	1段	3.5	なし	なし	宝珠の作りはやや稚。鐫はやや反り、端部は丸く成形される。かえりは削り出し。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	—	
89		1	—	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	23.0×8.5	1個 方形	凹2 凸1 凸3 凹2	6個 三日月形	なし	肩部：波状文（沈線） 胴部：蓮華文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	外反口縁。口唇部は下向きに傾斜。ロクロ成形後、全体的に丁寧なナデ調整を施す。	マンガン釉を刷毛で表面全体に施釉。口唇部、胴下部、屋門銘書面は露胎する。	なし	なし	—	—	
90			—	マンガン釉壺形	蓋	饅頭形	あり	あり	1段・2条	—	—	なし	つまみ台削り出し。鐫端部はやや平坦。かえりは丁寧に作られる。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	嘉慶3 (1798)	全体の3/4 程を欠失 する。
91	050 号墓	—	マンガン釉壺形	身	—	—	—	—	凹2 凸1 凸3 凸3	5個 円形	なし	肩部：なし 胴部：蓮華文（貼付） 胴下部：なし	屋門部分を中心に口縁部～胴部の半分以上を欠失する。直口口縁と思われる。口唇部は中央がやや凸む。ロクロ成形後、へう削り調整。	マンガン釉を刷毛で表面全体に施釉。口唇部、胴下部は露胎。	なし	なし	—	—	半分程度 を欠失。
92			—	マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	—	—	—	— 凸3 凹3	円形	肩部：— 胴部：蓮華文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	胴部のみ資料である。ロクロ成形後、ナデ調整を施す。つくりはやや丁寧である。	マンガン釉を刷毛で表面全体に施釉し、残存部より屋門銘書面は露胎すると思われる。	—	—	—	—	全体の半 分程を欠 失する。
93		4	—	転用	蓋	なし	なし	1段	なし	—	なし	沖繩産のアカムヌーの血を蓋を転用したと思われる。ロクロ成形。器面は滑らかである。	なし	なし	あり	—	—		
94			—	転用	身	—	—	—	—	—	—	肩部：2条圏線＋圏線の上に円文（貼付）＋横描波状文（沈線）＋2条圏線	沖繩産陶器の水廻。焼き締めで、口縁部が口折れになる。やや短い頸部を作り、肩部がやややぶ整は丁寧。焼成不良によりやや形が歪になる。	なし	あり	なし	—	—	窯印は三 のような 形状。

※大きさ(㎝)は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/器高/底部(長軸×短軸)/器高である。
 冢形・御殿形は、蓋が上から横長/桁長/梁長/器高、身は上から上部(長軸×短軸)/底部(長軸×短軸)/器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (9)

No.	墓 番号	蔵 骨器 番号	図版番号	種類	蓋	つまみ/屋根 形状	接合部孔	つまみ 台・圏線	鐳 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形・調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
95	050 号墓	5	—	マンガン釉壺形	蓋	—	—	2段	2.6	0.1	—	なし	つまみ台削り出し。罎端部は丸い。かえりは丁寧に作られる。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	全体の半分ほどを欠失する。
96			マンガン釉壺形	身	—	—	—	凸1 凹4	17個 円形	—	肩部：一 胴部：蓮華文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	外反口縁。口唇部は下へ傾く。残存部から胴部が細くなり寸胴化が進むタイプと思われる。丁寧に調整。水抜きロクロ成形か。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	口縁部～胴部の大部分を欠失。	
97	1	1	—	転用	身	—	—	—	—	—	19.6 30.8 20.5 43.6	沖縄産陶器の水甕で、縁部が口折れになるタイプ。やや短い頸部を作り、肩部がはる器形。ロクロ成形後、丁寧に調整が見られる。	なし	なし	なし	—	—		
98	051 号墓	2	第27図64 図版25-64	無軸壺形	蓋	宝珠形	あり	1段・2条	3.2	1.2	なし	なし	つまみ台は回転削り出し。罎はわずかに上へ反り、端部は丸い。かえりは丁寧に作られる。内外面ともにロクロ成形の痕がみられる。	なし	なし	なし	あり	乾隆57 (1792)	—
99			第27図65 図版25-65	無軸壺形	身	瓦屋形沈線	10.1×11.0	1個 方形	凸1 凸1 凸1	5個 円形	—	28.4 36.2 22.6 51.0	なし	直口口縁で、口唇部は平坦。ロクロ成形後、外面には横位・斜位にナデ調整と、胴下部にヘラ削り調整。内面下部には回転痕が明瞭に残る。	なし	なし	なし	なし	—
100	3	3	第27図62 図版25-62	赤焼	蓋	宝珠形	あり	なし	なし	なし	21.3 20.5 10.8	—	沖縄産のアカムヌーに胎土が類似。つまみは別単位で作られ、接合したとみられる。ロクロ成形で全体的に滑らかだが、外面よりも内面の方が滑らか。	なし	なし	なし	—	—	
101			第27図63 図版25-63	赤焼	身	平蓋形貼付 1.0cm	4.6×5.9	3個 方形	凹1	1個 円形	—	17.4 23.0 14.5 26.5	なし	蓋と同質。形状がボージャリー形に類似。口縁部は玉縁状で内傾。マド枠に指でつまんで成形した痕。ロクロ成形で器面は滑らか。底面に糸切痕あり。	なし	なし	なし	—	—
102	052 号墓	1	—	マンガン釉壺形	蓋	饅頭形	あり	2段・1条	3.4	0.2	なし	11.3 33.2 25.8 18.3 12.6	つまみ台は削り出し。罎端部はやや平坦。かえりは作りが雑。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	同治4 (1865)	—	銘書は退色がすすんでいる。
103	054 号墓	1	—	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	2段・1条	3.4	なし	なし	11.2 33.3 25.3 13.5 11.4	つまみ台削り出し。罎端部は丸く成形される。ロクロ成形後にナデ調整をし、内外面ともに滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	—	口縁部から胴部を1/4程度欠失。胴下部に円形孔が1個。
104			マンガン釉壺形	身	—	—	—	凸1 凹4 凹2	円形	—	肩部：蓮華文+波状文（沈線） 胴部：蓮華文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	ゆるやかな外反口縁。口唇部は平坦に作られ、下へ傾く。ロクロ成形。器面は滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	明治27 (1894)	—
105	2	2	—	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段・1条	2.1	0.4	なし	7.0 19.5 14.5 10.0 7.3	つまみは作りが雑。つまみ台削り出し。罎端部はやや丸い。かえり削り出しでやや雑なつくり。ロクロ成形。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	—	
106			マンガン釉壺形	身	切妻形？沈線	11.0×9.0	1個 円形	凸1 凸1 凸1 凹2	6個 円形	—	肩部：蓮弁文（沈線） 胴部：葉文+蓮華文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	外反口縁。口唇部は平坦に作られる。屋門は沈線で書かれる。ロクロ成形。器面はやや滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	あり	—	—		

※大きさ (cm) は、ボージャリー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高である。
家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵兵器観察一覧表 (10)

No.	墓 番号	蔵 骨器 番号	図版番号	種類	蓋 身	つまみ、屋根 形状	接合部孔	つまみ 台・圈線	鐳 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
107			—	マンガン釉壺形	蓋	扁平方形	あり	窓数・形	鐳 横帯	底面孔	9.2 19.7 14.0 8.5 7.0	なし	つまみ台削り出し、角が丸くなる。鐳はやや下へ傾き、鐳端部は丸い。ロクロ成形後、調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	
108		3	—	マンガン釉壺形	身	切妻形？沈線	8.5×5.5	1個 円形	凹2 - 凹4 凹4	5個 三日月形	20.0 19.2 9.7 29.4	肩部：蓮弁文（沈線） 胴部：葉文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	ゆるやかな外反口縁。口唇部は平坦に作られる。傾きは焼成不良で口縁部が歪むため不明。胴門は沈線で書かれる。ロクロ成形。器面は滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	胴下部に三日月型の孔が7つあり。	
109	054 号墓	4	—	マンガン釉壺形	蓋	饅頭形	あり	1段・1条	2.5	0.3	6.0 17.5 12.2 9.0 6.8	なし	つまみ台削り出し、鐳端部は丸い。かえりは削り出しでやや雑。ロクロ成形。器面は滑らか。	マンガン釉を表面全体に薄く施釉する。	なし	あり	—	明治40 (1907)	
110			—	マンガン釉壺形	身	切妻形？沈線	9.0×6.0	1個 円形	凹2 凹1 凹3 凹2	6個 円形	18.2 20.5 12.5 31.0	肩部：蓮弁文（沈線） 胴部：葉文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	外反口縁。口唇部は平坦に作られる。器面に書かれる。ロクロ成形。器面は滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	あり	—		
111		墓室内一括	—	転用	蓋	あり	—	—	—	—	5.8 15.5 — 4.5 3.7	なし	沖縄産無釉陶器の皿を転用したもの。回転べら削り成形。つまみ台にあたる高台部分は削り出して、鐳にあたる口唇部は古状。	なし	なし	あり	—		
112			第32図68 図版26-68	上焼コバルト釉 御殿形	蓋	入母屋形	—	—	—	—	32.4 36.0 28.5 40.5	大棟に虬一対。唐破風頂部に龍頭。龍頭と隆棟はツノになる。中央に格子文と蓮華と法師を貼付ける。底上面は軒瓦。裏面は釉で円文を描く。	型成形。内面は型押し後、ヘラ削りにより調整。底に重ね焼の痕が見られる。	白化粧後にコバルト・緑色・茶色の釉を施釉し透明釉を掛けるがツノの先は透明釉なし。	なし	あり	大正9 (1920)	昭和6 (1931)	マドが正面と側面に2円ずつあり。
113		1	第32図69 図版26-69	上焼コバルト釉 御殿形	身	アーチ形貼付	—	7個 円形	—	2個 円形	36.4× 27.8 26.5× 19.5 34.8	屋門のアーチの玉飾が上部の法師と一体化する。前面の文様は全て貼り付けで法師、蓮華文、菊文。背面には各色の釉薬で円文を描く。	型成形。内面は型押し後、ヘラ削りにより調整。内側底面に重ね焼の痕が見られる。	全体を白化粧後にコバルト・緑色・茶色の釉を施釉し、その上から透明釉を掛ける。	なし	なし	—		
114	055 号墓	2	—	上焼コバルト釉 御殿形	蓋	入母屋形	—	—	—	—	41.0 48.2 48.0 38.2	大棟に虬一対。唐破風の頂部に龍頭。龍頭と隆棟はツノになる。中央に格子文様と蓮華と法師を貼付。底上面は軒瓦。裏面は釉で円文を描く。	白化粧後にコバルト・緑色・茶色の釉を施釉し透明釉を掛けるがツノの先は透明釉なし。	なし	あり	—	光緒19 (1893)	マドが正面に2円、側面に3円あり。	
115			—	上焼コバルト釉 御殿形	身	アーチ形貼付	—	15個 円形	—	3個 円形	46.0× 35.8 37.2× 26.5 43.9	屋門のアーチの玉飾が上部の法師と一体化する。前面の文様は全て貼り付けで法師、蓮華文、菊文。背面には各色の釉薬で円文を描く。	型成形。文様を施文しナデ調整。内面は型押し後、ヘラ削りにより調整。内側底面に重ね焼の痕が見られる。	全体を白化粧後にコバルト・緑色・茶色の釉を施釉し、その上から透明釉を掛ける。	なし	なし	—		
116		3	第32図66 図版26-66	マンガン釉壺形	蓋	饅頭形	あり	1段	2.6	なし	10.9 26.2 20.8 13.3 9.1	つまみ台は回転削り出し。鐳はやや上に反り、端部はやや平坦。焼成不良のため一部反る。ロクロ成形で、内外面ともに滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉。胴毛による施釉か。	なし	あり	大正4 (1915)	—		
117			第32図67 図版26-67	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	21.2×10.4	2個 円形	凹2 凹1 凹4 凹2	13個 円形	28.2 31.2 17.6 54.0	肩部：蓮弁文（沈線） 胴部：蓮華文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	外反口縁で、口唇部は平坦。底面に逆さ形の脚が3つ付く。外面は水洗ロクロ成形で滑らかだったが、内面は回転痕が明瞭に残る。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部露胎。	なし	なし	—	底面の孔のうち4つは未貫通	

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身は上から上部（長軸×短軸）/底部（長軸×短軸）/器高である。
 冢形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/梁長/器高、身は上から上部（長軸×短軸）/底部（長軸×短軸）/器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (11)

No.	蔵番号	図版番号	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏線	鐳	かえり	大きさ	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考	
				身	マド枠(底部 cm)/屋根形	縦長軸×横 長軸 (cm)	窓数/形	横帯	底面孔	※								
118	4	—	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	1段・1条	2.5	なし	8.5 2.5 15.3 10.5 7.6	なし	つまみ台削り出し。髹端部は丸い。ロクロ成形。器面は滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉。	なし	あり	光緒19 (1893)	光緒31 (1905)	
119		—	マンガン釉壺形	身	唐破風形沈線	15.2×9.0	3個 方形	凹2 凹1 凹6 凹2	9個 半月形	25.8 26.9 16.4 44.6	肩部：蓮弁文+葉文(沈線) 胴部：蓮華文(沈線) 胴下部：波状文(沈線)	外反口縁。口唇部のつくりはやや横、やや下へ傾く。ロクロ成形後、ナデ調整とへう削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	あり	光緒19 (1893)	光緒31 (1905)	
120	5	第32図70 図版26-70	転用	蓋	—	—	—	—	1.1	7.1 6.6 2.7	頂部に螺旋状に圏線を引く。	中国産の蓋付小壺。つまみはなく、髹は水平に伸び、端部丸い。かえりは丁寧に作られる。ロクロ成形で器面は滑らか。	緑釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	昭和11 (1936)	昭和11 (1936)	
121		第32図71 図版26-71	転用	身	—	—	—	—	—	—	9.1 14.4 8.0 12.3	蓋と同質。直口縁で頸部は短い。口唇部が削られやや外傾する。内外面にロクロ成形の痕が見られるが、器面は滑らかで丁寧なつくりである。	白化粧後、緑釉を内外面全体に施釉するが、口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	
122	6	—	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	1段・1条	3.5	なし	8.4 28.3 21.5 14.4 10.7	なし	つまみ台削り出し、つまみ接合部孔は完全には貫通していない。髹端部は丸い。ロクロ成形。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	大正4 (1915)	
123		—	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	21.0×10.0	3個 方形	凹2 凹1 凹4 凹2	6個 三日月形	29.2 34.2 21.3 59.6	肩部：葉文(沈線) 胴部：蓮華文(沈線) 胴下部：波状文(沈線)	外反口縁。口唇部は平坦。ロクロ成形後、ナデ調整とへう削り調整。器門の左右に、柱に垂直方向に運弁のような文様を沈線で描く。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	
124	7	—	マンガン釉壺形	蓋	—	あり	1段	2.8	なし	8.3 22.0 16.0 — 8.4	なし	つまみ部部分は欠失するため形状不明。髹はやや下へ傾き、端部は丸い。回転成形後、ナデ調整とへう削り調整が見られる。	マンガン釉を表面全体に施釉。	なし	あり	大正15 (1926)	昭和2 (1927)	つまみ部分を欠失。
125		—	マンガン釉壺形	身	その他沈線	9.0×6.0	1個 円形	凹2 凹1 凹4 凹3	6個 円形	19.6 21.4 13.0 33.5	肩部：波状文+ハの字状文(沈線) 胴部：葉文(沈線) 胴下部：波状文(沈線)	ゆるやかな外反口縁。口唇部は中央がやや凹む。ロクロ成形後、ナデ調整とへう削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	
126	8	—	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	1段	3.0	0.2	9.3 22.3 16.3 10.5 7.7	なし	つまみ台削り出し。髹端部は丸い。ロクロ成形。かえりは削り出してやや稚。	マンガン釉を表面全体に施釉。	なし	あり	同治2 (1863)	同治6 (1867)	
127		—	マンガン釉壺形	身	位牌形沈線	15.5×8.7	1個 方形	凹2 凹1 凹3 凹2	5個 三日月形	22.4 27.1 17.0 43.0	肩部：波状文(沈線) 胴部：蓮華文(沈線) 胴下部：波状文(沈線)	外反口縁。口唇部が中央が凹む。ロクロ成形後、ナデ調整とへう削り調整がされる。焼成不良により胴下部が膨らむ。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	
128	9	—	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段	3.3	なし	6.9 19.8 12.9 8.7 5.9	なし	つまみ台削り出し、角はやや丸い。髹端部は丸い。ロクロ成形。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	あり	—	昭和3 (1928)	
129		—	マンガン釉壺形	身	アーチ形沈線	9.5×5.5	3個 円形	凹2 凹1 凹3 凹2	13個 三日月形	20.1 19.5 11.5 29.8	肩部：蓮弁文(沈線) 胴部：葉文+唇門の隣にも唇門のような文様(沈線) 胴下部：波状文(沈線)	外反口縁。口唇部は平坦。全体的に丁寧に調整。胴下部も丁寧にナデ調整がされる。底部は角が面取りされる。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎。	なし	なし	—	—	

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身は上から口径/胴径/底径/器高である。
家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (12)

No.	蔵番号	蔵器番号	図版番号	種類	蓋 身	つまみ/屋根 形状 マド枠（底部 cm）/屋根形	接合部孔 縦長軸×横 長軸（cm）	つまみ 台・圈縁 窓数/形	鐫 （cm） 横帯	かえり （cm） 底面孔	大きさ （cm） ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 （西暦）	洗骨年 （西暦）	備考
130		1	—	ボージャー形	蓋	なし	なし	1段・1条	なし	なし	— — 7.8	なし	つまみの無い笠型。鋸端部はやや平坦につくる。ロク口成形後、ナデ調整。	なし	なし	あり	—	—	全体の半分ほど欠失する。
131			—	ボージャー形	身	—	—	—	凹2 凹1 凹1	4個円形	— 20.7 45.6	なし	玉縁口縁で、内傾する。焼成不良により口縁部の一部が歪む。回転成形後、ナデ調整とへう削り調整。	なし	なし	なし	—	—	口縁から胴部、特にマド枠の部分に欠失。
132		2	第38図79 図版28-79	マンガン釉薬形	蓋	宝珠形	あり	2段・2条	2.8	0.6	10.4 30.9 24.2 19.1 14.6	なし	つまみ台は回転削り出しで、2cm弱下位にもう1段作る。鋸端部は平坦。かえりは丁寧なつくり。ロク口成形。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	道光14 （1834）	
133			第38図80 図版28-80	マンガン釉薬形	身	唐破風形貼付	27.4×11.6	3個方形	凹2 凸1 凸3 凸3	6個 半円形	30.6 37.4 22.2 56.8	肩部：弧状文（沈線） 胴部：蓮華文（貼付） 脚下部：波状文（沈線）	口縁部はわずかに外反し、口唇部は平坦。内外面ともにロク口成形後、丁寧なナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部、脚下部は露胎する。	なし	あり	—	道光14 （1834）	底面孔のうち2つは未貫通。
134			—	マンガン釉薬形	蓋	宝珠形	あり	2段・2条	3.1	0.4	10.5 29.7 22.3 17.3 12.6	なし	宝珠は丁寧につくられる。つまみ台削り出し。鋸端部は平坦。かえりは丁寧なつくり。ロク口成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に胴毛で施釉する。	なし	あり	嘉慶年間 （1796-1820）		
135		056 号臺	—	マンガン釉薬形	身	アーチ形貼付	32.5×13.8	3個方形	凹2 凸1 凸3 凹3	9個 三日月形	29.2 38.9 23.4 67.2	肩部：葉文（沈線） 胴部：蓮華文（沈線） 脚下部：波状文（沈線）	外反口縁。口唇部は平坦。ロク口成形後、ナデ調整とへう削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	
136			第37図77 図版28-77	ボージャー形	蓋	扁平形	なし	なし	なし	なし	— 30.8 30.0 11.7	なし	つまみ台のないタイプ。ロク口成形で、外面上部には回転へう削りの痕がみられ、下部はナデ消される。内面は器面がやや滑らか。	なし	なし	あり	乾隆20 年代 （1755-1764）	乾隆26 （1761）	一部欠失のため、死去年が判断不能。
137		4	第37図78 図版28-78	ボージャー形	身	平蓋形貼付 1.2cm	7.6×13.2	5個1方4円	凹2 凹1 凹1	5個円形	26.2 37.0 20.4 52.5	なし	口唇部は玉縁状で、内傾するが、他の資料に比べゆるやか。ロク口成形後、へう削り調整とナデ調整。内外面ともに滑らか。	なし	あり （不願）	—	—	窯印はIIのような形状。底面孔のうち2つは未貫通。	
138			第35図73 図版27-73	赤焼御殿形	蓋	入母屋形	—	—	—	—	41.4 48.7 40.8 22.9	大棟に1対の鰹と間を鋸齒文。正面と背面に大きな牡丹唐草。側面は裏部を黒く彩色し、下半分に牡丹唐草を描く。	内外面に白化粧をした後に、黒で濃淡を付けて施釉する。	なし	あり	雍正4 （1726）	雍正5 （1727）		
139		5	第36図74 図版27-74	赤焼御殿形	身	唐破風形貼付	—	5個1方4円	—	20個円形	48.8× 37.6 47.4× 35.9 39.4	正面と側面は貼付の法師、その下に沈線の蓮華文。側面は上部に牡丹唐草を描く。背面は大きな牡丹唐草。全面、菱形文を連続させて縁取る。	内外面に白化粧をした後に、黒で濃淡を付けて施釉する。	なし	なし	—	—		
140			第37図75 図版28-75	ボージャー形	蓋	なし	なし	1段	なし	なし	11.1 35.0 32.9 11.5	なし	つまみ台のみのタイプ。台の頂部に糸切痕がある。ロク口成形で、外面は回転痕が明瞭に残るが、内面はナデ調整を施しやや滑らか。	なし	なし	あり	—	乾隆22 （1757）	
141		6	第37図76 図版28-76	ボージャー形	身	平蓋形貼付 0.6cm	10.0×12.3	5個1方4円	凹3 凹1 凹1	6個 半円形	31.6 41.4 24.2 55.0	マド枠の中とその周囲に蓮華文と唐草文を細い沈線で描く。	口縁部は玉縁状で内傾。ロク口成形後、へう削り調整とナデ調整。ヒビのある箇所は漆喰の痕がみられる。	なし	あり	なし	—	—	窯印は七のような形状。

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/器高/体部高、身が上から口径/口径/器高/底高である。
 冢形・御殿形は、蓋が上から横長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) / 底部 (長軸×短軸) / 器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (13)

蔵骨器番号	No.	蔵骨器種類	蓋形状	つまみ・屋根	接合部孔	つまみ・台・圏線	罫	かえり		文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
								罫	底面孔							
蔵骨器番号	No.	蔵骨器種類	蓋形状	つまみ・屋根	接合部孔	つまみ・台・圏線	罫	かえり		文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
								罫	底面孔							
056号墓	142	ボージャー形	身	平蓋形貼付	縦長軸×横長軸 5.9×13.0	1個 円形	凹2 凹1 凹1	4個 半円形	なし	なし	玉縁口縁で、内傾する。ロクロ成形後、ナデ調整とへう削り調整。器面調整はやや粗い。	なし	なし	—	—	
	143	マンガン釉蓋形	身	アーチ形貼付	横長軸11.0	—	凹2 凸1 凸3 凹2	17個 円形	肩部：波状文（沈線） 胴部：蓮華文（貼付） 胴下部：波状文（沈線）	外反口縁。口唇部は平坦。ロクロ成形後、ナデ調整とへう削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉するが、口唇部、胴下部、銘書面は露胎する。	なし	なし	—	—	
057号墓	144	ボージャー形	蓋	なし	なし	なし	なし	なし	なし	つまみとつまみ台のない笠型。端部は平坦。ロクロ成形。頂部は調整されずに土偶がくつついた形になる。	なし	なし	あり	嘉慶19 (1814)		
	145	マンガン釉蓋形	蓋	宝珠形	あり	1段・1条	—	1.2	なし	つまみ台は回転削り出し。罫の形状は残存状況が悪く不明。かえりは丁寧に作られるようである。ロクロ成形。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	嘉慶年間? (1796-1820)		罫の残存状況不良。
058号墓	146	ボージャー形	蓋	宝珠形	あり	1段	なし	なし	体部にゆるやかな櫛描波状文を描く。	つまみ台は回転削り出しで、つまみ台の直下はロクロ痕がみられるが全体に丁寧なナデ調整。内面は回転へう削りの後にナデ調整。	なし	なし	あり	康熙40 (1701)		
	147	ボージャー形	身	平蓋形貼付 1.8cm	8.6×13.6	5個 1方4円	凹2 凹1 凹1	2個 円形	胴上部に沈線で蓮華文を描く。	口縁部が玉縁状になり、内傾する。頸部横帯は強く2本ひかれ、突帯状になる。ロクロ成形後、器面は丁寧に調整される。	なし	なし	なし	—	—	
059号墓	148	転用	蓋	なし	なし	なし	3.0	なし	なし	蓋・底の荒焼の埋鉢を蓋として使用。口折れの跡で、口唇部は平坦に成形される。ロクロ成形で、底部はへう削り調整の痕が明瞭に残る。	なし	なし	なし	—	—	
	149	ボージャー形	身	平蓋形貼付 0.4cm	7.8×10.8	3個 1方2円	凹3 凹1 凹1	4個 円形	なし	口縁部は玉縁状で、頸部は直口し、やや長めである。ロクロ成形後、全体的に丁寧に調整される。	なし	なし	あり	嘉慶5 (1800)		
060号墓	150	転用	蓋	なし	なし	なし	2.8	なし	なし	沖繩産の赤煉の鉢を転用したもの。罫内面にあたる口唇部に沈線を2条めぐらせる。ロクロ成形。器面はとても滑らか。	なし	なし	なし	—	—	底面孔のうち1つは未貫通。
	151	ボージャー形	身	平蓋形貼付 0.9cm	8.8×14.0	3個 1方2円	凹3 凹1 凹1	5個 円形	なし	玉縁口縁で、内傾する。ロクロ成形後、ナデ調整。器面は滑らか。	なし	なし	なし	—	—	
061号墓	152	ボージャー形	蓋	なし	なし	1段	なし	なし	なし	つまみは付かない。つまみ台削り出し。罫端部は平坦。ロクロ成形。焼成不良により形がやや歪む。	なし	なし	あり	乾隆45 (1780)		
	153	ボージャー形	身	唐破風形貼付 0.5cm	縦長軸8.8	—	凹3 凹1 凹1	12個 円形	なし	玉縁口縁で、内傾する。ロクロ成形後、ナデ調整とへう削り調整。胴部が焼成不良により形がやや歪む。	なし	なし	あり	—	—	マド枠から半分程を欠失する。

※大きさ (cm) は、ボージャー形・蓋形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高である。家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (14)

No.	蔵番号	蔵器番号	種類	蓋 身	つまみ/屋根 形状 マド枠 (底部 cm) / 屋根形	接合部孔 縦長軸×横 長軸 (cm)	つまみ 台・圈縁 窓数/形	鐫 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
154		5	転用	身	身	—	—	—	—	13.5 23.2 13.3 33.5	頭部直下に2本沈線をめぐらせる。	沖縄産陶器の水薬転用したもの。 口唇部は丸くなくややや長めの頸 部で、胴部が張る器形。丁寧な調 整がされ、器面には疵がある。	なし	なし	—	—		
155			冢形 (石製)	蓋	入母屋形	—	—	—	—	27.4 59.7 45.6 27.1	正面に軒が削り出しにより表現さ れるが、背面には軒は表現されな い。	サンゴ石製。ノミによる削り出 し。外面は滑らかに仕上げられ るが、内面はノミの痕が残る。	大棟、隆棟、隅棟、軒を 縁取るように赤で彩色 するが退色が進む。	なし	なし	—	—	
156		6	冢形 (石製)	身	—	—	2個 方形	—	—	49.4× 35.2 51.8× 37.4 55.6	正面に方形に掘り込みを4面。側 面は方形の掘り込みを3面、背面 にはない。	サンゴ石製。ノミによる削り出 し。外面は滑らかに仕上げられ るが、内面は1.2cm幅のノミの痕 が明瞭に残る。	方形の掘り込み面を縁 取るように赤で彩色す るが退色が進む。	なし	あり	—	—	銘書は墨 が薄くなり ほぼ判 読不能。
157			冢形 (石製)	蓋	入母屋形	—	—	—	—	33.5 24.5 54.5 67.0	なし	サンゴ石製。ノミによる削り出 し。内外面ともにノミの痕が残 るが、内面の方が明瞭に残る。	なし	なし	なし	—	—	素材:サン ゴ石
158			冢形 (石製)	身	—	—	—	—	—	54.0× 39.3 39.3× 38.8 44.5	なし	サンゴ石製。ノミによる削り出 し。内外面ともにノミの痕が残 るが、内面の方が明瞭に残る。	なし	なし	あり	—	—	素材:サン ゴ石
159		8	ボージャー形	身	—	—	—	—	6個 円形	— 23.0 —	なし	玉縁口縁で、頭部はやや直口す る。ロクロ成形後、ナデ調整と へう削り調整。調整は丁寧。	なし	なし	なし	—	—	底部と、口 縁部は1/4程 が残る。胴 部をほとん ど欠失する。
160			マンガン釉蓋形	蓋	饅頭形	あり	2段・1条	2.6	0.1	9.4 28.3 24 15.4 12	なし	つまみ台は削り出し。鐫はやや 上へ反り、端部は丸い。かえり はつくりが粗。ロクロ成形後、 ナデ調整。	マンガン釉を表面全体 に刷毛で施釉する。	なし	なし	—	—	
161			マンガン釉蓋形	身	アーチ形貼付	23.0×8.7	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凹2	7個 半円形	27.2 31.7 18.5 47.8	肩部: 波状文+蓮弁文 (沈線) 胴部: 蓮華文 (沈線) 胴下部: 櫛描波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は中央がやや 凹む。ロクロ成形後、ナデ調整 とへう削り調整。	マンガン釉を表面全体 に刷毛で施釉。口唇部 は露胎する。	なし	あり	—	光緒17 (1891)	
162			ボージャー形	蓋	宝珠形	あり	1段・1条	なし	なし	8.4 30.0 28.4 12.4 9.2	つまみ台は回転削り出しで、端 部は平坦。ロクロ成形後、外面 は丁寧なナデ調整。内面は回転 痕がやや明瞭に残る。	なし	なし	なし	あり	—	—	
163			ボージャー形	身	平臺形貼付 0.9cm	9.2×12.3	3個 1方2方	凹2 凹1 凹1	4個 円形	23.0 34.6 20.6 51.6	なし	口縁部は玉縁状で内傾。内外面に漆喰 が付着。胎土の色は他のボージャー形 と比べ暗い。口唇部にサンゴの目痕が 付く。ロクロ成形後ナデ調整。	なし	あり	なし	—	—	窯印は○ のような 形状。
164			マンガン釉蓋形	蓋	扁平形	あり	1段・1条	3.6	0.2	12 30.7 23.3 16.6 14.1	なし	つまみ台削り出し。鐫端部はや や丸い。かえりはやや粗なつく り。ロクロ成形。鐫付近にマン ガン釉が手形につく。	マンガン釉を表面全体 に刷毛で施釉する。	なし	なし	—	—	
165			マンガン釉蓋形	身	唐破風形貼付	37.0×9.8	3個 円形	凹2 凸1 凸3 凸2	なし	28.4 33.3 22.3 54.5	肩部: 波状文 (沈線) 胴部: 蓮華文 (貼付) 胴下部: 波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は中央がやや 凹らむ。唇部は柱状で付く。回 転成形後、へう削り調整。底面 に漆喰が付着。	マンガン釉を表面全体 に刷毛で施釉。口唇部 と銘書面は露胎する。	なし	なし	—	—	

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/器高/体部高、身は上から口径/口径/器高/器高である。
冢形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (15)

No.	蔵骨器番号	図版番号	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏縁	鐳 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
166	12	—	転用	蓋	—	—	—	3.4	—	14.2 35.5 28.9 16.5	なし	沖繩産の赤焼の鉢を転用したもの。胴内面にあたる口唇部に沈線を1条めぐらせる。ロク口成形。器面はとても滑らか。	なし	なし	—	—	—	
167		—	ボージャー形	身	唐破風形貼付 1.3cm	8.6×11.5	3個 1方2円	凹2 凹1 凹1	なし	28.4 37.1 19.3 48.0	なし	玉縁口縁で、内傾する。ロク口成形後、ヘラ削り調整。	なし	あり	なし	—	—	
168	13	—	ボージャー形	蓋	—	—	—	なし	なし	—	なし	破片のため、全体の形は不明瞭。鐳の端部はやや平坦。ロク口成形。	なし	なし	あり	乾隆50年代 (1785-1794)	—	全体の2/3を欠失する。
169		—	ボージャー形	身	平葺形貼付 0.5cm	縦長軸7.7	—	凹3 凹1 凹1	なし	26.5 24.0 49.5	なし	玉縁口縁で、やや直口する。ロク口成形後、ナデ調整とヘラ削り調整。調整は丁寧。	なし	なし	なし	—	—	マド株の半分程度を含む一部を欠失する。
170	14	—	転用	身	—	—	—	—	—	10.5 13.3 7.2 17.5	なし	沖繩産陶器のいわゆるアンダガミを転用。口縁部はくの字状に外反する。ロク口成形後、器面調整。底面は調整が雑。	なし	なし	なし	—	—	
171		—	マンガン釉薬形	身	—	—	—	—	円形	—	なし	残存状況があまり良くないため、全体像は不明。ロク口成形後、ヘラ削り調整。	なし	なし	なし	—	—	底部が1/4程度の資料。底面孔は未貫通もあり。
172	15	—	マンガン釉薬形	蓋	—	—	1段・1条	3.7	なし	—	なし	つまみ台削り出し。鐳はわずかに下へ傾き、端部は平坦。ロク口成形後調整を行うが雑。	なし	なし	あり	—	—	鐳からつまみ台までの全体での1/5程の残存状況。
173		—	マンガン釉薬形	蓋	饅頭形	あり	2段・1条	2.5	なし	9.4 30 24.7 14.4 11.1	なし	つまみ台削り出し。ロク口成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に剛毛で施釉する。	なし	あり	—	—	
174	1	—	マンガン釉薬形	身	アーチ形貼付	21.3×10.5	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凹2	12個 円形	29.4 33.7 30.2 53.9	肩部：波状文+蓮弁文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：梅描波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は中央がやや凹む。頸部がやや長くなる。回転削り成形後、ナデ消しによる調整が見られる。	マンガン釉を表面全体に剛毛で施釉。口唇部には露胎する。	なし	なし	—	—	
175		—	マンガン釉薬形	蓋	—	—	2段	3.0	0.1以下	8.3 25.5 19.5 12.5 9.3	なし	つまみ台削り出し。鐳端部は丸い。かえりのはつくりが雑。ロク口成形。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	明治19 (1886)	—	
176	2	—	マンガン釉薬形	身	アーチ形貼付	8.1×3.2	3個 方形	凹2 凸1 凹3 凹5	12個 円形	26.3 30.3 28.6 51.2	肩部：蓮弁文+唐団扇? (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は平坦。ロク口成形後、ナデ調整とヘラ削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	胴下部に三日月形に8個の孔がある。

※大きさ (cm) は、ボージャー形・鐳形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身は上から口径/胴径/底径/器高である。家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/梁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (16)

No.	墓番号	蔵骨器番号	図版番号	種類	蓋	つまみ/屋根形状 マド枠 (底部cm) / 屋根形 (cm)	接合部孔 縦長軸×横長軸 (cm)	つまみ台・圓縁窓数/横	鐫 (cm)	かえり (cm)	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
177		3	—	マンガン釉壺形	蓋 身	—	—	2段	3.7	0.2	11.3 31.8 24.2 17.8 12.5	なし	つまみ台削り出し。鋸端部はやや平坦。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	道光28 (1848)	咸豊年間? (1851) - 1861	
178			—	マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	31.5×13.0	3個方形	凹2 凸1 凸3 凹5	10個半円形	33.0 42.3 22.2 66.0	肩部：雲文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は平坦。屋門は柱書がつく。ロクロ成形後、ナデ調整とへう削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部、胴下部、銘書面は露胎。	なし	なし	—	—	
179			—	マンガン釉壺形	蓋	—	あり	2段・1条	3.3	0.3	12 18.5 21.3 — 13.1	なし	つまみは欠失。つまみ台削り出しで、角が丸くなる。鋸はやや平坦で端部はやや丸くなる。かえりはやや粗。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	咸豊11 (1861)	同治2 (1863)	つまみは欠失する。
180		4	—	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	19.5×9.4	3個方形	凹2 凸1 凹4 凹3	6個三日月形 1 半円形4	26.0 31.9 20.0 52.6	肩部：蓮弁文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部はやや平坦。回転成形後、ナデ調整とへう削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	
181		5	第43図92 図版30-92	マンガン釉壺形	蓋	饅頭形	あり	1段	2.8	0.5	10.4 29.8 24.0 17.0 13.0	なし	つまみ台は回転削り出し。鋸端部は丸く、かえりは丁寧に作る。ロクロ成形で外面上部には回転へう削りの痕がみられる。調整はやや丁寧。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	道光12 (1832)	道光23 (1843)	
182			第43図93 図版30-93	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	30.6×12.6	3個方形	凹2 凸1 凸3 凸3	14個半円形	33.6 41.8 23.2 66.4	肩部：繡描波状文 (沈線) 胴部：蓮華文+法師 (貼付) 胴下部：繡描波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部は平坦だが中央がわずかに窪む。内外面ともにロクロ成形の後にナデ調整とへう削り調整を施す。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部、胴下部、銘書面は露胎。	なし	なし	—	—	
183		6	第43図94 図版31-94	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	2段	3.0	0.3	9.3 28.5 22.1 14.0 11.3	なし	つまみ台は角が丸くなり、つまみ頂部は調整が徹底されない。かえりは小さくやや丁寧な調整がされる。ロクロ成形後、内外面にナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	同治3 (1864)	同治10 (1871)	
184			第43図95 図版31-95	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	18.6×11.2	2個方形	凹2 凸1 凸2 凹3	10個円形	29.8 35.0 18.7 53.6	肩部：蓮弁文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部は平坦だが中央がわずかに窪む。内外面ともにロクロ成形の後に丁寧なナデ調整を施す。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部、胴下部は露胎する。	なし	なし	—	—	
185		7	第43図90 図版30-90	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	1段	2.2	0.3	7.2 21.1 16.3 10.3 7.6	なし	つまみ頂部が窪む。つまみ台は回転削り出し。鋸は反り、鋸の端部は丸く、かえりは速。内外面ともにナデ調整を行うが、回転削りが残る。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	明治19 (1886)	—	
186			第43図91 図版30-91	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	11.6×7.5	1個方形	凹2 凸1 凹2 凹2	5個半円形	21.8 24.3 15.4 36.6	肩部：蓮華文+葉文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁で、口唇部は平坦でやや外傾する。底部に長方形状の脚が3つ付く。内面はやや明瞭に回転痕が残る。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部の施釉が粗で口唇部は露胎。	なし	なし	—	—	骨の代わりに石が入る。
187		1	第45図97 図版31-97	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段・1条	2.8	0.5	8.4 22.6 15.9 11.7 7.7	なし	つまみ台は回転削り出し。鋸は下向きだが、焼成不良により一方向にゆがむ。かえりはやや丁寧な調整がされる。ロクロ成形後。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	
188		059号墓	第45図98 図版31-98	マンガン釉壺形	身	瓦屋形貼付	21.4×8.6	3個方形	凹2 凸1 凹2 凹2	5個円形	24.8 30.3 21.7 49.2	肩部：波状文 (沈線) 胴部：蓮華文+法師 (貼付) 胴下部：波状文 (沈線)	直口縁で、口唇部は平坦。屋門は貼り付けた瓦屋形だが柱と柱間は沈線で描かれる。頂部玉飾は斜線。内外面ともに丁寧にナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部と銘書面は露胎する。	なし	なし	—	—	

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から口徑/内径/器高/体部高、身が上から口徑/内径/器高/器高である。
家形・御殿形は、蓋が上から横長/桁長/梁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) / 底部 (長軸×短軸) / 器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (17)

No.	墓番号	蔵骨器番号	図版番号	種類	蓋		つまみ/屋根形状 マド枠 (庇部cm) / 屋根形	接合部孔 縦長軸×横長軸 (cm)	つまみ台・圏線窓数/横	鏝 (cm) 横帯	かえり (cm) 底面孔		文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
					身	蓋					底面孔	※								
189	059号墓	2	—	マンガン釉蓋形	蓋	宝珠形	あり	縦長軸×横長軸 (cm)	窓数/横	1段・1条	4.0	0.4	なし	つまみ台削り出し。鏝はやや上へ返り、端部は丸い。つまみとかえりはやや丁寧な作り。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	嘉慶25 (1820)	
190			—	マンガン釉蓋形	身	唐破風形貼付	24.5×8.9		3個方形	凸1 凸3 凸3	10個円形		肩部：波状文 (沈線) 胴部：法師像+蓮華文 (貼付) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は下へやや傾く。口唇部は柱貫がつく。ロクロ成形後、器面調整されるがやや雑。底面に陶器片が落着いている。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部と銘書面は露胎する。	なし	なし	—	—	
191			—	マンガン釉蓋形	蓋	宝珠形	あり		2段	3.3	0.3	なし	つまみ台はナデ調整によって角が丸くなる。鏝はやや平坦、端部は丸い。かえりはやや丁寧に作られる。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	—	
192	061号墓	1	—	マンガン釉蓋形	身	唐破風形貼付	28×10		3個方形	凸1 凸3 凸3	4個半円形		肩部：櫛描波状文 (沈線) 胴部：蓮華文 (貼付) 胴下部：櫛描波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部はやや平坦、やや下へ傾く。ロクロ成形後にナデ調整とヘラ削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部と胴下部は露胎する。	なし	なし	—	—	
193			—	マンガン釉蓋形	蓋	—	—		—	2.7	0.2	なし	つまみ、つまみ台は欠失するたため不明、鏝端部はやや平坦。ロクロ成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	光緒年間? (1875-1908)		
194			—	マンガン釉蓋形	身	アーチ形貼付	14.5×6.8		3個円形	凸2 凸1 凸3 凸2	7個円形		肩部：波状文+蓮弁文 (沈線) 胴部：唐団扇? (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は中央をくぼませ、下へ傾く。ロクロ成形後、ナデ調整とヘラ削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	—	—
195	062号墓	1	第47図100 図版31-100	ボージャー形	蓋	扁平形	なし		なし	なし	なし	—	つまみ台のないタイプで、鏝端部は平坦。外面上部は回転削りの痕、内外面にロクロ成形の痕が残る。焼成不良により一部が反る。	なし	なし	なし	—	—	底面孔のうち1つは未貫通。	
196			第47図101 図版31-101	ボージャー形	身	平蓋形貼付 1.9cm	10.0×15.0		3個1方2方	凸2 凸1 凸1	7個円形		マド枠の左側のみに蓮華文が沈線で描かれる。	口縁部は玉縁状で、内傾する。ロクロ成形で、器面は内外面ともに丁軍にナデ調整を施す。底面が焼成不良のため膨れ、すわりが悪い。	なし	なし	なし	—	—	
197			第47図102 図版32-102	ボージャー形	蓋	扁平形	なし		1段・1条	なし	なし	なし	つまみ台は回転削り出し。つまみは小型。鏝端部は中央が窪み、外面はヘラ削りとナデ調整が異なる。焼成不良のため一部が反る。	なし	なし	なし	あり	乾隆23 (1758)		
198	062号墓	2	第47図103 図版32-103	ボージャー形	身	唐破風形貼付 1.9cm	9.1×14.8		3個1方2方	凸3 凸1 凸1	6個円形		口縁部は玉縁状で内傾する。マド枠は上の庇が厚くつくられ下の庇と左右の柱は一段低くなる。底面が焼成不良のため膨れてすわりが悪い。	なし	なし	あり	なし	—	—	底面孔の1つは未貫通。窯印は七のような形状。
199			—	荒焼御殿形	蓋	—	—		—	—	—	—	型押し後、文様を施文しナデ調整。内面は型押し後、ヘラ削りにより調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	道光5 (1825)	マドが正面・背面・側面に各3方。側面は2円有。	
200			—	荒焼御殿形	身	位牌形貼付	—		3個1方2方	—	43個円形		前面は2条1組の沈線で周りを縁取り、側面には指の痕が残る。背面縁部に大きく亀裂が入り、漆喰で埋めた痕あり。右側面にも亀裂を漆喰で押さえた痕あり。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	なし	—	—	—	

※大きさ (cm) は、ボージャー形・蓋形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。
家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵兵器観察一覧表 (18)

No.	裏番号	蔵器番号	図版番号	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圈縁窓数/横	鐳 (cm)	かえり (cm)	底面孔	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
201	4		—	マンガン釉壺形	蓋	饅頭形	あり	1段・1条	2.7	0.1	10.8 29.4 23.8 — 11	なし	つまみ台削り出し。鏝はやや上へへり、端部は丸い。かえりはつくりが雑。回転成形。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	光緒17? (1891?)	銘書の一部の文字が薄くなり判読不能な字がある。
202				マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	19.0×9.7	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凹2	なし	27.4 32.3 19.3 52.8	肩部：華文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は下へ傾く。底面は逆台形状の脚が3つつく。口クロ成形後、ヘラ削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部は露胎する。	なし	なし	—	底面に脚3つ。	
203	5	—	—	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	2段・1条	4.0	0.2	9.6 29.7 21.8 17.4 11.8	なし	つまみ台削り出し。鏝はやや平坦。かえりはやや雑。器体の約1/3の範囲に上部から胴部まで右灰が付着し、一部は内面の鏝まで広がる。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	咸豊年間? (1851-1861?)		
204				無釉壺形	身	唐破風形貼付 0.6cm	13.6×13.0	3個 1方2円	凹1 凹3 凹1 凹1 凹1	4個 円形	31.4 39.2 23.8 55.6	肩部：雲文+方形文 (印刷) 胴部：蓮華文 (貼付)+唐団扇+雲文 (印刷) 背面に進貢船を沈線で描く。	直口縁で、口唇部は平坦でわずかに内側に傾く。内外面ともに口クロ成形後、ヘラ削りとナデ調整を丁寧に行う。	マド枠と玉飾、胴部文に施釉。口唇部の蓮華文をマンガン釉で彩色する。	なし	なし	—	器形から蓋No. 221とセットの可能性有。	
205	6		第49図109 図版33-109	マンガン釉壺形	蓋	扁平形	あり	1段・1条	3.3	0.3	9.5 29.0 21.7 14.2 10.6	なし	つまみ台は回転ヘラ削りで、内面の接合部孔は粘土が削り取られる。端部は丸く、かえりはつくりが雑。器面はナデ調整され滑らか。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	あり	あり	咸豊9 (1859)	同治2 (1863)	窯印は七に似た形状。つまみに沈線、胴内側に施釉。
206				マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	26.7×11.4	2個 方形	凹1 凹1 凸3 凸3	5個 半円形	27.9 33.8 21.4 54.2	肩部：波状文 (沈線) 胴部：蓮華文 (貼付) 胴下部：波状文 (沈線)	口縁部はやや外反し、口唇部は平坦。内外面ともに口クロ成形後、丁寧なヘラ削りとナデによる調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部と銘書面に露胎する。	なし	あり	—	道光18 (1838)	蓋と身とで銘書が違う。
207	062 号臺		第49図107 図版33-107	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	2段・2条	3.6	0.5	12.4 29.2 21.2 16.8 10.7	なし	つまみ台は回転ヘラ削りで段つきの。鏝は上へへり端部は丸い。かえりはやや雑。口クロ成形後、外面は丁寧にナデ消すが内面は回転痕が残る。	マンガン釉を表面全体に施釉。	なし	あり	嘉慶年間 (1796-1817)		
208	7		第49図108 図版33-108	マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	30.6×8.8	1個 方形	凹2 凸1 凸3 凸3	4個 三日月形	27.6 35.6 20.4 54.0	肩部：なし 胴部：蓮華文 (貼付) 胴下部：なし	直口縁部で、口唇部は平坦。唇の頂部に玉飾はない。口クロ成形で、外面はナデ調整と胴下部にヘラ削り調整、内面は回転痕が残る。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部、胴下部、銘書面は露胎。	なし	なし	—	—	
209				マンガン釉 庇付壺形	蓋	宝珠形	あり	1段・2条	3.5	0.6	11.6 30.4 22.3 16.6 11.0	体部の上半分を庇にし、上面に半載竹箒を強めに押し立て的な瓦を表現する。降棟が4つ付く。	つまみ台は回転削り出し。鏝は平坦だが一部焼成不良のため歪みや、端部はやや丸い。かえりはやや雑。内外面ともに口クロ成形後ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉。	なし	あり	—	道光5 (1825)	マドが庇の下部に3円錐すつもの4組あけられる。
210	8		第50図116 図版34-116	マンガン釉 庇付壺形	身	位牌形貼付	25.0×11.2	3個 1方2円	凹2 凸1 凸1 凸2	6個 円形	27.4 35.6 21.6 57.6	肩部：龍文+法師+蓮華文+花文 (貼付) 胴下部：雲文 (貼付)	口縁部はわずかに外反する。口唇部は平坦。口クロ成形後、外面はナデ調整と胴下部にヘラ削り調整、内面はナデ調整を施す。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部、胴下部、銘書面は露胎。	あり	あり	—	道光5 (1825)	底面孔のうち3つは未貫通。
211				マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	2段・1条	3.4	0.1	10.5 27.2 20.5 15.5 10.9	なし	つまみ台削り出し。つまみはつくりが丁寧。鏝端部は丸い。かえりはつくりが雑。口クロ成形。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	—	
212	9	—	—	マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	23.7×10.0	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凸3	7個 円形	27.8 33.0 19.7 51.6	肩部：波状文+蓮弁文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部はやや平坦。口クロ成形後、器面調整するが、やや雑。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部と胴下部は露胎する。	なし	なし	—	—	

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から口徑/内径/器高/体部高、身が上から口徑/胴径/底径/器高である。
家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (19)

No.	蔵骨器番号	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏縁窓数/横	鍔(cm)	かえり(cm)	大きさ(cm)		文様	成形/調整	軸葉/施軸範囲	窯印	銘書	死去年(西暦)	洗骨年(西暦)	備考
									縦長軸×横長軸 (cm)	底面孔								
213	10	マンガン釉壺形	蓋	—	あり	1段・1条	2.8	0.4	10.9 29.6 22.6 — 12.6	—	なし	つまみは欠失。つまみ台は回転削り出し。鍔はやや下へ傾き、先端は丸い。かえりは作りが丁寧。内外面ともにロク口成形後にナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施軸する。	なし	あり	—	道光29 (1849)	
214		マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	22.6×10.8	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凸3	15個 円形	27.8 33.0 19.7 51.6	—	肩部：櫛描波状文（沈線） 胴部：蓮華文（貼付） 胴下部：櫛描波状文（沈線）	外反口縁で、口唇部は平坦。ロク口成形後、内外面ともにナデ消すが内面は回転痕が残る。	マンガン釉を表面全体に施軸。口唇部、胴下部に施軸。銘書面は露胎。	なし	あり	—	道光29 (1849)	底面孔の4つは未貫通。内面に七の鏡文字状の墨書。
215		マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	2段・2条	3.1	0.7	12.5 29.2 22.3 16.5 10.8	なし	なし	つまみ台は回転削り出し。鍔は上へ反り端部は丸い。かえりはつくりがやや雑。ロク口成形後、内外面ともにナデ消すが内面は回転痕が残る。	マンガン釉を表面全体に施軸する。	なし	あり	—	嘉慶17 (1812)	つまみ台接合部孔の周りを墨で囲う。
216		マンガン釉壺形	身	唐破風形貼付	29.4×11.8	1個 方形	凹2 凸1 凸3 凸3	5個 半円形	29.0 35.9 21.2 54.2	—	肩部：なし 胴部：蓮華文（貼付） 胴下部：なし	直口縁。口唇部は平坦。ロク口成形後ナデ調整するが、外面は回転痕がやや明瞭に残るが、内面は丁寧になデ消す。	マンガン釉を表面全体に施軸。口唇部、胴下部に施軸。銘書面は露胎。	なし	なし	—	—	
217	12	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段・1条	3.5	0.2	10.1 29.2 21.5 12 7.4	なし	なし	つまみ台削り出し。鍔端部はやや平坦。かえりはつくりがやや雑。ロク口成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施軸する。	なし	あり	—	道光14 (1834)	
218		マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	25.3×11.5	3個 方形	凹2 凸1 凸2 凸4	7個 半円形	27.9 34.1 19.4 55.0	—	肩部：花文？（沈線） 胴部：蓮華文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	外反口縁。口唇部は下へ傾く。ロク口成形後、器面調整がされるがやや雑。	マンガン釉を表面全体に施軸。口唇部と銘書面は露胎する。	なし	なし	—	—	
219	13	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	19.0×11.5	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凸3	9個 半円形	26.6 33.4 19.4 48.4	—	肩部：蓮弁文の先を唐草風にした形状（沈線） 胴部：蓮華文（沈線） 胴下部：波状文（沈線）	外反口縁。口唇部は平坦に作られるが焼成不良のため一部窪む。ロク口成形後、内外面ともに丁寧にナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施軸。口唇部と銘書面は露胎する。	なし	なし	—	—	底面孔は全て未貫通。
220		マンガン釉壺形	蓋	—	—	—	3.2	0.2	—	なし	なし	上部欠失のため、つまみとつまみ台の形状は不明。鍔と鍔端部は平坦。かえりも丁寧に作られる。	マンガン釉を表面全体に施軸する。	なし	あり	—	—	
221	1	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段・2条	3.3	0.6	13.0 30.2 22.2 17.6 11.8	なし	なし	つまみ台は回転削り出し。鍔は平坦で、鍔端部はナデ調整は行われていないが、全体的につくりは丁寧。ロク口成形で内外面ともに調整を施す。	マンガン釉を表面全体に施軸。口唇部と銘書面は露胎する。	なし	あり	—	嘉慶21 (1816)	器形などからNo. 204とセットの可能性がある。
222		転用	蓋	—	—	—	—	1.2	5.8 5.4 3.5 —	なし	なし	沖繩産陶器のいわゆるアンダーガミの蓋を利用。つまみは後から付けられる様である。ロク口成形で器面は滑らか。	鉛釉を表面全体に掛け、つまみの周りを蛇の目状に掻き取る。	なし	なし	—	—	
223	070号墓	転用	身	—	—	—	—	—	7.5 10.5 6.2 10.9	なし	なし	中国南部か東南アジア産の小壺と思われる。外反口縁で胴部が貼る器形。ロク口成形だが、全体に釉が掛かり調整は不明。	褐色の釉葉を内外面全体に施軸する。	なし	なし	—	—	骨の代わりにサングと貝が入れられている。

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高である。家形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部（長軸×短軸）/底部（長軸×短軸）/器高である。

第5表 蔵骨器観察一覧表 (20)

No.	墓 番号	蔵 骨器 番号	図版番号	種類	蓋 身	つまみ/屋根 形状 マド枠 (底部 cm) / 屋門形	接合部孔 縦長軸×横 長軸 (cm)	つまみ 台・圏線 窓数/形	鏝 (cm) 横帯	かえり (cm) 底面孔	大きさ (cm) ※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年 (西暦)	洗骨年 (西暦)	備考
224		1	—	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段・1条	2.7	0.2	7.8 24 17.7 13.1 8.8	なし	つまみ台削り出し。鏝と髷端部は平坦。かえりも丁寧に作られる。回転成形後、ナデ調整。	マンガン釉を表面全体に刷毛で施釉する。	なし	あり	—	咸豊8 (1858)	
225			—	マンガン釉壺形	身	アーチ形貼付	—	—	—	凹2 凸1 凸2 凹4	7個 半円形	— — 16.4 35.2	肩部：波状文+蓮弁文 (沈線) 胴部：蓮華文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	外反口縁。口唇部は平坦。回転成形後、器面調整。焼成不良のため胴部がふくれで歪む。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部と胴下部は露胎する。	なし	なし	—	口縁部から 胸部まで1/3 を欠失。残 存状況から 屋門はアー チ状か。
226	071 号墓	2	—	マンガン釉壺形	蓋	宝珠形	あり	1段・1条	4.0	0.1以下	9.7 29 21.3 — 12.1	なし	つまみ台削り出し。鏝と髷端部は平坦。回転成形後、ナデ調整を施す。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	—	—	
227			—	マンガン釉壺形	身	—	—	—	凹2 凸1 凸3 凸3	不明 円形	—	—	肩部：波状文 (沈線) 胴部：前面に蓮華文 (貼付) 背面に沈線で花文 (沈線) 胴下部：波状文 (沈線)	全体の1/2程が残る資料。前面を主に欠失。外反口縁部。口唇部はやや平坦。回転成形後、ナデ調整とヘラ削り調整を施す。	マンガン釉を表面全体に施釉。口唇部と胴下部は露胎する。	なし	なし	—	全体の半分 ほどが残る 資料だが、 前面を欠失 する。

※大きさ (cm) は、ボージャー形・壺形は、蓋が上から上部径/口径/内径/器高/体部高、身が上から口径/胴径/底径/器高である。
冢形・御殿形は、蓋が上から棟長/桁長/器高、身は上から上部 (長軸×短軸) /底部 (長軸×短軸) /器高である。

第5章 銘書の分析

調査では、合計69基の墓が検出された。これらの遺構と出土遺物の概要については、前章で報告を行った。本章では、蔵骨器に記された銘書についてその詳細を報告する。報告は、銘書の内容を整理した上で、各墓の様相について所見を述べる。

第1節 資料の概要

銘書^{みがち}とは、蔵骨器に記された墓誌銘を指す方言である。その主な記載内容としては、被葬者の姓名、位階、死亡・洗骨年月日などが挙げられる。銘書は基本的には墨書で記され、蔵骨器の蓋と身に記される。今回の調査地から出土した蔵骨器は蓋裏に書かれたものが多いが、身の屋門内や口唇部に記されるものもある。この傾向は、この地区に限ったことではなく、一般的な傾向であることはこれまでの近世墓の調査より明らかである。

本調査で出土した蔵骨器で概ね復元することができた資料は蓋と身をあわせて227点で、そのうち銘書が記されたものは114点である。これらの詳細については第6表に記した。同表は銘書の記された蔵骨器を墓単位で取り上げ番号順に並べ、それぞれの銘書の内容と被葬者名、死去・洗骨年月日を記載したものである。関連する情報は「備考」に記した。なお、蔵骨器の取り上げ番号については、第4章の図版および本文中の記載、第5表の番号と対応する。

本章では銘書の判読によって各墓の被葬者集団の近世時点における身分を判定した。近世琉球の身分制度では士族（系持）と百姓（無系）の両身分が存在した。以下に身分判定の根拠を挙げる。

士族身分の判定。①「氏」名をもつ（例：毛氏〇〇、向氏〇〇等）。②名前に名乗り頭をもつ（例：朝〇、盛〇等）。③士族にのみ使用される位階（例：子、里之子、里之子親雲上、親方、按司等）。

百姓身分の判定①所属する間切名もしくは村名を記載する（例：浦添間切前田村）。②屋号を記載する。（例：「川ノ前大屋」等）。③無位階の人物。その場合「名+姓」で記される（例：「かめ宮里」）。これらの要素を含まないものについては、身分の判定が困難である。例えば、両身分ともに使用される位階「にや、筑登之、筑登之親雲上、親雲上」などは単独での判定は困難であるが、墓単位で検証することで被葬者の身分を判定することができる場合が多い。

第2節 銘書からわかる各墓の様相

銘書の内容については、前節に示したとおりである。本節では、銘書の内容を基に各墓についての所見を述べる。なお、各墓の報告については、「墓番号（身分、家名）」のスタイルで報告を行う。

（1）001号墓〔士族、練氏（家名不明）の墓〕

該墓における最も古い洗骨年は蔵骨器1の同治2年（1863）であり、近世末期に造墓されたと考えられる。また、蔵骨器4には練氏六男玄■思亀と記されていることから、被葬者は首里士族・練氏の人々であることがわかる。

(2) 009号墓 [士族、召氏佐久川家の墓]

該墓における最も古い紀年は蔵骨器9の乾隆46年(1781)である。該蔵骨器には「嫡子靄千代」が収められているが、童名のみの記載であるため成人前に死去した可能性が高い。被葬者が成人であるもので、最も古い紀年は墓室正面奥に安置された蔵骨器4である。該蔵骨器には嘉慶4年(1789)に洗骨された佐久川親雲上(召後祥)夫妻が収められている。また、蔵骨器5、7は蔵骨器4と洗骨年が近く召後祥の近親者であることが想定される。これらの関係性から該墓は召後祥を中心に造墓が行われたことが想定される。ただし、蔵骨器5は道光4年(1861)に合葬されているため、この時期に造墓もしくは蔵骨器の配置の改変が行われた可能性もある。

家譜が現存しないため、正確な世代数は把握できないが凡そ5、6世代が利用したと考えられる。最も新しい紀年は蔵骨器12の合葬年の昭和19年(1944)であることから、該墓は18世紀後半から20世紀中頃まで使用されたことがわかる。なお、『歴代宝案』に乾隆45年(1780)の進貢使節のなかに「在船使節」として「召後祥」の名前が確認できる。

(3) 019号墓 [不明]

銘書があるのは蔵骨器1のみで被葬者名は不明だが、乾隆27年(1762)に死去、もしくは洗骨されたことがわかる。

(4) 027号墓 [百姓、平良・知念家の墓]

該墓で最も古い紀年は蔵骨器14の「乾隆33年(1768)」である。銘書が不鮮明で元号がはっきりとはしないが、器型と十干十二支の照合により乾隆年間に該当すると判断した。乾隆33年が最も古い紀年ではあるが、該墓の全体的な傾向としては咸豊年間以降の資料が大半を占める。また、蔵骨器12に「首里區山川町」と記されていることから、首里に居住する百姓身分の系統であることがわかる。該墓の被葬者には主に平良と知念の2姓が登場するが、近世期の銘書には平良姓しか現れない。近代に入ると一部の銘書に平良を消して知念に書き換えを行うものが登場する。反対に蔵骨器1・蔵骨器6のように知念を消して平良に書き換えを行っているものもある。平良姓の人々が近代期に平良系と知念系に別れたと理解できようか。このことから該墓は家族墓というよりは門中墓に近い利用のされ方であったことが想定される。

なお、蔵骨器9には「御轎夫頭知念筑登之親雲上」という表現が見られる。これにより知念筑登之親雲上という人物が御轎夫(国王の輿を担ぐ役職)の頭の職に就いていたことがわかる。

(5) 041号墓 [不明]

該墓からは銘書の記された蔵骨器が2点得られたが、そのいずれも銘書の残存状況が悪く、具体的な被葬者名等は不明である。カタカナで記された銘書と「昭和」と思われる箇所があるため、少なくとも近代期に使用されていた点を確認できる。

(6) 049号墓 [不明・又吉家の墓]

蔵骨器1、2ともに嘉慶21年(1816)9月23日に洗骨されている。蔵骨器1に「次男又吉筑登之」、蔵骨器2に「次男又吉筑登之母親」が収められていることから、該墓が「次男又吉筑登之」母子のためにつくられた可能性がある。なお、身分は不明である。

(7) 050号墓 [不明]

銘書からわかる被葬者は「思加那」「次男筑登之親雲上■■■」である。記載から百姓身分であることが想定されるが詳細は不明である。

(8) 051号墓 [百姓・金城家の墓]

蔵骨器2に「三ら金城母親」が乾隆57年(1792)7月7日に洗骨されている。この銘書の記載から被葬者は百姓身分の人々であることがわかる。

(9) 052号墓 [不明]

名前不明の人物が同治4年(1865)11月14日に洗骨されている。

(10) 054号墓 [士族・夏氏兼城家の墓]

該墓でもっとも古い紀年は蔵骨器2の明治27年(1894)で、もっとも新しい紀年が大正12年(1923)であることから近代期に造成され、利用された墓であることがわかる。兼城賢知とその子供達が葬られているか。

(11) 055号墓 [士族・新参池氏金城家の墓]

該墓でもっとも古い紀年は蔵骨器8の同治6年(1867)で、もっとも新しい紀年は蔵骨器5の昭和11年(1936)である。このことから近世末から戦前期にかけて利用された墓であることがわかる。蔵骨器1・3・4・8は「五男」の子供である旨が記されている。蔵骨器8は該墓中で最も古い紀年をもつ資料であることから五男の金城某が該墓を造墓したと考えられる。

(12) 056号墓 [士族・那氏平識家の墓]

該墓で最も古い紀年は蔵骨器5の雍正5年(1727)である。同蔵骨器には造営した墓の由来が「伝記」として記されており、それによると当初墓は真和志間切の真嘉比村に造られたことがわかる(「伝記」の詳細は後述)。経塚に墓を移転した年代は不明であり、造墓および使用の開始時期は判然としない。蔵骨器No.145の道光年間に洗骨された「嫡子松金」以降の銘書を確認できないため、近世末の時点で使用されなくなった可能性もある。

(13) 057号墓 [百姓・我謝家の墓]

該墓でもっとも古い洗骨年は蔵骨器10の康熙40年(1701)で、もっとも新しいと考えられるものは蔵骨器No.172で正確な年代を特定できないが「ムカヘス」と片仮名を使用していることから近代期のものである。ただし、墨書が薄れて判読ができない蔵骨器6に僅かに文字を確認できるため康熙40年を遡る可能性もある。蔵骨器16には「小樽我謝」と名+姓の順に氏名を表記する百姓身分に特徴的な記載をしているため、同墓は百姓身分の人々が使用したと考えられる。また、蔵骨器9には「大宗」と記されていることから同家が近代期に門中の本家として機能していたことがわかる。

(14) 058号墓 [士族・向氏喜久本家の墓]

該墓中で最も古い洗骨年は蔵骨器5の道光十二年(1843)である。もっとも新しい洗骨年は蔵骨器

1 の明治25年である。蔵骨器 2 に収められている「喜久本里之子親雲上妻鍋」と蔵骨器 1 に収められている「喜久本里之子親雲上四男松」、蔵骨器 7 に収められている「喜久本里之子親雲上五男真牛」は親子であることがわかり、そのいずれにも「母方亀濱」と記されている。その意味するところは不明だが、妻鍋が亀濱家出身であることがわかる。2、3 代にかけて使用されたか。明治期には使用されなくなった可能性がある。

(15) 059号墓 [士族・高良家の墓]

蔵骨器 2 に嘉慶25年（1820）に洗骨された「高良里之子妻真靄」が収められている。その他の蔵骨器の銘書が確認できないため、造墓または使用年代は不明である。

(16) 061号墓 [不明・西平家の墓]

蔵骨器 1 に光緒年間に洗骨された西平某が収められている。

(17) 062号墓 [百姓・宮城・宮里家の墓]

該墓で最も古い紀年は乾隆23年（1758）であり、最も新しい紀年は光緒20年（1894）である。蔵骨器のなかには「宮城」に取消線がひかれ「宮里」に書き直されている。咸豊 9 年（1859）以前の銘書には「宮城」と記されているため、近世末期から近代初頭に家名が宮城から宮里に変わったことがわかる。また、同墓では被葬者の整理が行われており蔵骨器 8 から 2 人の被葬者を蔵骨器 3 に移し替え、世代別に蔵骨器を仕立て直したことが確認できる。その他には蔵骨器 2 に乾隆20年代に洗骨された宮里筑登之夫妻が最初に収められていたが、光緒20年（1894）に新たに 3 人が追加されたことが確認できる。この被葬者の整理と宮里への書き換えは同時期に行われた可能性がある。

なお、蔵骨器 2 は光緒20年の被葬者を追加した際に、銘書の追加に加えて薄れていた元の銘書を新たに書き直したことが確認できる。

(18) 071号墓 [不明・真栄城家の墓]

蔵骨器 1 の被葬者は「次男真栄城筑登之女子蒲戸」で洗骨年は咸豊 8 年（1858）である。蔵骨器 2 の紀年は不明だが、該墓に収められた蔵骨器は上記の 2 点であることから造墓および使用年代は19世紀中頃に限定される可能性がある。

第 3 節 056号墓蔵骨器 5 に記された「伝記」について

056号墓の墓室より出土した蔵骨器 5（蔵骨器の出土状況や遺物の詳細については、第 4 章第10節を参照）の蓋裏には、「伝記」と題した墓の由来が墨書で記されており、その内容からは当初当該墓は真和志間切の真嘉比村に造られたことがわかる。このような内容が記載されているものは、本地区中では 1 点のみである。また、これまで前田・経塚近世墓の報告された資料でも同様の銘書は確認されていない。このことから本資料については特筆すべき資料として、以下に内容の詳細を報告する。報告にあたっては、原文の翻刻およびその現代語訳を行った。また、その内容について那覇市立歴史博物館に所蔵の家譜資料を参照しつつ、銘書に書かれた人物とその周辺の人物の家系図を復元した上で、銘書情報の整理を行った。以下にその内容について記す。

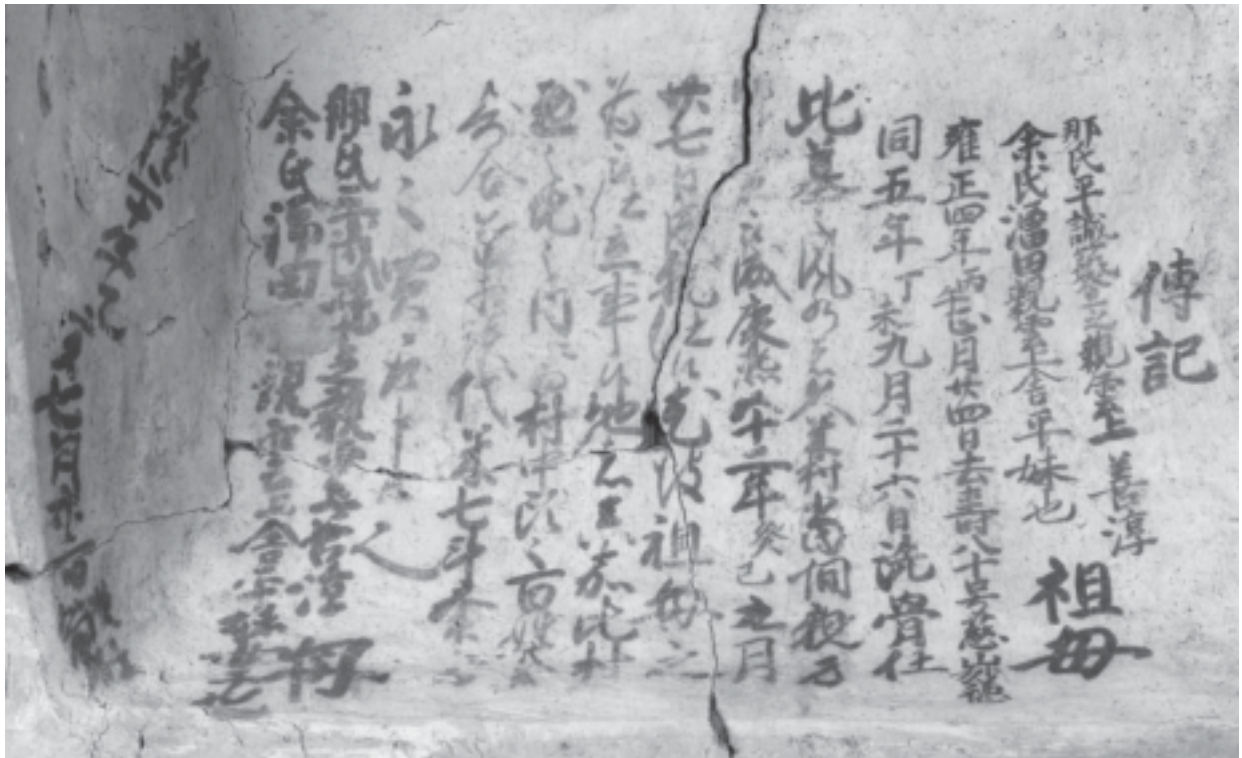


写真2 056号墓出土の蔵骨器5蓋裏の銘書

(1) 原文

傳記/那氏平識筑登之親雲上善淳祖母/余氏湧田親雲上舎平妹也/雍正四年丙午正月廿四日去寿八十号
慈山妙徳/同五年丁未九月二十六日洗骨仕/此墓之風水者久米村當間親方/御■■被成康熙五十二年癸
巳九月/廿七日成就仕候尤致祖母之/為■■〔御カ〕仕立事候地者真嘉比村/屋之地之内二而村中頭々百姓
共茂/分合達相■■代米七斗五升二而/永々買取申候也/那氏平敷筑登之親雲上善淳母/余氏湧田親雲上舎
平妹女子也/乾隆二十年乙亥七月廿二日洗骨仕

(2) 現代語訳

伝記。

那氏の平識筑登之親雲上の祖母（余氏湧田親雲上舎平の妹）は雍正4年（1726）年1月24日に死去した。享年80歳で〔戒名は〕慈山妙徳である。雍正5年（1727）の9月26日に洗骨をした。

此の墓の風水は久米村の當間親方に〔見ていただき〕、康熙52年（1713）9月27日に完成した。なお、祖母のために造った墓地は真嘉比村の村屋の敷地内なので村役人・百姓たちに事情を伝え、代米（墓地代の米）7斗5升で永久に買い取った。

那氏平識筑登之親雲上善淳の母（余氏湧田親雲上舎平妹の女子）は乾隆20年（1755）7月22日に洗骨をした。

(3) 解説

銘書には蔵骨器に収められた被葬者の情報以外に造墓にまつわる一連の経緯が「伝記」として記されている。まず、造墓の主体となった人物であるが、被葬者の続柄が平識筑登之親雲上善淳を中心に記載されている。このことより、造墓を行ったのが善淳であることが理解できる。墓は善淳の祖母

(余氏湧田親雲上舎平の妹) のために造られた。墓地は久米村の當間親方が風水を見て選定を行い、真嘉比村に定められた。墓地は村役人と百姓たちの立ち会いのもとで米七斗五升にて購入した。墓は康熙52年(1713)に完成し、祖母が雍正5年(1727)に洗骨をしているので、生前に造墓する「寿蔵墓」の類であったことがわかる。これまで県内において寿蔵墓として知られる墓是那覇市識名に所在する上里墓(1525年造墓)のみであり、本例は貴重な事例である。該蔵骨器は当初、祖母のみ収められていたが乾隆20年(1755)に善淳の母(余氏湧田親雲上舎平妹の女子)を洗骨して追加している。

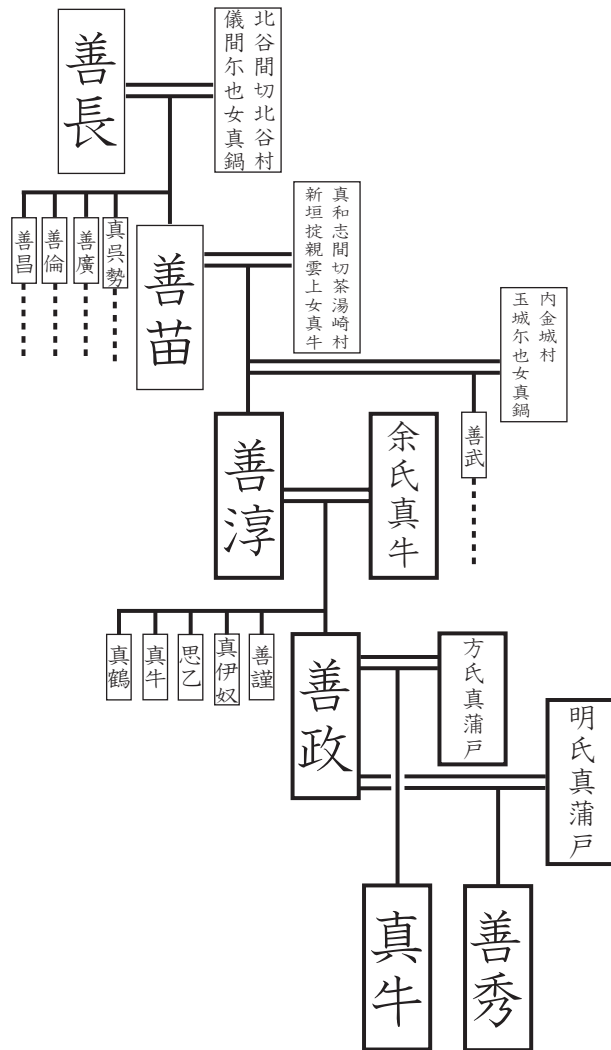
なお、「伝記」中に登場する當間親方とは補唇術(兎唇治療)を中国で学び、琉球に持ち帰ったことで知られる魏士哲(高嶺親方徳明)を指すと考えられる。魏士哲は康熙49年(1710)に親方位(紫金大夫)に昇り、康熙51年(1712)に小禄間切當間の地頭職に就任していることから、墓の完成した康熙52年時点では當間親方を名乗っていたためである。

該蔵骨器に収められている祖母と母については家譜資料との照合を行った。『那姓家譜』によると善淳は首里士族那氏の六世にあたる。家譜で確認できる祖母は北谷間切同村儀間尔也女真鍋であり、母は真和志間切茶湯崎村新垣掟親雲上女真牛である。善淳の室が余氏湧田筑登之親雲上舎明女真牛であることから、銘書に記された人物は妻方の祖母と母である可能性が高い。

〈引用・参考文献〉

『那姓家譜 大宗 平識家』(複製資料) 那覇市歴史博物館蔵

『歴代宝案 校訂本 第六冊』沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編2006



第56図 復元した家系図

第6表 銘書一覧表(1)

No.	墓 番号	蔵骨 器 No.	図版 番号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
1	001 号墓	1	第10図 1	〈蓋〉大清同治二年癸亥七月廿三日洗骨■〔母カ〕蒲	〈1〉蒲	—	1863	
8		4	第10図 6	〈身〉練氏六男玄■/思亀■	〈1〉練氏六男玄■(思亀)	—	—	
11	009 号墓	1	—	〈蓋〉明治三十七年旧辰八月十一日嫡子佐久川嘉慶三男洗骨	〈1〉嫡子佐久川嘉慶三男	—	1904	
17 ・ 18		4	第14図 20・21	〈蓋〉嘉慶二年丁巳四月十五日/死佐久川親雲上召後祥/同年四月十一日死召後祥/妻/同四年未七月八日洗骨/義寛良勇居士/快岩妙嘉大姉(身)嘉慶二年丁巳四月十五日死佐久川親雲上召後祥義寛良勇居士/同年四月十一日死召後祥妻快/岩妙嘉大姉/同四年未七月八日洗骨	〈1〉佐久川親雲上召後祥(義寛良勇居士) 〈2〉妻(快岩妙嘉大姉)	〈1〉1797 〈2〉1797	〈1〉1799 〈2〉1799	
19		5	第15図 24	〈蓋〉道光四年甲申十月十三日死同十一月十一日洗骨御同人妻咸豐十一年辛酉四月廿四日御一手二成/嘉慶二年巳四月十五日洗骨嘉茂嫡子伊礼筑登之親雲上唐名召允仁/山戸/思戸	〈1〉嘉茂嫡子伊礼筑登之親雲上(召允仁) 〈2〉同人妻	〈1〉不明 〈2〉1824	〈1〉1797 〈2〉1824	1861年に合葬
22		7	第17図 30	〈蓋〉嘉慶五年己申十一月十五日死去同七年辛戌五月廿六日洗骨佐久川親雲上女真伊奴	〈1〉佐久川親雲上女真伊奴	〈1〉1800	〈1〉1802	
24・25		8	第18図 36・37	〈蓋〉光緒五年卯十一月廿八日嫡子佐久川筑登之嘉節次男思亀洗骨〈身〉光緒五年卯十一月廿八日嘉節次男思亀/	〈1〉嫡子佐久川筑登之嘉節次男思亀	—	〈1〉1879	
26 ・ 27		9	第15図 22・23	〈蓋〉乾隆四拾六年辛丑十■月拾九日洗骨露千代〈判読不能〉 〈身〉乾隆四拾六年/辛丑三月二拾九日/洗骨■/嫡子露千代	〈1〉露千代	—	〈1〉1781	
30 ・ 31		11	第16図 26・27	〈蓋〉光緒二拾七年辛丑/嫡子佐久川/光緒二拾七年辛丑/旧二月十五日佐久川/嘉節洗骨之〈身〉光緒二〈判読不能〉丑旧三月〈判読不能〉	〈1〉佐久川嘉節	—	〈1〉1901	
32		12	第15図 28	〈蓋〉大正八年旧十月二日嘉節長男嘉慶洗骨/昭和十九年十月廿七日嘉慶六男徳合葬	〈1〉嘉節長男嘉慶 〈2〉嘉慶六男徳	—	〈1〉1919 〈2〉不明	1944年に合葬
34		13	第18図 39	〈蓋〉道光貳拾七年/丁未■月五日嫡子/佐久川筑親雲上/妻洗骨/同治七年辰四月/廿五日嫡子佐久川嘉理/筑登之親雲上洗骨/二十七年丁未五月五日嫡子佐久川筑登之親雲上妻洗骨同治七年辰四月〈判読不能〉嘉	〈1〉佐久川筑登之親雲上妻 〈2〉嫡子佐久川筑登之親雲上嘉理	—	〈1〉1847 〈2〉1868	
36 ・ 37		14	第17図 34・35	〈蓋〉光緒五年卯十一月廿八日嫡子佐久川筑登之親雲上嘉理継妻洗骨〈身〉光緒五年卯十一月廿八日嫡子佐久川筑登之親雲上嘉理継妻洗骨	〈1〉嫡子佐久川筑登之親雲上嘉理継妻	—	〈1〉1879	
38 ・ 39		15	第17図 32・33	〈蓋〉道光貳拾■〔五カ〕/■〔二カ〕月廿九日次男/佐久川筑登之嘉房洗骨〈身〉道光二十五年乙巳三月二十九日次男佐久川筑登之嘉理継妻洗骨	〈1〉次男佐久川筑登之嘉房 〈2〉次男佐久川筑登之嘉理継妻	—	〈1〉1840 ~1849 〈2〉1845	
40・41	019 号墓	16	—	〈蓋〉光緒二拾七年辛丑/嫡子佐久川/光緒二拾七年辛丑/旧二月十五日佐久川/嘉節洗骨〈身〉佐久川嘉■〔房カ〕六男徳	〈1〉嫡子佐久川嘉節 〈2〉嘉■六男徳	—	〈1〉1901 〈2〉不明	
42 ・ 43		17	—	〈蓋〉道光四年甲申十月十三日死順心妙壽信女道光十一年辛卯十一月十一日洗骨佐久川筑親雲上召教達母嫡子佐久川筑親雲上嘉紹妹武太■〔咸豊カ〕十一年辛酉四月廿四日洗骨〈身〉道光四年甲申十月十三日死順心妙壽信女道光十一年辛卯十一月十一日洗骨佐久川筑登之親雲上召教達母/嫡子佐久川筑登之親雲上嘉紹妹武太■咸豊十一年辛酉四月二十四日洗骨	〈1〉順心妙壽信女(佐久川筑親雲上召教達母) 〈2〉嫡子佐久川筑登之親雲上嘉紹妹武太	〈1〉1824	〈1〉1831 〈2〉1861	
44		18	—	〈蓋〉嘉慶■〔妹カ〕/蒲戸	〈1〉蒲戸	—	—	
46		1	第20図 43	〈蓋〉乾隆二十七年/癸午閏五月/	不明	1762 ?	1762 ?	
48・49	027 号墓	1	第23図 51・52	〈蓋〉光緒十九年癸巳正月十八日嫡子かま知念平良洗骨〈身〉光緒十九年癸巳正月十八日嫡子かま知念洗骨	〈1〉嫡子かま知念(平良)	—	〈1〉1893	
50		2	—	〈蓋〉嫡子亀平良父親同人女親かめ二人	〈1〉嫡子亀平良父親 〈2〉同人女親かめ	—	—	
52		3	—	〈蓋〉平良筑親雲上	〈1〉平良筑親雲上	—	—	
54		4	第22図 45	〈蓋〉咸豊四年甲寅十月廿一日死同八年午十一月廿二日洗骨平良親雲上同治三年甲子五月廿九日死同七年辛■〔西カ〕十一月九日洗骨同人妻	〈1〉平良親雲上 〈2〉同人妻	〈1〉1854 〈2〉1864	〈1〉1858 〈2〉1868	
56		5	—	〈蓋〉乾隆二十〇〔判読不能〕十一月/平〔判読不能〕親雲上/父親	〈1〉平〔判読不能〕親雲上父親	〈1〉1755 ~1764 ?	〈1〉1755 ~1764 ?	
58		6	—	〈蓋〉知念蒲骨平良蒲骨/■〔首カ〕里区山川一丁目五拾番地知念平良蒲大正七年丁午旧七月拾五日洗骨/妻■〔カカ〕マド	〈1〉知念(平良)蒲 〈2〉妻■マド	—	〈1〉〈2〉1918 ?	住所の記載あり
60		7	第23図 53	〈蓋〉昭和貳年旧八月一日死亡知念知念/平良蒲長男蒲/昭和參年旧九月拾壹日骨先〔マ〕	〈1〉知念(平良)蒲長男蒲	〈1〉1927	〈1〉1928	
62		8	—	〈蓋〉咸豊九年己亥十一月十三日洗■平良筑登之/■良筑登之/咸豊四年甲寅十一月十二日/死次良/咸豊五年乙未女まつ/同治元年辛酉六月十日死男子/三良	〈1〉平良筑登之? 〈2〉次良 〈3〉女まつ 〈4〉男子三良	〈1〉不明 〈2〉1854 〈3〉1855 〈4〉1862	〈1〉1859 〈2〉不明 〈3〉不明 〈4〉不明	
64	027 号墓	9	第23図 49	〈蓋〉御轎夫頭知念筑登之親雲上三女牛光緒十年十二月廿三日洗骨/御轎夫知■〔念カ〕筑登之親雲上三女牛光緒十年甲酉十二月廿三日洗骨光緒叁年丑正月十八日右同人〔判読不能〕/頭〔「頭」は「親雲上」と「三女」の間に挿入〕	〈1〉御轎夫頭知念筑登之親雲上三女牛 〈2〉不明	〈2〉1875?	〈1〉1884 〈2〉1875 ?	「御轎夫頭」と記載あり

第6表 銘書一覧表 (2)

No.	墓 番号	蔵骨 器 No.	図版 番号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
66	027 号墓	10	-	〈蓋〉光緒十/光緒十六年庚寅十月二十三日死知念筑登之二男 やま/昭和貳年四月■七日死亡/妻ツル同〈判読不能〉合骨/ ■■■■年旧九〈判読不能〉	〈1〉知念筑登之二男やま 〈2〉妻ツル	〈1〉1890 〈2〉1927	-	
68		11	-	〈蓋〉同治六年丁卯十九日亡父知念筑登之妻まつ	〈1〉亡父知念筑登之妻まつ	1867 ?	1867 ?	
70		12	-	〈蓋〉〔蓋縁〕知念ツル〔蓋裏〕首里區山川町壱丁目五十番地 知念三良二女ツル大正七年丁午旧七月十五日洗骨昭和二年 旧八月二日四女カメも此の中に入ル	〈1〉知念三良二女ツル 〈2〉四女カメ	-	〈1〉1918 〈2〉不明	
72 ・ 73		13	-	〈蓋〉豊成〔マ〕九四代女■■〔親カ〕五月■六日洗骨嫡子知 念仁屋祖母/川ノ前大屋妹〈身〉知念筑登之親雲上三女牛洗 骨■光〈判読不能〉	〈1〉嫡子知念仁屋祖母 (川ノ前大屋妹) 〈2〉知念筑登之親雲上三女牛	-	〈1〉1859 〈2〉不明	〈1〉と〈2〉は 同一人物の可 能性あり
75		14	第22図 48	〈身〉■■■■〔三カ〕拾三年戊子/平良筑登之親雲上/■伊佐 仁屋/■■■〔一カ〕■洗骨/■兩人	〈1〉平良筑登之親雲上 〈2〉伊佐仁屋	-	-	※「戊子」は乾 隆33 (1768) か
76		15	-	〈蓋〉〈判読不能〉■■〔念カ〕牛大正七年丁未旧七月拾■■〔壱カ〕 日洗骨知念牛骨首里區山川町壱丁目五拾番■■	〈1〉知念牛	-	〈1〉1918	
80	041 号墓	3	-	〈蓋〉十一月二十六日ニ/シンクチシタ/〈判読不能〉ヤクニ ノ子/イノノ人/女/〈判読不能〉	不明	-	-	
83		墓室 内一括	-	〈蓋〉嫡子〈判読不能〉/昭〈判読不能〉十一年■■〈判読不能〉 /思戸家	不明	-	-	
84 ・ 85	049 号墓	1	第26図 61	〈蓋〉大清嘉慶二十一年■子九月二十三日次男又吉筑登之洗 骨〈身〉大清嘉慶廿叁年	〈1〉次男又吉筑登之	-	〈1〉1816	蔵骨器2と洗 骨年月日が一 致
86		2	第26図 59	〈蓋〉大清嘉慶二十一年丙子九月二十三日次男又吉筑登之母 親洗骨之	〈1〉次男又吉筑登之母親	-	〈2〉1816	蔵骨器1と洗 骨年月日が一 致
88	050 号墓	1	-	〈蓋〉次男■■■■/■■■/次男■■■/母	〈1〉次男■■■母	-	-	
90		2	-	〈蓋〉■■■之■■〔嫡カ〕子思加那■■八月十六日死嘉慶三年戊 午七月七日■■〔洗カ〕■■〈判読不能〉	〈1〉思加那	-	〈1〉1798	
93		4	-	〈蓋〉次男次良筑登之■■■正〈判読不能〉	〈1〉次男次良筑登之親雲上■■ ■	-	-	
98	051 号墓	2	第27図 64	〈蓋〉乾隆五拾七年子七月七日/三良金城母洗骨/乾隆五拾七 年/子七月七日/三良金城母/洗骨	〈1〉三良金城母	-	〈1〉1792	
102	052 号墓	1	-	〈蓋〉同治四年/十一月十四日/伊■■■〈判読不能〉/〈判読不 能〉	不明	1865 ?	1865 ?	
103	054 号墓	1	-	〈蓋〉■■正拾貳年/旧拾月貳拾参日/死亡ス/昭和十■■〔年カ〕 /旧六月拾日/次男兼城賢■■/洗骨	不明	1923 ?	-	
105 ・ 106		2	-	〈蓋〉明治二十七年旧三月十一日兼城賢知■■男童名三良洗骨 仕候〈身〉四男三良	〈1〉兼城賢知■■男(三良)	-	1894	
109 ・ 110		4	-	〈蓋〉明治四十年旧三月十一日兼城賢知四女童名牛洗骨仕同 日也〈身〉四女牛	〈1〉兼城賢知四女童名牛	-	1907	
111		墓室 内一括	-	〈蓋〉■■■〈判読不能〉/〈判読不能〉日洗骨	不明	-	-	
112	055 号墓	1	第32図 68	〈蓋〉大正九年申九月/金城睦昌/昭和六年未(ヒツヂ)/旧四 月壱日洗骨/五男摘〔マ〕子童名亀	〈1〉金城睦昌 〈2〉五男摘〔マ〕子童名亀	〈2〉不明	〈1〉1920 〈2〉1931	※〈1〉〈2〉は 同一人物の可 能性あり
114		2	-	〈蓋〉光緒拾九年癸巳/二月十七日死/洗骨/金城筑登之/同参拾 壹年乙巳/■■〔未カ〕七月十二日死去同人/妻童名真牛同参拾 二年/丙午九月三日洗骨	〈1〉金城筑登之 〈2〉同人妻童名真牛	〈2〉1905	〈1〉1893 〈2〉1906	
116		3	第32図 66	〈蓋〉大正四年卯十二月/七日死五男ノ/次男童名櫛	〈1〉五男ノ次男童名櫛	1915	-	
118 ・ 119		4	-	〈蓋〉光緒十九年/癸巳二月十七日死/五男乃三男童名武太/同 参拾壹年/十一月十三日洗滑〔マ〕〈身〉光緒十九年/癸巳二 月十七日死/五男ノ三男童名武太/全三十壹年巳十一月十三 日洗骨	〈1〉五男ノ三男童名武太	1893	1905	
120		5	第32図 70	〈蓋〉昭和十一年九月一日卒幼女マツ/旧七月七日洗骨	〈1〉幼女マツ	1936	1936	
122		6	-	〈蓋〉大正四年旧寅十二月十一日洗胃〔マ〕元祖三女ツル	〈1〉元祖三女ツル	-	1915	
124		7	-	〈蓋〉大正拾五年/正月廿八日死去/昭和二年/旧七月七日/次 男/金城睦輝/長女スミ子	〈1〉次男金城睦輝長女スミ子	1926	1927	
126		8	-	〈蓋〉大清同治二年丁子八月/大清同治六年丁卯六月十四日洗 入■■/五男金城仁屋子女子/真牛	〈1〉五男金城■■子女子真牛	1863	1867	
128		9	-	〈蓋〉昭和三年辰旧七月七日洗滑〔マ〕睦信三男武太/昭和三年 辰/旧七月七日洗滑骨/亡睦昌三男武太	〈1〉睦信三男武太 〈2〉睦昌三男武太	-	〈1〉1928 〈2〉1928	※〈1〉〈2〉は 同一人物の可 能性あり

第6表 銘書一覧表 (3)

No.	墓 番号	蔵骨 器 No.	図版 番号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
130	056 号墓	1	-	〈蓋〉子平識筑登之親雲上/■〈判読不能〉	〈1〉子平識筑登之親雲上	—	—	
132 ・ 133		2	第38図 79・80	〈蓋〉道光十四年甲午八月二十七日洗骨具志筑登之親雲上妻 寿長妙案/同日嫡子平識筑登之親雲上善顯女子真加戸洗骨 〈身〉道光十四年甲午八月二十七日洗骨/具志筑登之親雲上妻 寿長妙案/同■同日嫡子平識筑登之親雲上/〈判読不能〉洗骨	〈1〉具志筑登之親雲上妻寿長 妙案 〈2〉嫡子平識筑登之親雲上善 顯女子真加戸	—	〈1〉1834 〈2〉1834	
134		3	-	〈蓋〉嘉慶■〈判読不能〉/三日/亀〈判読不能〉	〈1〉亀	1796～ 1820?	1796～ 1820?	
136		4	第37図 77	〈蓋〉乾隆■〔貳〕■■十二月十七日去/那氏平識筑登之親雲 上善政妻/法名雪巖妙白真蒲戸/明氏饒平名親雲上長盛女子/ 享年三十年二而死/同貳六年辛巳十一月貳八日洗骨〈身〉那 氏〈判読不能〉親雲上妻/乾〈判読不能〉/雪巖〈判読不能〉/ 〈判読不能〉饒〈判読不能〉	〈1〉那氏平識筑登之親雲上善 政妻法名雪巖妙白真蒲戸(明氏 饒平名親雲上長盛女子)	1755～ 1764	1761	「享年三十 年二而死」とあ る
138		5	第35図 73	〈蓋〉傳記/那氏平識筑登之親雲上善淳祖母/余氏湧田親雲上 舍平妹也/雍正四年丙午正月廿四日去寿八十号慈山妙徳/同 五年丁未九月二十六日洗骨仕/此墓之風水者久米村當間親方 /御■■被成康熙五十二年癸巳九月/廿七日成就仕候尤致祖 母之/為■■〔御カ〕仕立事候地者真嘉比村/屋之地之内二而村 中頭々百姓共茂/分合達相■■代米七斗五升二而/永々買取申 候也/那氏平敷筑登之親雲上善淳母/余氏湧田親雲上舍平妹 女子也/乾隆二十年乙亥七月廿二日洗骨仕	〈1〉那氏平識筑登之親雲上善 淳祖母余氏湧田親雲上舍平妹 (慈山妙徳) 〈2〉那氏平識筑登之親雲上善 淳余氏湧田親雲上舍平妹女子	〈1〉1726 〈2〉不明	〈1〉1727 〈2〉1755	墓造営の記録 あり
140		6	第37図 75	〈蓋〉那氏平識筑登之親雲上善淳/乾隆二十二年丙子十二月十 八日洗骨/同人妻乾隆四十年乙未■■〔ハカ〕月十二日/洗骨/ 孫女牛洗骨	〈1〉那氏平識筑登之親雲上善 淳 〈2〉同人妻 〈3〉孫女牛	—	〈1〉1757 〈2〉1775 〈3〉不明	
144		墓室 内一 括	-	〈蓋〉嘉慶拾九年甲戌十二月廿九日洗骨次男平識善積	〈1〉次男平識善積	—	〈1〉1814	
145		墓室 内一 括	-	〈蓋〉道光■■■七年丁未七月六日平■■〔識カ〕筑登之善秀顯 嫡子松金洗骨同■■〈判読不能〉/〈判読不能〉年甲戌■■■■ 〔ハカ〕日死嘉■■〔判読不能〕■■〔四カ〕年己卯七月七日洗 骨/〈判読不能〕■■〔平カ〕識筑登之親雲上/顔心妙■■〈判読 不能〉	〈1〉平■■〔識カ〕筑登之善秀 顯嫡子松金 〈2〉■■〔平カ〕識筑登之親雲 上/顔心妙■■	〈1〉不明 〈2〉1814?	〈1〉 1827、 1837、 1847のい ずれか 〈2〉1819	※「甲戌」は嘉 慶19年(1814) で「己卯」は嘉 慶24年(1819)
146	057 号墓	1	第41図 85	〈蓋〉我謝筑登之親雲上/女房/大清康熙四十年辛巳/七月廿六 日二肉/みかき候〈身〉父我謝■■■■〔筑登之〕〈判読不能〉/ ■■〈判読不能〉	〈1〉我謝筑登之親雲上女房	—	〈1〉1701	
149		2	第41図 88	〈身〉嘉慶五年庚申十月六日骨洗/故我喜屋筑登之親雲上妻	〈1〉故我喜屋筑登之親雲上妻	—	〈1〉1800	
152 ・ 153		4	-	〈蓋〉乾隆四拾/五年庚子/七月七日洗骨/御■■也/我謝筑登之 親雲上/妻〈身〉嫡子/我謝筑登之親雲上/我謝〈判読不能〉 子	〈1〉我謝筑登之親雲上妻	—	〈1〉1780	
156		6	第40図 82	〈身〉我謝■■/■■■〈判読不能〉/位〈判読不能〉/■■〈判読不 能〉	〈1〉我謝	—	—	
158		7	-	〈身〉大清〈判読不能〉/〈判読不能〉/〈判読不能〉/同人女 房	〈1〉同人女房	—	—	
161		9	-	〈身〉大清光緒十七年辛卯十月九日大宗之嫡孫仁王我謝仁屋 洗骨	〈1〉大宗之嫡孫仁王我謝仁屋	—	〈1〉1891	
162		10	第41図 84	〈蓋〉父我謝筑登之親雲上/小樽我謝				
168		13	-	〈蓋〉乾隆五十■■〔三カ〕〈判読不能〉■■日先骨嫡子我謝	〈1〉嫡子我謝	—	1785～ 1794	
172		墓室 内一 括	-	〈蓋〉〈判読不能〉ムカヘス/西昭〈判読不能〉	不明	—	—	
173	058 号墓	1	-	〈蓋〉明治十九年旧九月八日卒同廿五年旧二月廿七日洗骨小 樽喜久本里之子親雲上四男松母方亀濱	〈1〉小樽喜久本里之子親雲上 四男松(母方亀濱)	1886	1892	
175		2	-	〈蓋〉明治十九年/旧九月十八日卒/小樽喜久本/里之子親雲上 妻鍋/本生方/亀濱	〈1〉小樽喜久本里之子親雲上 妻鍋(本生方亀濱)	1886	—	
177		3	-	〈蓋〉道光二十八年戊申/六月十六日矢〔天カ〕亡歳■■〔一カ〕 /同人三男真蒲/戸/咸豊拾一年■■■十二月/二十四日洗骨/咸 豊拾年庚申五月二十八日/卒寿五十六/嫡子喜久本里之子親 雲上/朝暉/同拾一年辛酉十二月/二十四日洗骨/同治元年壬 戌正月廿六日/矢〔天カ〕亡歳三/同二年癸亥十一月/廿日洗 骨/同治元年■■■■■■〔九カ〕月十一日/矢〔天カ〕亡歳六同 八■■〈判読不能〉/同二年癸亥十一月廿日洗骨	〈1〉同人三男真蒲戸〈2〉嫡 子喜久本里之子親雲上朝暉 〈3〉不明〈4〉不明	〈1〉1848 〈2〉1860 〈3〉1862 〈4〉1862	〈1〉1861 〈2〉1861 〈3〉1863 〈4〉1863	
179		4	-	〈蓋〉咸豊拾一年辛酉/十三月士四日十二月二十四日卒/五男 喜久本里之子親雲上/朝佑室/寿八十二/同治二年癸亥十一月 /二十日洗骨	〈1〉五男喜久本里之子親雲上 /朝佑室	〈1〉1861	〈1〉1863	

第6表 銘書一覧表 (4)

No.	墓番号	蔵骨器No.	図版番号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
181	058号墓	5	第43図92	〈蓋〉道光十二年壬戌未二月十日向土美喜久本里之子親雲上朝佑死同二十三年癸卯七月五日洗骨/道光二十三年癸卯壬七月四日向諸淳喜久本里之子親雲上朝暉女子真嘉戸死同二十六年■未七月廿九日洗骨/道光二十四年甲辰十一月十六日同人真呉勢死同二十六年丙午七月二十九日洗骨	〈1〉向土美喜久本里之子親雲上朝佑 〈2〉向諸淳喜久本里之子親雲上朝暉女子真嘉戸 〈3〉同人真呉勢	〈1〉1832 〈2〉1843 〈3〉1844	〈1〉1843 〈2〉1846 〈3〉1846	
183		6	第43図94	〈蓋〉同治三年甲子/六月廿四日■/喜久本里之子/親雲上女子/真鶴寿廿一/同治十年■〔庚カ〕未/八月三日洗骨/未/八月三日	〈1〉喜久本里之子親雲上女子真鶴	〈1〉1864	〈1〉1871	
185		7	第43図90	〈蓋〉明治十九年旧■月廿四日卒小樽喜久本里之子親雲上五男真牛/■原二合葬母方亀濱	〈1〉小樽喜久本里之子親雲上五男真牛	〈1〉1886	—	
189	059号墓	2	—	〈蓋〉申十二月死去/嘉慶貳拾五年庚辰八月廿二日洗骨高良里之子妻童名真露	〈1〉高良里之子妻童名真露	〈1〉不明	〈1〉1820	
193	061号墓	1	—	〈蓋〉光■〔緒カ〕〈判読不能〉/八日骨洗〈判読不能〉■西平	〈1〉■西平	—	不明	※光緒年間に洗骨か
197	062号墓	2	第47図102	〈蓋〉乾隆貳拾三年戊寅八月洗骨宮里筑登之/同貳拾八年癸未六月十一日洗骨同人妻/光緒二十年六月十一日宮里筑登之男亀同人/女子■〔真カ〕鍋三人入/〈判読不能〉■八年癸未〈判読不能〉洗骨	〈1〉宮里筑登之 〈2〉同人妻 〈3〉宮里筑登之男亀 〈4〉同人/女子■〔真カ〕鍋	—	〈1〉1758 〈2〉1763	※後年に書き直しと書き加えあり
199		3	—	〈蓋〉道光貳拾三年丁卯/八月■廿九日洗骨/三代宮里筑登之親雲上/宮里筑登之親雲上男子入■■〔候付カ〕/但女子加ま/道光五年乙酉八月洗骨四代/宮里筑登之親雲上妻但上間之女/鍋/道光二十三年丁卯八月廿九日/洗骨嫡子宮城里筑登之但男子まつ	〈1〉四代宮里筑登之親雲上(まつ) 〈2〉宮里筑登之親雲上妻鍋(上間之女)	—	〈1〉1843 〈2〉1825	
201		4	—	〈蓋〉光緒十七年/卯九月■■〔洗骨カ〕/嫡子牛宮里/嫡子松宮里	〈1〉嫡子牛宮里嫡子松宮里	1891?	1891?	
203		5	—	〈蓋〉咸豐貳年子三月十日當■〔歲カ〕五十/同咸豐六年/年■月/廿八日上城村/■宮城筑登之親雲上/宮里筑登之親雲上/次男宮城筑登之/宮里筑登之/之洗骨	〈1〉宮里筑登之親雲上次男宮里筑登之	1852?	1852?	
205・206		6	第49図109・110	〈蓋〉宮城宮里筑登之女子呉勢/咸豐九年戊八月四日死去同治二年七月七日洗骨宮城筑登之宮里筑登之女子呉勢〈身〉道光拾八年/〈判読不能〉/宮■筑登之/道光貳拾壹年寅八月廿七日かめ宮里	〈1〉宮城(宮里)筑登之女子呉勢 〈2〉宮■筑登之	〈1〉1859 〈2〉1838?	〈1〉1863 〈2〉1838?	蓋と身で銘書が異なる
207		7	第49図107	〈蓋〉嘉慶〈判読不能〉月■日洗骨仕候事かめ宮里	〈1〉かめ宮里	—	〈1〉1796 ~1820	
209・210		8	第50図115・116	〈蓋〉口/口大清咸豐七年丁巳子二月六日五代宮城里筑登之洗骨/道光五年乙酉八月二十八日/洗骨四代宮城筑登之親雲上妻但女子鍋/道光二十三年丁卯八月廿九日洗骨/道光二十三年丁卯八月廿九日洗骨嫡子宮城筑登之但男子まつ〈身〉道光五年乙酉八月二十八日/洗骨四代宮城筑登之親雲上妻/■■女子鍋	〈1〉五代宮城(宮里)筑登之	—	〈1〉1857	四代宮城筑登之親雲上妻(女子鍋)と嫡子宮城筑登之(男子まつ)は蔵骨器 ³ へ移し替える
211		9	—	〈蓋〉次男宮里筑登之嫡子牛宮里/咸豐九年己未六月〈判読不能〉/三■宮城〈判読不能〉/宮城■	〈1〉次男宮里筑登之嫡子牛宮里	1859?	1859?	
213・214		10	第50図111・112	〈蓋〉卞道光貳拾九年己酉九月廿七日洗骨宮里筑登之/父母〈身〉道光貳拾九年己酉九月/廿七日洗骨宮里筑登之/父母	〈1〉宮里筑登之父 〈2〉宮里筑登之母	—	〈1〉1849 〈2〉1849	
215		11	第49図105	〈蓋〉嘉慶十七年壬申二月十日洗骨仕候事松宮里	〈1〉松宮里	—	1812	
217		12	—	〈蓋〉道光拾四年辛卯七月七日洗骨嫡子童名亀宮城にや宮里にや/同貳拾壹年寅八月廿七日洗骨亀宮里	〈1〉嫡子童名亀宮城(宮里)にや 〈2〉亀宮里	—	〈1〉1834 〈2〉1841	
220	墓室内一括	—	—	〈蓋〉〈判読不能〉■〔隆カ〕五拾九年甲寅八月十日宮城■■〔筑登之カ〕宮里筑〈判読不能〉/嫡子宮里筑登之親雲上洗骨	〈1〉嫡子宮里筑登之親雲上洗骨	—	不明	
221		第50図114	—	〈蓋〉大清嘉慶二十一年丙子九月十三日骨洗宮里筑登之親雲上/大清嘉慶二十一年丙子九月十三日宮里筑登之親雲上洗骨	〈1〉宮里筑登之親雲上	—	1816	
224	071号墓	1	—	〈蓋〉咸豐八年戊午七月九日洗骨次男真栄城筑登之女子蒲戸	〈1〉次男真栄城筑登之女子蒲戸	—	1858	
226		2	—	〈蓋〉〇卞〔寅カ〕正月七日死亡真栄城亀但シ次男■六年十月廿■洗骨/妻牛骨合	〈1〉真栄城亀(次男) 〈2〉妻ウシ	不明	不明	

第6章 人骨の分析

本章では各墓遺構及び蔵骨器中から出土した人骨について、形質人類学的視点に基づく観察所見と分析を行った結果について述べる。出土人骨の基礎的なデータを記載してゆくとともに、それらの観察によって得られる南小島原A丘陵に埋葬された人々の形態的特徴について若干の考察を行ってゆきたい。

第1節 資料について

本調査区からは、18基の墓遺構から出土した103基の蔵骨器中およびシルヒラシから人骨の出土が確認された。全身骨がほぼ完形の状態で遺存するものから、破片・微細片状態のものまで様々な様子が窺える。本章では出土した人骨について基礎的データを主体として報告する。

人骨の分析は、部位同定とそれに基づく個体識別および最小個体数の計数・性別および年齢推定・病変等の異常形態の観察と記載・頭蓋及び四肢骨の計測作業を基本として行い、それぞれ一覧表に記載した(第7表～第20表)。個体識別と個体数の計数は蔵骨器単位で行い、識別した個体ごとにNo.を付した。一次葬を除く墓室埋土や床面出土の人骨については、同定と記載には含めたものの、計数・性別・年齢判定等の対象からは除外している。性別判定はBrothwell1981等に基づき、頭蓋および寛骨形態によることを基本とした。しかし、判別に必要な残存状態を保っていない資料も多いことから、これらについては、頭蓋および寛骨形態で性別が判別できた個体との四肢骨骨端サイズの比較により推定し、骨端の残存状態の不良な資料については不明とした。年齢区分についてはKnussman1988による分類を参考に、乳歯・永久歯の萌出・咬耗状況、四肢骨骨端等の癒合状況などを鑑みた上で推定している。計測の方法はKnussman1988に従い、計測部位及び位置は土肥・譜久嶺1999等を参照した。

第2節 分析結果

本節では部位同定・個体識別・観察等について墓遺構・蔵骨器ごとに所見を記載する。それぞれの見出しには蔵骨器No.―人骨No.を用いた。なお、紙幅の都合上、ある程度残存状態の良好な資料に絞って記載する。

(1) 001号墓

出土した4基の蔵骨器のうち、蔵骨器1・3・4に人骨が残存していた。しかしながらいずれも遺存状態はそれ程良くないことから、詳細な分析を行うことは難しい。それでも、一定度の部位同定が出来たことから、蔵骨器1から成人女性が、蔵骨器3からは成人男性がそれぞれ1体分ずつ、蔵骨器4からは幼児段階と推定される未成人骨が1体ずつ含まれていることを窺うことができる。

(2) 009号墓

○蔵骨器16―No.1・No.2 (図版37)・No.3

成人1体および未成人2体分の人骨が同定され、成人骨をNo.1・未成人骨をそれぞれNo.2・No.3とし

て個体を識別した。No.1は手根骨や足根骨など一部の部位が見られないものの、頭蓋骨を含む主要な四肢骨が概ね完形で残存している。寛骨の大坐骨切痕角や乳様突起の発達形状などから男性であると判断される。下顎の第1大臼歯に歯槽閉鎖が観察されるものの、その他の歯はそれほど咬耗が認められないことから成年段階ではないかと想定される。そのほか、上顎に歯槽性突額、下顎犬歯にエナメル質減形成が観察されている。また、腰椎のうちの2点に骨棘形成が認められる。

未成人骨については部位重複から2体分が含まれ、四肢骨のサイズ差や遊離歯の形成状況などから発達段階の異なる個体であることが推定できるため個体を識別可能である。No.2では四肢骨に加え、脳頭蓋及び下顎骨が残存しており、第2乳臼歯が萌出中・第1大臼歯が未萌出・大泉門が癒合済みである点などから幼児段階であると推定できる。両眼窩にはクリブラオルビタリアが観察される他、後頭骨に僅かながら篩状小孔が認められる。また、左下顎の第2乳臼歯および乳犬歯が癒合・右下顎の乳犬歯は形成されていないといった萌出異常が観察されている。一方、No.3では頭蓋は破片であるものの、残存している遊離歯の内、第1乳切歯以外は歯根が未形成である点から乳幼児段階であると推定している。

○その他の蔵骨器

009号墓は出土した18基の蔵骨器中12基から人骨の出土が認められたが、前述の蔵骨器16から出土した人骨は良好な残存状態を保っていたものの、それ以外の蔵骨器から採集された人骨の遺存状態は悪く、詳細な分析が困難である資料が多い。蔵骨器1・8からは乳幼児、蔵骨器7・10・11・12からは性別不明の成人、蔵骨器2・4・13・15・17からは年齢性別不詳の人骨が、それぞれ最小個体数にして1体分ずつ検出されたことが窺えるのみである。

(3) 027号墓

○蔵骨器1 - No.1

骨の残存状態としては悪いものの、腰椎及び尺骨に変異が認められる個体である。腰椎は椎体右半が左半に比べて薄く変形している。尺骨は上腕骨との関節する滑車切痕から橈骨切痕周辺に著しい骨増殖が観察され、肘関節に疾病を患っていたのではないかと推測される。ただし、当該部と関節を構成する上腕骨遠位端や橈骨近位端は残存していないため、どの程度広がりを持っていたかを窺うことは難しい。

○蔵骨器3 - No.1・No.2

部位同定に基づく重複から考えて成人2体分が含まれることが窺える。重複する部位のうち上腕骨・橈骨・尺骨についてはサイズ差が認められるが、それ以外の部位については明確でないため、個体識別を行うことは困難であった。

下顎骨が左右それぞれで出土しており、両者ともに歯槽閉鎖が認められることから2体のうち少なくともいずれか一方は老年段階に当たると考えられる。ただし、これらの下顎骨は切歯から犬歯部分にかけて欠失しており、直接接合しないため同一個体のものかNo.1・No.2各個体に属するものかは断定しがたい。そのため個体数算出上は両者とも成人として計数している。

○蔵骨器7 - No.1 (図版38)

ほぼ全身の部位が完存して出土している。寛骨は一部が欠損しているものの、大坐骨切痕角や前頭骨眉弓の隆起などから成人男性と判断され、大半の歯槽が閉鎖していることから老年段階の個体であったと考えられる。腰椎3点の椎体腹縁には比較的重度の骨棘形成が認められ、加齢に伴う変形性関節

症によるものと推測される。

○蔵骨器 8 - No.1・No.2

未成人の四肢骨がいずれも断片的ながら残存する一群である。下顎骨についても下顎底が残存している状態であるため明瞭ではないものの、乳歯が未萌出の段階ではないかとみられることから、乳児段階以前の個体が含まれているものと思われる。また、側頭骨岩様部が左右とも2点ずつ残存しており、ほぼ同形状・同サイズであることから2体分が混在していると想定されるが、部位ごとの個体識別は不能である。

○蔵骨器 9 - No.1

形状を留めない部位も見られるものの、概ね上下肢にわたり成人1体分が残存している様子を窺うことができる。下顎の歯槽が欠損部及び第2小臼歯を除き閉鎖していることから、老年段階に達した個体であったと考えられる。寛骨の大坐骨切痕角が大きいことや、比較的明瞭な前耳状溝が認められることなどから女性であると推測できる。

○蔵骨器11 - No.1・No.2

頭蓋骨・下顎骨・鎖骨・上腕骨・寛骨・大腿骨・膝蓋骨・脛骨・踵骨・距骨で部位重複が確認されたことから2体分が納められていたことが窺える。重複部位の一方は、骨端未癒合あるいは未成熟であることから、2体はそれぞれ個体識別が可能であり、前者をNo.1・後者をNo.2として群別した。

No.1は下顎歯槽がすべて閉鎖していることから老年段階であると判断される。また、寛骨の形状および前頭骨眉弓・後頭骨隆起がそれ程発達していないことなどから女性であると推測される。左の眼窩上孔に比較的軽度のクリブラオルビタリア、後頭骨に径3mm程度の孔が観察された他、寛骨には比較的明瞭な前耳状溝が認められている。

No.2は大腿骨・脛骨の骨端が未癒合であることが確認され、他の部位もサイズ等からみてNo.1と異なる個体のものである。顎骨が残存しており、上下左右とも第3大臼歯が歯冠形成済・未萌出であることから、No.2は若年段階と想定される。

○蔵骨器15-No.1 (図版38)

成人の全身骨が概ね完存している状態で出土している。寛骨の大坐骨切痕角や眉弓・乳様突起の発達などから男性であると判断される。また、上下顎骨のうち半数程度の歯槽が閉鎖済みである点、頭蓋外側の冠状・矢状・ラムダ縫合いいずれも癒合中であることなどから老年段階に達した個体ではないかと推定される。特記事項としては右の第1中足骨遠位端に変形が認められる点で、その他の中足骨・指骨等には目立った変異は認められないことから、部分的な疾病によるものではないかと思われる。

○その他の蔵骨器

027号墓からは15基の蔵骨器が出土しているが、このうち12基から人骨の出土が確認された。しかし、上記に記載した蔵骨器7及び15から検出された人骨は良好な残存状態を維持していたものの、それ以外の蔵骨器から出土している資料は一部の部位が残存する、もしくは全て破片となっており詳細な分析が困難な状態であった。その中でも比較的部位同定が可能であった蔵骨器3・8・9・11からは出土した人骨については個体識別・ある程度の年齢性別を推測することができた。しかしながら、蔵骨器1・5・6・12・14から採集された人骨は微細破片となっており、少なくとも1体分の人骨が納められていた事を示すのみである。

(4) 054号墓

○蔵骨器 1—No.1 (図版38)

残存状態はそれ程良くないが、成人1体分の人骨が含まれることが窺われる。左の顔面と下顎骨を除く頭蓋が残存しており、眉弓及び後頭骨隆起が発達していることから男性であろうと判断される。右上顎の歯槽の形状から永久歯の萌出が完了している点、脛骨遠位端が癒合済みであることなどから成人段階に達しているとみられるが、詳細な年齢段階を想定することは難しい。

○蔵骨器 2—No.1

頭蓋骨破片・椎骨椎体・四肢骨などの主要な部位が残存する未成人骨である。四肢骨は骨端等を含め比較的形状が遺存している。顎骨が欠損しているものの、乳切歯から第1乳臼歯までが歯根形成中、第2乳臼歯・第1大臼歯が歯冠のみ形成されている段階であることから、乳幼児段階に区分している。

○蔵骨器 3—No.1

遊離歯の一部が形状を保って残存しているが、それ以外の部位については全て細片となっているため詳細な分析は不能である。ただし、遊離歯については歯冠が残存する乳歯および歯根未形成の永久歯が残存している様子が観察されることから、幼児段階にある個体であったことが推定される。

○蔵骨器 4—No.1

頭蓋骨・下顎骨・椎骨・四肢骨などの主要な部位が残存する未成人骨が1体分検出されている。頭蓋骨は多数の破片に分かれており、ある程度の接合が可能であると思われるが保存状態が悪いため復元が困難である。概ね形状を残す下顎骨と上顎遊離歯の萌出・形成状況は乳切歯が萌出済・乳臼歯が未萌出・第1大臼歯の歯冠先端のみが形成される段階であることから、幼児段階に区分されると思われる。

(5) 055号墓

○一次葬 (図版39)

055号墓のシルヒラシから出土した人骨で、木棺に納めて置かれた原位置の状態を保って出土したものと考えられる人骨である(第4章第9節)。全身骨がほぼ完形の状態で残存しており、寛骨形状および頭蓋骨の形状から女性と推定できる。上下顎骨共に第3大臼歯が萌出を完了している点・いずれの歯にも咬耗がそれ程認められない点・頭蓋内側の縫合が未癒合である点などから若年～成年段階にあると思われる。

○蔵骨器 1—No.1 (図版39)・No.2・No.3

部位同定によると、成人1体分と未成人2体分が含まれる様子が窺われ、このうち成人をNo.1・未成人をNo.2・No.3として個体識別を行った。

No.1は成人骨であることから他の2体と区分したものであるが、各部位の形状が概ね残存しているものの、表面の風化が著しい状態である。寛骨形状からは男性であると考えられ、上下顎骨に残存する歯は第3大臼歯が未萌出・咬耗がそれ程進行していない点から成年段階に区分されるものと思われる。上顎には歯槽性突顎の傾向が窺われ、また犬歯にはエナメル質減形成が観察される。このほか、胸椎関節突起・左鎖骨肋鎖韌帯圧痕・右立方骨関節面に骨増殖が、左第1中足骨遠位側骨幹に棘状の突起が形成されている様子が観察された。

一方で未成人骨については、後頭骨や側頭骨・鎖骨・上腕骨・橈骨・尺骨・大腿骨・脛骨などがそれぞれ重複して同定されたことから2体分が混在していることが確認される。しかしながら、いずれ

の部位もほぼ同等のサイズであり、残存状態にも大きな違いが認められないことから、個体ごとに分類することは困難である。椎骨・中手骨・中足骨・指骨なども同様であり、No.2・3一括として一覧表には記載している。右の下顎骨が1点のみ形を残しており、第2乳切歯から第1大臼歯までが未萌出ないし萌出中である様子が窺われる。また、遊離歯では第1乳切歯以外が歯根未完成である事などから、2体とも乳幼児段階であると想定できる。

○蔵骨器2—No.1・No.2・No.3

部位同定により四肢骨等の主要な部位の重複が認められたことから、本蔵骨器には成人2体・未成人1体が含まれていることを窺うことができる。成人2体のうち寛骨についてその形状から、一方は男性であると判断され、一方はやや残存形状が不良であるが女性ではないかと思われる。また、その他の重複部位同士を観察すると表面や骨質の風化などの遺存状態に明瞭な差が認められ、個体ごとの埋納期間の差を反映したものと考えられる。これらにより個体識別を行い、男性をNo.1、女性と思われる一群をNo.2として類別した。なお、重複していない部位、遺存状態に差が認められない部位については一括して一覧表には記載した。

未成人骨はいずれも骨端未癒合であることなどから成人骨と明瞭に区別でき、1体分と考えられることからNo.3として個体を数えている。下顎歯の萌出状況をみると歯槽の状態から、いずれの乳歯も未萌出であろうと思われる事から乳児段階と想定している。

○蔵骨器7—No.1

主要な部位が同定される未成人骨が1体分検出され、四肢骨は未癒合の骨端を含め概ね残存している様子が窺われる。一方で、頭蓋骨や下顎骨は破片となっており接合による復元などは困難である。乳歯を中心とする遊離歯が残存しており、第2乳臼歯・第1大臼歯の歯冠が形成中である点などからは幼児段階に分類できるものと推測している。なお、椎骨・中手ないし中足骨・指骨などは詳細な部位同定が困難であるため一括して記載した。

○蔵骨器9—No.1（図版39）

頭蓋骨・下顎骨や四肢骨を含め全身の部位が概ね良好な状態で残存している未成人骨が1体分出土している。上下顎骨の歯の萌出状況をみると、乳歯は概ね萌出を完了しており、第1大臼歯および第2大臼歯が萌出中ないし未萌出であることから、幼児段階に分類される。乳歯の大半に齲蝕が認められ、上顎第1乳切歯は左右ともに歯冠がほぼ消失し、上顎第2乳切歯もやはり左右とも舌側面の大半が浸食されているほか、左右の下顎第2乳臼歯の咬合面にも一部に齲蝕が観察されている。

○その他の蔵骨器

055号墓からは9基の蔵骨器から出土した人骨と一次葬人骨が得られており、他の墓に比べると比較的骨の残存状態が良好である。上記に記載した蔵骨器に加え、蔵骨器3・6からは頭蓋骨・下顎骨・椎骨・四肢骨などを中心とする成人骨がそれぞれ検出されている。また、蔵骨器4からは乳幼児骨が検出されている。

（6）056号墓

○蔵骨器2—No.1

ある程度破損しているものの、肩甲骨・鎖骨・上腕骨・橈骨・尺骨・腸骨・大腿骨・脛骨・腓骨が形状を保って遺存しており、いずれも骨端未癒合の未成人骨である。頭蓋骨・下顎骨も概ね残存しているが、多数の破片となっていることから復元することは難しい状態である。乳歯は概ね萌出してお

り、第1・2大臼歯および一部の切歯が未萌出であることが観察され、幼児段階に分類される。前頭骨の両眼窩上孔にはクリブラオルビタリアが、右頭頂骨のラムダ縫合周辺にはクリブラクラニイと判断される小孔が多数形成されている。

○蔵骨器3-No.1

頭蓋骨は残存していないものの、手根骨や下肢骨など成人1体分が同定される。胸椎椎体と仙椎椎体の腹縁にそれ程強度ではないものの骨棘形成が認められ、また中手骨近位端にも骨増殖の様相が認められる。

○その他の蔵骨器

上記以外に056号墓では6基の蔵骨器中から人骨の出土が確認されているが、残存状態が悪く、ほとんどが部位同定不明の破片で、かろうじて一部の部位の同定と遊離歯が形状を保っていることが窺えるのみである。それでも、蔵骨器6および8からは未成人を含む複数体分が遊離歯の種類などから窺うことができる。それ以外の蔵骨器4・5・7では、全て同定不可の破片となっており、詳細の分析は困難である。

(7) 057号墓

○蔵骨器1-No.1・No.2・No.3・No.4

本蔵骨器からは多量の人骨が検出されているものの、その大半が破片・細片となった状態である。同定可能な部位を抜き出してみたところ、成人骨と未成人骨を混在している様子を確認することができる。骨端未癒合の未成人骨が複数体分ある中に、成人の中手骨・中足骨・足根骨などを識別することができ、これらの一群をNo.1として一個体分とした。未成人骨については左の大腿骨が3点出土しており、ややサイズに大小が認められるものの概ね幼児から小児の前半に属する年齢段階であると想定される。ただし、最小個体数を算出した大腿骨以外の部位については、同一個体を識別することが困難であることから、一覧表中では一括として表記している。

○蔵骨器9-No.1

それ程残存状態の良くない成人1体分の人骨が出土している。長骨や扁平骨は基本的に欠損しており、手根骨・足根骨・中手骨・中足骨・指骨の一部が完形で同定され、四肢骨骨端サイズから男性であると推定している。下顎骨は概ね残存しており、切歯から犬歯の歯槽が閉鎖している点と咬耗の状況から熟年～老年段階に達するものと想定される。

○蔵骨器10-No.1・No.2・No.3・No.4

第2中手骨の重複から成人3体分が含まれていることが確認され、それとは別に未成人骨1体分が検出され、成人をNo.1～3・未成人をNo.4として個体識別を行った。成人は第2中手骨・第3中手骨・第4中足骨の部位重複から最小個体数が3であると判断されるが、主要な四肢骨等に部位重複は確認されない点や骨の遺存状態・サイズなどを全体的に勘案すると大多数の部位は同一の個体に属するものであらうと思われる。遺存状態が比較的良好なこの個体をNo.1として識別し、それ以外の良好でない状態で遺存している残りの個体をNo.2・No.3とした。No.2・No.3については個体ごとに分類することが難しいため一括して表記したが、膝蓋骨のサイズからいずれか一方は女性ではないかと考えられる。

No.1は頭蓋は破片であるが、四肢骨骨端は比較的残存しており全体的に大型サイズであることを窺うことができる事から男性であらうと推定できる。骨端は全て癒合済であることから少なくとも成人であることは確認できるが、それ以上の詳細は不明とした。

未成人のNo.4は下顎骨の一部と左右の大腿骨のみが残存している状態である。下顎乳歯は残存していないが、第1切歯・犬歯・第1大臼歯が歯槽内で歯冠形成中である様子を窺うことができることから、幼児段階であろうと推測される。

○蔵骨器11-No.1・No.2

成人骨と見られる全身の骨が確認され、尺骨・橈骨・踵骨・立方骨・舟状骨に部位重複が認められることから2体分が含まれることを窺える。重複した部位を観察してみると、遺存状態に明確な違いがあることから、上記の2体が納骨されていた期間に大きな差があるものと想定される。そのことから、遺存状態の違いにより分類が可能と考え、比較的状态の良好な一群をNo.1、不良な一群をNo.2として個体を識別した。ただし、頭蓋骨・下顎骨と一部の骨は判別不可として一括している。

No.1はいくつか検出されていない部位があるものの椎骨・四肢骨等の主要な部位が概ね含まれる。骨端サイズからは男性であろうと推測されるが、年齢段階について詳細な区分は不明である。頸椎3点・胸椎4点・腰椎2点の椎体復縁に骨棘形成が認められることから、加齢に伴う変異である可能性が考えられる。

No.2は残存部位も少ないことから詳細を窺うことは難しいが、重複部位の一部である尺骨・踵骨のサイズをNo.1と比較するとそれ程大きさに遜色がない点が注視される。

○蔵骨器13-No.1

遊離歯のみが残存する状況である。遊離歯を観察すると第3大臼歯が萌出済みと見られる点、全体的に咬耗が進行していない点などから比較的若い成人であろうと推測される。なお、上顎犬歯にエナメル質減形成が観察される。

○その他の蔵骨器

057号墓からは上記の他、蔵骨器2～8からも人骨が出土しているが、いずれも破片ないし断片的に部位が残存しているのみであることから、詳細な分析は困難である。

(8) 058号墓

○蔵骨器1-No.1

残存状態はそれ程良くないものの、四肢骨が比較的形状を保って残存している。残存する骨端は全て癒合済であることから成人で、骨端等のサイズからは女性ではないかと推測される。

同定された部位のうち、右の脛骨及び腓骨に変形が認められた。脛骨は栄養孔周辺の位置において内側へ瘤状に飛び出すように骨増殖が、腓骨は近位側骨幹部が内側へと湾曲する様子がそれぞれ観察された。このことから膝下付近において外側から内側へ向けた衝撃を受けた事による損傷があったのではないかと考えられる。

○蔵骨器3-No.1・No.2

四肢骨などを中心に出土しているものの、全体的に劣化が著しい一群である。四肢骨の重複及び骨端の癒合等の状況から成人1体・未成人1体が最小個体数として算出される。

ただし、遊離歯の咬耗進行の程度が異なるように見受けられることから、あるいはもう複数体が混在している可能性も否定できない。

○その他の蔵骨器

上記に加え、4基の蔵骨器中から人骨の出土が確認されたものの残存状態は悪く、一部の部位が同定できたものの、そのほとんどは遊離歯および部位不明破片である。

(9) 059号墓

○蔵骨器 1 - No.1・No.2・No.3・No.4

未成人の四肢骨と遊離した永久歯が形状を保って残存している。未成人骨の顎骨等は残存しないが、年齢段階の明確な他の個体との四肢骨のサイズの比較により、乳歯が概ね萌出した段階の年齢であろうと推定できることから、同一個体のものとしてNo.1とした。

遊離歯は基本的に永久歯であることからNo.1とは異なる個体のものであると判断したが、咬耗の進行している一群と殆ど未咬耗である一群とに類別され、また未咬耗の一群の中には複数体分が含まれることが歯種の重複から窺える。最小個体数を成人1体・未成人（若年）2体分であると算出し、それぞれNo.2からNo.4とした。

○蔵骨器 2 - No.1

左右の距骨のみが部位同定された他は、全て細片・破片であったため詳細は不明である。

○蔵骨器 3 - No.1

残存状態は良好ではなく頭蓋も残存していないが、ある程度の部位同定は可能であり、成人1体分であることが窺われる。断片的ながら残存する寛骨形状から女性であると考えられ、前耳状溝と認められる変異も観察された。このほか、腰椎の椎体腹縁に僅かながら骨棘が形成されている点が特記事項として挙げられる。

(10) 062号墓

○蔵骨器 4 - No.1 (図版40)

頭蓋・脊椎・四肢骨を中心に全体形が保たれた状態で成人1体分が出土しており、寛骨の形状や前頭骨の眉弓隆起などから男性であることが窺える。同定される各部位の残存状態は比較的良好であるにもかかわらず、手根骨と中手骨および足根骨の一部が検出されていない点が留意される。

○蔵骨器 5 - No.1 (図版40)・No.2

成人1体分の全身骨1体分と歯冠形成中の乳歯が数点検出されていることから、成人・未成人各1体が納められたものと考えられる、前者をNo.1・後者をNo.2として区分する。

No.1は寛骨の大坐骨切痕角及び恥骨下角から男性であると判断でき、歯槽の大半が閉鎖ないし閉鎖中であることから老年段階に位置づけられる。全体的に加齢に伴うものと思しき形態変異が観察され、特に第3～5腰椎には椎体腹縁に明瞭な骨棘が形成される。このほか、右の腓骨近位端において脛骨との関節面に骨増殖が認められる。

No.2は遊離歯が断片的に残存するのみであることから詳細を窺う事は難しいが、歯冠形成中の乳歯であることから乳児段階と推定することができる。

○蔵骨器 9 - No.1

全身の骨が概ね完形で残存しているが、頭蓋骨は破片となり形状を保っていない状態で、僅かに上顎骨と眼窩骨の一部を残すのみである。寛骨の形状等から成人男性1体分で構成されるものと考えられる。

左の腓骨骨体に著しい骨増殖が観察されており、右と比べると骨体中央周が倍近い計測値を呈する程に膨張している。また、大腿骨の近位端近くにおいても外側を中心に骨増殖が窺える。左脛骨ではヒラメ筋線がやや強度の発達を示すものの、大腿骨・腓骨と関連した変形であるとは考え難い。そのため、腓骨を中心に外側からの面的な衝撃を受けた事による、骨破壊と治癒によるものではないかと

推測される。またその他、残存する歯の8本に齲蝕が観察される。

○その他の蔵骨器

蔵骨器1・2・3・7・8・10・11・12・13については、内部から人骨が検出されているものの残存状態は悪く、大多数が破片ないし分析不能の微細破片であった。一覧表の記載において部位同定可能であった個体においても、詳細な形態観察に十分な状態では残存していなかった。

(11) 071号墓

○蔵骨器1 - No.1

未成人の四肢骨及び遊離歯が検出されている。いずれも四肢骨端が未癒合であり、上下顎骨は残存しないものの、遊離したほぼ未咬耗の永久歯などから小児程度の年齢段階ではないかと想定される。

○蔵骨器2 - No.1

四肢骨が部分的に残存する程度であるが、下顎歯槽がすべて閉鎖していることから老年段階、側頭骨の乳様突起の発達の程度から男性であろうと推定される。

○その他

なお、埋土中から出土した人骨には成人のものに加え、未成人骨が含まれているが、いずれの蔵骨器に納められていたものであるかは判然としないため、一括資料として一覧表にのみ記載し、個体数の計数からは除いた。

(12) その他の遺構

ここまで述べてきた人骨の出土した遺構および蔵骨器以外に004・019・023・041・049・050・051・061号墓から出土した蔵骨器中からも人骨は出土しているものの、いずれも断片的な資料で詳細な分析が困難であるものが多い。そのため、最小個体数のみあるいは成人/未成人の区別など判断可能な最低限の情報について一覧表に記載するのみに留めている。

第3節 形態観察に基づく本調査区の特徴について

ここでは、前節の記載に際して行った観察によって得た所見のうち、通常と異なる骨の形状を有する事例について具体的に記述する。

①疾病・傷病など

観察対象とした人骨に認められた形質異常のうち疾病あるいは傷病などの要因に基づくものと思われるものは、①椎骨椎体の骨棘形成、②四肢骨に骨端あるいは骨体にみられる骨増殖、③手根骨・足根骨等の関節面に認められる骨増殖などである。

本調査区から出土した椎骨に観察された変異の大半は椎体腹縁への骨棘形成で、その程度は一個体中の1点に僅かに形成されるものから、同一個体内の複数の椎骨に認められる状態まで様々である。特に057号墓蔵骨器11No.1の個体では頸椎・胸椎・腰椎それぞれ複数の椎体に変異がするほど重度の症状が認められる。これらはいずれも椎骨同士の関節面に出現しているものであることから、変形性関節症が進行していた事を示すものであろう。ただし、資料全体を通してみると057号墓蔵骨器11No.1の例は残存状態の良好なものであり、多くの個体では椎骨全体が残存していることは少なく、変形

している椎骨のみが形状を保っている場合も多いため、局所的なものか椎骨全体に広がっていたものであったかどうかは窺い難い。そのため加齢性的変化であるか、もしくはそれ以外の要因の含めた症状であるかどうかの判断は難しいと考えられる。

次に四肢骨に認められた変形で特記すべきは027号墓蔵骨器 1 No.1の肘関節にみられる変形である。右尺骨の滑車切痕から橈骨切痕周辺にかけて骨増殖が見られる症状を呈し、上腕骨との関節を覆うような形で関節面が伸長するように形成されている。個別の記載でも述べたとおり上腕骨遠位端及び橈骨近位端は残存していないことから、実際の形状を観察することはできないが、恐らく何らかの変異を起こしているのではないかと想定される。変形は関節部分に集中しているように感じられることから、外傷性と言うよりは肘関節への負荷による関節症ではないかと考えられる。

一方で、058号墓蔵骨器 1 No.1および062号墓蔵骨器 9 No.1では共に脛骨・腓骨の骨体に骨増殖が認められる。脛骨腓骨とも同じ高さの位置に変形が認められることから衝撃により同時に外傷を負った後の治癒痕ではないかと想定される。

このほか、中手骨・足根骨・中足骨などに変形が認められる資料が散見され、多くは近位端・遠位端あるいは関節面への骨増殖であることから、関節症に起因する変異ではないかと考えられる。

②発達障害など

生活環境の中で人々が受ける身体的ストレスや疾患の痕跡を示すものの一つとしてクリブラオルビタリアとクリブラクラニイが比較的観察しやすいストレスマーカーとしてとして挙げられるが（藤田編2013）、本調査区からは3個体に発現している様子が確認された。009号墓蔵骨器16No.2および056号墓蔵骨器 2 No.1は両者ともに未成人で、上記2ヵ所ともに篩状孔が比較的高い密度で形成されている様子が認められる。027号墓蔵骨器11No.1は老年女性であり、比較的軽度ながら眼窩上孔に篩目状孔が観察される。

これらは主に栄養障害や鉄欠乏性貧血を発症要因とし、小児期に形成されやすいと指摘されており（藤田編2013）、上記の事例においても成人のものに比べ未成人2体にみられる篩目状孔がより高密度・広範囲で発現している点で、これに沿った傾向を示しているものと言えよう。これまで分析を実施した前田・経塚近世墓群出土人骨についても主に未成人の個体を中心に確認されていることとも一致する。

発現数としては本調査区の最小個体数136に対して3体は少数であるが、発現部位である頭蓋骨が残存していない個体が大半を占める残存状況においては、集団全体の中でどの程度の出現頻度を有していたかは本調査区資料のみからは量りかねる。ただし、小児期において比較的重症化する程の身体的負荷のかかる生活環境の中に、本調査区に被葬された人々がいたことを示すものと言えよう。

③前耳状溝

前耳状溝は妊娠痕と考えられている、腸骨耳状面直下に形成される溝状の変異である。妊娠痕としてはこれ以外にも恥骨内側面に形成される小孔でも示されると考えられるが、本調査で出土した人骨では恥骨が残存する個体は殆ど無い。腸骨もまた四肢骨等の長管骨に比べ同定される数は少ないものの、本試料中からは6例の前耳状溝を確認できた。前耳状溝の幅や深さは出産数に比例すると言われるが、上記6例を比較してみると、比較的浅いもの・深いものとその程度は個別に異なる様子を窺うことができる。

前耳状溝を確認した例のうち2体は027号墓の蔵骨器9 No.1あるいは蔵骨器11 No.1に納骨された個体である。027号墓は15基の蔵骨器を有することから銘書等と併せた家族構成を窺うことのできる可能性がある遺構であることから、それぞれの蔵骨器に納められた人々の関係性を窺う上でも有用な資料になり得ると思われる。

第4節 まとめ

本章では、出土した人骨の部位同定・計測などといった基礎的な分析作業の成果について主に記載してきた。ほぼ全身の部位が残存するものから、部位同定不能な資料までその遺存状態は様々であり、詳細な形態観察所見を得られた資料から、最小個体数算定したのみの資料など、情報が蔵骨器ごとあるいは墓ごとに多寡が生じているものの、出土資料の個別の特徴については概ね前節までに述べたとおりである。全体的にみて、これまで前田・経塚近世墓群で分析を行った地区と比較すると、残存状況はそれ程良好であるとまでは言えないものの、得られた情報を抽出してゆくことで、本丘陵に被葬された集団の形質的特徴に言及することができるものと思われるが、本稿は分析作業時間と紙幅の都合上、基礎データの記載に留めた。

これらのデータに基づく考察については、前田・経塚近世墓群の周辺調査区の人骨出土様相との比較も含め今後の課題としたい。

〈引用・参考文献〉

- 浦添市教育委員会2011『前田・経塚近世墓群2 首里大名地区—那覇広域都市計画道路事業3・3・16号国際センター線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』浦添市文化財調査研究報告書
- 浦添市教育委員会2012『前田・経塚近世墓群3 前田真知堂B丘陵（1）・前田真知堂C丘陵（1）—都市計画街路国際センター線及び沢岬石嶺線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 浦添市教育委員会2013『前田・経塚近世墓群4 経塚子の方原A丘陵（1）—浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 江藤盛治編1991『人体計測法2』人類学講座別巻1 雄山閣
- 小橋川剛ほか2009「沖縄県読谷村大当原貝塚出土人骨について」『沖縄埋文研究』紀要6 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 谷畑美帆・鈴木隆雄2004『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社
- 土肥直美・北條真子1998「那覇市銘苅古墓群（B・E）地区出土の人骨」『銘苅古墓群（I）—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告V—』那覇市教育委員会 那覇市文化財調査報告書第39集
- 土肥直美・譜久嶺忠彦1999「那覇市銘苅古墓群南（A・C・D）地区出土の人骨」『銘苅古墓群（II）—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告VI—』那覇市教育委員会 那覇市文化財調査報告書第40集
- 徳嶺里江ほか2009「沖縄県座間味村古座間味原シル地区砂丘地出土人骨について」『沖縄埋文研究』紀要6 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 譜久嶺忠彦・土肥直美・石田肇2000「那覇市ナーチャー毛古墓群出土の人骨」『—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告VII—』那覇市教育委員会 那覇市文化財調査報告書第44集
- 譜久嶺忠彦・土肥直美・石田肇・瑞慶覧朝盛・泉水奏・佐宗亜衣子・比嘉貴子2001「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨」『ヤッチのガマ カンジン原古墓群原古墓群—県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター

藤田尚編2013『古病理学事典』同成社

山本美代子1988「日本古人骨永久歯のエナメル質減形成」『人類学雑誌』96 日本人類学会

Knussman.R 1988 Martin/Knussman Anthropologie.Band1, Stuttgart, Gustav Fischer Yerlag

I.W.Cornwall 1964 Bones for the Archaeologist. Phoenix House LTD

D.R.Brothwell 1981 Digging up Bones. Cornell University Pres

E.SCHMID 1972 Atlas of Animal Bones For Prehistorians, Archaeologists and Quaternary Geologists. Elsevir
Publishing Company

付記 001号墓蔵骨器1から出土した動物骨

人骨の分析・観察を行っていたところ、001号墓の蔵骨器1内から出土した資料に動物骨が混在していることが確認された。その出土状況からやや特異的な性格を有する可能性が考えられることから、付記しておきたい。

上記の蔵骨器から出土した動物骨はトガリネズミ科に同定される。検出された部位は頭蓋骨・下顎骨・椎骨・脛骨・寛骨で、最小個体数は頭蓋骨の同定数より45と算定される。蔵骨器1の出土状況を見ると蓋が載せられた状況であったことから、設置後に自然に侵入してきたものとは考えにくい。そのため、納骨時にトガリネズミ科ないしはその骨を人骨と共に入れたものであると想定される。その理由は定かではなく、また前田・経塚近世墓群でこれまで報告した蔵骨器中からも、これほど多量のトガリネズミ科が検出されている例は確認されていない。これらが何らかの意味合いを持つものであるかどうか、今後の検討課題である。

第7表 出土人骨一覧表(1)

墓 No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	年齢	性別	出土部位	特記事項
001	1	1	成人	F	頭蓋骨破片、下顎骨、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、腸骨+寛骨臼L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L/R、距骨L	トガリネズミ科頭蓋骨等 が混在
	3	1	成人	M	頭蓋骨破片、環椎、上腕骨L・R、橈骨R、尺骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、第5中足骨L、基節骨	
	4	1	幼児	不明	頭蓋骨破片、下顎骨、大腿骨L・R、脛骨L・R	
004	1	1	不明	不明	頭蓋骨破片、大腿骨L・R	
009	1	1	幼児	不明	四肢骨破片、遊離歯	
	2	1	成人	不明	部位不明破片、遊離歯	
	4	1	不明	不明	上腕骨R	
	7	1	不明	不明	破片のみ	
	8	1	乳幼児	不明	頭蓋骨破片、下顎骨、椎骨(16)、尺骨L・R	
	10	1	幼~小児	不明	胸椎、仙椎、上腕骨R、橈骨R、腸骨R、大腿骨R、踵骨L・R、距骨R	
	11	1	成人	不明	頭蓋骨破片、肩甲骨R、上腕骨L・R、橈骨R、尺骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L、距骨L・R	
	12	1	成人	M	前頭骨、頭頂骨、後頭骨、側頭骨、肩甲骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、腸骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R	
	13	1	不明	不明	頭蓋骨破片、大腿骨R	
	15	1	不明	不明	破片のみ	
	16	1	成年	M	頭蓋骨、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(4)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙骨、胸骨、肋骨L(9)・R(11)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、月状骨L・R、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L・R、基節骨L/R(8)、中節骨L/R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、内側楔状骨L、立方骨R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L、第5中足骨L	
	16	2	幼児	不明	下顎骨、肩甲骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L	
	16	3	幼児	不明	肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R	
	16	一括	—	—	軸椎、椎体(25)、椎弓(15)、肋骨L(15)・R(16)、中手/中足骨(16)、指骨(13)	No.2もしくはNo.3
	17	1	不明	不明	破片のみ	
019	1	1	未成人	不明	頭蓋骨破片、遊離歯	
023	1	1	不明	不明	大腿骨L・R	
	1	2	不明	不明	大腿骨L・R	
	1	3	不明	不明	大腿骨L	
	1	一括	—	不明	上腕骨L・R、脛骨L・R、腓骨L/R(2)	個体計数対象外
	2	1	不明	不明	後頭骨、側頭骨、上腕骨L・R、橈骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R	
027	1	1	成人	不明	腰椎、上腕骨L・R、橈骨R、尺骨R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R	
	2, 3	一括	—	—	仙骨破片、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、舟状骨L、月状骨L、第3中手骨R、基節骨、腸骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L、腓骨L、距骨L、舟状骨R	個体計数対象外
	3	1, 2	成人	不明	頭蓋骨破片、下顎骨L・R、仙骨破片、肩甲骨L・R、上腕骨L(2)・R(2)、橈骨L・R(2)、尺骨L・R(2)、第3中手骨L、坐骨+恥骨L、坐骨R、大腿骨L・R(2)、膝蓋骨R、脛骨L・R、踵骨L・R、距骨L(2)・R、内側楔状骨L(2)、立方骨L・R(2)、舟状骨L(2)・R(2)、第1中足骨R、第2中足骨L(2)・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R	個体識別不可
	5	1	不明	不明	遊離歯	
	5	2	不明	不明	遊離歯	
	6	1	不明	不明	大腿骨L・R、脛骨L・R	
	7	1	老年	M	頭蓋骨破片、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(5)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙骨、胸骨、肋骨L(12)・R(12)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨L・R、小菱形骨L・R、有頭骨L・R、有鈎骨L・R、月状骨L・R、三角骨L、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L・R、基節骨L/R(10)、中節骨L/R(6)、末節骨L/R(1)、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔状骨L・R、中間楔状骨L・R、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、基節骨L/R(8)、中節骨L/R、末節骨L/R(2)	
	8	1, 2	乳児	不明	頭蓋骨破片、側頭骨L(2)・R(2)、下顎骨R、椎体、鎖骨L・R、上腕骨L、尺骨R、大腿骨L・R、脛骨R	個体識別不可
	9	1	老年	F	側頭骨L・R、下顎骨、胸椎(2)、仙骨破片、胸骨丙、鎖骨L、上腕骨R、橈骨L・R、尺骨R、舟状骨L・R、第2中手骨R、第4中手骨L・R、基節骨(3)、中節骨、腸骨+坐骨+寛骨臼L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L/R、距骨L・R、外側楔状骨R、内側楔状骨L、舟状骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第5中足骨L	
	10	1	老年	F	頭蓋骨、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(4)、胸椎(6)、腰椎(4)、仙骨、肩甲骨R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、有頭骨L・R、第1中手骨R、第2中手骨L、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、基節骨(8)、寛骨臼+腸骨+坐骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、内側楔状骨L、立方骨L・R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第5中足骨L・R	
	11	1	老年	F	頭蓋骨、下顎骨L・R、仙骨、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、腸骨+幹骨臼L、腸骨+坐骨+幹骨臼R、大腿骨L・R、膝蓋骨L、脛骨L・R、腓骨L/R、踵骨L・R、距骨R、舟状骨R、第2中足骨L、第4中足骨R	
	11	2	若年	不明	側頭骨L・R、下顎骨L・R、鎖骨R、上腕骨L・R、腸骨L、大腿骨L・R、膝蓋骨L、脛骨L・R、踵骨R、距骨L	

第7表 出土人骨一覧表(2)

墓 No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	年齢	性別	出土部位	特記事項
027	12	1	若年	不明	肩甲骨L、上腕骨L・R、坐骨L、大腿骨L・R、腓骨L/R	
	12	2	未成人	不明	大腿骨R、遊離歯	
	13	1	成人	不明	基節骨(4)、中節骨(2)、遊離歯	
	14	1	不明	不明	破片のみ	
	15	1	老年	M	頭蓋骨、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(5)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙骨、胸骨、肋骨L(10)・R(9)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨L・R、小菱形骨L・R、有頭骨L、有鈎骨L・R、舟状骨L、三角骨L、豆状骨L・R、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨R、基節骨L/R(7)、中節骨L/R(7)、末節骨L/R(3)、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L、距骨L・R、外側楔状骨L、中間楔状骨L、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨L、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨R、基節骨L/R(1)、末節骨L/R(2)	
	—	一括	—	—	頭蓋骨破片、椎骨破片、上腕骨R、月状骨L、立方骨R、第5中足骨R	個体計数対象外
041	1	1	未成人	不明	四肢骨破片、遊離歯	
	2	1	未成人	不明	頭蓋骨破片、下顎骨、上腕骨R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L/R	
	4	1	未成人	不明	遊離歯	
049	1	1	成人	M	頭蓋骨破片、下顎骨、軸椎、頸椎(2)、胸椎(3)、腰椎、仙椎破片、上腕骨R、橈骨L・R、尺骨L・R、第1中手骨L・R、第2中手骨R、第3中手骨R、第4中手骨R、第5中手骨L、基節骨(6)、中節骨(5)、末節骨(4)、寛骨L、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨R、腓骨L・R、距骨L・R、内側楔状骨R、立方骨R、舟状骨L・R、第1中足骨R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、基節骨(2)	
	2	1	熟年	F	頭蓋骨、下顎骨、軸椎、頸椎(4)、腰椎、仙椎、肩甲骨L・R、鎖骨L、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨L・R、小菱形骨L、有鈎骨L・R、舟状骨L、月状骨L、三角骨L・R、第3中手骨R、第4中手骨L、第5中手骨L・R、基節骨(5)、中節骨(2)、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、腓骨L・R、踵骨L、距骨R、中間楔状骨R、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨R、第2中足骨L・R、第4中足骨R、第5中足骨L・R、第1基節骨L・R、基節骨(8)、中節骨(2)、末節骨	
050	1	1	老年	不明	下顎骨、上腕骨L、橈骨L、大腿骨L・R	
	1	2	未成人	不明	遊離歯	
	4	1	未成人	不明	頭蓋骨破片、遊離歯	
	5	1	成人	M	頭蓋骨破片、下顎骨R、脛骨R	
	一括	—	—	—	頭蓋骨破片、下顎骨L、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨R、大腿骨R、脛骨L・R、腓骨L/R	個体計数対象外
051	1	1	不明	不明	破片のみ	
	2	1	成年～ 熟年	不明	腰椎(2)、舟状骨L、大腿骨L・R、脛骨L・R、舟状骨R	
	3	1	未成人	不明	遊離歯	
054	1	1	成年～ 熟年	M	軸椎破片、鎖骨L、上腕骨L、脛骨R、腓骨R、第1中足骨R	
	2	1	乳幼児	不明	後頭骨、蝶形骨、頬骨R、頭蓋骨破片、軸椎破片、椎体(18)、肋骨L(5)・R(2)、肩胛骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨R、橈骨R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、第1中足骨L、中手/中足骨L/R(11)、基節骨(4)、中節骨(4)、遊離歯	
	3	1	幼児	不明	遊離歯	歯根未形成の永久歯有
	4	1	乳幼児	不明	頭蓋骨破片、下顎骨L・R、軸椎破片、仙骨、椎体(20)、肋骨L(3)・R(3)・破片、肩胛骨L、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L、尺骨L・R、腸骨L・R、坐骨L・R、恥骨R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨R、中手/中足骨L/R(16)、基節骨L/R(10)、中節骨L/R(9)、末節骨L/R(5)	
055	1	1	成年	M	頭蓋骨、下顎骨、環椎、軸椎、胸椎(5)、腰椎(5)、仙骨破片、肋骨L(8)・R(6)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、舟状骨L、月状骨R、第1中手骨L・R、第3中手骨L、第4中手骨L・R、基節骨L/R(4)、中節骨L/R、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、中間楔状骨L、内側楔状骨L、立方骨R、舟状骨L・R、第1中足骨L、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨R、第5中足骨L・R、基節骨L/R(3)	全体的に表面の風化が激しい
	1	2, 3	乳幼児	不明	前頭骨眼窩周辺L・R、後頭骨後頭顆L(2)・R・咽頭結節、側頭骨外耳孔周辺L(2)・R(2)、椎体(24)、肋骨L(12)・R(14)、肩甲骨L・R、鎖骨L(2)・R、上腕骨L(2)・R(2)、橈骨L(2)・R(2)、尺骨L(2)・R(2)、腸骨L・R、坐骨R、恥骨R、大腿骨L(2)・R(2)、脛骨L(2)・R(2)、腓骨R、中手/中足骨(14)、中手/中足/指骨(11)、基節骨L/R(11)、中節骨L/R(10)、末節骨L/R(2)	未成人2体分であるが、サイズが近似するため個体識別不能、歯骨は手足不明
	2	1	成人	M	上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨R、外側楔状骨L・R、中間楔状骨L、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨L・R	部位重複および残存状態によりNo.2と識別
	2	2	成人	F	上腕骨L・R、橈骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L、脛骨L・R、踵骨L、距骨L、外側楔状骨L、中間楔状骨L・R、立方骨L	(F?)
	2	3	乳児	不明	頭蓋骨破片、下顎骨、椎骨(8)、肩甲骨R、鎖骨L、上腕骨L・R、橈骨L・R、腸骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R	
	2	一括	—	—	頭蓋骨破片、軸椎、頸椎(5)、胸椎(9)、腰椎(3)、仙骨、椎骨破片、大菱形骨R、小菱形骨L・R、有鈎骨L(2)、舟状骨L、月状骨L(2)、三角骨L(2)、第1中手骨L(2)、第2中手骨L(2)、第3中手骨L、第4中手骨L、基節骨(5)、中節骨(4)、末節骨(5)、第1中足骨L、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、第1基節骨L、基節骨(6)、末節骨	
	3	1	成年	M	頭蓋骨、下顎骨、頸椎(2)、胸椎(11)、腰椎(3)、仙骨、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、尺骨L・R、橈骨L・R、有鈎骨L・R、舟状骨R、三角骨L、第1中手骨R、第2中手骨R、第3中手骨R、第4中手骨L・R、第5中手骨L、基節骨(7)、中節骨(4)、末節骨、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔状骨L、中間楔状骨L/R、内側楔状骨L、立方骨L・R、舟状骨L・R、第1中足骨R、第2中足骨L、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、第1基節骨L・R、基節骨(6)、中節骨(3)、末節骨(2)	

第7表 出土人骨一覧表(3)

墓 No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	年齢	性別	出土部位	特記事項
055	4	1	幼児	不明	頭蓋骨、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎、胸椎、腰椎、仙椎、肋骨L・R、肩甲骨L・R、上腕骨L・R、尺骨L・R、橈骨L・R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R	
	5	1	乳幼児	不明	頭蓋骨、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎、胸椎、腰椎、仙椎、肋骨L・R、肩甲骨L・R、上腕骨L・R、尺骨L・R、橈骨L・R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R	
	6	1	成年	F	頭蓋骨、下顎骨、軸椎、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L、腸骨L、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R	
	7	1	幼児	不明	前頭骨・側頭骨、軸椎、椎体(25)、胸骨、肋骨L(5)・R(7)、肩甲骨L、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、中手/中足骨L/R(11)、基節骨(手/足)L/R(9)、末節骨(手/足)L/R(5)	
	8	1	乳幼児	不明	四肢骨破片	
	9	1	幼児	不明	頭蓋骨、下顎骨、椎体(24)、肋骨L(10)・R(10)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨R、中手/中足骨L/R(10)、指骨L/R(3)	
	一次葬	1	若年	F	頭蓋骨、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(5)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙骨、胸骨、肋骨L(13)・R(10)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大腿形骨L、小菱形骨R、有頭骨R、舟状骨R、月状骨R、三角骨R、豆状骨L/R、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L・R、基節骨L/R(9)、中節骨L/R(6)、末節骨L/R)、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、中間楔状骨L・R、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、基節骨L/R(2)、末節骨L/R	基節骨に指輪着装
056	1	1	成人	不明	遊離歯	
	2	1	幼児	不明	頭蓋骨、下顎骨、環椎、軸椎、椎骨(8)、肋骨破片、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、腸骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R	後頭骨に変異
	3	1	成人	M	胸椎、仙骨、上腕骨L・R、大菱形骨R、小菱形骨R、有頭骨R、有鈎骨L、舟状骨R、豆状骨R、第2中手骨R、第3中手骨L、第4中手骨R、第5中手骨L、基節骨(5)、中節骨(2)、末節骨(5)、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨R、第1基節骨L・R、基節骨(4)、中節骨、末節骨	
	4	1	不明	不明	微細破片のみ	
	5	1	不明	不明	微細破片のみ	
	6	1	成人	不明	舟状骨R、基節骨、中節骨(4)、末節骨	
	6	2	幼~若年	不明	遊離歯	
	7	1	不明	不明	立方骨R	
	8	1	成人	不明	大腿骨L・R、遊離歯	
	8	2	乳幼児	不明	遊離歯	
057	1	1	成人	不明	環椎、頸椎、上腕骨R、尺骨R、有頭骨L、第2中手骨R、中節骨、末節骨、膝蓋骨L、腓骨R、中間楔状骨L・R、内側楔状骨L・R、舟状骨R、第1中足骨R、第3中足骨R、第5中足骨R	
	1	2	小児	不明	大腿骨L	
	1	3	幼児	不明	大腿骨L	
	1	4	幼児	不明	大腿骨L	
	1	5	乳幼児	不明	大腿骨L	
	1	一括	—	—	頭蓋骨破片、下顎骨L(2)・R(3)、軸椎(2)、仙椎(5)、椎骨(11)、肩甲骨L・R、上腕骨R、橈骨L・R、尺骨L・R、腸骨L(4)・R(2)、坐骨L(2)・R、恥骨R、脛骨R、踵骨L、距骨R	未成人骨、No.2～No.5のいずれか
	2	1	不明	不明	頭蓋骨破片、大腿骨L	
057	3	1	不明	不明	破片のみ	
	4	1	成人	不明	頸椎、胸椎(5)、腰椎(3)、仙骨、橈骨L、尺骨L・R、腓骨R、距骨R、舟状骨L、第4中足骨R、第5中足骨L、基節骨	
	5	1	成人	不明	頭蓋骨破片、下顎骨、腰椎、上腕骨R、尺骨L・R、寛骨臼+坐骨L、大腿骨L、膝蓋骨L・R	焼骨
	5	2	未成人	不明	下顎骨、脛骨L	
	6	1	成人	不明	上腕骨L、橈骨R、尺骨L、大腿骨R、膝蓋骨R	女性?
	7	1	成人	不明	軸椎、中節骨、遊離歯	
	8	1	不明	不明	破片のみ	
	9	1	成人	M	軸椎破片、頸椎(2)、胸椎(3)、仙骨破片、肩胛骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨R、有鈎骨R、月状骨L、第1中手骨L・R、第2中手骨R、基節骨(4)、中節骨(3)、大腿骨L・R、膝蓋骨R、脛骨L・R、腓骨R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔状骨L・R、内側楔状骨R、立方骨L、第1中足骨R、第4中足骨R、第5中足骨R	
	10	1	成人	M	軸椎、頸椎(2)、胸椎、腰椎(4)、仙骨、胸骨丙、肋骨破片、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、有頭骨R、第1中手骨L、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨R、第5中手骨L、基節骨(3)、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L、距骨R、内側楔状骨R、立方骨L、舟状骨R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨	
	10	2, 3	成人	不明	頸椎(2)、胸椎、有鈎骨L・R、第2中手骨L(2)、第3中手骨R、基節骨(2)、中節骨、末節骨、膝蓋骨L・R、中間楔状骨L、第4中足骨R	No.2とNo.3の個体識別は不能
	10	4	乳幼児	不明	下顎骨、大腿骨L・R	
	11	1	成人	M	軸椎、頸椎(5)、胸椎(9)、腰椎(4)、肋骨L(4)・R(2)、肩甲骨L、鎖骨R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨R、小菱形骨L、有鈎骨L・R、舟状骨L、第1中手骨L・R、第2中手骨R、第3中手骨L・R、第4中手骨R、基節骨(3)、中節骨(4)、末節骨(2)、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔状骨R、中間楔状骨L、内側楔状骨L、立方骨L、舟状骨R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨R、第1基節骨L・R、基節骨(3)、末節骨	残存状態によりNo.2と識別
	11	2	成人	不明	橈骨L、尺骨L・R、踵骨R、立方骨L・R、舟状骨R	

第 7 表 出土人骨一覽表(4)

墓 No.	藏骨器 No.	人骨 No.	年齡	性別	出土部位	特記事項
057	11	一括	—	—	頭蓋骨破片、下顎骨、椎体(4)	
	12	1	成人	M	上顎骨L・R、肩甲骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L/R、尺骨R、寬骨L/R、大腿骨L・R、腓骨R、舟狀骨L、第4中足骨L	
	12	2	若年	不明	仙椎(3)、椎骨(12)、上腕骨L・R、橈骨L、尺骨L・R、舟狀骨L・R、月狀骨L、第3中手骨R、基節骨(3)、坐骨L、大腿骨L・R、膝蓋骨L、踵骨L・R、距骨L・R、立方骨L、第5中足骨L、基節骨	
	13	1	若年	不明	遊離齒	
058	1	1	成人	F	頭蓋骨破片、上腕骨L・R、橈骨R、尺骨L・R、大菱形骨L、有頭骨L・R、舟狀骨L、月狀骨L、基節骨	
	2	1	成人	F	上腕骨L、橈骨L・R、大菱形骨R、第3中手骨R、基節骨、中節骨(2)、末節骨、腸骨L・R、大腿骨L・R、脛骨R、距骨L、立方骨R、第1基節骨R、基節骨	
	3	1	乳幼兒	不明	頭蓋骨、下顎骨、椎体(17)、肋骨破片、肩甲骨R、鎖骨R、上腕骨L・R、橈骨R、尺骨L・R、腸骨L・R、坐骨R、恥骨L、大腿骨L・R、脛骨L、腓骨L/R	
	3	2	成人	M	胸骨体、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L、尺骨L・R、有鈎骨L・R、舟狀骨R、第3中手骨L・R、第5中手骨L、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L、腓骨R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔狀骨L、內側楔狀骨R、立方骨R、第1中足骨L・R、第2中足骨L、第3中足骨L・R、第4中足骨R、第5中足骨L	
	4	1	熟年	不明	頭頂骨L、後頭骨、上腕骨R、橈骨R、尺骨L、大腿骨L・R、脛骨R、腓骨L、立方骨L	
	5	1	成人	不明	胸椎(5)、椎骨、大菱形骨R、有頭骨L・R、第4中手骨R、基節骨、中節骨、末節骨(3)、膝蓋骨R、距骨L、外側楔狀骨L・R、中間楔狀骨L・R、內側楔狀骨R、第5中足骨R、基節骨(2)、中節骨(4)、末節骨(4)	
	5	2	若年	不明	椎骨(10)、指骨(2)、遊離齒	
	6	1	成人	不明	遊離齒	
059	1	1	幼兒	不明	軸椎、仙椎、上腕骨L・R、尺骨L、腸骨L・R、坐骨L・R、大腿骨L・R	
	1	2	成人	不明	遊離齒	
	1	3.4	未成人	不明	遊離齒	No.3、4識別不可
	2	1	成人	M?	距骨L・R	
	3	1	成年～ 熟年	F	頭椎(3)、胸椎、腰椎(3)、仙骨、胸骨体、上腕骨L・R、橈骨L、大菱形骨R、小菱形骨L、月狀骨L、第2中手骨L、第3中手骨L、第5中手骨L、中節骨(4)、末節骨(2)、腸骨L、坐骨L、大腿骨L・R、膝蓋骨L、脛骨L・R、距骨L・R、內側楔狀骨L・R、立方骨L・R、舟狀骨R、第2中足骨L、第3中足骨L・R、第4中足骨R、第5中足骨L、第1基節骨L・R、基節骨(4)	
061	1	1	乳幼兒	不明	頭蓋骨破片、上腕骨L、大腿骨L・R	
062	1	1	成人	不明	上腕骨L、有頭骨L、有鈎骨L、第2中手骨L・R、第3中手骨R、第4中手骨L、第5中手骨L、基節骨、末節骨、距骨L、中間楔狀骨R、舟狀骨L、第1中足骨R、第5中足骨R、基節骨、末節骨	
	2	1	成年	F	椎骨、上腕骨L、橈骨L、大菱形骨R、小菱形骨R、月狀骨L、三角骨R、第2中手骨R、第5中手骨R、中節骨、寬骨L、膝蓋骨L・R、脛骨L、中節骨(5)、末節骨	
	3	1	成人	不明	遊離齒	
	4	1	成人	M	頭蓋骨破片、下顎骨、環椎、軸椎、頭椎(5)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙骨、胸骨、肋骨L(11)・R(11)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、有鈎骨・R、第1中手骨L、第2中手骨L、第3中手骨L、第4中手骨L、第5中手骨L・R、基節骨L/R(4)、中節骨、寬骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、距骨L・R、中間楔狀骨L・R、內側楔狀骨L・R、立方骨L・R、舟狀骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、基節骨L/R(2)	
	5	1	老年	M	頭蓋骨破片、下顎骨、環椎、軸椎、頭椎(5)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙骨、胸骨、肋骨L(12)・R(11)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨L・R、小菱形骨L・R、有頭骨L・R、有鈎骨L・R、舟狀骨L・R、月狀骨L・R、三角骨L・R、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L・R、基節骨L/R(9)、中節骨L/R(7)、末節骨L/R(10)、寬骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔狀骨L・R、中間楔狀骨L・R、內側楔狀骨L・R、立方骨L・R、舟狀骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、基節骨L/R(7)、末節骨L/R	
	5	2	乳兒	不明	遊離齒	
	6	1	成年	不明	末節骨(3)、大腿骨R、膝蓋骨R、遊離齒	
	7	1	成人	不明	上顎骨L、頸椎、胸椎(3)、腰椎(3)、肩甲骨R、上腕骨L・R、有頭骨R、坐骨L・R、大腿骨L・R、脛骨R、舟狀骨L、第1中足骨R	
	8	1	成人	不明	頭蓋骨破片、環椎破片、頭椎(2)、胸椎(3)、椎骨(8)、胸骨丙、大菱形骨L、有頭骨L、有鈎骨R、月狀骨L、第2中手骨R、第3中手骨R、第4中手骨R、第5中手骨L・R、中節骨(5)、末節骨(3)、大腿骨L、脛骨L・R、外側楔狀骨L、中間楔狀骨R、內側楔狀骨L、第3中足骨L・R、第4中足骨L、基節骨(5)、中節骨、末節骨(5)	
	9	1	成人	M	頭蓋骨破片、下顎骨、環椎、軸椎、頭椎(5)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙骨、胸骨、肋骨L(12)・R(12)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨L・R、小菱形骨L・R、有頭骨L・R、有鈎骨L・R、舟狀骨L・R、月狀骨L・R、三角骨L・R、豆狀骨L・R、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L・R、基節骨L/R(10)、中節骨L/R(8)、末節骨L/R(10)、寬骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔狀骨L・R、中間楔狀骨L・R、內側楔狀骨L・R、立方骨L・R、舟狀骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R、基節骨L/R(7)、中節骨L/R、末節骨L/R	
	10	1	成人	不明	頭蓋骨破片、舟狀骨L・R、基節骨(2)、末節骨(3)、大腿骨L・R、外側楔狀骨R、舟狀骨L、中節骨、末節骨	
	11	1	不明	不明	頭蓋骨破片、頭椎(2)、胸椎(7)、腰椎、椎骨、胸骨丙、肩甲骨L、尺骨L、有頭骨L、有鈎骨L、月狀骨R、基節骨、中節骨(2)、末節骨、寬骨L・R、大腿骨L/R、膝蓋骨R、脛骨L、踵骨L、立方骨L、基節骨(2)、中節骨(4)、末節骨(5)	
	12	1	成年	不明	遊離齒	
	12	2	若年	不明	遊離齒	

第7表 出土人骨一覧表(5)

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	年齢	性別	出土部位	特記事項
062	12	一括	—	不明	椎骨(2)、上腕骨R、橈骨R、尺骨R、大菱形骨L・R、小菱形骨R、有頭骨L・R、有鈎骨L・R、舟状骨L・R、月状骨L・R、三角骨L・R、第3中手骨R、第4中手骨L、第5中手骨R、基節骨(2)、中節骨(2)、末節骨、膝蓋骨L・R、中間楔状骨R、第3中足骨L、基節骨(3)、中節骨(4)、末節骨(3)	
	13	1	成人	不明	頭頂骨、後頭骨、側頭骨、橈骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨R	
071	1	1	小児	不明	仙椎、椎骨(2)、上腕骨L、大菱形骨R、有頭骨R、有鈎骨R、中手骨(2)、腸骨L、大腿骨L、膝蓋骨R、脛骨L・R、基節骨(手/足)(4)、中節骨(手/足)	
	2	1	老年	M	頭蓋骨破片、側頭骨、下顎骨、仙骨、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L、寛骨破片、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R	
	—	一括	—	—	四肢骨破片	

第8表 検出された人骨の最小個体数一覧(墓別)

墓No.	成人												未成人				年 齡 性 別 不 明	計
	成年			熟年			老年			年齢不明			若年	小兒	乳 幼 児	年 齡 不 明		
	M	F	性別 不明	M	F	性別 不明	M	F	性別 不明	M	F	性別 不明						
001										1	1				1			3
004																	1	1
009	1									1		2		1	4		5	14
019																1		1
023																	4	4
027							2	3				4	2		2	1	4	18
041																3		3
049					1					1								2
050									1	1						2		4
051						1										1	1	3
054				1											3			4
055	2	1								1	1		1		8			14
056										1		3	1		2		3	10
057										4		8	2	1	4	1	3	23
058						1				1	2	2	1		1			8
059					1					1		1			1	2		6
061															1			1
062		1	2				1			2		6	1		1		1	15
071							1							1				2
合計	3	2	2	1	2	2	4	3	1	14	4	26	8	3	28	11	22	136

※推定年齢段階がまたがっている場合はより上の段階でカウント

凡例) 歯種記号: 残存歯, ○: 歯槽開放, ×: 歯槽閉鎖, /: 歯槽破損,
△: 歯根のみ残存, (): 未萌出, []: 萌出中・閉鎖中,
網掛: 齶歯, 空白: 欠失・未形成

第9表 上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況(1)

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	残存状況															
			R								L							
001	1	1					P ²	C	I ²	I ¹				C	P ¹			
				M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	
009	16	1							(I ²) i ²	(I ¹) ○								
				(M ₁)	(m ₂)		m ₁	c	/	/	/	/	c	m ₁	(m ₂)	(M ₁)		
027	16	2	○	M ²	○	○	○	C	○	○	○	○	C	○	P ²	M ¹	M ²	M ³
			M ₃	M ₂	×	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	×	M ₂	M ₃
049	3	1, 2																
			×	×	×	×	/	/	/						/	/	×	×
054	7	1	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	/	/	/
			×	×	×	(×)	○	C	○	×	×	×	C	P ₁	×	×	×	×
055	9	1																
			×	×	×	○	×	×	×	×	/	/	/	/	/	×	×	×
055	10	1																
										/	×	×	×	×	×	×	×	×
055	11	1																
			×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
055	11	2	(M ³)	M ²	M ¹	/	/	/	/	/	○	○	C	P ¹	/	M ¹	M ²	(M ³)
			(M ₃)	M ₂	M ₁	P ₂	○	C	○	○	I ₁	I ₂	○	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	(M ₃)
055	15	1	×	×	×	○	△	○	○	I ¹	○	×	○	○	×	×	×	×
			×	×		○	○	C	○	×	×	×	○	P ₁	P ₂	M ₁	○	M ₃
055	1	1																
			/	○	○	△	△	○	○	○	○	○	○	△	△	○	○	/
055	2	1																
				/	○	○	○	C	○	○	○	○	○	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	
055	1	1																
			/	×	×	×	×	×	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
055	1	1																
			/	○	○	○	○	○	/	/								
055	4	1																
				(M ₁)	(m ₂)	(m ₁)	/	/	/	/	○	○	○	○	(m ₂)	(M ₁)		
055	1	1		M ²	M ¹	P ²	○	○	○	I ¹	○	○	C	○	P ²	M ¹	M ²	
				M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	○	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	
055	2	3																
											○	○	○	○	○			
055	3	1																
			M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	○	○	/	/	/	/	○	△	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

凡例) 齒種記号: 残存齒, ○: 齒槽開放, ×: 齒槽閉鎖, /: 齒槽破損,
 △: 齒根のみ残存, (): 未萌出, []: 萌出中・閉鎖中,
 網掛: 齧齒, 空白: 欠失・未形成

第9表 上顎骨及び下顎骨の齒列残存状況(2)

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	残存状況															
			R								L							
055	6	1	(M ²)	M ²												M ¹	M ²	(M ²)
				M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	
	9	1	/	(M ¹)	m ²	m ¹	c	i ²	i ¹	i ¹	i ²	c	m ¹	m ²	(M ¹)	/		
056	一次葬	1	M ²	○	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	○	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ¹
			M ₂	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	○	C	○	P ₂	M ₁	M ₂	
057	5	1		○	(M ¹)	m ²	m ¹	c	(I ¹) ○	(I ¹) i ¹	(I ¹) i ¹	(I ¹) i ²	c	m ¹	m ²	(M ¹)	○	
				○	(M ₁)	m ₂	m ₁	c	i ₂ (I ₂)	○	i ₁	○ (I ₂)	c	m ₁	m ₂	(M ₁)	○	
057	5	1										/	/	/	×	○	○	/
	5	2						/	/	/	/	/	/	/	/			
	9	1	M ₂	△	M ₁	○	○	/	/	/	/	△	○	○	×	×	×	×
	10	4								○	○ (I ₁)	○	○ (C)	△	○	(M ₁)		
	11	一括				×	×	×	/	/	/	/	/	/	/			
	12	1	/	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
058	3	1			(m ¹)	m ¹	○	i ²	○									
				(M ₁)	(m ₂)	m ₁	○	○	○	○	i ₂	○	m ₁	(m ₂)	(M ₁)			
062	4	1	○	○	○	○	○	○	○	I ¹	I ²	○	○	○	M ¹	○	○	
			○	M ₂	M ₁	○	○	○	○	○	○	○	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	○	
	5	1	×	×	×	○	○	C	I ²	○	I ¹	○	○	P ¹	P ²	×	×	×
			M ₂	(×)	(×)	(×)	P ₁	C	○	×	×	×	C	○	(×)	(×)	(×)	M ₂
071	7	1									○	○	○					
	9	1	/	/	M ¹	○	P ¹	C	○	I ¹	I ¹	○	C	P ¹	P ²	M ¹	/	/
			×	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	×	M ₁	M ₂	M ₂
071	2	1																
			×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

第10表 骨に見られる変異等の観察表

墓 No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	部位	左右	変 異 種 別	観 察 所 見
009	16	1	上顎骨	—	歯槽性突顎	図版37参照
	16	2	前頭骨	L R	クリブラオルビタリア	両眼窩に中程度の篩状孔
			後頭骨	—	クリブラクラニイ	僅かに篩状孔
			i 2・c	L	異常萌出	癒合
			c	R	異常萌出	非形成
027	1	1	腰椎	—	変形	椎体左半が右半に比べ薄く変形
			尺骨	R	骨増殖	滑車切痕・橈骨切痕・鉤状突起一帯が著しい骨増殖により変形
	7	1	腰椎	—	変形性関節症	椎体腹縁に骨棘形成
	9	1	寛骨	L R	前耳状溝	比較的明瞭な前耳状溝
	10	1	寛骨	L R	前耳状溝	比較的幅の広く深い溝
	11	1	前頭骨	L	クリブラオルビタリア	やや軽度の篩状孔が眼窩上孔に認められる
			後頭骨	—	孔	φ 3 mm程度の孔
			腸骨	L R	前耳状溝	比較的中程度の幅・深さの溝
	15	1	腰椎	—	変形性関節症	椎体腹縁に骨棘形成および上下関節に骨増殖
			第 1 中足骨	R	骨増殖	遠位端に異常形質
049	2	1	寛骨	L R	前耳状溝	比較的幅の狭く深い溝
051	2	1	腰椎	—	骨増殖	腰椎椎体腹縁に骨棘形成
055	1	1	上顎骨	—	歯槽性突顎	図版39参照
			胸椎	—	下関節突起	関節面に骨棘形成
			鎖骨	L	骨増殖	肋鎖靱帯圧痕に骨増殖
			立方骨	R	骨増殖	関節面の端部に骨棘形成
			第 1 中足骨	L	変形	遠位側骨幹に棘状の突起形成
	3	1	胸椎	—	骨増殖	椎体腹縁に骨棘形成
056	2	1	前頭骨	L R	クリブラオルビタリア	両眼窩に中程度の篩状孔
			後頭骨	—	クリブラクラニイ	ラムダ縫合付近に高密度の篩状孔
	3	1	胸椎	—	骨増殖	椎体腹縁に軽度の骨棘形成
			仙椎	—	骨増殖	第一仙椎の椎体腹縁に軽度の骨棘形成
			中手骨	—	骨増殖	近位端にやや膨張
057	9	1	腰椎	—	骨増殖	椎体腹縁に骨棘形成
	11	1	頸椎	—	骨増殖	3 点の椎体腹縁に弱い骨棘形成
			胸椎	—	骨増殖	4 点の椎体腹縁に骨棘形成
			腰椎	—	骨増殖	2 点の椎体腹縁に骨棘形成
058	1	1	脛骨	R	骨増殖	栄養孔位周辺で内側に瘤状
			腓骨	R	屈曲	近位側骨幹が内側へ湾曲
	5	1	中節骨・末節骨	L R	癒合	足の第 5 指中節骨と末節骨が左右とも癒合
059	3	1	胸骨	—	孔	胸骨体下部に φ 5 mm の孔
			胸椎	—	骨増殖	2 点の椎体腹縁に骨棘形成
			腸骨	L	前耳状溝	比較的浅い溝が形成
062	2	1	寛骨	L	前耳状溝	比較的軽度の幅及び深さの溝
	5	1	腓骨	R	骨増殖	近位端付近脛骨との関節部分に板状の骨増殖
	7	1	腰椎	—	骨増殖	2 点の椎体腹縁に骨棘形成
	9	1	腰椎	—	骨増殖	2 点の椎体腹縁に骨棘形成
			脛骨	L	骨増殖	近位側骨幹外側に瘤状の骨増殖
			腓骨	L	骨増殖	骨幹全体に骨折治癒痕と思しき骨増殖

第11表 齧歯一覧表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	歯種	左右	位 置	所 見
027	7	1	P ₁	L	遠心面	歯冠にφ2mmの齧蝕
	10	1	I [']	R	唇側面	歯冠下部に齧蝕
	11	2	M ₁	L	咬合面	φ1mmとφ2mmの齧蝕
	15	1	P ₂	L	遠心面	φ1mm程度の齧蝕
			M ₂	L	近心面・頬側面	歯冠近心φ3mmと歯冠から歯根にかけてφ4mmの齧蝕
055	6	1	M ₂	L	歯冠	歯冠消失
			M ₂	R	歯冠	歯冠の大部分消失
	9	1	m ₂	LR	咬合面	後端に齧蝕
			i [']	LR	歯冠	歯冠がほぼ全て消失
			i ²	LR	舌側面	歯冠の大部分に齧蝕
062	5	1	M ₂	L	近心～頬側面	歯冠下半に齧蝕
			M ₂	R	歯冠	大半が齧蝕により消失
			P ₁	R	遠心面	歯冠
			P [']	L	歯冠	歯冠消失
			P ²	L	近心面	歯冠
	9	1	I ₂	R	遠心面	歯冠と歯根の境目にφ2mmの孔
			C↓	R	遠心面	歯冠に齧蝕による孔
			P ₁	L	遠心面	遠心面の歯冠が欠失
			P ₂	R	咬合面	歯冠が齧蝕により消失
			M ₁	L	近心面・遠心面	両面の歯冠にφ5mm程度の齧蝕
			M ₁	R	近心面	歯冠下部にφ2mm程度の齧蝕
			M ₂	R	遠心面	歯根が面的に剥離

第12表 下顎犬歯に観察されるエナメル質減形成一覧表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	歯種	LR	出現数	類型	歯冠最下端からの距離 (mm)	ストレス受容推定年齢 (歳)	備考
009	11	1	C↓	L	3	線状	1.96	5.0～5.5	下顎左右の犬歯にも有
						線状	3.38	4.5～5.0	
						線状	6.08	3.0～3.5	
	16	1	C↓	L	3	線状	1.92	5.0～5.5	下顎右犬歯、左右小臼歯にも有
						線状	3.19	4.5～5.0	
055	1	1	C↓	L	4	線状	4.61	4.0～4.5	下顎右・上顎左右の犬歯にも有
						線状	2.37	5.0～5.5	
						線状	3.88	4.0～4.5	
						線状	4.88	3.5～4.0	
	6	1	C↓	L	3	線状	6.74	2.5～3.0	下顎右犬歯および切歯・小臼歯にも有
						線状	2.26	5.0～5.5	
						線状	3.50	4.5～5.0	
						線状	4.96	3.5～4.0	
062	9	1	C↓	L	3	線状	2.33	5.0～5.5	他の下顎歯にも有
						線状	3.38	4.5～5.0	
						線状	5.08	3.5～4.0	

※類型・計測・ストレス受容年齢推定は山本1987に従っている

第13表 身長推定

墓No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	性別	推定身長 (cm)	対象部位	LR	最大長(mm)	LR平均値 (mm)
009	16	1	M	151.84	Tib	L	307	308.0
						R	309	
027	7	1	M	148.42	Fem	L	357	357.0
						R	357	
	15	1	M	157.45	Fem	L	406	405.5
						R	405	
055	1	1	M	153.41	Hum	R	286	286.0
062	4	1	M	158.76	Fem	L	410	412.5
						R	415	
	5	1	M	158.76	Fem	L	412	412.0
						R	412	
	9	1	M	159.70	Fem	L	420	417.5
						R	415	
男性平均				155.48				
055	一次葬	1	F	138.20	Fem	R	336	336.0
女性平均				138.20				

※ピアソンの式に基づく身長推定
 ※最大長計測値の内、大腿骨を優先的に用い、それが無い場合には脛骨・上腕骨を用いた。
 ※左右計測可能な場合は、その平均値から算出

第14表 脳頭蓋計測値①（男性）

計測項目		計測値 (mm)							平均
		009	027	027	054	055	062	062	
		16	7	15	1	1	4	5	
		1	1	1	1	1	1	1	
1	脳頭蓋最大長	169.0	164.0	173.0	176.0	167.0	174.0	181.0	172.0
5	頭蓋底長	94.0	104.0	102.0		98.0	101.0	106.0	100.8
8	脳頭蓋最大幅	144.0	145.0	133.0	141.0	147.0	142.0	138.0	141.4
8/1	頭蓋長幅指数	85.2	88.4	76.9	80.1	88.0	81.6	76.2	82.4
9	最小前頭幅	89.0	93.0	85.5	90.8	91.0	91.7	94.7	90.8
9/8	横前頭頭頂指数	61.8	64.1	64.3	64.4	61.9	64.6	68.6	64.2
17	バジオン・プレグマ高	134.0	140.0	137.0		138.0	142.0	150.0	140.2
17/1	頭蓋長高指数	79.3	85.4	79.2	0.0	82.6	81.6	82.9	70.1
17/8	頭蓋幅高指数	93.1	96.6	103.0	0.0	93.9	100.0	108.7	85.0
23	脳頭蓋水平周	476.0	484.0	483.0	499.0	483.0	49.6	520.0	427.8
24	横弧長	300.0	293.0	258.3	370.0	310.0	298.0	359.0	312.6
25	正中矢状弧長	360.0	346.0	350.0				359.0	108.8
26	正中前頭弧長	126.0	117.0	114.0	130.0	119.0	105.0	112.0	117.6
27	正中頭頂弧長	127.0	122.0	127.0	122.0	127.0	132.0	133.0	127.1
28	正中後頭弧長	107.0	107.0	109.0				114.0	109.3
27/26	矢状前頭頭頂指数	100.8	104.3	111.4	93.8	106.7	125.7	118.8	108.8
26/25	前頭矢状弧長指数	35.0	33.8	32.6				31.2	33.1
27/25	頭頂矢状弧長指数	35.3	35.3	36.3				37.0	36.0
28/25	後頭矢状弧長指数	29.7	30.9	31.1				31.8	30.9

第14表 脳頭蓋計測値②（女性・不明）

計測項目	計測値 (mm)		平均
	055		
	一次葬		
	1		
1	脳頭蓋最大長	168.0	168.0
5	頭蓋底長	93.0	93.0
8	脳頭蓋最大幅	143.0	143.0
8/1	頭蓋長幅指数	85.1	85.1
9	最小前頭幅	87.1	87.1
9/8	横前頭頭頂指数	60.9	60.9
17	バジオン・プレグマ高	134.0	134.0
17/1	頭蓋長高指数	79.8	79.8
17/8	頭蓋幅高指数	93.7	93.7
23	脳頭蓋水平周	483.0	483.0
24	横弧長	307.0	307.0
25	正中矢状弧長	351.0	351.0
26	正中前頭弧長	120.0	120.0
27	正中頭頂弧長	109.0	109.0
28	正中後頭弧長	122.0	122.0
27/26	矢状前頭頭頂指数	90.8	90.8
26/25	前頭矢状弧長指数	34.2	34.2
27/25	頭頂矢状弧長指数	31.1	31.1
28/25	後頭矢状弧長指数	34.8	34.8

第14表 脳頭蓋計測値③（未成人）

計測項目	計測値 (mm)		平均
	055		
	9		
	1		
1	脳頭蓋最大長	149.0	149.0
5	頭蓋底長	74.0	74.0
8	脳頭蓋最大幅	129.0	129.0
8/1	頭蓋長幅指数	86.6	86.6
9	最小前頭幅	74.0	74.0
9/8	横前頭頭頂指数	57.4	57.4
17	バジオン・プレグマ高	115.0	115.0
17/1	頭蓋長高指数	77.2	77.2
17/8	頭蓋幅高指数	89.1	89.1
23	脳頭蓋水平周	424.0	424.0
24	横弧長	265.0	265.0
25	正中矢状弧長	320.0	320.0
26	正中前頭弧長	105.0	105.0
27	正中頭頂弧長	108.0	108.0
28	正中後頭弧長	107.0	107.0
27/26	矢状前頭頭頂指数	102.9	102.9
26/25	前頭矢状弧長指数	32.8	32.8
27/25	頭頂矢状弧長指数	33.8	33.8
28/25	後頭矢状弧長指数	33.4	33.4

第15表 上腕骨計測値①（成人男性・性別不明）

計測項目		蓋No.	計測値 (mm)																			平均							
		載骨器No.	001	009	009	009	009	023	027	027	027	027	049	050	054	055	055	057	057	057	057		057	058	062	062	062	062	071
		人骨No.	3	4	11	12	16	2	3	3	7	15	1	1	1	1	2	3	6	9	10		11	12	4	4	5	7	9
1	最大長	L									240	292				286		337						295	295		304	292.7	
		R					213				245	295					342							290	298		313	285.1	
2	全長	L									235	286				280		336						291	291		301	288.6	
		R					211				238	290					340							288	295			277.1	
3	近位端幅	L					39.2				47.9	46.2					47.3			45.3				45.3	48.6		48.9	46.1	
		R					41.0			44.6		47.7	47.4				47.1					45.6			49.6	49.0	46.5		
4	遠位端幅	L									58.1	57.6					54.8							56.8	61.8		57.6	57.8	
		R									58.1	58.4					54.7							57.0	62.1		61.4	58.6	
5	中央最大径	L	21.6	19.3		20.3	19.3	18.2	20.0	19.5	23.4	22.7		19.4	20.5	21.5	20.8	20.5		17.3	19.2			21.0	23.4	25.2	21.0	20.7	
		R	21.4			21.7	19.0	18.6			23.8	24.4	19.3			21.8	21.1				19.1		17.7	20.0	24.3	22.3	22.1	21.1	
6	中央最小径	L	19.6	14.0		16.5	15.0	13.7	16.8	13.0	18.4	18.0		13.5	16.4	18.8	18.6	16.6		13.9	14.5			19.0	18.9	19.5	19.7	16.7	
		R	19.6		16.0	16.3	15.1	14.4			18.4	18.1	13.8			18.0	16.8					15.2	15.1	17.0	18.6		18.7	16.1	
7	骨体最小周	L	61	53		55	53	51			65	63		51	56	60	62	57	45	56		53		58	65		66	57	57.2
		R	61		58	56	54	50			66	65	52			60	58		59	52			51	56	67	66	57	58.1	
7a	中央周	L	64			60	56	53	61	53	68	66		54	60	65	62	60		50				61	69	70	66	61	61.0
		R	65			61	56	54			70	68	56			64	60			55		53	60	70		66	61	61.3	
8	頭周	L									133						126			117		120		125	134		136	127.3	
		R							112		133	133					125			119		123		125	136		139	127.2	
9	頭最大横径	L									44.2						40.6		36.9	39.6			39.6	43.2		45.3	41.3		
		R							35.4			43.5	42.3				40.7		37.9	40.6			40.0	43.9		44.7	41.0		
10	頭最大矢状径	L				37.0					42.2	43.1					42.0		41.1	39.8			40.3	44.7		42.9	41.5		
		R						29.1			43.0	44.7					42.8		40.2	41.0			40.0	44.1		42.5	40.8		
6/5	骨体横断示数	L	90.7	72.5		81.3	77.7	75.3	84.0	66.7	78.6	79.3		69.6	80.0	87.4	89.4	81.0		80.3	75.5			90.5	80.8	77.4	93.8	80.7	80.4
		R	91.6			75.1	79.5	77.4			77.3	74.2	71.5			82.6	79.6			79.6		85.3	85.0	76.5		83.9	72.9	78.9	
7/1	長厚示数	L				135.2					135.7	136.4					120.5						128.0	133.7	135.8		132.2		
		R				131.7					138.4	137.1					123.1							135.1	135.5		133.5		
9/10	骨頭断面示数	L									104.7	0.0					96.7			89.8	99.5			98.3	96.6		105.6	86.4	
		R						121.6			101.2	94.6					95.1			94.3	99.0		100.0	99.5		105.2	101.2		

第15表 上腕骨計測値②（成人女性）

計測項目		基No. 藏骨器No. 人骨No.	計測値（mm）										平均
			001	027	049	055	055	055	058	058	059		
			1	11	2	一次葬	2	6	1	2	3		
			1	1	1	2		1	1	1			
1	最大長	L	264									264.0	
		R	245									245.0	
2	全長	L	263									263.0	
		R	232									232.0	
3	近位端幅	L											—
		R											—
4	遠位端幅	L	48.9						51.6				51.6
		R	47.8						49.7				48.8
5	中央最大径	L	19.9	18.7	16.4	18.3	20.6	17.6	19.8	17.7	20.2	19.0	
		R	19.9	19.9	18.3	17.6			19.6		21.0	19.4	
6	中央最小径	L	14.9	15.5	13.3	13.0	16.2	14.2	16.0	13.9	16.4	15.0	
		R	14.0	14.3	14.3	12.8			15.8		16.8	14.7	
7	骨体最小周	L	48	51	45	45		48	55	49		49.3	
		R	49	52	47	45	54	48	54		55	50.5	
7a	中央周	L	55	56	50	49	59	51	58	52	59	54.7	
		R	57	56	54	49			56		61	55.5	
8	頭周	L											—
		R											—
9	頭最大横径	L											—
		R											—
10	頭最大矢状径	L											—
		R	37.2										37.2
6/5	骨体横断示数	L	74.9	82.9	81.1	71.0	78.6	80.7	80.8	78.5	81.2	78.5	
		R	70.4	71.9	78.1	72.7			80.6		80.0	75.6	
7/1	長厚示数	L											—
		R											—
9/10	骨頭断面示数	L											—
		R											—

第15表 上腕骨計測値③（未成人）

計測項目		蓋No. 腕骨器No. 人骨No.	計測値（mm）															平均
			001	009	009	027	027	054	054	055	055	055	055	057	058	061		
			4	16	16	8	11	2	4	1	1	2	7	9	12	3	1	
			1	2	3	1/2	2	1	2/3①	2/3②	3	1	1	2	1	1		
1	最大長	L																—
		R																—
2	全長	L																—
		R																—
3	近位端幅	L																—
		R																—
4	遠位端幅	L																—
		R	40.6															40.6
5	中央最大径	L																—
		R	12.0	10.0	8.0		15.2	10.6	10.8	10.0	10.0	5.3	10.3	12.6		10.8	9.9	
6	中央最小径	L																—
		R	9.9	9.8	7.5		13.0	7.9	8.6	9.5	9.2	5.0	9.9	8.6		7.4	8.8	
7	骨体最小周	L																—
		R	33	30	22	18	13		28	28	28	16	32	33		30	25.3	
7a	中央周	L																—
		R	37	31	25		46	28	32	30	28	20	33	35		32	31.4	
8	頭周	L																—
		R																—
9	頭最大横径	L																—
		R																—
10	頭最大矢状径	L																—
		R																—
6/5	骨体横断示数	L	89.9 91.1 79.0 78.7 95.0 91.0 94.3 92.2 76.2															87.5
		R	82.5	98.0	93.8		85.5	74.5	79.6	90.5	93.9	94.3	96.1	68.3		69.8	85.8	
7/1	長厚示数	L																—
		R																—
9/10	骨頭断面示数	L																—
		R																—

第16表 橈骨計測値①（成人男性・性別不明）

計測項目		基準 No. 人骨No.	計測値 (mm)																		平均
			001 3	009 11	009 12	009 16	023 2	027 3	027 7	027 15	049 1	050 1	055 1	055 2	055 3	057 9	057 11	062 4	062 5	062 9	
1	最大長	L							180	232								226	231	221	218.0
		R							181	228								226	232	230	219.4
2	機能長	L				188			217	217			203					213	217	208	209.5
		R				189			222	217								213	209	207	209.5
3	骨体最小周	L			38	37	35		43	43		36	42	41		40	33	40	42	44	41
		R	43			38			40	43					40	42	34	37	40	45	41
4	骨体横径	L			15.7	15.0		15.0	16.9	17.8	14.8	14.6	15.4	15.6	15.6	15.8		16.0	15.9	16.9	17.1
		R	18.6	14.0	15.6	15.1	14.6		16.1	17.1	14.1			15.9	16.1	15.0	13.7	15.5	16.0	16.9	15.2
4a	骨体中央横径	L			14.2	14.6		13.9	15.8	15.4	13.0	12.9	13.6	14.9		15.3	13.9	15.0	15.3	15.1	16.1
		R	17.0		13.8	14.7			15.3	16.4				14.8		14.2	13.9	14.2	14.7	16.0	16.0
4(1)	骨頭横径	L							20.0		20.4			21.1	19.0		20.0	22.3	21.5		20.6
		R						19.8	21.9							21.4	19.4	20.9	20.8	23.4	21.1
4(2)	頸横径	L				11.6			15.6	15.5	12.2		13.0	13.1		12.0		13.5	15.8	17.5	14.0
		R				12.0			13.6	15.2	16.4	12.0				12.4	10.7	13.0	15.9	17.5	10.9
5	骨体矢状径	L			11.1	10.1		10.5	12.8	12.5	11.8	11.0	13.0	12.1	10.2	12.8		11.1	13.2	13.6	12.1
		R	12.2	11.7	11.6	10.4	10.2		11.6	13.9	11.0			12.8	11.7	11.3	9.7	11.5	11.6	13.3	11.9
5a	骨体中央矢状径	L			11.2	10.5		19.4	12.5	12.8	11.4	10.4	12.1	12.4		12.7	9.9	11.4	13.0	12.9	11.6
		R	12.2		12.3	10.6			11.3	13.3				12.5	12.6	12.4	9.9	11.8	12.4	13.4	11.7
5(1)	骨頭矢状径	L							21.9		19.5							20.6	23.3	22.7	21.6
		R							22.4						20.2		19.7	20.1	21.4	22.6	21.1
5(2)	頸矢状径	L				12.0			16.8	14.3	13.4		15.2	14.1		13.8		13.3	17.2	17.0	14.7
		R				12.2			13.9	18.9	14.0	13.0				13.6		13.0	14.0	17.8	17.6
5(3)	頭周	L																64	71	70	68.3
		R							70									60	64	67	72
5(5)	骨体中央周	L			40	39		37	44	43		36	42	42		42	38	41	43	44	45
		R	45		41	39			42	46				43		40	37	41	41	46	43
5(6)	遠位端幅	L				28.1			31.6	30.8								30.3		33.7	31.3
		R				26.5			33.3		31.7									30.0	32.7
3/2	長厚示数	L				19.7			19.8	19.8			20.7					18.8	19.4	21.2	19.9
		R				20.1			18.0	19.8								17.4	19.1	21.7	19.4
5/4	骨体断面示数	L			70.7	67.3		70.0	75.7	70.2	79.7	75.3	84.4	77.6	65.4	81.0		69.4	83.0	80.5	70.8
		R	65.6	83.6	74.4	68.9	69.9		72.0	81.3	78.0			80.5	72.7	75.3	70.8	74.2	72.5	78.7	74.8
5a/4a	骨体中央断面示数	L			78.9	71.9		139.6	79.1	83.1	87.7	80.6	89.0	83.2		83.0	71.2	76.0	85.0	85.4	72.0
		R	71.8		89.1	72.1			73.9	81.1				84.5		87.3	71.2	83.1	84.4	83.8	73.1

第16表 橈骨計測値②（成人女性）

計測項目		基準 No. 人骨No.	計測値 (mm)										平均
			001 1	027 9	027 10	027 11	049 2	055 一次群	055 2	055 6	058 1	058 2	059 3
1	最大長	L						183					183.0
		R											—
2	機能長	L						173					173.0
		R											—
3	骨体最小周	L	31	32			30	32		35			34
		R	31			33	31	29			39		32.6
4	骨体横径	L	12.1	14.8	15.3		12.9	10.8	16.1		16.0	13.8	14.0
		R	12.6	13.6	13.8	14.2	13.1	10.9	15.7		15.1	11.6	13.4
4a	骨体中央横径	L	11.4	12.5			13.6	12.6	10.9	14.1	12.6	12.8	13.3
		R	11.5		12.2	12.5	11.2	15.4		13.6			12.7
4(1)	骨頭横径	L					17.1						17.1
		R											—
4(2)	頸横径	L					9.9	9.9			11.5	10.9	10.6
		R					10.3	10.2					10.3
5	骨体矢状径	L	9.2	10.9	9.8		9.8	9.0	11.5	11.1		11.1	10.3
		R	9.5	11.0	10.0	10.6	9.1	8.2	11.2			10.9	10.1
5a	骨体中央矢状径	L	8.4	10.0			9.7	9.6	8.8	12.0	11.2	10.8	10.1
		R	9.9			9.9	9.3	8.0		12.1			9.8
5(1)	骨頭矢状径	L					18.0						18.0
		R											—
5(2)	頸矢状径	L					11.6	11.8			12.5	12.8	12.2
		R					11.8	10.2					11.0
5(3)	頭周	L											—
		R											—
5(5)	骨体中央周	L	32	36		37	33	30	41	36		36	35.2
		R	32			35	33	30		41			34.2
5(6)	遠位端幅	L						27.2					27.2
		R						26.0					26.0
3/2	長厚示数	L						18.5					18.5
		R											—
5/4	骨体断面示数	L	76.0	73.6	64.1		76.0	83.3	71.4		69.4	72.5	73.3
		R	75.4	80.9	72.5	74.6	69.5	75.2	71.3		94.0		76.7
5a/4a	骨体中央断面示数	L	73.7	80.0		71.3	76.2	80.7	85.1	88.9		84.4	79.5
		R	86.1			81.1	74.4	71.4		89.0			80.4

第16表 橈骨計測値③（未成人）

計測項目		基準 No. 蔵骨器No.	計測値 (mm)											平均
			001 4	009 10	009 16	009 16	054 2	054 4	055 1	055 1	055 2	055 7	055 9	
1	最大長	L	1	1	2	3	1	1	2/3①	2/3②	3	1	2	—
		R												—
2	機能長	L												—
		R												—
3	骨体最小周	L			21	15		18	18	19	11	21		17.6
		R			21		19		18	19	11	21		18.3
4	骨体横径	L			7.9	5.2		6.5	6.5	6.8	3.3	7.4	7.8	10.3
		R	8.0	9.5	7.6		6.5		6.9	6.5	3.4	7.5	7.6	7.1
4a	骨体中央横径	L			7.7	4.9		5.7	7.8	6.5	3.6	4.5	7.6	6.0
		R	8.0	9.3	7.7		6.4		6.8	6.5	3.5		7.8	7.0
4(1)	骨頭横径	L												—
		R												—
4(2)	頸横径	L			8.0	5.8					7.7		9.0	7.6
		R			7.3						7.5	8.2		7.7
5	骨体矢状径	L			4.9	3.6		5.2	4.9	5.1	2.7	5.3	5.7	7.7
		R	5.8	6.7	4.9		4.8		5.0	5.0	2.7	5.4	6.1	5.2
5a	骨体中央矢状径	L			4.9	4.0		5.0	5.0	5.0	2.7	5.3	5.5	7.5
		R	5.1	6.4	4.7		4.6		5.0	5.0	3.0	5.3	6.1	5.0
5(1)	骨頭矢状径	L												—
		R												—
5(2)	頸矢状径	L			7.1						3.4	6.9	10.7	7.0
		R			7.5						3.2	7.1		5.9
5(3)	頤周	L												—
		R												—
5(5)	骨体中央周	L			22			18	19	18	13	21	22	19.1
		R	23	26	21		19		19	19	13		22	20.3
5(6)	遠位端幅	L												—
		R												—
3/2	長厚示数	L												—
		R												—
5/4	骨体断面示数	L			62.0	69.2		80.0	75.4	75.0	81.8	71.6	73.1	74.8
		R	72.5	70.5	64.5		73.8		72.5	76.9	79.4	72.0	80.3	73.7
5a/4a	骨体中央断面示数	L			63.6	81.6		87.7	64.1	76.9	75.0	117.8	72.4	79.9
		R	63.8	68.8	61.0		71.9		73.5	76.9	85.7		78.2	72.9

第17表 尺骨計測値①（成人男性・性別不明）

計測項目		計測値 (mm)																		平均			
		墓No.	001	009	009	009	027	027	027	027	049	055	055	055	057	057	057	057	058		062	062	062
		蔵骨器No.	3	11	12	16	3	3	7	15	1	1	2	3	4	9	10	11	4		4	5	9
		人骨No.	1	1	1	1	1,2①	1,2②	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	1
1	最大長	L																		239	239	239.0	
		R									244									249		246.5	
2	機能長	L								218		205								209	212	211.0	
		R				194			218	218									216	220		213.2	
3	骨体最小周	L				34			40	36		36							34	37	38	36.4	
		R				34	32		40	40					36		32		33	38	39	36.0	
6	肘頭幅	L				18.9			25.0		17.5			23.2	21.8		23.9	22.0	23.3	23.5	23.2	22.2	
		R							24.8	24.1				23.2					23.0	24.8	24.1	24.0	
7	肘頭深	L				19.9	19.6		27.4	25.2	22.0	26.5		25.2	18.2		19.2	24.6	22.0	24.5	23.0	22.9	
		R							26.5	22.8	22.7			24.5		23.4	23.1		23.0	26.4	24.5	24.1	
11	骨体矢状径	L	12.9	11.9		10.7	11.8		12.1	12.9		11.6	13.0	13.9		13.0		12.3	11.8	12.6	14.8	13.3	12.6
		R	14.3	11.7	13.7	10.3		10.4	13.0	11.6		14.5		13.8	11.8				13.0	14.4	14.1	12.8	
12	骨体横径	L	18.2	12.8		16.5	12.9		15.7	17.0		17.0	15.1	16.5		14.3		15.3	13.4	16.0	16.4	19.3	15.8
		R	18.0	14.0	13.6	15.0		15.4	16.5	19.0		16.6		16.9	14.1	14.5			16.0	17.5	17.0	16.0	
3/2	長厚示数	L								16.5		17.6								17.7	17.9	17.4	
		R				17.5			18.3	18.3									15.3	17.3		17.4	
7/6	肘頭深幅示数	L				105.3			109.6		125.7			108.6	83.5		80.3	111.8		94.4	104.3	99.1	102.3
		R							106.9	94.6				105.6						100.0	106.5	101.7	102.5
11/12	骨体横断示数	L	70.9	93.0		64.8	91.5		77.1	75.9		68.2	86.1	84.2		90.9		80.4	88.1	78.8	90.2	68.9	80.6
		R	79.4	83.6	100.7	68.7		67.5	78.8	61.1		87.3		81.7	83.7	0.0				81.3	82.3	82.9	74.2

第17表 尺骨計測値②（成人女性）

計測項目		計測値（mm）							平均
		墓No.	001	027	027	049	055	058	
		蔵骨器No.	1	10	11	2	一次葬	1	
		人骨No.	1	1	1	1	1	1	
1	最大長	L					184		184.0
		R					187		187.0
2	機能長	L					175		175.0
		R					179		179.0
3	骨体最小周	L	31	33	33	28	30	34	31.5
		R			33		30		31.5
6	肘頭幅	L					12.9		12.9
		R							—
7	肘頭深	L				18.8	18.0		18.4
		R							—
11	骨体矢状径	L	11.4	11.0	11.3	9.8	9.1	11.2	10.6
		R	10.9	11.7	11.8	10.7	9.2		10.9
12	骨体横径	L	16.0	14.6	15.1	12.2	13.0	15.3	14.4
		R		15.2	14.8	12.9	12.2		13.8
3/2	長厚示数	L					17.1		17.1
		R					16.8		16.8
7/6	肘頭深幅示数	L				139.5			139.5
		R							—
11/12	骨体横断示数	L	71.3	75.3	74.8	80.3	70.0	73.2	74.2
		R		77.0	79.7	82.9	75.4		78.8

第17表 尺骨計測値③（未成人）

計測項目		計測値（mm）									平均
		墓No.	009	009	027	055	055	055	057	058	
		蔵骨器No.	16	16	8	1	1	7	9	12	
		人骨No.	2	3	1/2	2/3①	2/3②	1	1	2	
1	最大長	L									—
		R									—
2	機能長	L									—
		R									—
3	骨体最小周	L	18			18	16	19	17		17.6
		R				17		18	17	20	18.0
6	肘頭幅	L							15.7		15.7
		R							15.7		15.7
7	肘頭深	L									—
		R						15.0			15.0
11	骨体矢状径	L	5.7			5.4	5.5	5.7	5.6	5.6	5.6
		R	5.6	3.9	3.2	5.0	5.5	5.7	5.6	5.6	5.0
12	骨体横径	L	7.2			9.8	9.7	7.1	7.5		8.0
		R	6.9	5.2	3.7	9.2	9.6	7.1	6.9	6.7	6.9
3/2	長厚示数	L									—
		R									—
7/6	肘頭深幅示数	L									—
		R						95.5			95.5
11/12	骨体横断示数	L	79.2			55.1	56.7	80.3	74.7	86.2	72.0
		R	81.2	75.0	86.5	54.3	57.3	80.3	81.2	83.6	74.9

第18表 大腿骨計測値①（成人男性・性別不明）

計測項目		基No. 座骨No. 人骨No.	計測値 (mm)																											平均											
			001	004	009	009	009	009	023	023	023	023	027	027	027	027	049	050	055	055	055	057	057	057	058	062	062	062	071												
			3	1	11	12	13	16	1	2	3	1	2	3	3	7	15	1	1	1	1	1	3	9	11	12	4	4	5		9	2									
			1	1	1	1	1	1	1	2	3	1	1	2	①	1	2	②	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1											
1	最大長	L																								357	406											410	412	420	401.
		R																								357	405	407										415	412	415	401.8
2	自然位全長	L																								352	403											409	408	418	398.0
		R																								353	404	400										412	409	413	398.5
6	骨体中央矢状径	L	25.9	24.2	27.2	24.5	24.0		27.3	23.4	23.4	26.0			29.2	27.4	24.1		26.5	28.1	26.9	24.8	25.0				26.9	30.0	32.5	26.0	26.3										
		R	25.3	25.8	27.3	27.3	23.0	24.8	26.1	22.6	23.0			22.7	28.8	27.8	27.4	23.8	26.2	27.5	25.8	25.2	26.0	24.3		25.9	30.0	31.4	25.0	25.8	26.0										
7	骨体中央横径	L	26.0	25.0	26.7	25.4	24.6		27.5	23.7	24.8	24.5			26.6	25.4	23.4		28.2	27.4	26.5	23.3	24.7	24.1			25.9	26.3	31.8	25.6	25.8										
		R	24.5	26.3	27.0	24.0	26.3	24.5	27.5	22.7	24.2			23.2	26.6	25.3	22.7		27.9	27.1	26.6	25.1	23.6	24.4			25.0	25.5	27.5	25.6	25.3										
8	骨体中央周	L	77	75	83	78	75		85	72	73	78			84	70	28		83	85	82	73	75				18	86	98	78	74.1										
		R	78		83	80	77	75	82	68	71			72	84	80	28		83	86	80	75	76	76			17	85	87	79	73.7										
9	骨体上横径	L	32.6	30.0			27.8	28.5			27.0			30.0	29.3	19.0		33.4	33.4	29.3	30.7	27.2	26.5			30.1	28.2	35.1	28.7	29.3											
		R	30.9	30.9	30.4	29.0	28.1			29.2			29.5	29.2	29.1	28.3	19.6	32.6	32.5	29.4	30.3	26.3	25.6			29.5	28.5	31.5	29.6	29.0											
10	骨体上矢状径	L	22.0	23.6			22.8	23.3			22.2			24.0	22.6	23.0		23.1	23.1	22.5	21.1	18.9			23.9	25.7	29.4	23.2	23.0												
		R	22.9	23.0	22.8	22.1	22.1			21.0			23.2	25.4	23.5	22.3	22.4		24.1	22.3	22.9	21.6	19.6			22.0	25.9	25.1	21.4	22.8											
16	頸矢状径	L	24.0					28.9			27.9	28.2			24.1			22.9	24.5			26.8	25.9				25.9														
		R	22.9					22.6			21.1	22.6			21.1	25.6			24.0			23.1	24.0			26.1	26.3	24.8													
20	頭周	L																								90	139			123			132	138			137	114	124.7		
		R																								141			139			122			132	140			139	114	132.4
8/2	長厚示数	L																								23.9	17.4	4.4			21.1	23.5				18.0					
		R																								23.8	19.8	20.0			4.3			20.8	21.1				18.3		
6/7	骨体中央断面示数	L	99.6	96.8	101.9	96.5	97.6		99.3	98.7	94.4	106.1			109.8	107.9	103.0		94.0	102.6	101.5	106.4	101.2	103.9			114.1	103.5	101.6	101.9											
		R	103.3	98.1	101.1	113.8	87.5	101.2	94.9	99.6	95.0			97.8	108.3	109.9	104.8		93.9	101.5	97.0	100.4	110.2	100.8			103.6	120.8	109.1	100.8	102.3										
10/9	上骨体断面示数	L	67.5	82.0			81.8			82.2			80.0	77.1	68.9			69.2	78.8	73.3	77.6	71.3			79.4	91.1	83.8	77.6													
		R	74.1	74.4	75.0	76.2	78.6			79.5			87.0	80.8	78.8	0.0	68.7	74.2	75.9	75.6	82.1	76.6			74.6	90.9	79.7	72.3	73.3												

第18表 大腿骨計測値②（成人女性）

計測項目		基No. 肱骨No. 人骨No.	計測値 (mm)											平均
			001	027	027	027	049	055	055	055	058	058	059	
			1	9	10	11	一次葬		2	6	1	1	2	
1	最大長	L												—
		R	336											336.0
2	自然位全長	L												—
		R	330											330.0
6	骨体中央矢状径	L	26.5	23.5	21.2	24.0	25.1	17.7	25.0	23.4	24.5	20.1	23.0	
		R	27.5	24.1	21.3	25.0	24.0	18.7	25.0	23.2	25.0	20.4	25.5	
7	骨体中央横径	L	20.7	24.6	23.0	24.6	22.5	20.7	26.9	22.9	22.2	24.0	25.8	
		R	20.8	24.1	23.1	23.5	22.3	21.0	25.7	22.0	23.0	24.3	26.6	
8	骨体中央周	L	72	75	68	73	71	62	80	70	72	68	73	
		R	73	75	69	73	70	63	79	69	73	68	76	
9	骨体上横径	L	30.7	30.1	27.9	27.7	23.8	24.2	28.5	27.5	24.0	26.1	28.4	
		R	32.7	29.0	28.5	26.4	24.5	23.4	28.2	26.5	24.0	27.0	27.9	
10	骨体上矢状径	L	20.6	21.7	18.5	19.4	21.0	18.5	23.2	20.0	21.2	18.5	20.9	
		R	20.1	22.3	19.4	20.7	20.0	18.5	22.3	19.9	21.4	22.0	20.7	
16	頸矢状径	L	20.1	23.8				20.0	22.1	21.3		21.5		
		R	21.9					22.0	22.3		22.0			
20	頭周	L												—
		R	119											119.0
8/2	長厚示数	L												—
		R	19.1											19.1
6/7	骨体中央断面示数	L	128.0	95.5	92.2	97.6	111.6	85.5	92.9	102.2	110.4	83.8	89.1	
		R	132.2	100.0	92.2	106.4	107.6	89.0	97.3	105.5	108.7	84.0	95.9	
10/9	上骨体断面示数	L	67.1	72.1	66.3	70.0	88.2	76.4	81.4	72.7	88.3	70.9	73.5	
		R	61.5	76.9	68.1	78.4	81.6	79.1	79.1	75.1	89.2	81.6	75.7	

第18表 大腿骨計測値③（未成人）

計測項目		基No. 最首器No. 人骨No.	計測値 (mm)															平均		
			001	009	009	027	027	054	054	055	055	055	055	055	058	061				
			4	16	16	8	11	2	4	1	2/3①	2/3②	3	2	7	9	3	1	1	
1	最大長	L																		—
		R																		—
2	自然位全長	L																		—
		R																		—
6	骨体中央矢状径	L	10.8	9.6	7.5	5.6	19.2	8.3				9.2	4.6	9.8	11.5	9.8	8.5			9.5
		R	10.4	10.1	7.4	5.6	20.2	8.4	8.2	9.4	9.0	4.9	9.7	10.6			8.9	9.4		9.4
7	骨体中央横径	L	11.5	11.2	9.2	6.2	17.3	10.2		10.5	10.5	5.3	11.2	11.5	10.0	10.1				10.4
		R	12.0	11.2	8.9	6.2	16.6	10.4	10.2	10.2	10.0	5.5	11.2	11.1			10.1			10.3
8	骨体中央周	L	36	33	28	21	58	30				31	18	33	37	33	31			32.4
		R	36	35	27	21	57	30	30	31	31	19	33	36			31	32.1		31.1
9	骨体上横径	L	16.2	13.8	11.2	23	14.3						6.5	14.2	16.2	11.8				14.1
		R		14.3	11.5	22.9	14.1	13.5			11.7	6.6	14.2	15.7			13.4			13.8
10	骨体上矢状径	L	11.8	11.8	10.0	17.7	11.4					6.3	11.9	12.8	10.8					11.6
		R	11.7	11.2	9.4	16.4	12.3	11.5			10.8	6.5	11.5	13.0			11.0			11.4
16	頸矢状径	L						14.2												14.2
		R						13.4												13.4
20	頭周	L																		—
		R																		—
8/2	長厚示数	L																		—
		R																		—
6/7	骨体中央断面示数	L	93.9	85.7	81.5	90.3	111.0	81.4				87.6	86.8	87.5	100.0	98.0	84.2			90.7
		R	86.7	90.2	83.1	90.3	121.7	80.8	80.4	92.2	90.0	89.1	86.6	95.5			88.1			90.4
10/9	上骨体断面示数	L	72.8	85.5	89.3		77.0	79.7					96.9	83.8	79.0	91.5				84.0
		R	78.3	81.7		71.6	87.2	85.2			92.3	98.5	81.0	82.8			82.1			84.1

第19表 脛骨計測値①（成人男性・性別不明）

計測項目	基No. 蔵骨器No. 人骨No.	計測値 (mm)																			平均		
		001 3	009 11	009 12	009 16	027 1	027 3	027 7	027 15	051 2	054 1	055 1	055 2	055 3	057 9	057 11	058 4	062 4	062 5	062 9		071 2	
1 全長	L				257			286	334									333	343	343		316.0	
	R				259														333	346	340		319.5
1a 最大長	L				262			291	337										348	349	348		322.5
	R				265														348	352	346		327.8
1b 脛骨長	L							277	330										326	339	335		321.4
	R																		329	341	337		335.7
3 近位端最大幅	L																		75.4	73.4			74.4
	R																	70.9	75.8	72.9			73.2
6 遠位端最大幅	L							44.9							45.7				47.2	47.8			46.4
	R											47.5	51.0			42.5	45.2		44.0	44.3	50.3		46.4
7 遠位端矢状径	L				32.5			37.1				37.3	38.2	36.9		34.0			35.9	38.6	41.5		36.9
	R											38.2	39.0			38.5	32.5		36.1	38.8	42.3		37.9
8 中央最大矢状径	L	30.8	29.2	29.5	25.1			28.4	30.4	25.3		30.0	33.7	33.2					28.8	30.4	30.8	28.4	29.6
	R	30.6	30.7	29.5	24.3			28.6	29.6	24.9	28.7	30.6	32.6	33.2	25.2	27.8			28.5	30.1	35.2	27.5	29.3
8a 栄養孔最大径	L	36.1	33.4	31.1	31.8		29.6	32.0	32.3			35.2	35.7	35.8					32.0	35.3	40.4	31.3	33.7
	R	35.2	33.5	32.5	28.0	34.3	28.6	33.0	33.5	27.6	32.9	35.8	37.1	34.4	29.6		29.6		32.2	33.7	37.4	32.6	32.7
9 中央横径	L	19.5	19.6	20.4	18.9			20.6	20.8	17.6		20.0	21.0	20.2					20.0	21.1	23.4	20.4	20.3
	R	21.1	20.7	21.0	19.4	24.4		22.3	20.7	18.9	20.0	19.5	20.1	19.2	17.5	17.3			19.9	20.8	22.9	21.1	20.4
9a 栄養孔位横径	L	23.6		20.7	24.1		22.8	23.6	23.1			23.8	22.3	22.6					21.0	23.9	26.4	21.9	23.1
	R	24.4	21.9	21.3	20.7		22.1	23.2	23.7	20.1	22.4	23.4	21.8	20.9	19.2		18.8		21.1	23.5	26.4	23.1	22.1
10 骨体中央周	L	75	75	74	68			77	77	66		80	82	82					75	80	83	74	76.3
	R	78	80	78	68			69	78	64	74	79	83	80	67	68			79	80	93.0	74	76.0
10a 栄養孔位周	L	88		82	86		85	86	95			93	91	94					83	91	101	82	89.0
	R	88	87	85	77	90	84	89	88	73	84	94	92	87	79		77		84	88	98	83	85.6
10b 骨体最小周	L	70	68	63	65	75		75	70			77	76	77					68	75	79	70	72.0
	R	69	68	64	66			74	69		69	74		76		65			70	77	77	69	70.5
9/8 中央断面示数	L	63.3	67.1	69.2	75.3			72.5	68.4	69.6		66.7	62.3	60.8					69.4	69.4	76.0	71.8	68.7
	R	69.0	67.4	71.2	79.8			78.0	69.9	75.9	69.7	63.7	61.7	57.8	69.4	62.2			69.8	69.1	65.1	76.7	69.2
9a/8a 脛示数	L	65.4	0	66.6	75.8		77.0	73.8	71.5			67.6	62.5	63.1					65.6	67.7	65.3	70.0	63.7
	R	69.3	65.4	65.5	73.9		77.3	70.3	70.7	72.8	68.1	65.4	58.8	60.8	64.9		63.5		65.5	697.3	70.6	70.9	102.8
10b/1 長厚示数	L				25.3			26.2	21.0										20.6	21.9	23.0		23.0
	R				25.5														21.0	22.3	22.6		22.9

第19表 脛骨計測値②（成人女性）

計測項目	基No. 蔵骨器No. 人骨No.	計測値（mm）											平均
		001 1 1	027 9 1	027 10 1	027 11 1	049 2 1	055 一次葬 1	055 2 2	055 6 1	058 1 1	058 2 1	059 3 1	
1 全長	L							264					264.0
	R							264					264.0
1a 最大長	L												
	R							269					269.0
1b 脛骨長	L							258					258.0
	R							255					255.0
3 近位端最大幅	L												—
	R												—
6 遠位端最大幅	L							37.5					37.5
	R							37.2				43.2	39.7
7 遠位端矢状径	L					31.0		32.0					31.5
	R							30.4				35.5	32.8
8 中央最大矢状径	L	22.0	24.4	24.7	24.8	23.8	21.5	29.2	26.0	23.2			24.4
	R	24.0	23.9	24.7	25.9	23.5	21.4	28.2	26.0	22.2			24.4
8a 栄養孔最大径	L	26.0		30.0	29.4	25.9	23.8	32.3	30.2	25.3			27.9
	R	26.3	29.6		30.6	26.9	20.1	31.1	29.4	28.9			27.9
9 中央横径	L	18.0	18.6	18.0	16.8	16.4	16.4	20.5	18.1	19.2			18.0
	R	18.9	17.5	17.7	16.4	16.5	16.1	20.8	17.5	18.9			17.8
9a 栄養孔位横径	L	19.9		21.6	20.0	17.7	17.7	23.0		20.6			20.1
	R	20.1	20.7		18.8	18.8	18.0	22.2	19.8	24.3			20.3
10 骨体中央周	L	61	68	64	65	61	59	78	69	63			65.3
	R	63	67	65	66	60	58	77	68	61			65.0
10a 栄養孔位周	L	70		80	76	68	65	86		71			73.7
	R	70	80		77	70	66	83	75	80			75.1
10b 骨体最小周	L	60	65	60		57	57		64	61			60.6
	R	60	65	60		55	57		63	60	65		60.6
9/8 中央断面示数	L	81.8	76.2	72.9	67.7	68.9	76.3	70.2	69.6	82.8			74.0
	R	78.8	73.2	71.7	63.3	70.2	75.2	73.8	67.3	85.1			73.2
9a/8a 脛示数	L	76.5		72.0	68.0	68.3	74.4	71.2		81.4			73.1
	R	76.4	69.9		61.4	69.9	89.6	71.4	67.3	84.1			73.8
10b/1 長厚示数	L						21.6						21.6
	R						21.6						21.6

第19表 脛骨計測値③（未成人）

計測項目	基No. 蔵骨器No. 人骨No.	計測値 (mm)												平均
		001 4 1	009 16 2	009 16 3	027 11 2	027 8 1/2	054 2 1	054 4 1	055 1 2/3①	055 1 2/3②	055 2 3	055 7 1	055 9 1	
1 全長	L													—
	R													—
1a 最大長	L													—
	R													—
1b 脛骨長	L													—
	R													—
3 近位端最大幅	L													—
	R													—
6 遠位端最大幅	L													—
	R													—
7 遠位端矢状径	L													—
	R													—
8 中央最大矢状径	L	11.2	11.0	8.6	20.4		10.0	10.2	10.0	9.5	5.1	9.8	10.8	10.6
	R	10.9	11.2	8.6	21.4	5.8	9.7	10.3	9.9	9.7	5.1	9.8	11.1	10.3
8a 栄養孔最大径	L	13.1	13.3	10.0			12.8	11.9	11.2	12.0	5.7	12.7	13.0	17.2
	R	13.4	13.7	9.4			12.2	12.2	10.9	12.0	6.4	12.2	13.7	11.6
9 中央横径	L	10.4	9.7	7.2	16.5		8.9	9.1	8.8	8.7	5.0	9.2	11.2	13.9
	R	10.8	10.6	7.3	16.8	5.6	8.9	8.8	8.9	8.8	4.7	9.2	10.1	9.2
9a 栄養孔位横径	L	12.0	12.4	8.6			11.3	10.5	10.1	11.1	5.4	11.0	12.4	49.0
	R	13.0	12.2	8.4			10.5	11.3	9.7	11.6	6.0	10.0	11.4	10.4
10 骨体中央周	L	34	32	25			30	31	30	30	19	31	35	29.7
	R	33	33	26	59	20	30	31	29	29	18	31	35	31.2
10a 栄養孔位周	L	38	39	29			38	36	35	35	20	37	39	34.6
	R	39	39	28			38	37	33	35	21	37	39	34.6
10b 骨体最小周	L	33					30				20	31	35	29.8
	R	33			58		30				21	31	35	34.7
9/8 中央断面示数	L	92.9	88.2	83.7	80.9		89.0	89.2	88.0	91.6	98.0	93.9	103.7	90.8
	R	99.1	94.6	84.9	78.5	96.6	91.8	85.4	89.9	90.7	92.2	93.9	91.0	90.7
9a/8a 脛示数	L	91.6	93.2	86.0			88.3	88.2	90.2	92.8	94.7	86.6	95.4	284.9
	R	97.0	89.1	89.4			86.1	92.6	89.0	96.7	93.8	82.0	83.2	89.9
10b/1 長厚示数	L													—
	R													—

第20表 腓骨計測値①（成人男性・性別不明）

計測項目	基No. 蔵骨器No. 人骨No.	計測値（mm）																平均
		001	009	027	027	049	054	055	055	055	057	057	057	057	062	062	062	
		3	16	7	15	1	1	1	2	3	4	9	10	11	4	5	9	
		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
1 最大長	L	331																331.0
	R	332																332.0
2 中央最大径	L	16.8	13.7	13.3	14.5				16.3	15.6					14.0	16.7	31.3	16.9
	R	17.2	13.3	13.9	16.1		13.5	16.6	17.0					13.7	14.0	15.7	16.2	15.2
3 中央最小径	L	9.4	11.3	12.1	12.0				12.4	9.9					11.1	12.9	20.8	12.4
	R	9.9	11.4	11.3	12.5		11.0	12.8	11.0					10.2	11.0	11.9	13.3	11.5
4 中央周	L	41	42	40	41				44	40					13	48	82	43.4
	R	42	42	40	44		38	49	44					38	13	46	45	40.1
4a 最小周	L		36	38				38	38	37					13	40	42	35.3
	R		36	37	38		32			40				33	13	41	41	34.6
4(1) 近位端幅	L	30.4																30.4
	R	21.1																25.8
4(1a) 近位端矢状径	L	30.1																30.1
	R	25.9																22.1
4(2) 遠位端幅	L			21.9		17.4			19.5	20.4			18.4	18.3	14.9	18.8	20.5	18.9
	R		15.9			18.4		20.0	20.0	18.2		20.0		17.2	14.9	18.9		18.2
4(2a) 遠位端矢状径	L			24.7		23.1			25.4				24.6	23.2	21.0	23.8	29.2	24.4
	R					22.9		26.2	25.5	27.8	21.3	25.2			22.0	24.2		24.4
3/2 中央断面示数	L	56.0	82.5	91.0	82.8				76.1	63.5					79.3	77.2	66.5	75.0
	R	57.6	85.7	81.3	77.6		81.5	77.1	64.7					74.5	78.6	75.8	82.1	76.0
4a/1 長厚示数	L	12.1																12.1
	R	12.3																12.3

第20表 腓骨計測値②（成人女性）

計測項目	基No. 蔵骨器No. 人骨No.	計測値（mm）					平均
		049	055	055	055	058	
		2	一次葬	2	6	1	
		1	1	2	1	1	
1 最大長	L						—
	R						—
2 中央最大径	L	13.0	12.6	14.7	16.5		14.2
	R	14.4	13.6		15.5	13.4	14.2
3 中央最小径	L	8.3	10.3	11.0	11.1		10.2
	R	8.2	9.4		12.7	10.0	10.1
4 中央周	L	33	36	41	45		38.8
	R	35	38		47	36	39.0
4a 最小周	L	30	35				32.5
	R	30	32		38	30	32.5
4(1) 近位端幅	L						—
	R						—
4(1a) 近位端矢状径	L						—
	R						—
4(2) 遠位端幅	L		21.6				21.6
	R		24.1				24.1
4(2a) 遠位端矢状径	L						—
	R		14.8				14.8
3/2 中央断面示数	L	63.8	81.7	74.8	67.3		71.9
	R	56.9	69.1		81.9	74.6	70.7
4a/1 長厚示数	L						—
	R						—

第20表 腓骨計測値③（未成人）

計測項目	基No. 蔵骨器No. 人骨No.	計測値（mm）					平均
		009	009	054	055	055	
		16	16	4	7	9	
		2	3	1	1	1	
1 最大長	L						—
	R						—
2 中央最大径	L	5.6	4.9	5.6	5.2	6.3	5.5
	R	5.9	4.7	5.6	5.3	6.3	5.6
3 中央最小径	L	4.8	3.5	4.0	4.4	4.5	4.2
	R	4.6	3.7	4.1	3.9	4.4	4.1
4 中央周	L	19	15	17	27	29	21.4
	R	19	15	18	26	29	21.4
4a 最小周	L	20	17		28	28	23.3
	R	19			29		24.0
4(1) 近位端幅	L						—
	R						—
4(1a) 近位端矢状径	L						—
	R						—
4(2) 遠位端幅	L						—
	R						—
4(2a) 遠位端矢状径	L						—
	R						—
3/2 中央断面示数	L	85.7	71.4	71.4	84.6	71.4	76.9
	R	78.0	78.7	73.2	73.6	69.8	74.7
4a/1 長厚示数	L						—
	R						—

第7章 総括

前田・経塚近世墓群の経塚南小島原A丘陵で行った発掘調査で検出された69基の墓の調査成果について、それぞれの墓ごとに遺構や遺物の詳細について報告を行った。最後に、それぞれの成果をもとに下記の項目において総括を行い、本書のまとめとしたい。

1. 遺構の特徴と墓域の形成について

経塚南小島原A丘陵は、浦添市字経塚のほぼ中央に位置する丘陵で、南北に伸びるひょうたんのような形状をしている。丘陵の土質は、細粒砂岩（方言名：ニービ）が主体であるが、部分的には第三紀泥岩層（方言名：クチャ）を挟み互層となっていた。本丘陵に所在する墓は、全てこのような地質の丘陵に横穴を掘り込んで作られた掘込墓（方言名：フィンチャー）であった。横穴式の掘込墓が丘陵の上下段にわたり造られている形態は、「前田・経塚近世墓群」の他の地区の様相と類似している（浦添市教育委員会2007a、2011、2012、2013）。

遺構の形態や大きさについては、同遺跡の周辺地区でこれまで調査されてきたものと同様に、墓室が概ね3 m前後かそれ以下の小中規模のことが多い。また、単に横穴を掘り込んで墓室を造るものや、シルヒラシを中央に配置し、地山を成形してその周囲に蔵骨器を安置する棚を造る造営方法などもこれまで確認されてきた同遺跡における掘込墓の形態と概ね同様である（浦添市教育委員会2007b）。その中でも、本丘陵では009号墓や056墓のように、墓室内に棚が造られない単純な構造の墓が多い。その要因については、本丘陵で確認された墓は、比較的長期間にわたり複数世代が葬られるほど多くの蔵骨器が納められた墓が少ないことや、士族層の墓だけではなく百姓層の墓も多く確認されたことから、被葬者の階層性やその財力的な要因などの複合的な要因が想定される。

今回確認された墓の時期であるが、蔵骨器の年代観からすべての墓が同一の時期に造営された訳ではなく、ある程度の時期差があることが判明した。蔵骨器の年代観を参考にすると、最も古いものは、057号墓でおそらく18世紀初めには被葬者が安置されたと考えられる。墓の造営年代についてもほぼ同時期であると考えられるが、056号墓のように元々別の場所に仕立てられた墓が後世に移ってきている事例も確認されていることから、若干その時期が遅くなる可能性もある。いずれにせよ18世紀中頃には、027号墓、019号墓、056号墓、062号墓などが機能し始めたと考えることができ、この時期には本丘陵において一定度の墓域が形成されていたと考えられる。当初は墓が点在するかたちであったと考えられるが、その後、18世紀後半に004号墓・009号墓が、18世紀終盤～19世紀初頭に050号墓・051号墓・049号墓・059号墓が、19世紀中頃からそれ以降に001号墓・041号墓・055号墓・058号墓・070号墓・071号墓と徐々に墓が造られ続け、次第に墓群を成す景観に変遷していったと考えられる。丘陵のなかでも特定の区域において、墓の新旧に特徴が見られたり、方位に規則性があるような様相も認められないことから、これらの墓は規則性・計画性をもって造営されたというよりは、家族単位で地形の制約を受けながら個別に造営されていったと考えるのが妥当な様相を示している。

009号墓や055号墓のように戦前まで使用が継続される墓がみられる一方、003号墓や014号墓では沖縄戦時に改造され避難壕として利用された形跡も認められる。また、丘陵を横断する形の壕が確認されたように、沖縄戦の影響を色濃く受けていることも本丘陵の特徴である。このことから、戦時中に砲撃などの影響で天井などが崩落し、埋没したと考えられる遺構も多いことが想定される。その後、

戦後わずかに残った墓を改築し、または崩落した埋土の上に新たなコンクリート製の墓が建てられ、現代に至るまで墓域としての使用が継続されたと考えられる。

2. 遺物の特徴と年代観について

今回の調査における遺物の出土状況は、蔵骨器の数量が多く得られた一方、副葬品の出土量は少ない傾向が認められた。そのため遺物の特徴と年代観については、以下に蔵骨器を中心に述べる。

蔵骨器については、種類ごとにその特徴を述べる。まず、ボージャー形については、年代の判明した比較的古手のものは057号墓出土の蔵骨器1（康熙40〔1701〕年の銘書）であり、安里らによる分類（安里・新里2006）を参考にすると、蓋と身の器形の特徴から1700～1750年代に相当する資料である。また同墓では、その器形から1680～1740年代の資料であると考えられる蔵骨器10があり、この2点が比較的古い資料である。比較的新しい資料としては、049号墓出土の蔵骨器2がある（嘉慶21〔1816〕年の銘書）。また057号墓蔵骨器2は、ボージャー形の身（嘉慶5〔1800〕年の銘書）に、壺屋産の捏鉢を蓋としてのせたものである。他にも同様の時期に該当すると考えられる資料が3点得られており、これらボージャー形の比較的新しい時期の資料の共通点としては、ボージャー形の特徴である「内傾する口縁部」がいずれも直口するという特徴が認められる。このことは、ボージャー形の形態の変遷をたどる上で興味深い事例である。本調査区からはこの他に安里分類の蓋のⅤ～Ⅶ式（1740～1820年代）、身のⅢ～Ⅴ式（1700～1820年代）が比較的多く出土した。

次に甕形の資料について述べる。甕形の資料は、安里分類（2006）ではその器形の特徴から、「無釉甕形」・「マンガン釉甕形」・「上焼甕形」に細分される。本調査区では、無釉甕形の資料として、009号墓出土の蔵骨器5、051号墓出土の蔵骨器2、一部マンガン釉で彩色されるが基本的には無釉である062号墓出土の蔵骨器5の3点が出土している。無釉甕形は、安里らによるボージャー形の分類においては、身の「甕形的口縁」のⅦ式に相当し、マンガン釉甕形の分類編年（1997）においては、甕形の「マンガン釉甕形として定型化していない…（中略）…釉も掛けられない」とされる第Ⅰ期としてそれぞれ分類されているため、上記の両分類・編年を併記した。今回の調査で確認されたこれらの資料の年代観としては、051号墓蔵骨器2に乾隆57（1792）年の洗骨年が記されていること、009号墓蔵骨器5に嘉慶2（1797）年の洗骨年が記されていることから、概ね18世紀終末期の資料であると考えられる。ただし、安里によるマンガン釉甕形の編年（安里1997）の第Ⅰ期については、伊祖の入め御拝領墓出土の20号蔵骨器を指標として1760～70年代が与えられているため、本調査地区の資料とは若干の時間的なギャップがある。これらの無釉甕形の資料の年代観については、同様のタイプの資料の増加を待ち、再検討を要すると考えられる。

マンガン釉甕形は、安里編年（安里1997）の第Ⅱ期（1770～1800年代）～第Ⅵ期（1930年代以降）の資料が出土した。第Ⅱ期の資料は062号墓の蔵骨器7の1点である。マンガン釉甕形の中で多く出土したのは、胴部文様帯の蓮華文が沈線の表現になる第Ⅳ期（1850～1890年代）～第Ⅵ期の資料である。また、身の屋門が沈線で表現される資料は安里編年の第Ⅵ期に登場する資料とされていたが、近年の同遺跡の前田真知堂C丘陵C-019号墓の調査で確認された蔵骨器14や蔵骨器16において、同治12（1873）年の洗骨年の銘書が確認されるなど（浦添市教育委員会2012）、小型の資料を中心に19世紀後半の資料が確認されている。このことから、第Ⅵ期に相当する資料である本丘陵の001号墓蔵骨器4についてもその年代観が若干遡る可能性がある。安里編年のⅣ～Ⅴ期（1850～1920年代）がほとんどを大型の資料に依っていることから、小型の蔵骨器が大型のものと同様の変遷と辿る

のかといったことも今後検討していく必要があろう。

マンガン釉底付甕形は、全体的に出土量が少なく4点のみである。今回得られた資料から点数も少ない事もあり、型式学的な変遷を読み取ることができなかった。しかし、出土状況や胎土、器形などからこの4点にも年代差を漠然と感ずるが、マンガン釉底付甕形は文様もさまざまであり、全体的につくりが丁寧であることから、特別品的な存在であったのではないかと考えられる。

また、上記のタイプ以外にも027号墓の蔵骨器14や051号墓蔵骨器3のような赤焼の甕形という、従来の分類にみられない資料も得られた。形状はボージャー形に類似するが、胎土や製作技法は壺屋焼のアカムヌーに類似するなど、器形・製作技法ともに興味深い資料である。

家形と御殿形については、安里の分類に基づいて石製を家形とし、陶製を御殿形とした。家形は2点が出土しており同じ056号墓からの出土で、どちらもサンゴ石製である。上江洲編年(上江洲1981)において、サンゴ石製家形の年代は非常に幅が広く与えられており、今回の調査では銘書も明確に年代を示すものが得られなかったためその年代観は不明であり、今後の課題といえる。御殿形は、赤焼2点、荒焼2点、上焼1点、上焼コバルト釉2点が得られている。御殿形に関しては、型式学的な変遷が明らかでないことや、銘書が記されている資料が多いため、銘書にその年代観を頼るところが大きい。しかし、009号墓の蔵骨器2のように銘書のない例もあるため、今後、甕形と同様に型式学的な編年を作成することで、銘書と器形の両方からの検証を行い、年代を明確にしていく事が可能となる。

以上、種類ごとに蔵骨器の特徴と年代観についてまとめた。その中で、今回の調査成果で特筆されるのは「無釉甕形」の資料である。先述したように、安里分類および編年におけるボージャー形の編年と甕形の編年を併記する状況からは、ボージャー形のⅦ式と甕形の第Ⅰ期は同じ一群を指すといえ、ボージャー形とマンガン釉甕形の中間的な特徴を持つ資料であるといえる。本調査区でこのタイプの資料が複数点確認されたことから、今後これらの資料を抽出して特徴を明らかにしていくことで、ボージャー形からマンガン釉甕形への変化の過程をより明確にする事ができると思われる。また、無釉甕形以外にも上述した赤焼の甕形のような従来の分類に当てはまらない資料が確認されたことも成果の大きな一つであり、これらについては蔵骨器全体の分類の構築や編年にどのように位置づけていくかが課題となる。特に陶製の蔵骨器は、沖縄産陶器の中のひとつの器種として捉えることができ、沖縄産陶器の編年の中でも重要な役割を担う事のできる遺物といえる。

今回の調査では、副葬品については少量の出土であったが、簪・指輪・櫛や銭貨も出土している。そのほかには、戦争遺物が多く出土しているのが特徴的である。これらは、沖縄戦の実相を明らかにするためのモノとしても資料的価値を有する。

3. 銘書からみる本丘陵の特徴

今回の調査地区内より出土した蔵骨器のなかで最も古い紀年銘を持つものは康熙年間中期のものである。057号墓を造った人々は百姓身分であることから、南小島原A丘陵内に初めて墓地を求めた人々は百姓身分であったことが窺える。乾隆年間前期以降、次第に百姓に加えて士族がこの地に墓地を求めはじめ、王国時代末期には周辺地区と同様に士族と百姓の身分の違いなく墓が丘陵全体に築かれたことが想定される。

今回得られた資料からは墓室の整理に伴う被葬者の移動、また銘書の書き直し書き直し等の事例が確認できた。具体的には062号墓の蔵骨器8から2人の被葬者を蔵骨器3に移し替え、世代別に蔵骨

器を仕立て直した事例が確認できる。また、同墓の蔵骨器 2 は乾隆20年代に洗骨された宮里筑登之夫妻が最初に収められていたが、光緒20年（1894）に新たに 3 人が追加されたことが確認できる。この事例からは墓とそこに収められた被葬者たちを取り巻く環境が硬直的ではなく、むしろ時代とともに変化をしていく状況にあったことがわかる。この分析によって、墓の使用が終わった時点の状況のみではなく、その変遷の過程を窺い知ることができる。

また、056号墓の蔵骨器 5 からは造墓の経緯を記した銘書が確認された。その墓誌の分析によって、056号墓を所有した人々のはもともと真和志間切の真嘉比村に墓地を所有しており、時期は不明であるが後年になって経塚地区に墓を移動したことがあきらかになった。この事例は墓とそこに収められた蔵骨器が移動する可能性のあることを示すという点で貴重である。

027号墓の銘書からは被葬者が首里に籍を置く百姓身分の系統であることが確認された。従来、経塚地区は首里士族の墓が多いとされてきたが、百姓身分の墓も多く存在したことはこれまでの調査成果からわかっている。ただし、その百姓身分の所属については不明な点が多かった。今回の事例からは経塚地区に首里の百姓身分が墓地を求めたことがわかり、同地区は従来指摘された以上に多様な状況にあったことがうかがえる。

以上のように本調査区の銘書からは経塚地区の墓と被葬者をめぐる状況が従来想定されていた状況以上に多様なものであったことが確認できた。今後も銘書の分析を丹念に行うことで近世から近代にかけての人々の歩みを追うことができるものと考えている。

4. 人骨から見る形質的特徴

南小島原A丘陵から出土した人骨は18基の墓遺構・103の蔵骨器から最小個体数にして136体分のにぼる。このうち年齢段階の内訳をみると成人64体（約47%）、未成人50体（約36%）と比較的近い数になっている。また、未成人を若年・小児・乳幼児に区分した内訳をみてみると、その大半は乳幼児段階で埋葬されていることが窺え、乳幼児期を乗り切ることができるかが成長する上での第1の壁であった社会の様相が推察される。これは本調査区のみならず前田・経塚近世墓群でこれまで報告したクリブラオルビタリアなどのストレスマーカーが未成人骨を中心に観察される点や、エナメル質減形成を有する個体が珍しくない点などからも、乳幼児あるいは未成人の成長環境が良好ではなかった事を示唆していよう。一方で成人の年齢構成を見てみると比較的老年段階に比定される個体数が最も多いことが見て取れる。しかしながら、本調査区の出土人骨については成人であることは想定できるものの、残存状況からより詳細な年齢段階に言及することができず不明とした個体が大半を占めることから、本資料のみから実態を窺うことは難しいものと思われる。また、成人の男性女性の比率については、頭蓋骨あるいは寛骨等の形態から性別判定可能な資料のみでみると男性の比率が高いことが窺える。ただし、これについても性別不明あるいは判断保留した資料も多い事から、実態をどこまで反映しているかについては留意が必要なデータである。

人骨にみられる形態的変異については第6章でも述べたとおり椎骨の椎体腹縁への骨棘形成、四肢骨・中手骨等の関節周辺にみられる骨増殖、前耳状溝などが観察された。その他に上顎ないし下顎骨が残存する個体のうち8体に齲歯が確認されたが、中でも055号墓蔵骨器 9 No.1や062号墓蔵骨器 5 No.1の個体などは著しく、乳歯あるいは永久歯の歯冠が殆ど齲蝕により消失している状態に陥っている様子が観察された。相当の痛みを感じていたことが察せられるが、とりたてて処置はしていないものと思われることから、齲歯を治療する行為が存在していなかったのであろうと考えられる。

これらの様に人骨の形態を観察することで、当時の人々の生活・社会の様相を窺うことができる点で、人骨そのものの持つ情報の重要性は明確である。しかしながら人骨もまた、考古学的調査の出土遺物の一つであるという点から鑑みると、遺構・遺物あるいは銘書などと関連付けながら、遺跡全体の考察へ繋げる事で、本調査区の丘陵を利用した人々の実態を浮き彫りにすることができるようになるだろう。

5. 戦争遺物からみる南小島原A丘陵の様相

今回の調査では、003号墓や014号墓などのように戦時中に墓を改造して壕として利用していたと思われる痕跡が多く確認されている。また丘陵を横断する壕が掘り抜かれていることなどから、遺構や地形に大規模な改変が加えられたことがわかる。また、砲弾片や戦争遺物も多く出土した。

出土した戦争遺物は、全体を見ると民間人よりむしろ日本兵が使用していたと考えられる遺物が主体である。その内訳は、サーベルや予備の弾丸といったものより生活用具や薬瓶が多い。また、これらの生活用具のほかに簪や櫛といった資料も出土しているが、聞き取りから南小島原A丘陵では日本兵と民間人が共に避難していたことがわかっており、これらは彼らの遺品だと考えられる。これらの状況から、南小島原A丘陵の墓は、日本兵と民間人の避難壕として利用された可能性が高いといえる。

今回、戦争遺物の大半が014号墓、029号墓、034号墓から得られたものである。当該墓は調査区の南側に位置し、同様に墓の壕改築も南側に多く見られた。対して北側は、戦争遺物の出土はほぼ無く、壕に改築された墓もあまり見られなかった。これらのことから、南小島原A丘陵の南側は戦時中もしくは戦前に積極的に壕として利用されたと考えられ、北側とは様相が異なっている。今回の調査区は、北側に埋没墓が多く遺物の残存状況が良好な墓が多かった。これは、南側において戦時中の地形および遺構の攪乱の度合いが大きく、残存状況がよくないことが影響していると考えられる。

6. まとめ

最後に、上記の事項をふまえて、今回の調査地区で確認された墓群全体の評価を行いまとめとした。今回、経塚南小原A丘陵の調査を行った結果、これまでに実施した前田・経塚近世墓群の調査成果と墓の造り方や類型、出土遺物などに多くの共通点が認められることから、一連の墓群であることが確認された。また、多くの墓が戦時中に壕として利用されているさまは、さながら戦争遺跡の様相をも呈しており、本遺跡における地域的・時代的特性を如実に物語っている。

今回の調査では比較的埋没墓が多く確認されたことから、蔵骨器を主とした多くの遺物や、一次葬を含む多くの人骨が検出された。蔵骨器については、18世紀初頭から戦前に至る時期の蔵骨器が網羅的に出土している点が特徴である。その中でも甕形の資料が特に多い。これらは、蔵骨器の型式学的な変遷を明らかにする上で有用な資料であると考えられ、今後考古学的な研究に活かすことができる良好な資料群であると思われる。また、蔵骨器から検出された人骨からは、多くの形質的なデータを得ることができた。これらは、近世から近代を通じた人々の形質を知るための貴重なデータとして今後の人類学的な研究に大きく寄与できるものと考えられる。

これまで行われてきた前田・経塚近世墓群の調査成果から、経塚地区については首里の士族層の墓が多いとされてきたが、今回の銘書の分析では百姓層と考えられる人々の銘書も多く確認された。この点からは、同じ経塚地区の中でも区域もしくは丘陵ごとに墓を造る集団の階層が異なる可能性を示唆しており、時代差を含めてより詳細な検討が必要であるといえる。この問題については、蔵骨器の

考古学的な分析とともに、銘書の分析を重ねていくことで明らかになるものと考えられる。また、056号墓の蔵骨器5からは、墓を仕立てた経緯が記された墓誌が確認された。この銘書の内容から、蔵骨器を調達した年代と同丘陵に墓が仕立てられた年代に時代差が認められる点が特筆される。ほかにも062号墓などでは、銘書の書き直しや書き足しが複数点確認されており、後世に墓室の整理が行われたことが明らかである。これらの事例は、遺構や遺物の年代観などを検討する際に注意すべき点であるとともに、墓や蔵骨器が決して固定的なものではないことを表す事例であるといえる。これらの事例は、近世・近代の人々の移動や親族観念などの思想の変遷とつながるものと考えられ、資料を丹念に読み解くことで当該時期のよりダイナミックな歴史像を明らかにすることができると考えられる。

上記の成果は、今後の前田・経塚近世墓群の成果を集約していく中での比較資料として重要な意味を持つとともに、資料が少ない近世から近代・現代に至るまでの墓制・葬制の変遷を考える上でも重要な成果である。今後、これらの成果をもとに情報を蓄積することで、近世および近代における琉球・沖縄の人々や家族の歴史にとどまらず、当時の前田・経塚地域の歴史、ひいては琉球・沖縄の歴史解明に寄与するものと思われる。

〈引用・参考文献〉

- 安里進1997「伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者―近世墓の考古学的調査による家族復元―」『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者―近世墓の考古学的調査による家族復元―』浦添市文化財調査研究報告書第25集
- 安里進・新里まゆみ2006「比嘉門中墓の家族史―家族の数だけ歴史がある―」『比嘉門中墓の家族史 比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書 浦添市教育委員会
- 上江洲均1981「第五章 沖縄の厨子甕」『紀年銘（年号のある）民具・農具調査等―西日本―』日本常民文化研究所 報告第8集 日本常民文化研究所
- 浦添市教育委員会2004『墓からわかる家族の歴史 近世墓シンポジウム報告書』
- 浦添市教育委員会2007a『前田・経塚近世墓群』
- 浦添市教育委員会2007b『市内遺跡発掘調査報告書（1）』
- 浦添市教育委員会2011『前田・経塚近世墓群2 首里大名地区』
- 浦添市教育委員会2012『前田・経塚近世墓群3 前田真知堂B丘陵（1）前田真知堂C丘陵（1）』
- 浦添市教育委員会2013『前田・経塚近世墓群4 経塚子の方原A丘陵（1）』